第二東名No. 27 - 2・No. 36・No. 35・No. 17・No. 18・No. 20・No. 21・No. 24 地点 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 沼津市-9 第 1 分 冊

2014

沼津市教育委員会中日本高速道路株式会社

巻頭カラー図版



渕ヶ沢遺跡 (№ 27 - 2地点) から愛鷹山を望む

例 言

1. 本書は第二東海自動車道建設工事に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施した、渕ヶ沢遺跡(№ 27 — 2 地点)、長坂遺跡(№ 36 地点)、小坂上北遺跡(№ 35 地点)、土橋第Ⅱ遺跡(№ 17 地点)、土橋第Ⅲ遺跡(№ 18 地点)、井戸川遺跡(№ 20 地点)、井戸川西遺跡(№ 21 地点)、赤野西遺跡(№ 24 地点)の発掘調査報告書(第1分冊)である。

第1分冊は渕ヶ沢遺跡の調査結果について掲載しており、それ以下の遺跡については第2分冊に掲載している。なお、各遺跡から出土した遺物の観察表と、自然科学分析編(第2分冊 第XII章)における黒曜石産地推定の分析結果一覧表については、付属のCDに収録した。

各遺跡の所在地は以下のとおりである。

渕ヶ沢遺跡 沼津市根古屋字渕ヶ沢 958 - 49 他

長坂遺跡 沼津市石川字小坂上 906 - 2 他 小坂上北遺跡 沼津市石川字小坂上 913 - 6 他

土橋第Ⅱ遺跡 沼津市宮本字元野 156 - 118 他

土橋第Ⅲ遺跡 沼津市宮本字元野 272 - 1 他

井戸川遺跡 沼津市宮本字元野 297 - 5 他

井戸川西遺跡 沼津市柳沢字井戸川 473 - 15 他

赤野西遺跡 沼津市柳沢字釜川 576 他

2. これら遺跡の発掘調査は、日本道路公団静岡建設局(現中日本高速道路株式会社東京支社)が建設する第二東海自動車道の建設に先立ち、日本道路公団静岡建設局と沼津市の協議に基づいて沼津市が受託し、遺跡の存在が想定された地点において確認調査を実施した。その結果を踏まえ、遺構・遺物が確認された地点については基本的に本調査を実施した。

なお、渕ヶ沢遺跡(No.27 地点)については、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所(現 静岡県埋蔵文化財センター)が確認調査を実施した。確認調査の結果、本調査を要する範囲が広大であることが判明したため、調査範囲を 2 地点に分け、県埋文がNo.27-1 地点、沼津市がNo.27-2 地点を担当しそれぞれ本調査を実施した。このため、No.27-1 地点の調査成果については静岡県埋蔵文化財センターが刊行した報告書(県埋文第 30 集)を参照いただきたい。

3. 各遺跡における調査期間は以下のとおりである。ただし、土橋第Ⅲ遺跡(№ 18 地点)、井戸川遺跡(№ 20 地点)、井戸川西遺跡 (№ 21 地点)、赤野西遺跡 (№ 24 地点) については確認調査のみ実施し、本調査は実施していない。

【本調査実施】

渕ケ沢遺跡 確認調査:(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所実施

〔平成10年度〕平成11年2月2日~平成11年2月8日

[平成 11 年度] 平成 11 年 9 月 16 日~平成 11 年 10 月 25 日

[平成 12 年度] 平成 12 年 8 月 1 日~平成 12 年 9 月 18 日

〔平成 14 年度〕平成 14 年 8 月 1 日~平成 14 年 10 月 28 日

本調査:沼津市実施 No. 27 - 2 地点(本報告箇所)

[平成 15 年度] 平成 15 年 4 月 10 日~平成 16 年 3 月 26 日

[平成 16 年度] 平成 16 年 4 月 12 日~平成 17 年 3 月 31 日

本調查:(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所実施 No. 27-1地点

〔平成 11 年度〕平成 11 年 11 月 1 日~平成 12 年 3 月 31 日

[平成 12 年度] 平成 12 年 4 月 10 日~平成 12 年 9 月 1 日

[平成 12 年度] 平成 12 年 10 月 1 日~平成 13 年 3 月 30 日

[平成 13年度] 平成 13年4月2日~平成14年3月29日

[平成14年度] 平成14年8月1日~平成15年3月31日

[平成 15年度] 平成 15年4月1日~平成15年8月31日

長坂遺跡 確認調査 〔平成 11 年度〕平成 11 年 10 月 1 日~平成 12 年 1 月 18 日

本調査 〔平成 11・12 年度〕平成 12 年 2 月 2 日~平成 12 年 12 月 8 日

小坂上北遺跡 確認調査 〔平成 11 年度〕平成 11 年 9 月 6 日~平成 11 年 10 月 26 日

本調査 〔平成 11 年度〕平成 11 年 11 月 16 日~平成 12 年 3 月 14 日

土橋第Ⅱ遺跡 確認調査 〔平成 11 年度〕平成 11 年 4 月 12 日~平成 11 年 5 月 11 日

本調査 〔平成 11 年度〕平成 11 年 5 月 28 日~平成 11 年 8 月 31 日

[平成 13年度] 平成 13年 10月 16日~平成 14年 3月 20日

【確認調査のみ実施】

土橋第Ⅲ遺跡 確認調査 〔平成 12 年度〕平成 13 年 2 月 1 日~平成 13 年 2 月 20 日

井戸川遺跡 確認調査 〔平成 10 年度〕平成 10 年 10 月 19 日~平成 10 年 10 月 23 日

拡張確認調査 〔平成 10 年度〕平成 11 年 2 月 1 日~平成 11 年 2 月 19 日

井戸川西遺跡 確認調査 〔平成 10 年度〕平成 11 年 2 月 4 日~平成 11 年 2 月 5 日

赤野西遺跡 確認調査および拡張確認調査

[平成 13 年度] 平成 13 年 7 月 2 日~平成 13 年 7 月 30 日

4. 発掘調査の関係者は以下のとおりである。

【渕ヶ沢遺跡】

事業委託者 日本道路公団静岡建設局 局 長 三浦 克(H15)

松浦 恵一 (H15・16)

事業受託者 沼 津 市 市 長 斎藤 衛

調査主体者 沼津市教育委員会 教育長 長澤 靖夫(H15) 工藤 達朗(H16)

教育次長 三澤 幸男 (H15) 伊藤 幹雄 (H16)

事業担当者 沼津市教育委員会 文化振興課

文化振興課長 大澤 敏夫

課長補佐 鈴木 裕篤 土屋 宜活

調查担当者 文化財調查係長 高尾 好之

学芸員/主任学芸員 鶴田 晴徳

指導主事 原 健一郎 二又川 和行(H15)

岩品 文隆(H15) 厚地 淳司(H16)

【長坂遺跡・小坂上北遺跡・土橋第Ⅱ遺跡・土橋第Ⅲ遺跡・井戸川遺跡・井戸川西遺跡・赤野西遺跡】

事業委託者 日本道路公団静岡建設局 局 長 小泉 光政(H10~ 12) 川人 達男(H13)

事業受託者 沼 津 市 市 長 斎藤 衛

調査主体者 沼津市教育委員会 教育長 五月女 武(H10) 長澤 靖夫(H11 ~ 13)

教育次長 植松 攻 (H10~12) 三澤 幸男 (H13)

事業担当者 沼津市教育委員会 社会教育課 (H10)

文化振興課(H11~)

社会教育課長 杉山 智 (H10)

文化振興課長 小池 一廣 (H11~13)

課長補佐 川村 栄治(H10・11) 村上 益男(H12)

望月 孝夫 (H13) 鈴木 裕篤 (H13)

調查担当者 主幹兼文化財調查係長 鈴木 裕篤 (H10・11)

副参事補兼文化財調查係長 鈴木 裕篤 (H12)

文化財調査係長 高尾 好之(H13)

【長坂遺跡】 指導主事 古屋 徹 (H11) 笹谷 純治 (H11・12)

臨時嘱託 長野 裕之(H11·12)

【小坂上北遺跡】 指導主事 古屋 徹 (H11) 臨時嘱託 長野 裕之 (H11)

【土橋第Ⅱ遺跡】 指導主事 古屋 徹(H11・13) 笹谷 純治(H13)

臨時嘱託 長野 裕之(H11・13)

【土橋第Ⅲ遺跡】 指導主事 笹谷 純治(H12) 石川 慎吾(H12)

臨時嘱託 長野 裕之(H12)

【井戸川遺跡】主任学芸員 高尾 好之 (H10)【井戸川西遺跡】主任学芸員 高尾 好之 (H10)【赤野西遺跡】臨時嘱託 長野 裕之 (H13)

5. 整理事業については、平成 23 ~ 25 年度にかけて実施し、本報告書を刊行した。なお、主要な石器については株式会社ラングへの業務委託によって実測図を作成し、その他の遺物については整理補助員が実測を行った。また、調査現場で取得した遺構のデジタルデータについては、株式会社シン技術コンサルへの業務委託(担当:岡部・東・中山)によって編集を行った。

整理作業の関係者は以下のとおりである。

事業委託者 中日本道路高速道路株式会社 東京支社 沼津工事事務所長 大地 伸平(H23)

中尾 祐 (H23~25)

事業受託者 沼 津 市 市 長 栗原 裕康調査主体者 沼津市教育委員会 教育長 工藤 達朗

教育次長 海瀬 治 (H23) 工藤 浩史 (H24·25)

事業担当者 沼津市教育委員会 文化振興課

文化振興課長 宮下 義雄 (H23) 井原 正利 (H24)

勝又惠三(H25)

副参事 初又 利明 (H23)

課長補佐 勝又惠三(H23・24)

主幹兼文化財調査係長 山本 惠一(H23・24) 池谷 信之(H25)

整理担当者 文 化 財 調 査 係 主 事 小崎 晋 原田雄紀 (H23・24)

指導主事 前嶋 秀張

臨時嘱託 増島 淳 矢田 晃代 北 佳奈子

- 6.整理作業は小崎、前嶋、原田、矢田、北が担当し、黒曜石の原産地分析を増島が担当した。遺物図版・写真図版の作成は、整理補助員の加藤裕子、工藤みさ子、笹原伊津子、佐藤花奈子、関ちづる、高林千明、西川久美子、松島あつ子、目黒上子、守屋智子、渡邉南美の補助を得て、沼津市文化財センターにて行った。事務処理は、事務補助員の土屋周子が担当した。
- 7. 本文の執筆分担については、第Ⅲ章第2節(第1分冊)および第XI章第1~3節の旧石器時代(第2分冊)を前嶋、第Ⅲ章第3節の石器(第1分冊)、第IV~VI·X章の第2節、第3節の石器(第2分冊)を北、第XII章の4(第2分冊)を池谷が執筆し、それ以外の部分はすべて小崎が執筆した。全体の編集は北が担当し、その際、整理補助員の守屋の補助を得ている。
- 8. 本書で扱う遺跡はいずれも愛鷹山麓中に位置しているが、本文中の各遺跡の愛鷹山麓での位置については、愛鷹山麓を流れる高橋川を境として、以東を愛鷹山東南麓、以西を愛鷹山南麓と便宜的に分けて表記している。
- 9. 本書内での遺物の図示の方法については、遺物を実測した後にデジタルトレースを行ったものと、 拓影図をスキャニングしたもので版下画像を作成することを基本とした。ただし一部の遺物について は、株式会社ラングに委託して作成した、3次元レーザースキャナー(PEAKIT)による画像を使用 している。
- 10. 本書の作成にあたり、下記の方々にご指導・ご助言をいただいた。厚く御礼申し上げる。 柴垣勇夫、笹原芳郎、岩本貴、佐藤祐樹、藤村翔、熊谷博志、山岡拓也、橋本勝雄、鈴木敏中 (敬称略、順不同)
- 11. 本書に係わる発掘調査資料および出土遺物は、沼津市教育委員会事務局文化振興課文化財調査係 (沼津市文化財センター 〒 410 0873 沼津市大諏訪 46 1 電話 055 952 0844) で保管している。

凡例

石材略語

岩石名	岩石英名	略語	デイサイト	Dacite	Da	赤玉石	Red Jasper	RJa
黒曜石	Obsidian	Ob	安山岩	Andesite	An	黄玉石	Yellow Jasper	YJa
ガラス質黒色安山岩	Glassy Black Andesite	GBA	玄武岩	Basalt	Ва	石英	Quartz	Qt
チャート	Chert	Ch	石英閃緑岩	Quarts Dirite	QD	水晶	Rock Crystal	RC
赤色チャート	Red Chert	RCh	凝灰岩	Tuff	Tu	メノウ	Agate	Ag
頁岩	Shale	Sh	緑色凝灰岩	Green Tuff	GT	玉髄	Chalcedony	Cha
珪質頁岩	Siliceous Shale	SSh	粘板岩	Slate	SI	ヒスイ	Jedeite	Je
ホルンフェルス	Hornfels	Hor	泥岩	Mudstone	Mu	碧玉	Jasper	Ja
富士川系ホルンフェルス	F.Hornfels	F.H	砂岩	Sand Stone	SS	滑石	Talc	Ta
流紋岩	Rhyolite	Rhy	礫岩	Conglomerate	Со	蛇紋岩	Serpentine	Se
珪質岩	Siliceous Rocks	SR	珪岩	Quartzite	Qu	軽石	Pumice	Pu

報告書中では富士川系ホルンフェルスをF.ホルンフェルスと表記している

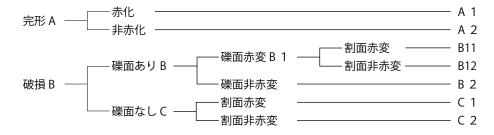
黒曜石産地略語

黒曜石産地名	略語	和田 土屋橋南	WDTM	蓼科 冷山	TSTY	箱根 上多賀	HNKT
和田 フヨーライト	WDHY	和田 古峠	WDHT	蓼科 双子山	TSHG	箱根 芦ノ湯	HNAY
和田 鷹山	WDTY	和田 高松沢	WOTM	天城 柏峠	AGKT	神津島 恩馳島	KZOB
和田 小深沢	WDKB	和田 ブドウ沢	WOBD	箱根 畑宿	HNHJ	神津島 砂糠崎	KZSN
和田 土屋橋北	WDTK	和田 牧ヶ沢	WOMS	箱根 鍛冶屋	HNKJ	神津島 砂糠崎 X	KZSX
和田 土屋橋西	WDTN	諏訪 星ヶ台	SWHD	箱根 黒岩橋	HNKI	高原山 甘湯沢	THAY

層位略語

新期スコリア層	新SC	栗色土層	ΚU	富士黒土層	FΒ	漸移層	ΖN
休場層上位	YLU	休場層中位	YLM	休場層下位	YLL	休場層下部黒色帯	BB0
第Iスコリア層	SCI	第1黒色帯	ВВІ	ニセローム層	NL	第Ⅱ黒色帯	BBII
第Ⅱスコリア層	SCII	第Ⅲ黒色帯	BBIII	第Ⅲスコリア帯スコリア 1	SCIIIs1	第Ⅲスコリア帯黒色帯1	SCIIIb1
第Ⅲスコリア帯スコリア5	SCIIIs5	第IV黒色帯	BBIV	第VII黒色帯	BBVII		

礫群一覧表中の略号



遺構実測図および本文中の略語

住居址	SB	溝状遺構	SD	小穴	PΤ
土坑	SK	掘立柱建物址	SH	柱穴	Р
焼土址	SYO	石囲炉	RO	単独出土の遺物(主に石器)	GRID
集石	SG	石器ブロック	SBL	試掘坑	ΤP
正体不明遺構	SX	礫群	PН	試掘溝	TRE

遺物実測図中の表記について

石器の実測図には、図版番号に続いて「遺物番号・遺構名・石材(黒曜石の場合はその原産地名)・ 出土層位・接合番号」の順に遺物のデータを表記している(遺物によっては、省略しているデータ有り)。

第1分册 目 次

巻頭カラー図版 例言

凡例

第	l 章 調	查経過	· 1
	第1節	調査に至る経緯	- 3
	第2節	発掘調査事業の経過	- 5
	(1)	渕ヶ沢遺跡(No. 27 — 2 地点)	
	(2)	長坂遺跡(No. 36 地点)	
	(3)	小坂上北遺跡(No. 35 地点)	
	(4)	土橋第Ⅱ遺跡(No. 17 地点)	
	(5)	土橋第Ⅲ遺跡(№ 18地点)	
	(6)	井戸川遺跡(No. 20 地点)	
	(7)	井戸川西遺跡(No. 21 地点)	
	(8)	赤野西遺跡(No. 24 地点)	
	第3節	整理事業の経過	30
第Ⅰ	章 遺詞	跡の環境 ────────────────────────────────────	35
	第1節	遺跡の位置と地理的環境	37
	第2節	周辺遺跡と歴史的環境	39
	第3節	遺跡の土層	43
 .			
第I		ヶ沢遺跡(No. 27 ー 2 地点)の調査 ····································	
	第1節	遺跡の概要	
	第2節	旧石器時代の遺構と遺物	
	第3節	縄文時代の遺構と遺物	
	第4節	古墳時代以降の遺構と遺物	290

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	第二東名路線図および沼津市発掘調査位置	· 4	第36図	第Ⅱ文化層第28号~第30号	
第2図	渕ヶ沢遺跡調査区位置図	. 6		石器ブロック実測図	-62
第3図	渕ヶ沢遺跡グリッド設定図	- 7	第 37 図	第Ⅱ文化層石器実測図(1)	·63
第4図	渕ヶ沢遺跡土層セクション図 (1)9 ·	10	第 38 図	第Ⅱ文化層石器実測図(2)	·65
第5図	渕ヶ沢遺跡土層セクション図 (2)11・	12	第 39 図	第Ⅱ文化層石器実測図(3)	-66
第6図	渕ヶ沢遺跡調査範囲図	14	第 40 図	第Ⅱ文化層石器実測図(4)	·67
第7図	長坂遺跡グリッド設定図	15	第 41 図	第Ⅱ文化層石器実測図(5)	-69
第8図	長坂遺跡トレンチ・テストピット配置図	16	第 42 図	第Ⅱ文化層石器実測図(6)	.70
第9図	長坂遺跡土層セクション図19・	20	第 43 図	第Ⅱ文化層石器実測図(7)	·71
第 10 図	小坂上北遺跡グリッド設定図	21	第 44 図	第Ⅲ文化層礫群·配石分布図	-73
第11図	小坂上北遺跡トレンチ・テストピット配置図		第 45 図	第Ⅲ文化層第 13 号礫群実測図	-74
	および土層セクション図	22	第 46 図	第Ⅲ文化層石器分布図───	.75
第12図	土橋第Ⅱ遺跡グリッド設定図	24	第 47 図	第Ⅲ文化層第20号~第23号石器ブロック実測図・	-76
第13図	土橋第Ⅱ遺跡トレンチ・テストピット配置図		第 48 図	第Ⅲ文化層東尾根出土石器実測図(1)	-77
	および土層セクション図	25	第 49 図	第Ⅲ文化層東尾根出土石器実測図(2)	-78
第14図	土橋第Ⅲ遺跡グリッド設定図	26	第 50 図	第Ⅲ文化層東尾根出土石器実測図(3)	-79
第 15 図	土橋第Ⅲ遺跡テストピット配置図	26	第 51 図	第Ⅲ文化層東尾根出土石器実測図(4)	-80
第16図	井戸川遺跡グリッド設定図および		第 52 図	第Ⅲ文化層東尾根出土石器実測図(5)	-81
	テストピット配置図	27	第 53 図	第Ⅲ文化層第 14 号礫群実測図	-82
第17図	井戸川遺跡 土層セクション図	28	第 54 図	第Ⅲ文化層第 37 号石器ブロック実測図	-83
第 18 図	井戸川西遺跡グリッド設定図および		第 55 図	第Ⅲ文化層中央谷出土石器実測図(1)	-84
	テストピット配置図	29	第 56 図	第Ⅲ文化層中央谷出土石器実測図(2)	-85
第 19 図	赤野西遺跡グリッド設定図	30	第 57 図	第Ⅲ文化層中央谷出土石器実測図(3)	-86
第 20 図	赤野西遺跡トレンチ・テストピット配置図		第 58 図	第Ⅲ文化層第13号・第18号石器ブロック実測図…	-87
	および土層セクション図	31	第 59 図	第Ⅲ文化層西尾根出土石器実測図(1)	-88
第21図	石器の分類	34	第 60 図	第Ⅲ文化層西尾根出土石器実測図(2)	-89
第 22 図	遺跡位置図	38	第61図	第Ⅲ文化層西尾根出土石器実測図(3)	-90
第 23 図	周辺主要遺跡分布図	40	第 62 図	第Ⅳ文化層遺構および礫群・配石分布図──	-93
第 24 図	愛鷹ローム層基本層序柱状図	44	第 63 図	第IV文化層石器分布図	-94
第 25 図	渕ヶ沢遺跡の土層柱状図と文化層	48	第 64 図	第IV文化層東尾根出土石器実測図	-95
第 26 図	第 I 文化層遺構および遺物分布図	51	第 65 図	第IV文化層第36号・第38号石器ブロック実測図-	-96
第 27 図	第 I 文化層第 10 号土坑実測図	52	第 66 図	第IV文化層中央谷出土石器実測図(1)	-97
第 28 図	第 I 文化層第16号・第17号石器ブロック実測図	52	第 67 図	第IV文化層中央谷出土石器実測図(2)	-98
第 29 図	第 I 文化層石器実測図(1)	53	第 68 図	第IV文化層中央谷出土石器実測図 (3)	-99
第 30 図	第 I 文化層石器実測図(2)	54	第 69 図	第IV文化層中央谷出土石器実測図 (4)	100
第31図	第 I 文化層石器実測図(3)	55	第 70 図	第IV文化層第9号土坑実測図	101
第 32 図	第 I 文化層石器実測図(4)	56	第71図	第IV文化層第 15 号礫群実測図	101
第 33 図	第 I 文化層石器実測図 (5)	57	第 72 図	第IV文化層第4号石器ブロック実測図	102
第 34 図	第Ⅱ文化層遺物分布図	60	第 73 図	第Ⅳ文化層第5号・第7号石器ブロック実測図1	103
第 35 図	第Ⅱ文化層第 11 号・第 14 号・第 26 号		第 74 図	第Ⅳ文化層第8号・第9号石器ブロック実測図──	104
	石器ブロック実測図	61	第 75 図	第IV文化層西尾根出土石器実測図(1)1	106

第76 期 別以文化四四尾银門吐石器支制図(3)—108 第120図	## = 0 F		## o 🖂	
第78 図 第12 文化 医四尾根州上石器失調図(4)—109 第12 図 第12 図 第12 区 第13 区 第12 区 第1	第76図	第Ⅳ文化層西尾根出土石器実測図(2)107	第118図	第四文化層東尾根出土石器実測図(14)165
第19 図 第10文化 國海區根出土石器美剛図(5)—112 図 第12 区 第2 で 1 日本 1				
第81図 第1次化層市尾視出土石器共測図(6)—112				
第81図 第1V文化層西尾根出土石器尖剛図(7)―113			弗 121 凶	
第82 図 第N文化層西尾根出土石器実測図(8)—114 第123 図 第加文化層中央合出土石器実測図(2)—175 第84 図 第N文化層西尾根出土石器実測図(10)—116 第124 図 第加文化層面1号→第3号機能 3月機能 3月機能 3月機能 3月機能 3月機能 3月機能 3月機能 3月			# 100 W	1144
第83図 第小文化層西尾根出土石器実測図(9)—115 第124図 第小文化層面尾根出土石器実測図(10)—116 第125図 第小文化層面上引出土石器実測図(11)—117 第126図 第小文化層面上引出土石器実測図(12)—118 第127回 第126図 第小文化層面上引出土石器実測図(12)—118 第127回 第126図 第小文化層面上根出土石器実測図(13)—119 第128図 第小文化層面是根出土石器実測図(13)—119 第128図 第小文化層面是根出土石器共测図(13)—119 第128図 第小文化層面是根出土石器共测図(15)—123 第130回 第小文化層面是根出土石器共测図(15)—123 第130回 第小文化層面是根出土石器共测図(15)—123 第131回 第小文化層面是根出土石器共测図(15)—125 第131回 第小文化層面是根出土石器共测図(15)—126 第131回 第小文化層面是根出土石器共测区(15)—127 第135回 第小文化層面是根出土石器共测区(16)—126 第131回 第小文化層面是根出土石器共测区(17)—191 第136回 第小文化層面是根出土石器共测区(17)—191 第136回 第小文化層面是根出土石器共测区(19)—191 第136回 第小文化層面是根出土石器共测区(19)—192 第136回 第小文化層面是根出土石器共测区(19)—193 第137回				
第84図 第1V文化層西尾根出土石器共測図(11)—117 第126図 第11文化層第1号へ第3号機解失測図—177 第86図 第1V文化層西尾根出土石器共測図(12)—118 第127図 第11文化層面尾根出土石器共測図(13)—119 第127図 第11文化層面尾根出土石器共測図(13)—119 第127図 第11文化層面尾根出土石器共測図(13)—119 第127図 第11文化層面尾根出土石器共測図(13)—119 第127図 第11文化層面尾根出土石器共测図(15)—123 第130図 第11文化層面尾根出土石器共测図(3)—184 第19 第12 図 第12 図 第11文化層面尾根出土石器共测図(3)—184 第19 第12 図 第12 図 第12 図 第12 区 第12				
第85図 第N文化層西尾根出土石器実測図(11)—117 第126図 第126図 第V文化層西尾根出土石器実測図(12)—118 第127図 第V文化層西尾根出土石器実測図(13)—119 第128図 第V文化層西尾根出土石器実測図(13)—129 第128図 第V文化層西尾根出土石器実測図(15)—123 第129図 第V文化層西尾根出土石器実測図(15)—125 第130図 第V文化層西尾根出土石器实測図(15)—125 第130図 第V文化層西尾根出土石器实測図(15)—125 第130図 第V文化層西尾根出土石器实測図(15)—126 第131回 第V文化層西尾根出土石器实測図(15)—127 第132図 第U文化層西尾根出土石器实測図(5)—186 第91図 第V文化層面尾根出土石器实测图(17)—197 第134回 第V文化層面尾根出土石器实测图(5)—186 第134回 第V文化層西尾根出土石器实测图(5)—186 第134回 第V文化層西尾根出土石器实测图(19) 第136回 第V文化層西尾根出土石器实测图(19) 第136回 第V文化層面尾根出土石器实测图(1)—191 第136回 第V文化層面尾根出土石器实测图(1)—191 第136回 第V文化層可是根出土石器实测图(2)—192 第136回 第V文化層石器分和图 129 第136回 第137回 203 第137回 第137回 第137回 第137回 第137回 第137回 203 第137回 203 第137回 203 第137回 203 第137回 203 第137回				
第86図 第Ⅳ文化層西尾根出土石器実測図(12)—118 第127図 第 収之		ZIGOTO CONTRACTOR CONT		**************************************
第87図 第N文化層西尾根出土石器実測図(13)—119 第128 図 第N文化層西尾根出土石器実測図(2)—182 第89 図 第N文化層西尾根出土石器実測図(14)—120・121 第130 図 第1文化層西尾根出土石器実測図(3)—184 第99 図 第V文化層西尾根出土石器実測図(15)—123 第130 図 第1文化層西尾根出土石器实測図(3)—186 第92 図 第V文化層連物分布図——126 第132 図 第1文化層西尾根出土石器实測図(5)—186 第92 図 第V文化層連移よび中央各出土				**************************************
第88図 第IV文化層西尾根出土石器実測図(14)-120・121 第 129図 第IV文化層西尾根出土石器実測図(2)-182 第 90図 第V文化層遺物分布図——125 第 131図 第 IV文化層西尾根出土石器実測図(3)-184 第 90図 第 V文化層遺物分布図——125 第 131図 第 IV文化層西尾根出土石器実測図(3)-186 第 92図 第 V文化層東尾根および中央合出土				
第88図 第IV文化層西尾根出土石器共測図(15)—123 第130図 第U文化層西尾根出土石器共測図(3)—184 第90図 第V文化層薄的介格図——125 第131図 第U文化層連尾根出土石器共測図(4)—185 第91図 第V文化層東尾根および中央合出土 第133図 第U文化層東尾根出土石器共測図(5)—186 第134図 第U文化層東尾根出土石器共測図(5)—190 第135図 第V文化層東尾根出土石器共測図——127 第135図 第U文化層西尾根出土石器共測図(1)—191 第93図 第V文化層東尾根出土石器共測図——127 第135図 第U文化層石器共測図(2)—192 第95図 第VI文化層東尾根出土石器共測図(1)—131 第138図 第U文化層石器共測図(3)—194 第96図 第VI文化層中央合出土石器共測図(1)—131 第138図 第U文化層石器共測図(5)—196 第96図 第VI文化層中央合出土石器共測図(1)—131 第138図 第U文化層石器共測図(5)—196 第96図 第VI文化層中央合出土石器共測図(2)—132 第139図 網文時代連構分布図——198 第140図 網文時代連構分布図——198 第140図 網文時代連構分布図——198 第141図 網文時代出場分布図(第1群)—199 第190図 第UI文化層強形分布図——137 第141図 網文時代土器分布図(第1群)—200 第100図 第UI文化層第8号・第12号確群共測図—141 第144図 網文時代土器分布図(第1群)—202 第102図 第UI文化層第8号・第12号確群共測回—141 第144図 網文時代土器分布図(第1群)—203 第141図 第UI文化層東尾母出土石器共測図(1)—145 第148図 網文時代上器分布図(第V群)—205 第160図 第UI文化層東尾母出土石器共測図(3)—150 第 第149 图 第2号上体不明遺構出遺物—206 第109図 第UI文化層東尾母出土石器共測図(3)—150 第 第4号 第4号 第6号 第7号 正本不明遺構共測図—210 第111図 第UI文化層東尾母出土石器共測図(3)—150 第 第4号 第6号 第7号 正本不明遺構共測図—210 第111図 第UI文化層東尾母出土石器共測図(7)—157 第 151図 第4号 正本可遺構共測図—213 第111図 第UI文化層東尾母出土石器共測図(7)—157 第 156 図 集石共測図(2)—218 第111図 第UI文化層東尾母出土石器共測図(9)—159 第 156 図 集石共測図(2)—218 第111図 第UI文化層東尾母出土石器共測図(9)—159 第 156 図 集石共測図(2)—218 第111図 第UI文化層東尾母出土石器共測図(9)—159 第 156 図 集石共測図(2)—218 第111図 第UI文化層東尾母出土石器共测図(9)—159 第 156 図 集石共測図(2)—222 第 115 図 第 4年表測図(3)—222 第 115 図 第 4年表測図(3)—222 第 4年表測図(3)—222 第 4年表測図(3)—222 第 4年末期回 (4)—152 第 157 図 集石共測図(2)—222 第 115 図 第 4年末期回(3)—222 第 4年末				
第90図 第V文化層運物分布図——125 第131図 第V収化層西尾根出土石器実測図(4)—186 第91図 第V文化層第33号石器プロック実測図—126 第133図 第V収化層西尾根出土石器実測図(5)—166 第133図 第V文化層東尾根および中央谷出土 第133図 第V収化層西尾根出土石器実測図(1)—191 第135図 第V文化層再尾根出土石器実測図—127 第135図 第V収化層石器共測図(1)—191 第135図 第V収化層石器共測図(2)—192 第136図 第V収化層石器分布図——129 第136図 第V収化層石器共測図(2)—194 第95図 第V収化層中央谷出土石器実測図(1)—131 第138図 第137図 第138図 第137図 第138図 第17区 图 第138図 第139図 第137図 第138図 第139図 第140図 第124 日標文時代土器分布図(第1群)—199 第190図 第V収文化層西尾根出土石器実測図(2)—133 第140図 第2中代土器分布図(第1群)—199 第190図 第V収文化層連尾根出土石器実測図(1)—131 第140図 第2中代土器分布図(第1群)—199 第190図 第V収文化層選前分布図——138 第142図 網文時代土器分布図(第1群)—202 第102図 第V収文化層第5号・第7号機群実測図—141 第142図 網文時代土器分布図(第1群)—202 第102図 第V収文化層第5号・第7号機群実測図—141 第144図 網文時代土器分布図(第1群)—203 第103図 第V収文化層第5号・第2号 解群実測図 第144図 網文時代土器分布図(第V群)—203 第103図 第V収文化層第8号・第7号機群実測図 第144図 網文時代土器分布図(第V群)—203 第146図 第V収文化層第25号・第27号 第146図 第144図 網文時代土器分布図(第V群)—203 第146図 第V収文化層東尾根出土石器実測図(2)—148 第149図 第2号・第3号正体不明遺構出土遺物 209 第108図 第102区 第102図 第116図 第112区 第12区 第4号正体不明遺構出土遺物 209 第108図 第102区 第109図 第102区層東尾根出土石器実測図(5)—154 第152図 第4号正体不明遺構出土遺物 209 第109図 第102区層東尾根出土石器実測図(6)—155 第150図 第2号正体不明遺構出土遺物 209 第116回 第112区 第112区 第12区層東尾根出土石器実測図(6)—155 第152図 第4号正体不明遺構出土遺物 215 第152図 第4号正体不明遺構出土遺物 215 第151図 第12区 第4号正体不明遺構出土遺物 215 第152図 第4号正体研算程限出土石器实制図(5)—154 第155図 第4号正体研算程度(2)—152 第152図 第4号正体研算程度(2)—152 第152図 第4号正体研算程度(2)—152 第152図 第4号正体研算程度(2)—152 第152図 第4号正体研算程度(2)—152 第152図 第4号正体研算程度(2)—152 第4号正体研算程度(2)—				
第91図 第V文化層東尾根出去石器支測図 126 第132図 第V工化層直尾根出土石器支測図(5)一186 第92図 第V文化層東尾根出去石器支測図 126 第134図 第V工化層五尾根出土石器支測図 127 第135図 第V工化層五尾根出土石器支測図 127 第135図 第V工化層石器支測図(2) 192 第94図 第V工化層再尾根出土石器支測図 129 第136図 第V工化層石器支測図(3) 194 第95図 第V工化層中央各出土石器支測図(1) 131 第138図 第V工化層石器支測図(4) 195 第96図 第V工化層中央各出土石器支測図(1) 131 第138図 第V工化層石器支測図(5) 196 第97 図 第V工化層中央各出土石器支測図(2) 132 第139 図 網文時代遺構分布図 198 第99 図 第V工化層中央各出土石器支測図(2) 132 第139 図 網文時代遺構分布図 198 第99 図 第V工化層直離非正石器支測図(2) 132 第139 図 網文時代遺構分布図 198 第99 図 第V工化層連降計 配石分布図 137 第141 図 網文時代土器分布図(第1群) 200 第 第101 図 第「工化層遺物分布図 138 第142 図 網文時代土器分布図(第1群) 200 第 第103 図 第「工化層遺物分布図 138 第142 図 網文時代土器分布図(第1群) 200 第 第103 図 第 「工化層遺物分布図 138 第142 図 網文時代土器分布図(第 「群 4 ~6 類) 201 第 104 図 第 V工化層第 5 号・第 7 号機群支測図 142 網 2 網 2 時代土器分布図(第 「群 4 ~6 類) 201 第 104 図 第 V工化層第 5 号・第 2 号機群支測図 142 第 144 図 網 2 網 2 時代土器分布図(第 「群 4 ~6 類) 202 第 104 図 第 V工化層第 8 号・第 12 号機群支測図 142 図 網 2 時代土器分布図(第 V群) 203 第 105 図 第 V工化層東尾根出土石器支測図(2) 144 図 網 2 時代土器分布図(第 V群) 203 第 106 図 第 V工化層東尾根出土石器支測図(3) 149 図 第 148 図 網 2 時代土器分布図(第 V群) 205 第 106 図 第 V工化層東尾根出土石器支測図(3) 150 図 第 150 図 第 V工化層東尾根出土石器支測図(3) 150 図 第 150 図 第 2 号正体不明遺構支測図 209 第 150 図 第 V工化層東尾根出土石器支測図(5) 155 図 第 150 図 第 4 号 5 帝 5 帝 7 号 正体不明遺構支測図 209 第 110 図 第 V工化層東尾根出土石器支測図(5) 155 図 第 156 図 第 4 号 5 帝 7 号 正体不明遺構支測図 216 第 111 図 第 V工 化層東尾根出土石器支測図(6) 155 第 154 図 第 155 図 第 156 図 第 2 長 2 則図(2) 219 第 111 図 第 V工 化層東尾根出土石器支測図(1) 161 第 158 図 第 4 号 2 則 (2) 2 2 2 2 第 4 日 2 第 2 頁 2 第 4 日 2 則 2 第 2 頁 2 頁 2 頁 4 日 2 則 2 第 2 頁 2 則 2 頁 2 頁 4 日 2 則 2 回 2 回 2 回 2 回 2 回 2 目 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	第89図	第IV文化層西尾根出土石器実測図(15)123	第 130 図	
第92図 第V文化層東尾根および中央谷出土 第133図 第14図 第12人間 第12人間 第13を1 第	第 90 図	第V文化層遺物分布図125	第 131 図	第Ⅷ文化層西尾根出土石器実測図(4)──185
第93 図 第V文化層西尾根出土石器実測図 127 第135 図 第 文化層石器実測図 (1) 191 第93 図 第V文化層西尾根出土石器実測図 127 第135 図 第 文化層石器実測図 (2) 192 第94 図 第 文化層石器分析図 129 第136 図 第 文化層石器実測図 (3) 194 第95 図 第 文化層中央谷出土石器実測図 (1) 131 第138 図 第 文化層石器実測図 (4) 195 第96 図 第 文化層中央谷出土石器実測図 (1) 131 第138 図 第 文化層石器実測図 (5) 196 第97 図 第 文化層西尾根出土石器実測図 (2) 132 第139 図 縄文時代連構分布図 198 第98 図 第 文化層通尾根出土石器実測図 (2) 133 第140 図 縄文時代土器分布図 (第1 群) 199 第99 図 第 文化層強響・配石分布図 137 第141 図 縄文時代土器分布図 (第1 群) 200 第100 図 第 文化層強等・配石分布図 137 第141 図 縄文時代土器分布図 (第1 群) 200 第101 図 第 文化層第1号~第4号石囲炉実測図 139 第143 図 縄文時代土器分布図 (第1 群) 202 第102 図 第 文化層第5号・第7号碟群実測図 141 第144 図 縄文時代土器分布図 (第1 群) 203 第103 図 第 文化層第8号・第12号碟群実測図 142 第145 図 縄文時代土器分布図 (第1 群) 203 第103 図 第 文化層第8号・第2号標群実測図 142 第145 図 縄文時代土器分布図 (第1 群) 205 第104 図 第 文化層東尾根出土石器実測図 (1) 145 第146 図 縄文時代土器分布図 (第1 群) 205 第106 図 第 文化層東尾根出土石器実測図 (2) 148 第147 図 縄文時代元器分布図 第1 研) 206 第106 図 第 文化層東尾根出土石器実測図 (3) 150 図 第2号・第3号正体不明遺構実測図 209 第109 図 第 文化層東尾根出土石器実測図 (3) 150 図 第2号・近体可遺構出土遺物 209 第109 図 第 文化層東尾根出土石器実測図 (5) 153 図 土坑実測図 第1年 209 第4号 第6号・第7号正体不明遺構実測図 213 第111 図 第 文化層東尾根出土石器実測図 (7) 157 第154 図 焼土吐実測図 第12 21 第113 図 第 文化層東尾根出土石器実測図 (9) 159 第156 図 集石実測図 (2) 219 第114 図 第 文化層東尾根出土石器実測図 (10) 160 第15 図 集石実測図 (2) 219 第114 図 第 文化層東尾根出土石器実測図 (10) 160 第15 図 集石実測図 (2) 221 第115 図 第 文化層東尾根出土石器実測図 (10) 160 第15 図 集石実測図 (3) 221 第115 図 第 文化層東尾根出土石器実測図 (10) 160 第15 図 集石実測図 (3) 221 第115 図 第 文化層東尾根出土石器実測図 (10) 160 第15 図 集石実測図 (3) 221 第15 図 第 文化層東尾根出土石器実測図 (10) 160 第15 図 集石実測図 (3) 221 第15 図 第 文化層東尾根出土石器実測図 (10) 160 第15 図 集石実測図 (3) 221 第15 図 第15 図 集列図 (4) 222 第15 日 第15 図 第15 図 集列図 (4) 222 第15 日 第15 図 第15 図 集列図 (4) 222 第15 日 第15 図 第15 図 集列図 (4) 222 第15 日 第15 図 集列図 (4) 222 第16 日 第15 図 農 経済 (4) 第15 図 集列図 (4) 222 第16 日 第15 図 農 経済 (4) 第15 図 集列図 (4) 222 第16 日 第15 図 集列図 (4) 222 第16 第16 図 第15	第91図	第V文化層第 33 号石器ブロック実測図126	第 132 図	第Ⅷ文化層西尾根出土石器実測図(5)──186
第93 図 第V文化層西尾根出土石器実測図 127 第135 図 第吨文化層石器実測図 (2) 194 第94 図 第V文化層石器分布図 129 第136 図 第107 区層 東区 (4) 195 第98 図 第V文化層中央谷出土石器実測図 (1) 131 第138 図 第 (4) 195 第98 図 第 (4) 196 第 (4) 197 (4) 198 第 (5) 199 第 (7) 文化層中央谷出土石器実測図 (2) 132 第 (14) 図 網文時代土器分布図 (第11群1~3類) 200 第 (7) 文化層連上石器実測図 133 第 (14) 図 網文時代土器分布図 (第11群1~3類) 200 第 (7) 文化層連 (14) 号 (14) 日 (14)	第92図	第V文化層東尾根および中央谷出土	第 133 図	第1200年190年190年190年190年190年190年190年190年190年1
第94図 第VI文化層石器分布図――――――――――――――――――――――――――――――――――――		石器実測図126	第 134 図	第1191
第95図 第VI文化層東尾根出土石器実測図	第93図	第V文化層西尾根出土石器実測図127	第 135 図	第1111 第111 第11 第1 第
第96 図 第VI文化層中央谷出土石器実測図(1)—131 第138 図 第2位層石器実測図(5)—198 第97 図 第VI文化層中央谷出土石器実測図(2)—132 第139 図 縄文時代遺構分布図 198 第98 第VI文化層選棒・配石分布図 133 第140 図 縄文時代土器分布図(第1群) 200 第100 図 第VI文化層機群・配石分布図 137 第141 図 縄文時代土器分布図(第1群1~3類) 200 第100 図 第VI文化層機群・配石分布図 138 第142 図 縄文時代土器分布図(第1群1~3類) 200 第101 図 第VI文化層 1号~第4号石囲炉実測図 139 第143 図 縄文時代土器分布図(第1群2 202 第102 図 第VI文化層第5号・第7号機群実測図 141 第144 図 縄文時代土器分布図(第1群2 203 第103 図 第VI文化層第5号・第7号機群実測図 141 第144 図 縄文時代土器分布図(第VI群) 203 第103 図 第VI文化層第5号・第7号機群実測図 141 第144 図 縄文時代土器分布図(第VI群) 203 第104 図 第VI文化層第25号・第7号 機群実測図 142 第145 図 縄文時代土器分布図(第VI群) 205 第104 図 第VI文化層第25号・第27号 第146 図 縄文時代土器分布図(第VI群) 205 第106 図 第VI文化層東尾根出土石器実測図(1)—145 第148 図 縄文時代土器分布図 (第VI群) 206 第107 図 第VI文化層東尾根出土石器実測図(2)—148 第149 図 第2号・第3号正体不明遺構実測図 208 第107 図 第VI文化層東尾根出土石器実測図(3)—150 図 第2号正体不明遺構出土遺物 209 第108 図 第VI文化層東尾根出土石器実測図(4)—152 第151 図 第4号正体不明遺構出土遺物 209 第110 図 第VI文化層東尾根出土石器実測図(5)—154 第152 図 第4号:第6号:第7号正体不明遺構実測図 211 第111 図 第VI文化層東尾根出土石器実測図(8)—155 図 第4号:第6号:第7号正体不明遺構実測図 215 第111 図 第VI文化層東尾根出土石器実測図(8)—155 図 集石実測図(2) 217 第114 図 第VI文化層東尾根出土石器実測図(10)—166 第157 図 集石実測図(3) 221 第111 図 第VI文化層東尾根出土石器実測図(11)—161 第158 図 集石実測図(3) 222 第116 図 第VI文化層東尾根出土石器実測図(11)—161 第158 図 集石実測図(3) 第1群1・2類 222 第116 図 第VI文化層東尾根出土石器実測図(11)—161 第158 図 集石実測図(第) 第1群1・2類 222 第116 図 第VI文化層東尾根出土石器実測図(11)—161 第158 図 集石実測図(3) 第1群1・2類 222 第116 図 第VI文化層東尾根出土石器実測図(11)—161 第158 図 塩構外出土土器実測図 第1群1・2類 222 第116 図 第VI文化層東尾根出土石器実測図(11)—161 第158 図 塩構外出土土器実測図 第1群1・2類 225 24 24 24 24 24 24 24 24 24 24 24 24 24	第94図	第VI文化層石器分布図129	第 136 図	第112年
第97図 第VI文化層中央谷出土石器実測図(2)—132 第139図 縄文時代遺構分布図—198 第98図 第VI文化層西尾根出土石器実測図—133 第140図 縄文時代土器分布図(第1群)—199 第99図 第VI文化層礫群・配石分布図—137 第141図 縄文時代土器分布図(第1群1~3類)—200 第100図 第VII文化層業群・配石分布図—138 第142図 縄文時代土器分布図(第1群4~6類)—201 第101図 第VII文化層第1号~第4号石囲炉実測図—139 第143図 縄文時代土器分布図(第1群4~6類)—202 第103図 第VII文化層第5号・第7号礫群実測図—141 第144図 縄文時代土器分布図(第IV群)—203 第103図 第VII文化層第8号・第12号礫群実測図—142 第145図 縄文時代土器分布図(第V群)—204 第104図 第VII文化層第8号・第27号 第146図 網文時代土器分布図(第V群)—205 石器プロック実測図—143 第147図 縄文時代土器分布図(第V群)—205 第106図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(1)—145 第148図 縄文時代土器分布図(第V群)—206 第106図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(2)—148 第149図 第2号・第3号正体不明遺構実測図—208 第107図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(3)—150 第150図 第2号正体不明遺構出土遺物—209 第108図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(4)—152 第151図 第4号正体不明遺構出土遺物—209 第110図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(5)—154 第152図 第4号・第6号・第7号正体不明遺構実測図—211 第111図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(7)—157 第154図 焼土址実測図—215 第111図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(8)—158 第155図 集石実測図(1)—218 第113回 第VII文化層東尾根出土石器実測図(9)—159 第156図 集石実測図(2)—219 第114回 第VII文化層東尾根出土石器実測図(10)—160 第157 與 集石実測図(3)—221 第115回 第VII文化層東尾根出土石器実測図(11)—161 第158図 集石実測図(4)—222 第116回 第VII文化層東尾根出土石器実測図(11)—161 第158図 集石実測図(4)—222 第116回 第VII文化層東尾根出土石器実測図(11)—161 第158回 遺構外出土土器実測図 第1群1・2類—225 第116回 第VII文化層東尾根出土石器実測図(11)—161 第158回 遺構外出土土器実測図 第1群1・2類—225 第116回 第VII文化層東尾根出土石器実測図(11)—161 第158回 遺構外出土土器実測図 第1群1・2類—225	第 95 図	第VI文化層東尾根出土石器実測図130	第 137 図	第1200年 第120年
第98図 第VI文化層西尾根出土石器実測図 133 第140図 縄文時代土器分布図(第1群) 199 第99図 第VII文化層礫群・配石分布図 137 第141図 縄文時代土器分布図(第1群1~3類) 200 第100図 第VII文化層選的分布図 138 第142図 縄文時代土器分布図(第1群1~3類) 202 第102図 第VII文化層第1号~第4号石囲炉実測図 141 第144図 縄文時代土器分布図(第1群2 202 第102図 第VII文化層第5号・第7号礫群実測図 141 第144図 縄文時代土器分布図(第II群) 203 第103図 第VII文化層第8号・第12号礫群実測図 145 図 縄文時代土器分布図(第II群) 203 第103図 第VII文化層第8号・第12号礫群実測図 145 図 縄文時代土器分布図(第VI群) 204 第104図 第VII文化層第25号・第27号 第146図 縄文時代土器分布図(第VI群) 205 石器プロック実測図 143 第147図 縄文時代土器分布図(第VI群) 206 第105 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(1) 145 第148図 縄文時代尖頭器分布図 207 第106 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(2) 148 第149 図 第2号・第3号正体不明遺構実測図 208 第107 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(3) 150 図 第2号正体不明遺構出土遺物 209 第108 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(4) 152 第151 図 第4号・体不明遺構出土遺物 209 第110 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(6) 155 第153 図 土坑実測図 213 第111 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(8) 155 図 集石実測図(1) 218 第113 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(9) 159 第156 図 集石実測図(2) 219 第114 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(10) 166 第157 図 集石実測図(3) 221 第115 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(10) 166 第157 図 集石実測図(3) 221 第115 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(11) 161 第158 図 集石実測図(4) 222 第116 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(11) 161 第158 図 集石実測図(3) 第I群1・2類 222 第116 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(11) 161 第158 図 集石実測図(3) 第I群1・2類 222 第116 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(11) 161 第158 図 集石実測図(3) 第I群1・2類 222 第116 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(11) 161 第158 図 集石実測図(3) 第I群1・2類 222 第116 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(11) 161 第158 図 集石実測図(3) 第I群1・2類 222 第116 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(11) 161 第158 図 集石実測図(3) 第I群1・2類 222 第I 116 図 第IT 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	第96図	第VI文化層中央谷出土石器実測図(1)131	第 138 図	第12年 第12年 第12年 第12年 第12年 第12年 第12年 第12年
第 9 9 図 第 VII 文化 層 機群・配石 分布 図 137 第 141 図 縄文 時代土器 分布 図 (第 II 群 1 ~ 3 類) — 200 第 100 図 第 VII 文化 層 遺物 分布 図 第 142 図 縄文 時代土器 分布 図 (第 II 群 4 ~ 6 類) — 201 第 101 図 第 VII 文化 層 第 1 号 ~ 第 4 号石 囲 炉 実測図 139 第 143 図 縄文 時代土器 分布 図 (第 II 群 4 ~ 6 類) — 202 第 102 図 第 VII 文化 層 第 5 号 · 第 7 号 機群 実測図 141 第 144 図 縄文 時代土器 分布 図 (第 II 群 1 ~ 3 類) — 203 第 103 図 第 VII 文化 層 第 8 号 · 第 12 号 機群 実測図 142 図 縄文 時代土器 分布 図 (第 VI 群) — 204 第 104 図 第 VII 文化 層 第 2 号 · 第 2 7 号 第 146 図 縄文 時代土器 分布 図 (第 VI 群) — 205 石器 ブロック 実測図 — 143 第 147 図 縄文 時代土器 分布 図 (第 VI 群) — 205 第 105 図 第 VII 文化 層 東 尾根 出土石器 実測図 (1) — 145 第 148 図 縄文 時代 大頭器 分布 図 — 207 第 106 図 第 VII 文化 層 東 尾根 出土石器 実測図 (2) — 148 第 149 図 第 2 号 · 第 3 号 正体 不明遺構 実測図 — 208 第 107 図 第 VII 文化 層 東 尾根 出土石器 実測図 (3) — 150 第 150 図 第 2 号 正体 不明遺構 出土遺物 — 209 第 108 図 第 VII 文化 層 東 尾根 出土石器 実測図 (5) — 154 第 152 図 第 4 号 正体 不明遺構 出土遺物 — 209 第 110 図 第 VII 文化 層 東 尾根 出土石器 実測図 (6) — 155 第 153 図 土坑 実測図 第 111 図 第 VII 文化 層 東 尾根 出土石器 実測図 (7) — 157 第 154 図 集 工 実測図 (1) — 218 第 113 図 第 VII 文化 層 東 尾根 出土石器 実測図 (8) — 158 第 155 図 集 石 実測図 (2) — 219 第 114 図 第 VII 文化 層 東 尾根 出土石器 実測図 (10) — 160 第 157 図 集 石 実測図 (3) — 221 第 115 図 第 VII 文化 層 東 尾根 出土石器 実測図 (11) — 161 第 158 図 集 石 実測図 第 1 I I 2 図 第 VII 文化 層 東 尾根 出土石器 実測図 (11) — 161 第 158 図 集 石 実測図 第 1 I I 2 2 2 2 2 2 3 3 1 5 1 5 1 9 遺 遺	第 97 図	第VI文化層中央谷出土石器実測図(2)132	第 139 図	縄文時代遺構分布図198
第100図 第111 第112 第112 第112 第112 第112 第112 第11	第 98 図	第VI文化層西尾根出土石器実測図133	第 140 図	縄文時代土器分布図(第 I 群)199
第101図 第VII文化層第1号〜第4号石囲炉実測図―139 第143図 縄文時代土器分布図(第II群)―203 第103図 第VII文化層第8号・第12号礫群実測図―142 第145図 縄文時代土器分布図(第VII群)―204 第104図 第VII文化層第25号・第27号	第 99 図	第Ⅵ文化層礫群·配石分布図137	第 141 図	縄文時代土器分布図(第Ⅱ群1~3類)200
第102 図 第VII文化層第5号・第7号礫群実測図―141 第144 図 縄文時代土器分布図(第IV群)―203 第103 図 第VII文化層第8号・第12号礫群実測図―142 第145 図 縄文時代土器分布図(第V群)―204 第104 図 第VII文化層第25号・第27号 第146 図 縄文時代土器分布図(第VI群)―205 石器プロック実測図―143 第147 図 縄文時代石器分布図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(1)―145 第148 図 縄文時代尖頭器分布図―207 第106 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(2)―148 第149 図 第2号・第3号正体不明遺構実測図―208 第107 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(3)―150 第150 図 第2号正体不明遺構出土遺物―209 第108 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(4)―152 第151 図 第4号正体不明遺構出土遺物―209 第109 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(5)―154 第152 図 第4号・第6号・第7号正体不明遺構実測図―210 第110 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(6)―155 第153 図 土坑実測図―213 第111 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(8)―157 第154 図 焼土址実測図―215 第113 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(8)―158 第155 図 集石実測図(1)―218 第114 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(10)―160 第157 図 集石実測図(3)―221 第115 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(11)―161 第158 図 集石実測図(4)―222 第116 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(11)―161 第158 図 集石実測図(3)―221 第158 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(11)―162 第158 図 集石実測図(3)―221	第 100 図	第Ⅷ文化層遺物分布図────138	第 142 図	縄文時代土器分布図(第Ⅱ群4~6類)201
第103 図 第VII文化層第8号・第12号礫群実測図―142 第145 図 縄文時代土器分布図(第V群)―204 第104 図 第VII文化層第25号・第27号 第146 図 縄文時代土器分布図(第VI群)―205 石器プロック実測図―143 第147 図 縄文時代石器分布図―206 第105 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(1)―145 第148 図 縄文時代五器分布図―207 第106 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(2)―148 第149 図 第2号・第3号正体不明遺構実測図―208 第107 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(3)―150 第150 図 第2号正体不明遺構出土遺物―209 第108 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(4)―152 第151 図 第4号正体不明遺構出土遺物―209 第109 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(5)―154 第152 図 第4号・第6号・第7号正体不明遺構実測図―210 第110 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(6)―155 第153 図 土坑実測図―213 第111 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(7)―157 第154 図 焼土址実測図―215 第112 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(8)―158 第155 図 集石実測図(1)―218 第113 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(9)―159 第156 図 集石実測図(2)―219 第114 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(10)―160 第157 図 集石実測図(3)―221 第115 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(11)―161 第158 図 集石実測図(4)―222 第116 図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(12)―163 第159 図 遺構外出土土器実測図 第1群1・2類―225	第 101 図	第Ⅷ文化層第1号~第4号石囲炉実測図⋯139	第 143 図	縄文時代土器分布図(第Ⅲ群)202
第104図 第VII文化層第25号・第27号 第146図 縄文時代土器分布図(第VI群) 205 石器プロック実測図 143 第147図 縄文時代石器分布図 206 第105図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(1)145 第148図 縄文時代失顕器分布図 207 第106図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(2)148 第149図 第2号・第3号正体不明遺構黒土遺物 208 第107図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(3)150 第150図 第2号正体不明遺構出土遺物 209 第108図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(4)152 第151図 第4号正体不明遺構出土遺物 209 第109図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(5)154 第152図 第4号・第6号・第7号正体不明遺構実測図210 第110図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(6)155 第153図 土坑実測図 213 第111図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(7)157 第154図 焼土址実測図 215 第112図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(8)-158 第155図 集石実測図(1) 218 第113図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(9)159 第156図 集石実測図(2) 219 第114図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(10)-160 第157図 集石実測図(3) 221 第115図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(11)161 第158図 集石実測図(4) 222 第116図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(11)-161 第158図 集石実測図(4) 222 3 遺構外出土土器実測図 第1群1・2類 225	第 102 図	第Ⅷ文化層第5号・第7号礫群実測図──141	第 144 図	縄文時代土器分布図(第IV群)203
	第 103 図	第Ⅷ文化層第8号・第 12 号礫群実測図──142	第 145 図	縄文時代土器分布図(第V群)204
第 105 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(1) 145 第 148 図 縄文時代尖頭器分布図 207 第 106 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(2) 148 第 149 図 第 2 号・第 3 号正体不明遺構実測図 208 第 107 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(3) 150 第 150 図 第 2 号正体不明遺構出土遺物 209 第 108 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(4) 152 第 151 図 第 4 号正体不明遺構出土遺物 209 第 109 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(5) 154 第 152 図 第 4 号・第 6 号・第 7 号正体不明遺構実測図 - 210 第 110 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(6) 155 第 153 図 土坑実測図 213 第 111 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(7) 157 第 154 図 焼土址実測図 215 第 112 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(8) 158 第 155 図 集石実測図(1) 218 第 113 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(9) 159 第 156 図 集石実測図(2) 219 第 114 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(10) 160 第 157 図 集石実測図(3) 221 第 115 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(11) 161 第 158 図 集石実測図(4) 222 第 116 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(12) 163 第 159 図 遺構外出土土器実測図 第 I 群 1・2 類 225	第 104 図	第Ⅷ文化層第 25 号·第 27 号	第 146 図	縄文時代土器分布図(第VI群)205
第 106 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(2)—148 第 149 図 第 2 号・第 3 号正体不明遺構実測図 209 第 107 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(3)—150 第 150 図 第 2 号正体不明遺構出土遺物 209 第 108 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(4)—152 第 151 図 第 4 号正体不明遺構出土遺物 209 第 109 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(5)—154 第 152 図 第 4 号・第 6 号・第 7 号正体不明遺構実測図 —210 第 110 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(6)—155 第 153 図 土坑実測図 213 第 111 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(7)—157 第 154 図 焼土址実測図 215 第 112 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(8)—158 第 155 図 集石実測図(1) 218 第 113 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(9)—159 第 156 図 集石実測図(2) 219 第 114 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(10)—160 第 157 図 集石実測図(3) 221 第 115 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(11)—161 第 158 図 集石実測図(4) 222 第 116 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(12)—163 第 159 図 遺構外出土土器実測図 第 I 群 1・2 類 —225		石器ブロック実測図143	第 147 図	縄文時代石器分布図206
第 107 図 第 W 文化層東尾根出土石器実測図 (3) — 150 第 150 図 第 2 号正体不明遺構出土遺物 — 209 第 108 図 第 W 文化層東尾根出土石器実測図 (4) — 152 第 151 図 第 4 号正体不明遺構出土遺物 — 209 第 109 図 第 W 文化層東尾根出土石器実測図 (5) — 154 第 152 図 第 4 号 · 第 6 号 · 第 7 号正体不明遺構実測図 — 210 第 110 図 第 W 文化層東尾根出土石器実測図 (6) — 155 第 153 図 土坑実測図 — 213 第 111 図 第 W 文化層東尾根出土石器実測図 (7) — 157 第 154 図 焼土址実測図 — 215 第 112 図 第 W 文化層東尾根出土石器実測図 (8) — 158 第 155 図 集石実測図 (1) — 218 第 113 図 第 W 文化層東尾根出土石器実測図 (9) — 159 第 156 図 集石実測図 (2) — 219 第 114 図 第 W 文化層東尾根出土石器実測図 (10) — 160 第 157 図 集石実測図 (3) — 221 第 115 図 第 W 文化層東尾根出土石器実測図 (11) — 161 第 158 図 集石実測図 (4) — 222 第 116 図 第 W 文化層東尾根出土石器実測図 (12) — 163 第 159 図 遺構外出土土器実測図 第 I 群 1 · 2 類 — 225	第 105 図	第Ⅷ文化層東尾根出土石器実測図(1)──145	第 148 図	縄文時代尖頭器分布図207
第 108 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(4)—152 第 151 図 第 4 号正体不明遺構出土遺物—209 第 109 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(5)—154 第 152 図 第 4 号 · 第 6 号 · 第 7 号正体不明遺構実測図—210 第 110 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(6)—155 第 153 図 土坑実測図—213 第 111 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(7)—157 第 154 図 焼土址実測図—215 第 112 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(8)—158 第 155 図 集石実測図(1)—218 第 113 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(9)—159 第 156 図 集石実測図(2)—219 第 114 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(10)—160 第 157 図 集石実測図(3)—221 第 115 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(11)—161 第 158 図 集石実測図(4)—222 第 116 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(12)—163 第 159 図 遺構外出土土器実測図 第 I 群 1 · 2 類 —225	第 106 図	第Ⅷ文化層東尾根出土石器実測図(2)──148	第 149 図	第2号・第3号正体不明遺構実測図208
第 109 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(5)—154 第 152 図 第 4 号 · 第 6 号 · 第 7 号正体不明遺構実測図 - 210 第 110 図 第 VII文化層東尾根出土石器実測図(6)—155 第 153 図 土坑実測図	第 107 図	第Ⅷ文化層東尾根出土石器実測図(3)──150	第 150 図	第2号正体不明遺構出土遺物209
第 110 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(6)—155 第 153 図 土坑実測図——213 第 111 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(7)—157 第 154 図 焼土址実測図——215 第 112 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(8)—158 第 155 図 集石実測図(1)—218 第 113 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(9)—159 第 156 図 集石実測図(2)—219 第 114 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(10)—160 第 157 図 集石実測図(3)—221 第 115 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(11)—161 第 158 図 集石実測図(4)—222 第 116 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(12)—163 第 159 図 遺構外出土土器実測図 第 I 群 1・2 類—225	第 108 図	第Ⅷ文化層東尾根出土石器実測図(4)──152	第 151 図	第4号正体不明遺構出土遺物209
第 111 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(7)157 第 154 図 焼土址実測図 215 第 112 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(8)158 第 155 図 集石実測図(1)218 第 113 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(9)159 第 156 図 集石実測図(2)219 第 114 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(10)160 第 157 図 集石実測図(3)221 第 115 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(11)161 第 158 図 集石実測図(4)222 第 116 図 第 WI文化層東尾根出土石器実測図(12)163 第 159 図 遺構外出土土器実測図 第 I 群 1・2 類225	第 109 図	第Ⅷ文化層東尾根出土石器実測図(5)──154	第 152 図	第4号•第6号•第7号正体不明遺構実測図210
第 112 図 第 VII 文化層東尾根出土石器実測図 (8) — 158 第 155 図 集石実測図 (1) — 218 第 113 図 第 VII 文化層東尾根出土石器実測図 (9) — 159 第 156 図 集石実測図 (2) — 219 第 114 図 第 VII 文化層東尾根出土石器実測図 (10) — 160 第 157 図 集石実測図 (3) — 221 第 115 図 第 VII 文化層東尾根出土石器実測図 (11) — 161 第 158 図 集石実測図 (4) — 222 第 116 図 第 VII 文化層東尾根出土石器実測図 (12) — 163 第 159 図 遺構外出土土器実測図 第 I 群 1・2 類 — 225	第 110 図	第Ⅷ文化層東尾根出土石器実測図(6)──155	第 153 図	土坑実測図213
第113図 第VII文化層東尾根出土石器実測図(9)159 第156図 集石実測図(2)	第 111 図	第Ⅷ文化層東尾根出土石器実測図(7)──157	第 154 図	焼土址実測図215
第 114 図 第 VII 文化層東尾根出土石器実測図(10)-160 第 157 図 集石実測図(3)	第 112 図	第Ⅶ文化層東尾根出土石器実測図(8)──158	第 155 図	集石実測図(1)218
第 115 図 第 VII 文化層東尾根出土石器実測図(11) 161 第 158 図 集石実測図(4)222 第 116 図 第 VII 文化層東尾根出土石器実測図(12) 163 第 159 図 遺構外出土土器実測図 第 I 群 1・2 類 225	第 113 図	第Ⅶ文化層東尾根出土石器実測図(9)──159	第 156 図	集石実測図(2)219
第116 図 第四文化層東尾根出土石器実測図(12)163 第159 図 遺構外出土土器実測図 第1群1・2類225	第 114 図	第Ⅶ文化層東尾根出土石器実測図(10)160	第 157 図	集石実測図(3)221
	第 115 図	第Ⅶ文化層東尾根出土石器実測図(11)161	第 158 図	集石実測図(4)222
第 117 図 第 VII 文化層東尾根出土石器実測図 (13) — 164 第 160 図 遺構外出土土器実測図 第 I 群 3 類 a 種 — 226	第 116 図	第Ⅶ文化層東尾根出土石器実測図(12)163	第 159 図	遺構外出土土器実測図 第 I 群 1・2 類 225
	第 117 図	第WI文化層東尾根出土石器実測図(13)164	第 160 図	遺構外出土土器実測図 第I群3類a種226

第 161 図	遺構外出土土器実測図	第 199 図	遺構外出土石器実測図(9)	269
	第 I 群 3 類 b 種① (1)226	第 200 図	遺構外出土石器実測図(10)	270
第 162 図	遺構外出土土器実測図	第 201 図	遺構外出土石器実測図(11)	
	第 I 群 3 類 b 種① (2)227	第 202 図	遺構外出土石器実測図(12)	273
第 163 図	遺構外出土土器実測図	第 203 図	遺構外出土石器実測図(13)	274
	第 I 群 3 類 b 種① (3)228	第 204 図	遺構外出土石器実測図(14)	275
第 164 図	遺構外出土土器実測図	第 205 図	遺構外出土石器実測図(15)	276
	第 I 群 3 類 b 種②・③229	第 206 図	遺構外出土石器実測図(16)	277
第 165 図	遺構外出土土器実測図 第 I 群 3 類 c · d 種 - 230	第 207 図	遺構外出土石器実測図(17)	278
第 166 図	遺構外出土土器実測図 第 I 群 4 類231	第 208 図	遺構外出土石器実測図(18)	279
第 167 図	遺構外出土土器実測図 第Ⅱ群1類232	第 209 図	遺構外出土石器実測図(19)	280
第 168 図	遺構外出土土器実測図 第Ⅱ群2類(1)-233	第 210 図	遺構外出土石器実測図(20)	282
第 169 図	遺構外出土土器実測図 第Ⅱ群2類(2)-234	第211図	遺構外出土石器実測図(21)	283
第 170 図	遺構外出土土器実測図 第Ⅱ群3類235	第 212 図	遺構外出土石器実測図(22)	284
第 171 図	遺構外出土土器実測図 第Ⅱ群4類(1)-237	第 213 図	遺構外出土石器実測図(23)	285
第 172 図	遺構外出土土器実測図 第Ⅱ群4類(2)-238	第 214 図	遺構外出土石器実測図(24)	286
第 173 図	遺構外出土土器実測図 第Ⅱ群5類a種239	第 215 図	遺構外出土石器実測図(25)	287
第 174 図	遺構外出土土器実測図	第 216 図	遺構外出土石器実測図(26)	288
	第Ⅱ群5類b・c・d種240	第 217 図	古墳時代以降遺構分布図	290
第 175 図	遺構外出土土器実測図 第Ⅱ群5類 e種241	第218図	古墳時代以降遺物分布図	291
第 176 図	遺構外出土土器実測図 第Ⅱ群6類242	第 219 図	第1号住居址実測図	292
第 177 図	遺構外出土土器実測図 第Ⅱ群7類(1)-243	第 220 図	第2号住居址実測図	294
第 178 図	遺構外出土土器実測図 第Ⅱ群7類(2)-244	第 221 図	第3号住居址実測図	295
第 179 図	遺構外出土土器実測図 第Ⅲ群1~3類⋯245	第 222 図	第1号·第2号掘立柱建物址実測図	296
第 180 図	遺構外出土土器実測図 第Ⅲ群 4 類246	第 223 図	第1号·第2号溝状遺構実測図	297
第 181 図	遺構外出土土器実測図 第IV群 1 · 2類 · 247	第 224 図	古墳時代以降出土遺物	300
第 182 図	遺構外出土土器実測図 第IV群3・4類248			
第 183 図	遺構外出土土器実測図 第V群1・2類249			
第 184 図	遺構外出土土器実測図 第V群3類(1)251			
第 185 図	遺構外出土土器実測図 第V群3類(2)252			
第 186 図	遺構外出土土器実測図 第V群4・5類253			
第 187 図	遺構外出土土器実測図 第V群6類254			
第 188 図	遺構外出土土器実測図 第VI群(早期)255			
第 189 図	遺構外出土土器実測図 第VI群(前期)256			
第 190 図	遺構外出土土器実測図			
	第VI群 (中期・後期~晩期初頭)257			
第 191 図	遺構外出土石器実測図(1)259			
第 192 図	遺構外出土石器実測図(2)260			
第 193 図	遺構外出土石器実測図(3)262			
第 194 図	遺構外出土石器実測図(4)263			
第 195 図	遺構外出土石器実測図(5)264			
第 196 図	遺構外出土石器実測図(6)265			
第 197 図	遺構外出土石器実測図(7)267			
第 198 図	遺構外出土石器実測図(8)268			

挿 表 目 次

第1表	周辺主要遺跡一覧表41	第11表	第2号正体不明遺構土層一覧表	209
第2表	渕ヶ沢遺跡旧石器時代文化層概要49	第12表	第4号正体不明遺構土層一覧表	211
第3表	第 I 文化層出土石器一覧表50	第13表	第6号正体不明遺構土層一覧表	212
第4表	第Ⅱ文化層出土石器一覧表59	第14表	第7号正体不明遺構土層一覧表	212
第5表	第Ⅲ文化層出土石器一覧表72	第 15 表	土坑土層一覧表	·····214
第6表	第IV文化層出土石器一覧表92	第16表	焼土址土層一覧表	217
第7表	第V文化層出土石器一覧表124	第 17 表	第1号住居址土層一覧表	293
第8表	第VI文化層出土石器一覧表128	第18表	第2号住居址土層一覧表	294
第9表	第VII文化層出土石器一覧表136	第 19 表	第3号住居址土層一覧表	295
第 10 表	等WII文化層出十石器一覧表189	第 20 表	掘立柱建物址十層一覧表	296

第1章 調查経過

第I章 調查経過

第1節 調査に至る経緯

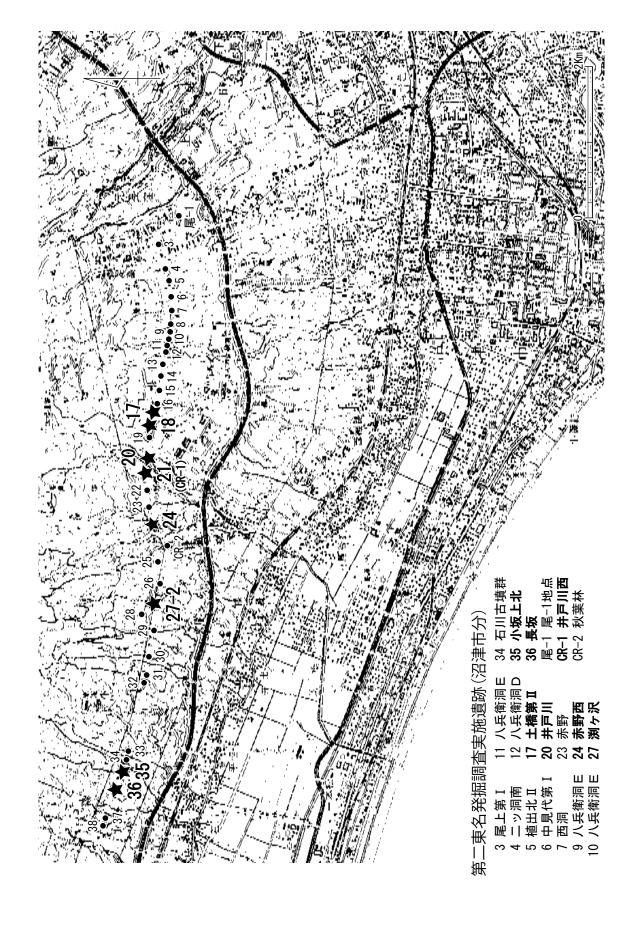
静岡県内を東西に貫く東名高速道路は、高度経済成長を象徴するプロジェクトの一つとして計画された。昭和44年に全線が開通して以来、東京と名古屋を結ぶ大動脈として日本の産業・経済・文化の発展に大きく貢献し、社会を支えてきた。他地域を走る高速道路に比べて利用する自動車台数は極めて多く、移動や物資運搬等の人々の暮らしに欠かせない道路として定着している。しかしながら、交通量の増大がもたらす混雑や開通後40年の経過に伴う維持補修工事によって、渋滞が日常的に発生しており、高速道路の最大の利点である高速性・定時性という機能を失いつつある。また、予想される東海大地震などを始めとする災害や事故などによって東名が通行できなくなった場合に、東西交通が分断され、地域生活や日本経済に重大な影響を与えることは避けられない。

こうした状況を踏まえ、国家的事業として第二東名自動車道(平成23年8月に正式名称が新東名高速道路と決定)の建設が計画された。第二東名完成後には、時間距離の大幅な短縮はもちろん、人・物・情報のより活発な交流、災害等緊急時の輸送路としての役割、インターチェンジ周辺地域の開発と経済的な発展など、様々な効果が期待されている。

第二東名自動車道の建設は、昭和62年6月に第四次全国総合開発計画が閣議決定され、第二東名自動車道が構想された。同年9月には国土開発幹線自動車道建設法の一部改正で予定路線となり、平成元年2月27日に国土開発幹線自動車道建設審議会で基本計画が策定された。平成3年12月3日には、静岡県駿東郡長泉町以西の静岡県全域が基本計画路線から整備路線に格上げされ、平成5年11月19日付けで建設大臣から日本道路公団に対する施工命令が出され、本格的に工事が開始された。

静岡県内における第二東名建設の計画が具体的となってきた平成4年度に、御殿場市から引佐町(現浜松市)までの区間を担当する日本道路公団静岡建設局より、第二東名本線部分にかかわる埋蔵文化財有無の照会を受けたため、分布調査を実施したところ、沼津市域を走る本線上には埋蔵文化財の存在する可能性をもった地点が39か所に及ぶことが判明した。発掘調査の分担は、原則的に本線・SA・PAを県が、工事用道路・取り付け道路・代替地・排土処分場は市町が対応するということになった。しかし、平成8年度に本線部分についての調査協力要請があったため、39か所のうち14か所については沼津市が発掘調査を実施することとなり、平成10年度から現地調査が実施された。

現地調査の実施にあたっては、日本道路公団静岡建設局(局長 小泉光政)、静岡県教育委員会(教育長 杉田豊)、沼津市(市長 斎藤衛)、沼津市教育委員会(教育長 五月女武)が平成10年3月10日付けで「第二東名建設事業に伴う沼津地区埋蔵文化財発掘調査に係る協定書」(以下、「協定書」とする)を取り交わし、日本道路公団静岡建設局と沼津市の間で、平成10年4月1日付けで「平成10年度第二東名建設事業に伴う沼津地区埋蔵文化財発掘調査費用の支払いに関する契約書」を締結した。これより第二東名建設事業に伴う沼津市の発掘調査を開始した。平成11年度以降については、協定書に基づいて工事行程との調整を図りながら調査対象地の選定を行い、年度ごとに「第二東名建設事業に伴う沼津地区埋蔵文化財発掘調査費用の支払いに関する契約書」を締結して現地調査を進めている。そして平成18年度末にはすべての現地調査を終了した。



第1図 第二東名路線図および沼津市発掘調査位置

第2節 発掘調査事業の経過

本書で報告する渕ヶ沢遺跡 (№ 27 - 2 地点)、長坂遺跡 (№ 36 地点)、小坂上北遺跡 (№ 35 地点)、土橋第 II 遺跡 (№ 17 地点)、土橋第 II 遺跡 (№ 18 地点)、井戸川遺跡 (№ 20 地点)、井戸川西遺跡 (№ 21 地点)、赤野西遺跡 (№ 24 地点) の調査のうち、渕ヶ沢遺跡、長坂遺跡、小坂上北遺跡、土橋第 II 遺跡については確認調査を実施した後に本調査を実施しているが、土橋第 III 遺跡、井戸川遺跡、井戸川遺跡、赤野西遺跡については確認調査のみで本調査は実施していない。

ただし、渕ヶ沢遺跡については、確認調査が(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所(現 静岡県埋蔵文化財センター 以後、県埋文とする)によって実施されており、本調査を要する範囲が 50,000㎡を超える広大な面積であっため、本調査については調査範囲の北側(No. 27 - 1 地点)を県埋文が、南側(No. 27 - 2 地点)を市が実施することになった。また、井戸川遺跡・赤野西遺跡については確認調査を実施した後に、埋蔵文化財包蔵地の範囲や様相の概要を把握するための拡張確認調査を実施している。

調査を実施するにあたっては、現地に 10 m方眼の座標を設定し、方眼による区画のグリッドを基準としてトレンチを設定し掘り下げを実施した。遺構・遺物・土層断面などの実測は光波測距儀によって行い、電子野帳に記録した後に沼津市が導入している遺跡管理システムに取り込んでデータベース化した。土層断面の注記は第二東名関連遺跡内で統一を図るため、色調は第一合成株式会社製の土色計(SCR - 1)を用いて測定し、記載は新版標準土色帖に準じた。

なお、グリッド設定や遺構実測および遺物の取り上げ等で使用した座標値については、日本道路公団が建設工事に使用した際の国土座標を元に設定しており、平成15年度に行われた測量法改正以前であることから、現在使用されている世界測地系(WGS84)ではなく旧日本測地系(平面直角座標価系)の座標値となっている。したがって、この報告書内で記す座標については旧日本測地系の座標値である。検出された遺構や遺物、土層断面などに関する写真撮影は随時行い、遺跡の全景や遺構の配置状況などを把握するための空中写真撮影は、RCヘリコプターによる業務委託として必要に応じて実施した。

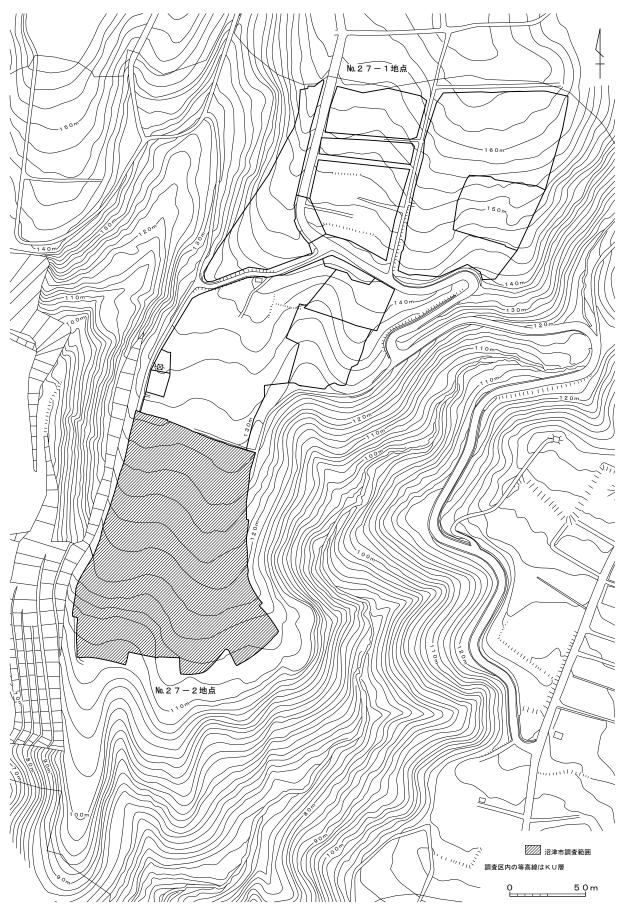
(1) 渕ヶ沢遺跡(No.27 - 2地点)

①確認調査から本調査に至るまでの経過

渕ヶ沢遺跡は、第二東名高速道路建設予定路線内調査地点のなかでNo.27 地点にあたる。No.27 地点の確認調査は県埋文によって平成 $10 \sim 12 \cdot 14$ 年度の 4 か年で実施された。確認調査は地権者の了解を得た箇所から順次、行うかたちで実施されており、基本的にはトレンチとテストピットによる調査が行われた。ただし、平成 10 年度の確認調査は樹木の伐採のみで終了しており、具体的な掘り下げは平成 11 年度から開始している。旧石器時代から古代にかけての遺構と遺物が検出され、特に旧石器時代と縄文時代については多時期に及んでいた。

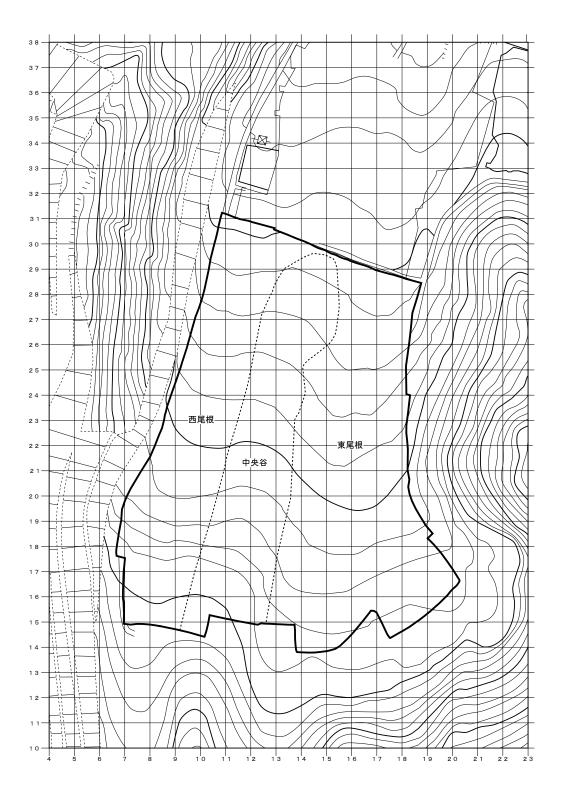
確認調査での成果を踏まえた結果、本調査を要する対象面積が 56,780 ㎡と極めて広い面積に及んでいることが判明した。また当該地の用地買収に日時を要したため、用地買収の進捗に併せて全体を $1 \sim 8$ 地区に分けて調査を実施することが決まった。そして県埋文が、 $1 \sim 6$ 地区(計 36,975 ㎡)を 10 ~

No. 27-2 地点は、第二東名建設工事範囲の中で渕ヶ沢遺跡の調査を要する範囲として $1\sim8$ 地区に分けられた中の $7\cdot8$ 地区に相当する。調査対象面積は 19,805 ㎡である。平成 $15\cdot16$ 年度に本調査を実施しており、平成 15 年度には 15,805 ㎡の調査を行い、残る 4,000 ㎡については平成 16 年度に調



第2図 渕ヶ沢遺跡 調査区位置図







第3図 渕ヶ沢遺跡 グリッド設定図

査を実施した。現地調査は平成 15 年 4 月 10 日から開始し、平成 17 年 3 月 31 日に終了している。当 初、調査にあたって、掘削に伴う排土の処理が問題となった。このため、掘削する位置および順序については、調査区西隣(道路建設予定箇所)→南側→北東側→東側→北側(本線部分)・中央部分と順に調査区を移していくことで排土の位置に問題が起きないようにするとともに、掘り下げ作業においてもベルトコンベアと重機を使用して排土処理がスムーズになるように努めた。また、確認調査において遺構・遺物の大半が栗色土層〜休場層にかけて出土していることが把握されたため、休場層までは基本的に面的な調査を行うこととし、休場層以下についてはトレンチ調査によって遺構や遺物が確認された箇所を拡張するかたちで本調査を実施した。各層位における調査範囲は第6図のとおりである。

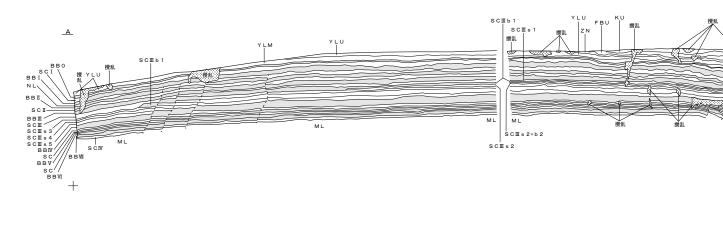
なお、本調査での測量作業については、国土座標 (-94,500.0、28,100.0) を (000-000) として、東方向に X 軸、北方向に Y 軸となる 10 m方眼の座標を設定し、その交点に測量の基準となる方眼杭を設置している (第3図)。

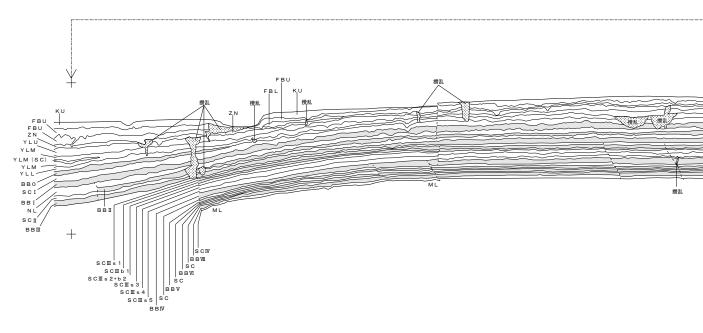
②平成 15 年度調査

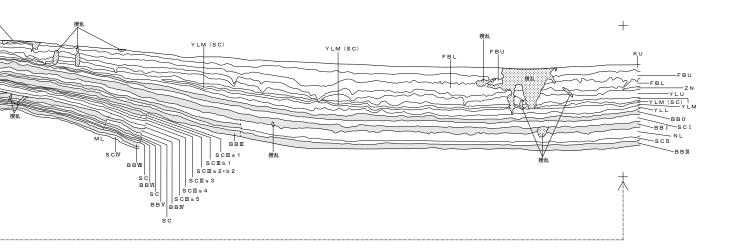
現地調査は西側の道路予定部分から着手し、4月16日から重機による表土剥ぎを開始した。表土剥ぎが終了した箇所から順次、鋤簾がけによる遺構精査および面的な掘り下げをグリッド単位に実施した。5月6日には010 -028 \sim 011 -028 グリッド間において第1トレンチを、5月12日には008 -012 \sim 009 -012 グリッド間に第2トレンチを設定し、両トレンチの掘り下げを行うことで下層の状況を確認しながら、面的な調査を進めることとした。そして両トレンチは5月13日にはニセローム層に到達した。また、5月26日にはグリッド線に沿う形で東西方向に10本のトレンチを追加設定して掘り下げを行い、6月2日には各トレンチが第Iスコリア層上面に到達している。そして、遺構や遺物が未検出のトレンチについては順次、第I1スコリア層まで掘り下げた。西側の道路予定部分のトレンチ調査箇所を除く面的調査全体が6月23日には第I1スコリア層上面に到達したため、空撮を実施した。

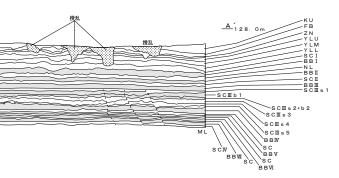
各トレンチの結果から、第Iスコリア層〜ニセローム層上面までの間に遺構や遺物が確認されなかったことから、道路予定部分における第Iスコリア層以下の調査をより早く行うため、6月30日から重機によってニセローム層上面までを掘り下げた。7月14日にはニセローム層上面に到達したため、トレンチを設定して人力による掘り下げを再開した。この掘り下げを行うにあたって、すべてのトレンチで第Ⅱスコリア層上面まで掘り下げ、遺構・遺物が確認された箇所は拡張し、遺構・遺物が確認されなかった箇所については再び重機で第Ⅲスコリア層まで掘り下げることとした。遺構等が確認されたトレンチにおいても8月20日には第Ⅲスコリア層に到達したため、第Ⅲスコリア層の上面に鋤簾がけ等を行い精査した後にさらに細かいトレンチを設定した。そして、掘り下げ途中で遺構・遺物等が確認された箇所についてはトレンチを拡張していき、更なる掘り下げを行っている。なお、第Ⅳ黒色帯と第Ⅷ黒色帯で石器ブロックが確認され、10月3日には中部ローム層に到達した。その後、中部ローム層の一部を掘り下げたところ、10月23日に極めて硬く締まったペアスコリア層に到達し、掘り下げを終了した。

調査区南側については、西側の道路予定部分の掘り下げに並行して6月19日に着手した。栗色土層上面の遺構精査のための鋤簾がけを開始し、遺構確認が終了次第、人力による面的な掘り下げを行った。10月2日には調査区南側における土層の堆積状況および遺構や遺物の状況を確認するために第2トレンチを南東方向に延長して掘り下げたが、11月21日に第Ⅲスコリア層上面に到達した段階で掘り下げを一時中断した。12月12日には第Ⅲスコリア層以下の掘り下げを再開し、12月17日には中部ローム層に到達したため、第2トレンチの掘削を終了している。調査区南側は範囲が広く、起伏が比較的激しい地形となっており、また西側の道路予定箇所との並行作業に加え、調査区北東側の掘り下げも並行して開始したため、掘り下げには日時を要することとなった。栗色土層~富士黒土層では焼土や集石などを検出し、多数の土器や石器がまとまって出土した。特に調査区の南東と南西側付近では遺物の集中



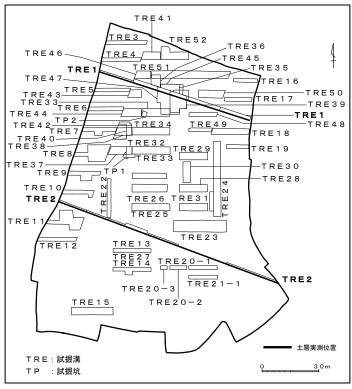


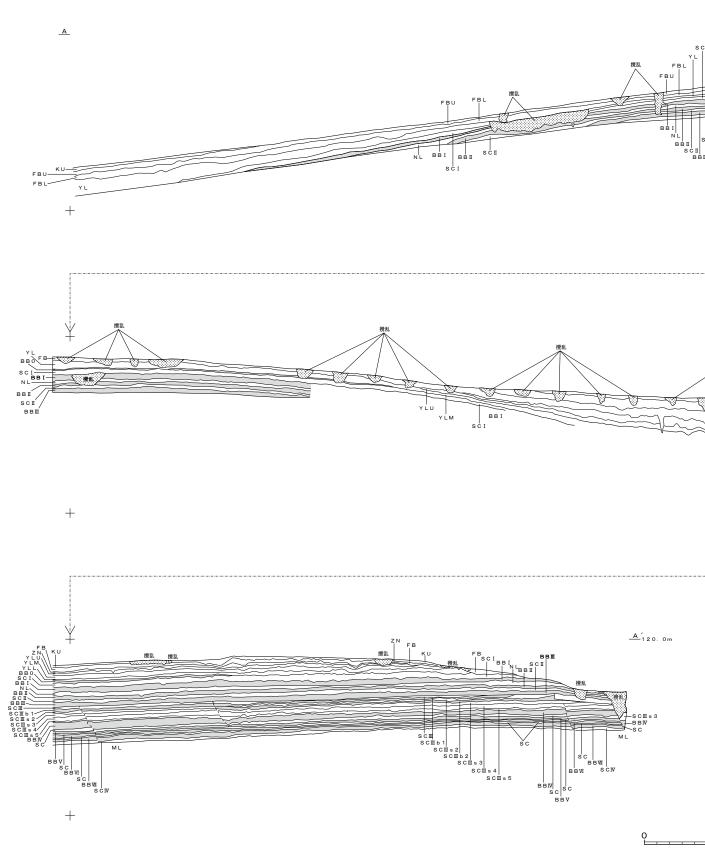




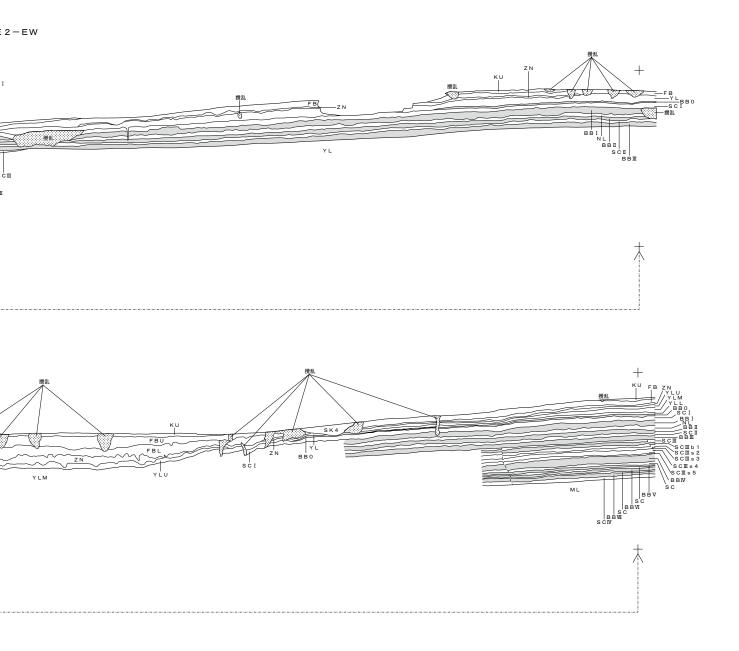
0 5 m

トレンチ・テストピット配置図





第5図 渕ヶ沢遺跡 土層セクション図(2)



箇所が見られたため、掘削範囲の拡張を行い掘り下げを行った。このため調査区南側のほぼ全面が休場層上面に到達したのは2月23日であった。引き続き休場層以下の掘り下げを行ったが、一部のトレンチで第Ⅲスコリア層まで到達したものの、平成15年度中に調査区南側の掘削を完了することはできず、平成16年度に引き続いて掘り下げることとなった。なお、調査区南側では休場層中で縄文時代に属すると考えられる用途不明の竪穴状遺構や旧石器時代の石囲炉が3基検出された。そして第15トレンチの北側の富士黒土層においては、当地域では出土事例が極めて少ない縄文時代後期末に位置付けられる異形台付土器が出土している。

調査区北東側については、前述したように調査区南側の作業と並行して 12 月 19 日から開始した。 基本的にニセローム層までは面的な掘り下げを行い、ニセローム層〜第Ⅲスコリア層はトレンチによる 調査を実施した。なお一部の箇所については重機を使用してニセローム層以下の盤下げを行った。 2 月 5 日には第Ⅲスコリア層上面に到達している。また、第 16・17 トレンチと第 1 トレンチ東側について は、第Ⅷ黒色帯上面まで掘り下げた。

調査区北東側に引き続き、2月の後半には調査区東側の掘り下げと南東部のトレンチ調査(第20・21トレンチ)にも着手したが、富士黒土層の途中で平成15年度の調査が終了し、次年度に継続して掘削することとなった。

③平成 16 年度調査

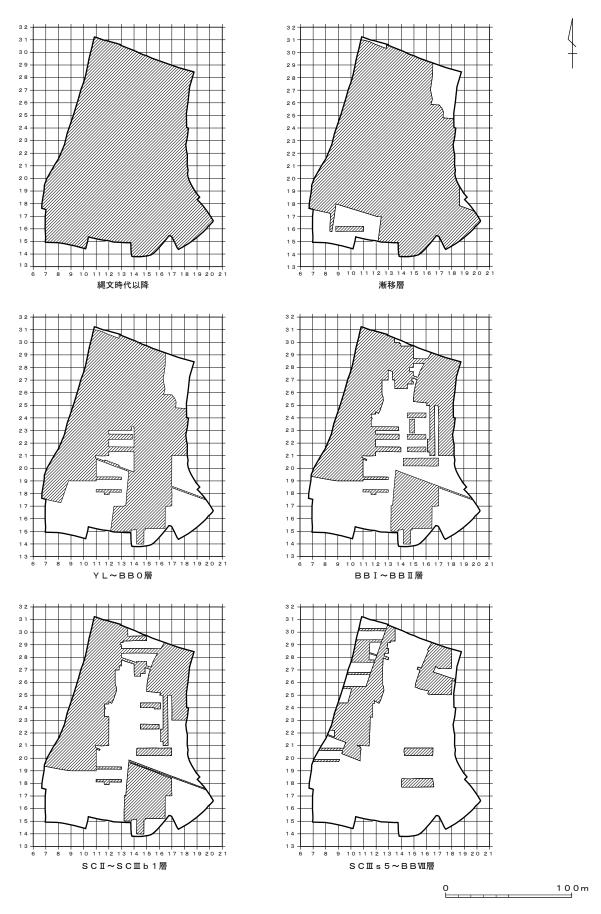
平成 16 年度の調査は 4月 12 日に開始した。まず昨年度から引き続いて南側の一部のニセローム層以下の掘り下げから着手した。そして平成 15 年度の調査において休場層で検出された、石囲炉周辺の休場層の掘り下げと精査を実施した。 5月 26 日には第 13・14 トレンチを設定して掘り下げを行い、5月 31 日には中部ローム層上面に到達した。

また、調査区南側の掘り下げに並行して、平成 15 年度に調査を実施した調査区西側の一部において 休場層および第IV黒色帯の掘り下げを実施した。5月21日には調査区西側の第7~9トレンチの間に 南北トレンチを設定し、第 I スコリア層以下の掘り下げを実施した。他の調査区と並行しての掘り下げ となったため日時を要することとなったが、平成 17年3月7日に中部ローム層上面に到達して、調査 区西側の掘り下げを終了した。

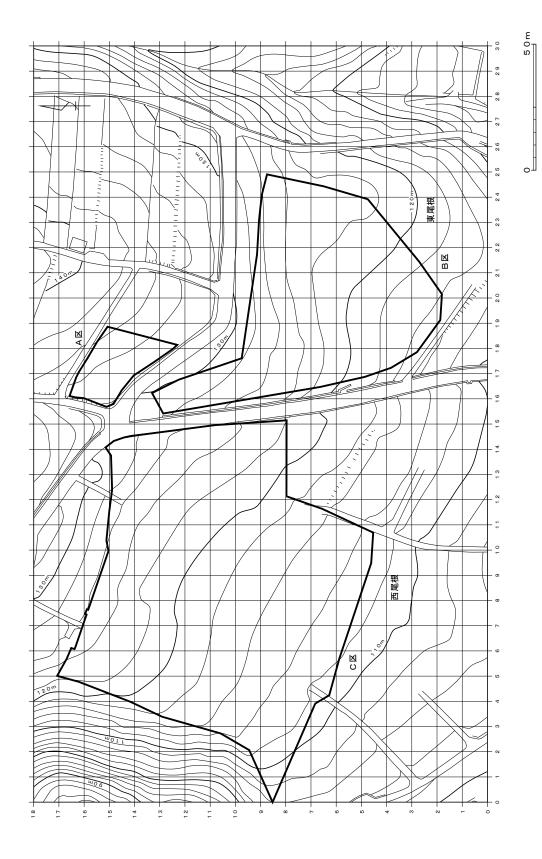
前年度の調査が富士黒土層の掘り下げ途中で中断していた調査区東側は、6月1日から第16~18トレンチを設定して掘り下げた。そして、トレンチの結果を踏まえ、 $017-028\sim017-029$ 、 $016\cdot017-025\cdot026$ グリッドの範囲において第VII黒色帯までの掘り下げを行った。他の調査区と同様に同時並行で掘り下げを実施したため、中部ローム層上面に到達したのは平成17年3月25日である。

本線部分にあたる調査区北側については6月14日から開始した。まず本線部分の南側から着手し、 栗色土層上面の鋤簾がけが終了した後に掘り下げた。第Iスコリア層までは面的に掘り下げたものの、 第I黒色帯より下層についてはトレンチ調査とし、遺構や遺物が確認された箇所については部分的に拡 張して調査を実施した。本線部分の北側についても同様の掘り方で進め、1月25日には本線部分の掘 り下げを終了した。

調査区南東部の調査は9月8日から再開し、休場層から掘り下げを行った。なお、休場層までは面的に掘り下げたものの、第Iスコリア層以下の層位については遺物等が出土した周辺を拡張するかたちで



第6図 渕ヶ沢遺跡 調査範囲図



第8図 長坂遺跡 トレンチ・テストピット配置図

掘り下げている。南東部の調査は平成17年2月24日に終了した。

最後に着手したのが中央部分であり、10月25日から開始した。一部について休場層まで面的な掘り下げを行ったが、大半はトレンチを設定してからの掘り下げとなった。トレンチ内のニセローム層以下の掘り下げについては平成17年2月23日から開始し、同年3月3日に第Ⅲスコリア層に到達して、トレンチの掘り下げを終了した。また面的調査箇所については同年3月25日に第Ⅰスコリア層の掘り下げが終了した。同年3月31日に現地の引き渡しを行い、調査を終了している。

(2) 長坂遺跡(No. 36 地点)

長坂遺跡は第二東名高速道路建設予定路線内調査地点のなかで№ 36 地点にあたる。調査対象となる面積は25,373㎡である。なお、本調査での測量作業については、国土座標(-93,800.0、25,700.0)を(000-000)として、東方向にX軸、北方向にY軸となる10 m方眼の座標を設定し、その交点に測量の基準となる方眼杭を設置している(第7図)。

確認調査は平成 11 年 10 月 1 日~平成 12 年 1 月 18 日に実施した。北東側にトレンチ 23 本、テストピット 15 か所、南東側にトレンチ 4 本、テストピット 66 か所、西側にテストピット 113 か所の、計トレンチ 27 本、テストピット 194 か所を設定して掘り下げた。確認調査の結果、北東側では第 6 ~第 9 トレンチで遺構や遺物を検出し、南東側および西側ではほぼ全域に渡って遺構や遺物が検出された。なかでも遺物は、西側で極めて濃い分布が確認された。確認調査の結果、本調査を必要とする範囲が 15,000㎡を超えることが判明した。そして、遺構や遺物の分布が 3 か所に分かれることから、遺構や遺物が検出された北東側の範囲を A 区、南東側を B 区、西側を C 区とする 3 か所の調査区を設定し、本調査を実施した。本調査の期間は平成 12 年 2 月 2 日~ 3 月 1 4 日、平成 12 年 4 月 10 日~ 12 月 8 日にかけてである。調査された面積は、調査期間の短かった平成 11 年度は 13,661㎡である。 A 区 \rightarrow B 区 \rightarrow C 区の順を基本として本調査を実施したが、遺物や遺構の密度などに応じて一部調査区間で時間的に並行して掘り下げを行っている。以下、調査区ごとに調査経過について見ていくこととする。

① A 区

本調査の着手はA区からであり、平成12年2月2日から開始した。確認調査におけるトレンチを拡張して、全面的に掘り下げた。栗色土層および富士黒土層において、縄文土器、石鏃・尖頭器等の石器類が散在的に出土する様相が確認された。休場層ではナイフ形石器、細石器等が検出された。休場層の途中まで掘り下げたところで平成11年度の調査が終了となったため、一時中断となった。平成12年度の調査は4月10日に開始し、同時にB区の休場層の掘り下げを再開した。4月21日には休場層の掘り下げが終了し、A区の調査を終了した。

②B区

B区の調査はA区の掘り下げと並行して、平成12年4月10日から開始した。なお、B区についてはグリッドのベルトを残してマス目状に掘り下げている。5月8日には黒ボク(暗褐色土)層の掘り下げが終了したため、栗色土層の掘り下げを開始したが、B区の南側で古墳時代に属すると思われる住居址と溝状遺構を検出したため、その精査を行った。5月24日にはB区南側のベルトの掘り下げを開始し、6月15日にはベルトの土層断面等を確認して、ベルトを除去した。休場層以下ニセローム層までについてはトレンチを設定して掘り下げを行い、7月3日に掘り下げを終了した。

7月5日にはB区の西側を拡張してBII区を新たに設定し、表土除去の後に掘り下げを開始した。黒ボク層において古墳時代に属すると推測される溝状遺構やピット等が検出されたため、精査を行った。なお、BII区においても休場層まではグリッドによる面的な掘り下げを行い、休場層以下についてはト

レンチおよびテストピットを設定して、第Ⅲスコリア層上面まで掘り下げた。この後、遺物等が確認された一部のトレンチにおいて拡張を行ったが、11月24日にはB区すべての掘削作業を終了した。

③C区

C区についてはB区の作業に並行して6月29日に着手した。まずC区西側をCI区としてに方眼杭を設置し、7月3日から本格的な掘り下げ作業を開始した。休場層まではグリッド単位で面的な掘り下げを行い、休場層以下はトレンチによる調査を実施した。7月31日にはC区南側で古墳時代の住居址と溝状遺構を検出した。8月2日には一部で休場層上面に到達し、順次トレンチ調査に切り替えて更なる掘り下げを行った。8月4日にはCI区すべてのグリッドおよびトレンチの掘り下げが終了した。

C区の東側である C II 区については、8月~10月にかけて B 区の掘り下げを集中的に行っていたため、本格的に着手できたのは 11月に入ってからである。C II 区は C I 区に比べ遺物の検出状況が比較的まばらであったため、休場層上面までは Y 軸のラインに沿ってトレンチを設定し、掘り下げを行った。休場層以下については、トレンチ内にテストピットを設定し、掘り下げを行った。11月中旬には遺物等が確認された箇所においてトレンチおよびテストピットの拡張を行い掘り下げた。11月24日に C 区全体で掘り下げを終了した。12月8日に現地の引き渡しを行い、調査を終了している。

(3) 小坂上北遺跡(No. 35 地点)

小坂上北遺跡は第二東名高速道路建設予定路線内調査地点のなかでNo.35 地点にあたる。調査対象となる面積は 11,237㎡である。なお、本調査での測量作業については、国土座標(-93,870.0、25,990.0)を(000-000)として、東方向にX軸、北方向にY軸となる 10 m方眼の座標を設定し、その交点に測量の基準となる方眼杭を設置している(第 10 図)。

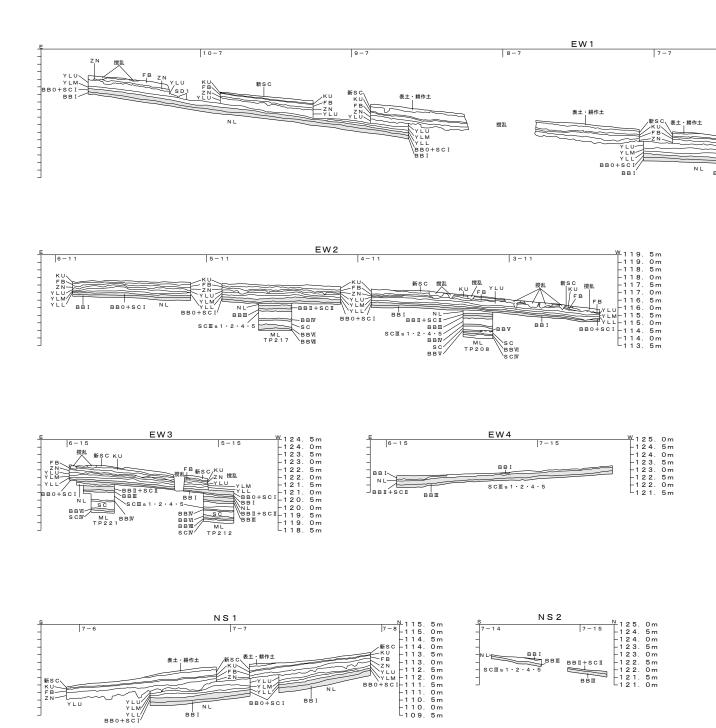
①確認調査

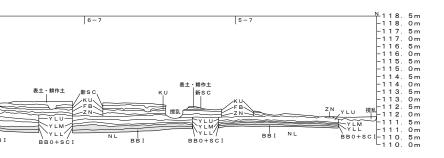
確認調査は平成11年9月6日~10月26日にかけて実施した。計67本のトレンチと60か所のテストピットを設定し、掘り下げを行った。トレンチは南北方向を基本に設定したが、一部は地形に沿う方向となった。またテストピットは、休場層中から遺物が検出された範囲において第Ⅲスコリア層まで掘り下げた。確認調査の結果、調査範囲のうち北側(北西側)と南側で縄文時代の土器や石器、旧石器時代(休場層)の石器の分布が確認され、北側と南側において本調査が必要と判断された。調査を必要とする面積は北側と南側で合計2,340㎡である。

②本調査

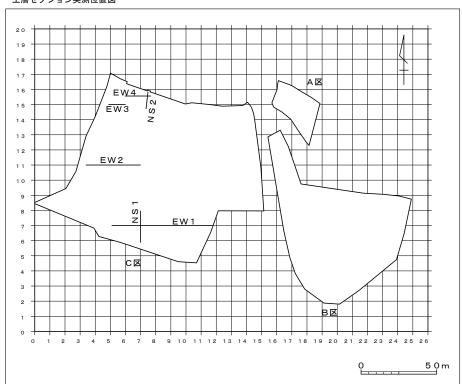
本調査は確認調査終了時から1か月を待たずして実施された。本調査の調査期間は平成11年11月16日~平成12年3月14日にかけてである。南北両調査区の調査を同時に開始し、確認調査において遺物が比較的多く検出された第 I 黒色帯まで調査区全体の掘り下げを行ったところ、北調査区では調査範囲の西側を中心とした遺物の分布が、南調査区では調査区中央部の東側を中心とした遺物の分布が確認された。2月4日にはニセローム層上面に到達したため、南北方向のトレンチを北側に3本、南側に4本設定し、南調査区から掘り下げを行った。2月15日にはほぼすべてのトレンチで第Ⅲスコリア層に到達した。第Ⅲスコリア層以下では北調査区の中央北側の第Ⅳ黒色帯に礫や石器の分布が確認されたため、分布が確認された範囲を拡張して中部ローム層上面まで掘り下げを行った。そして拡張範囲すべてにおいて中部ローム層に到達した。平成12年3月14日に本調査を終了している。

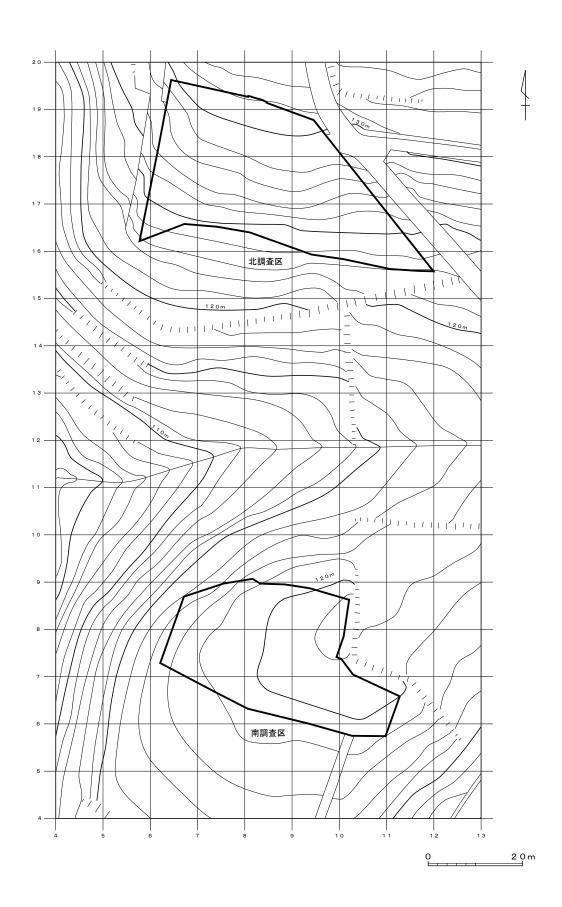
なお、この本調査の調査経過については、調査日誌等が残されていないため、発掘調査概要書や測量 記録をもとにしてまとめている。



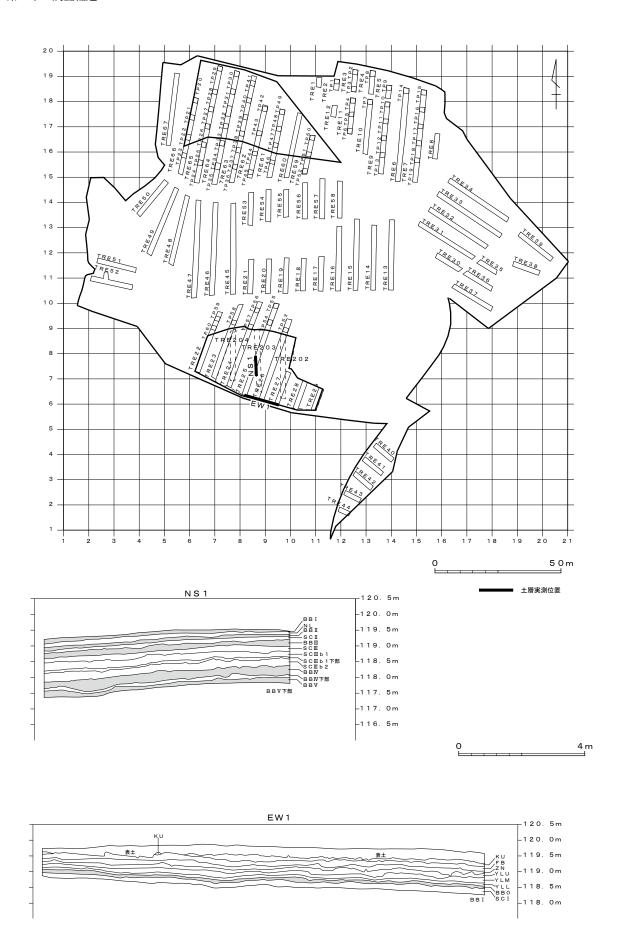








第10図 小坂上北遺跡 グリッド設定図



第11図 小坂上北遺跡 トレンチ・テストピット配置図および土層セクション図

(4) 土橋第Ⅱ遺跡(No.17 地点)

土橋第Ⅱ遺跡は第二東名高速道路建設予定路線内調査地点のなかで№ 17 地点にあたる。調査対象となる面積は 9.373㎡である。

①確認調査

確認調査は平成 11 年 4 月 12 日~ 5 月 11 日にかけて実施した。調査対象地は尾根が西と東に分岐する地形となっていたために、東西の尾根上を中心にテストピット 28 か所およびトレンチ 4 本を設定した。また、東側の中央北側は尾根を東西に掘り込んで道路が造られていることから、この道路部分に関しては、調査対象範囲から外している。なお、本調査での測量作業については、国土座標(-94,250.0、30,650.0)を(000-000)として、東方向にX 軸、北方向にY 軸となる 10 m方眼の座標を設定し、その交点に測量の基準となる方眼杭を設置している(第 12 図)。

調査は東尾根北側に設定したテストピット(TP 13 ~ 15)から掘り下げを開始した。また、南側においても東側に南北方向のトレンチを 2 本設定し(TRE 1 ・ 2)、テストピットとほぼ同時にトレンチの掘り下げを行った。休場層において石器や黒曜石片が比較的多く出土している。 4 月後半には西尾根に着手し、テストピットを設定して掘り下げを行った。また、 4 月の終わりには東西方向にトレンチを 2 本設定して(TRE 3 ・ 4)、テストピットと同時に掘り下げている。第 3 ・ 4 トレンチでは栗色土層や富士黒土層で比較的多くの石器類が出土している。また、西尾根上では古墳時代以降の溝状遺構と推測される遺構が確認された。 5 月 11 日にはすべてのテストピットおよびトレンチにおいて休場層までの掘り下げが終了し、確認調査を終了した。

②本調査

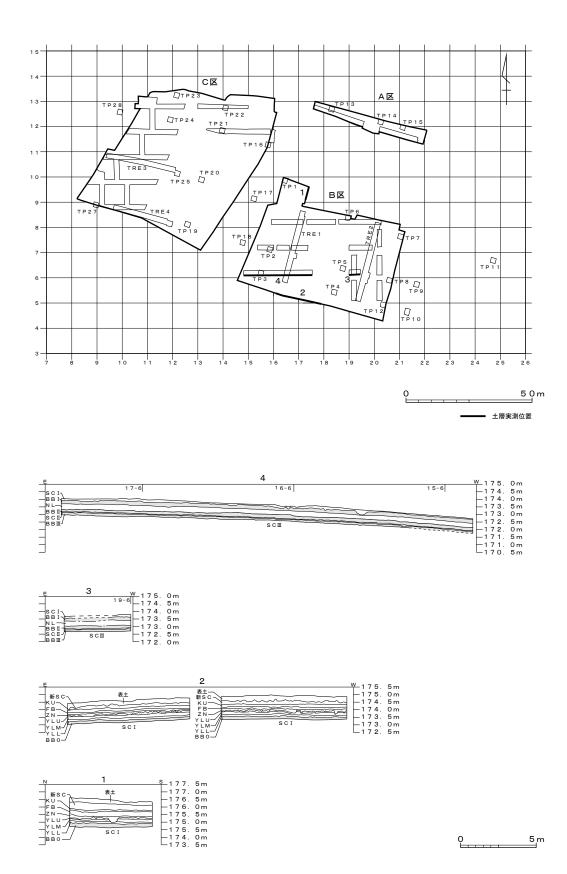
確認調査の結果、調査対象地北東側と南東側、西側において遺物が確認されたため、本調査が必要と判断された。本調査の実施にあたっては、北東側をA区、南東側をB区、西側をC区とする調査区を設定して実施し、調査に係る期間は、平成11年5月28日~8月31日にかけてA区の発掘調査を実施し、平成13年10月16日~平成14年3月20日にかけてB・C区の発掘調査を実施した。

前述したようにA区の発掘調査は平成11年度に実施した。着手したのは平成11年5月28日からである。A区は調査範囲が東西に細長く狭いため、面的に掘り下げることとなった。休場層に到達した段階で、休場層以下の状況を確認するトレンチをA区南壁に沿って設定し、第Iスコリア層まで掘り下げた。その後トレンチをA区全面に拡張して掘り下げを行い、8月31日に全面で第Iスコリア上面に到達し、平成11年度の本調査を終了した。

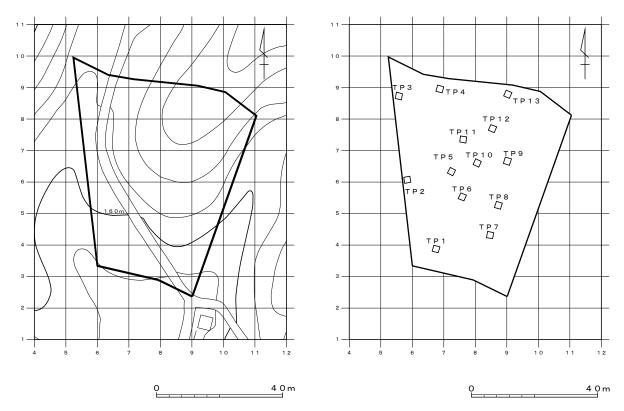
平成 11 年度に続く本調査は平成 13 年度に実施され、B区とC区の掘り下げを行った。10 月 16 日から現地での作業を開始し、まずB区の掘り下げから開始した。調査区東側からグリッド毎に面的に掘り下げた。東側で休場層上面に到達した段階において、019 および 020 グリッドライン(X軸)に沿って南北方向のトレンチを設定し休場層の状態を確認した。休場層内で遺物等が確認されたため、ほぼ全面の掘り下げを行った。12 月 19 日には全面が第 I スコリア層に到達したため、006、007 および 009 グリッドライン(Y軸)に沿ってトレンチを設定し、第 I スコリア層〜第Ⅲ黒色帯まで掘り下げ、各トレンチが第Ⅲスコリア層上面に到達した段階で終了した。第 I スコリア層以下では遺物等がほとんど検出されなかったため、B区の調査を終了した。

C区の調査は、B区に並行して10月26日から開始した。鋤簾がけの後に黒ボク層の精査を行った結果、確認調査で検出されていた溝状遺構が、C区東側に入る谷頭から谷筋を南に向かう形状であることが確認された。この後、栗色土層と富士黒土層の掘り下げを行い、12月18日には北東側で休場層上面に到達したことから、谷頭より北側の位置に012および013のグリッドライン(Y軸)に沿うかたちでトレンチを設定し、掘り下げた。結果、平成14年1月23日には第Ⅲスコリア層上面に到達した。

第12図 土橋第二遺跡 グリッド設定図



第13 図 土橋第Ⅱ遺跡 トレンチ・テストピット配置図および土層セクション図



第 14 図 土橋第Ⅲ遺跡 グリッド設定図

第15図 土橋第Ⅲ遺跡 テストピット配置図

西側については尾根の頂部となっていることから、休場層までは面的に掘り下げを行った。そしてグリッドラインに沿うようにトレンチを設定し、休場層下部黒色帯以下の掘り下げを開始した。トレンチについては平成 14 年 3 月 7 日には第 \square スコリア層上面に到達した。一部のトレンチで遺物等が確認されたため、011-013、010-012、009-010 グリッド付近を拡張して掘り下げた。これら拡張箇所についても 3 月 19 日に第 \square スコリア層上面に到達し、掘り下げを終了した。翌日 3 月 20 日には現地を撤収し、本調査を終了した。

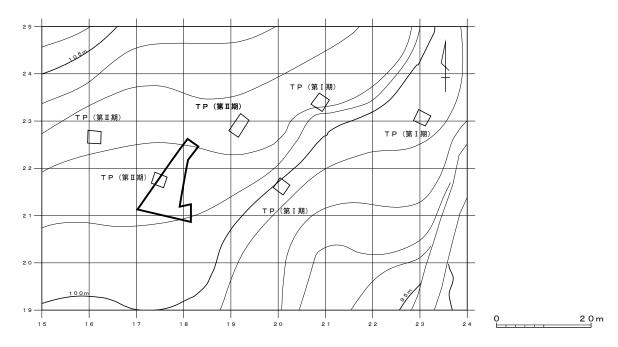
(5) 土橋第Ⅲ遺跡(No. 18 地点)

土橋第Ⅲ遺跡は第二東名高速道路建設予定路線内調査地点のなかで№ 18 地点にあたる。調査対象となる面積は 2,563㎡である。なお、本調査での測量作業については、国土座標(-94,190.0、30,600.0)を(000-000)として、東方向に X軸、北方向に Y軸となる 10 m方眼の座標を設定し、その交点に測量の基準となる方眼杭を設置している(第14図)。

確認調査は平成 13 年 2 月 1 日~ 2 月 20 日にかけて実施した。テストピットを 13 か所設定して、掘り下げを行った。なお、基本的にすべてのテストピットにおいて中部ローム層まで掘り下げを行っている。

掘り下げの結果、土層の堆積が不明瞭で、標準的な愛鷹ローム層とは明らかに違っている状況であった。また、TP5、11、12 において頁岩製の剥片と思われる岩片や礫、TP2 において礫が出土したものの、明確な石器等は確認されなかった。

これらの結果から、土層の堆積は再堆積が著しく、遺物の位置も原位置を止めていない可能性が極めて高いことから、遺跡外と判断され、確認調査のみで終了している。



第 16 図 井戸川遺跡 グリッド設定図およびテストピット配置図

(6) 井戸川遺跡(No. 20 地点)

井戸川遺跡は第二東名高速道路建設予定路線内調査地点のなかで№ 20 地点にあたる。本地点は橋脚の設置箇所およびその掘削範囲が調査対象となっており、面積は 4,363㎡である。なお、本調査での測量作業については、国土座標(- 94,300.0、30,000.0)を(000 - 000)として、東方向にX軸、北方向にY軸となる 10 m方眼の座標を設定し、その交点に測量の基準となる方眼杭を設置し行った(第16 図)。

確認調査は平成 10 年 10 月 19 日~ 23 日 (第 I 期)、平成 11 年 2 月 1 日~ 19 日 (第 II 期) の 2 回 に分けて実施した。

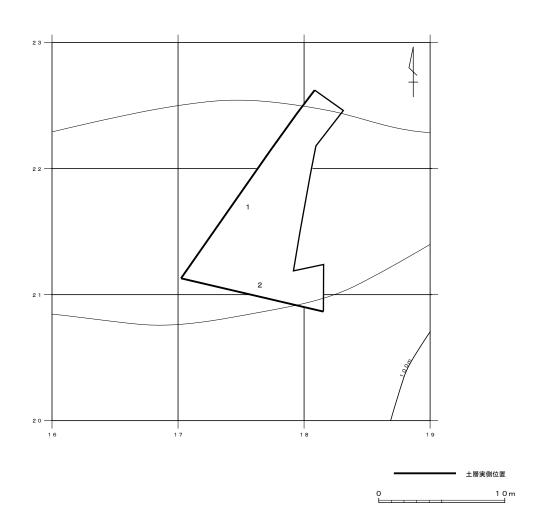
第 I 期は橋脚設置部分を中心に遺跡の所在確認を平成 10 年 10 月に実施した。テストピットを橋脚部分に3か所設定して手掘りで掘り下げた。表土以下休場層までは標準的な愛鷹ローム層の層序となっていたが、休場層直下は愛鷹ローム層の基盤である礫層(岩盤)となっていた。

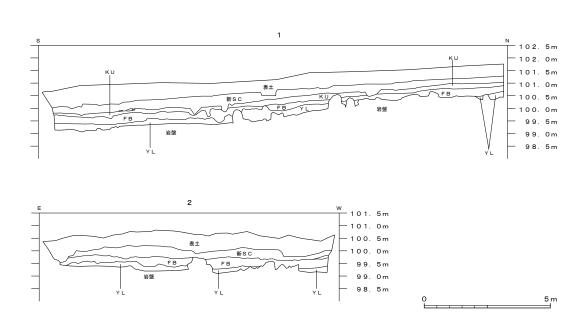
第Ⅱ期は、第Ⅰ期で確認調査を実施できなかった調査範囲の西側部分と工事影響範囲を対象とした確認調査を、平成11年2月に実施した。低位の河岸段丘部に3か所のテストピットを設定して掘り下げるとともに、第Ⅰ期の確認調査で遺物が出土した2か所のテストピットの位置を踏まえて三角形状に拡張して掘り下げた。その結果、栗色土層下部~富士黒土層上部にかけて縄文時代早期末葉の土器(入海式)と石匙等の石器が出土した。

これらの結果から、当該地に遺跡の分布が確認されたものの、橋脚部の設置箇所以外であったため、掘削等の工事が実施されない場所であることから、第二東名の建設工事が当初計画に変更がない場合は 当該地での本調査は不要と判断され、確認調査を拡張して実施する拡張確認調査の実施に止め、本調査 は実施しなかった。

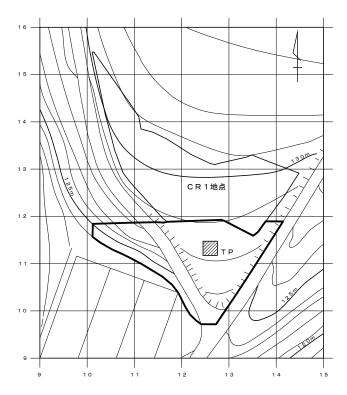
(7)井戸川西遺跡(№ 21 地点)

井戸川西遺跡は第二東名高速道路建設予定路線内調査地点のなかでMc 21 地点にあたる。調査対象となった面積は 430㎡である。なお、本調査での測量作業については、国土座標(-94,170.0、





第 17 図 井戸川遺跡 土層セクション図





第18図 井戸川西遺跡 グリッド設定図およびテストピット配置図

29,920.0)を(000-000) として、東方向にX軸、北方向にY軸となる 10 m方眼の座標を設定し、その交点に測量の基準となる方眼杭を設置し行った (第 18 図)。

確認調査は平成 11 年 2 月 4 日~ 5 日の 2 日間で実施した。調査対象面積のうち約半分が削平を受けていたため、残存する箇所の中央部分にテストピットを 1 か所設定して掘り下げた。その結果、休場層の下に中部ローム層が確認されており、遺構や遺物は検出されなかった。このため、遺跡外と判断されため、確認調査のみで終了している。

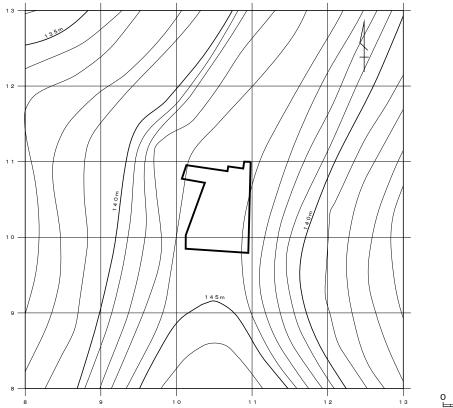
(8) 赤野西遺跡 (No. 24 地点)

赤野西遺跡は第二東名高速道路建設予定路線内調査地点のなかでNo.24地点にあたる。調査対象となった面積は1.867㎡である。確認調査は平成13年7月2日~7月30日にかけて実施した。

なお、本調査での測量作業については、国土座標(-94,280.0、29,260.0)を(000-000)として、東方向にX軸、北方向にY軸となる 10 m方眼の座標を設定し、その交点に測量の基準となる方眼杭を設置し行った(第 19 図)。

当該地の地形は東西に谷が入るために細い馬の背状の尾根となっていることから、比較的平坦面が残る調査範囲の南側に遺跡の範囲が限定されると推測されたため、トレンチを設定して掘り下げることとした。なお、表土直下は栗色土層ないし富士黒土層となっていたが、堆積は15cm程度と薄い状態であったことから、当該地は大きく削平を受けているものと推測される。調査については、まず最も平坦な箇所に南北11 m×東西3 mの範囲でトレンチを設定した。そして、西側の傾斜が東側に比べると緩やかであることから、当初設定したトレンチの北側に南北3 m×東西5 m、南側に南北3 m×東西4 mのトレンチをつなげ、コの字状になるトレンチを人力によって掘り下げた。

栗色土層および富士黒土層において、縄文時代早期~前期にかけての土器や石器が出土した。そして 全面が休場層上面に到達した段階において、当該地の地形状況を踏まえた結果、本地点では本調査では



0 10m

第19図 赤野西遺跡 グリッド設定図

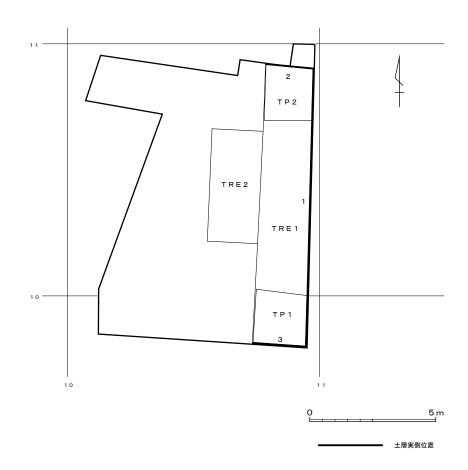
なく遺物が出土した範囲を拡張して掘り下げを行う拡張確認調査を実施することとなった。なお、縄文 時代の遺物の出土箇所を拡張した結果、調査範囲は変則的な台形状となっている。

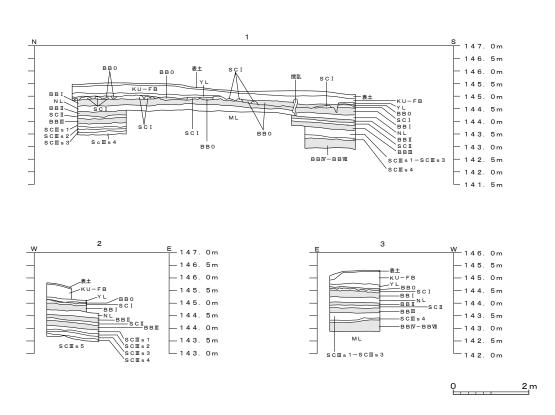
拡張された調査範囲全面が休場層に到達した後、調査範囲の東側から休場層の掘り下げを行った。第 II 黒色帯直上で石器ブロックが、第II 黒色帯下層において礫群が1基確認されたものの、検出範囲は調 査範囲の東側に散在的な様相になっていたため、休場層以下については調査範囲の東側とその中央部を 一部拡張して掘り下げるに留め、7月30日には調査を終了している。

第3節 整理事業の経過

第二東名建設事業に伴う発掘調査の整理事業は平成 16 年度から本格的に着手した。これまでに、平成 16・17 年度に石川古墳群(No. 34 地点)、平成 18 年度に尾上第 I 遺跡(No. 3 地点)、平成 16~19 年度にかけて尾壱遺跡(沼津工業団地代替地)、平成 17~20 年度にかけて中見代第 I 遺跡(No. 6 地点)、平成 21 年度に八兵衛洞遺跡(No. 9~12 地点)、平成 21・22 年度に二ッ洞南遺跡・植出北 II 遺跡(No. 4・5 地点)、平成 23 年度には赤野遺跡(No. 23 地点)・西洞遺跡(No. 7 地点)・井戸川西遺跡(CR -1)・秋葉林遺跡(CR -2)の整理事業を実施し、各遺跡の発掘調査報告書を刊行している。

本報告書に関する整理作業については、中日本高速道路株式会社東京支社沼津工事事務所と沼津市の間で、平成23年4月1日に「平成23年度第二東名建設事業に伴う沼津地区埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」、平成24年4月1日に「平成24年度第二東名建設事業に伴う沼津地区埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」、平成25年4月1日に「平成25年度第二東名建設事業に伴う沼津地区埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」を締結して、中日本高速道路株式会社東京支社沼津工事事務所が委託する業務を沼津市が受託するかたちで3か年で実施した。





第20図 赤野西遺跡 トレンチ・テストピット配置図および土層セクション図

年度ごとの作業内容については、遺物の洗浄、遺物の仕分け、注記作業といった基礎的な作業を平成23年度中に行い、遺物抽出作業や遺構図、遺物実測図や拓影図といった図版の作成、本文執筆、編集などの作業は平成24・25年度にかけて実施した。なお、渕ヶ沢遺跡(№27-2地点)については旧石器時代および縄文時代における石器の出土点数が膨大なため、石器抽出作業や器種分類などの作業を他の作業に先行して平成23年度に実施した。

本報告書の作成にあたっては、沼津市教育委員会事務局文化振興課文化財調査係が担当し、市内大諏 訪 46 - 1 に所在する沼津市文化財センターで整理作業の実務を行った。

遺物の実測作業のうち土器については、まず土器を時代別に分類してから接合作業を行った。接合後には復元樹脂を用いて接合土器の強化・復元を行っている。接合作業後、縄文土器の拓本作業を実施し、拓本が終了した縄文土器から順次、断面実測を行った。また、縄文土器のうち器形がほぼ判明したものや口縁部など特徴的な部位の破片については、元の器形をある程度復元した実測図を作成した。須恵器や土師器などは接合によってある程度の器形が判明したものについては、これらを株式会社シン技術コンサルに業務委託し、正射投影撮像装置(SIOS - 1000)により等倍で画像を撮影して実測に使用した。SIOS - 1000 は、立体物の寸法精度を保ったまま結像する、歪みのない正射投影と呼ばれる方法を用いているため、完全な画像の撮影が可能である。今回の整理作業ではこの写真を実測用の下絵として鉛筆による素図を作成した。これらの作成した実測図や素図をスキャニングした後に、汎用 CAD ソフト「Adobe Illustrator®」を使用してペンタブレットによるデジタルトレースを行った。なお、縄文土器についてはこれに拓本を貼り込んでいる。

石器については抽出作業の後、器種別に分類し重量を計測した。実測作業のうち礫器については、文化財センター内で撮影したデジタル写真をもとに整理補助員の手により実測図を作成した。剥片石器についてはすべてを株式会社ラングに業務委託し、3次元レーザースキャニングをもとにしたデジタルトレース図を作成し、そのまま報告書図版として使用した。石器のうち、旧石器時代と縄文時代の黒曜石製石器については、石材の原産地を特定するため、沼津市が平成17年度に導入した島津製作所製エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置(EDX – 900HS)を用い、旧石器時代は分析可能な大きさのもの全点、縄文時代は剥片石器に対して蛍光 X 線分析を行った。その結果については第XII章(第2分冊)に記す。なお、土器・石器の計測値・材質・器種名や型式名などのデータは、できる限り遺跡管理システムに入力し、保管している。

報告書図版の作成と本文執筆に関しては遺物の実測作業に併行して実施し、主務の専門職員と2人の専門職員に執筆分担させて行った。その際の遺構・文化層の認定基準と石器の分類基準については、後述する。遺構図版作成のためのデータは、現地調査時にデジタルデータとして遺跡管理システムに取り込んだものに必要最低限の編集を加えて整合性を確認し、図版用の図面とするための編集作業を行い、汎用 CAD ソフト「Adobe Illustrator®」データに変換した。これら遺構図面の編集作業については「整理作業支援業務委託」として、沼津市において本遺跡管理システムを運用・管理している株式会社シン技術コンサルの社員が担当職員の指示に従って行っている。

これら遺物の実測図と遺構の編集図面とを、汎用 DTP ソフト「Adobe InDesign®」に取り込み、印刷発注に向けた編集作業を進めた。

写真図版は、現地調査時に撮影した遺構・遺物などの記録写真と、整理作業時に撮影した接合・復元 された遺物の記録写真を合わせて整理し、写真図版用の版下を作成した。(小崎)

遺構と遺物の設定・分類と文化層の認定について

本報告書で扱う文化層および遺構は、以下のような内容について検討し認定を行った。また、石器についても、以下のような分類に基づいて器種を決定した。

【遺構の設定】

石器ブロックは、出土層位ごとに平面分布図を作成し、視覚的な石器集中地点を石器ブロックと呼称 した。複数の層位にまたがって分布する場合、接合資料の分布、黒曜石の産地別分布、石材別の分布、 示準的な石器の分布、出土層位等を検討し、同時性が高いと判断されるときは同一の石器ブロックに統 合した。

配石は、重量 900g 以上の礫を配石とした(竹内 1994)。

礫群は、調査時の記録を参考にして、一定範囲内に3点以上の礫が散在・集中・密集しているものを 礫群として取り扱った。これらは出土層位、石材、接合資料等の水平分布と垂直分布を検討し、同時性 が高いと思われる文化層に編入した。

炭化物は、礫群や石器ブロックに供伴するものを図示した。これらのなかから年代測定と樹種同定が可能な資料を抽出して自然科学分析を実施した。

石器類の接合は、石材別に分類し、色調・流理構造・斑晶などの特徴に基づいて細別して行った。黒曜石は蛍光X線分析法を用いて原産地別に分類し、色調・流理構造・斑晶などの特徴に基づいて細別して接合した。砕片は蛍光X線分析法による原産地別の分類が難しいため接合を省略している。

【文化層の認定】

文化層は、接合資料の分布、黒曜石の原産地別分布、石材別の分布、示準的な石器の分布、出土層位等を検討し、同時性が高いと想定されるブロックをまとめて認定した。単独で出土した石器は、ブロックに準じて文化層に編入した。

【石器の分類】

石器の分類は、図録「石器入門辞典」先土器 1991 加藤晋平・鶴丸俊明と、「旧石器考古学事典」〈増補改訂〉 2001 旧石器文化談話会編などの分類を基準にして行った。

台形様石器:平面形が台形状を呈する。石器の主軸に対して直交する刃部を一端に持つ剥片石器。

ナイフ形石器:剥片の鋭利な縁辺を刃部とし、他の部位に腹面側から急斜な角度の整形を施して、一端を鋭く尖らせた剥片石器。

尖頭器:平坦剥離を多用した両面・片面調整・周辺加工の槍先形の石器。

掻器:剥片または石刃の端部に、連続する調整剥離で弧状の分厚い刃部を作り出した石器。

削器:石刃や各種の剥片を素材とし、その縁辺に主として腹面側から入念な二次加工を施して薄い刃縁を作り出した剥片石器。

彫器:石刃または縦長剥片を素材とし、その先端部もしくは裁断したあとの端部に、1回から数回加撃で樋状剥離を施して彫刀面を作り出した石器。

楔形石器:相対する縁辺に、両極打法によって形成された細かな階段状の剥離痕が密集する石器。縦断 面形は凸レンズ状を見せ、平面形状は四辺形を呈するものが多い。

石錐:石刃や小形剥片の一部に二次加工を施して短く尖らせ、刺突・穿孔の機能を持たせた石器。

ハンマー: 円礫または亜円礫を用い、石器を製作するために対象物を加撃する石器。

磨石: 円礫の表面に明瞭な磨痕を持つ石器。

敲石:円礫または亜円礫を用い、対象物を敲打もしくは粉砕するための石器。

台石:石器製作や植物質の加工に利用したと考えられる、比較的大形の礫塊。

原石:石器の材料となる礫塊。

加工痕のある剥片:調整剥離や整形剥離が行われた剥片。

使用痕のある剥片:使用によって生じたと考えられる、刃こぼれ状の微細剥離痕が残る石器。

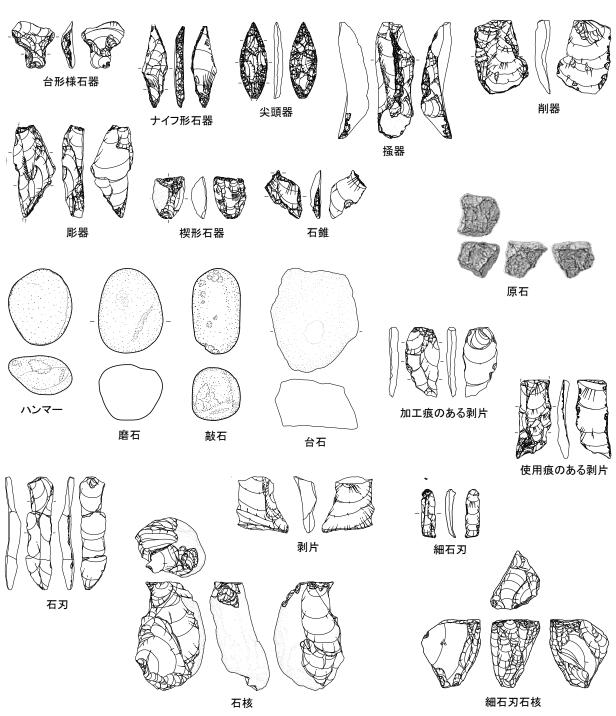
石刃:両側縁がほぼ並行する規格的な縦長の剥片。

剥片:剥片剥離または石器製作の過程で石核から剥離された、砕片より重い石片。 **砕片:**剥片剥離または石器製作の過程で生じた、重さ 0.1g 以下の微細な石片。

石核: 石器の素材となる剥片を剥離した石塊。

細石刃:長さ1cm~数cm、幅数mm~1cm、厚さ1mm~2mm程度の極小の石刃。

細石刃石核:極小形の石刃(細石刃)を連続的に剥離した石核。(前嶋)



第21図 石器の分類

第Ⅱ章 遺跡の環境

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

沼津市は静岡県東部に位置しており、駿河湾の最奥部である伊豆半島西岸の付け根に立地している。北には富士山を背に愛鷹山がそびえており、南東から南にかけてなだらかな尾根を広げている。この裾野の南側には、かつて浮島沼と呼ばれた低湿地帯と、富士山の山体崩壊を起源とする泥砂が堆積した黄瀬川扇状地とで構成された平地が広がっている。また、天城山系を源流域とした狩野川が市街地を分断するように流れて駿河湾に注いでおり、この狩野川河口付近から富士市田子の浦にかけての海岸部は、千本砂礫洲と呼ばれる富士川起源の砂礫が堆積した浜となっている。その上には青々とした松林の続く千本松原が形成されており、富士山や愛鷹山と併せて雄大で美しい景観となっている。

沼津市域において確認されている遺跡のなかには、古墳時代最初頭に位置付けられる高尾山古墳(前方後方墳)や白鳳時代の日吉廃寺跡、戦国期の興国寺城、三枚橋城などが存在している。また、江戸時代には東海道の宿場町として栄え、三枚橋城が存在した箇所に沼津城が築かれ、水野藩の城下町であった時期も存在した。これらの遺跡の存在は、当市域が歴史的に静岡県東部地域の中心的な位置であったことを示している。明治時代になると東海道線の駅が設けられ、海運によって沼津港で荷下ろしされた物資が鉄道によって運搬されるようになったことで、伊豆半島西側の玄関口としての役割がより大きくなり、その後に沼津市が商業都市として発展する要因となった。

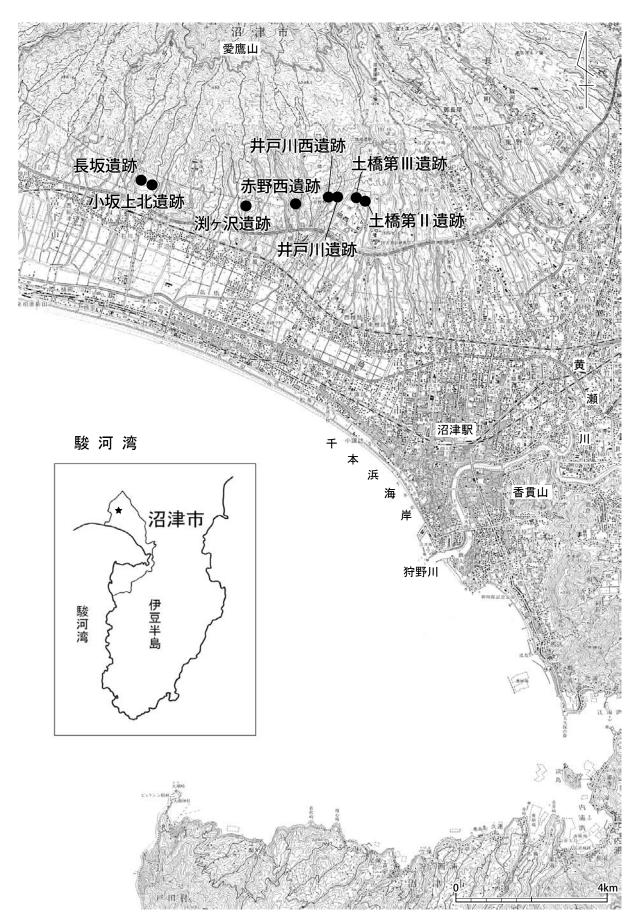
現在の沼津の市街地は黄瀬川扇状地の南西部分に形成されているが、周辺部の土地利用が徐々に進み、市街地は少しづつ拡大している。昭和 44 年に東名高速道路が開通し、沼津インターチェンジが開設されると、周辺で工業用地の開発が進み鉄工団地や工業団地が形成された。また、平地部にも重化学や電気機械の製造に関連した大規模な工場が作られており、沼津は商業のみならず工業の製造拠点としての性格も有することとなった。国や県に関連した公共機関・施設も多く存在しており、現在は静岡県東部の中核都市として政治・経済・産業の中心的な役割を担っている。

沼津市の北側にそびえる愛鷹火山は、富士火山の前身である小御嶽火山や箱根火山などと前後して、約40万年前に活動を開始し、約10万年前に活動を停止した火山である。古期の活動には玄武岩質や凝灰角礫岩の溶岩を主に噴出させていたが、次第に安山岩~デイサイト質の溶岩に変化することから、4期(旧期・中期・新期・最新期)の噴火ステージ(活動期)が存在したと指摘されている(由井1993)。そしてこれらの上に、約8万年前に活動を開始した「古富士火山」と完新世の「新富士火山」の噴出物である、いわゆる「愛鷹ローム層」が堆積したことにより、現在の愛鷹山麓が形成されている。

愛鷹山麓には開析作用によって複数の尾根が存在しており、これらの尾根上に数多くの遺跡が存在している。愛鷹山麓における遺跡の様相では、高橋川以東の愛鷹山東南麓において特に数多くの遺跡が確認されている。なかでも中沢川と桃沢川で挟まれた範囲は、足高尾上丘陵と呼ばれる愛鷹火山の最も新しい段階の溶岩流によって形成された扇状の緩斜面になっており、葛原沢遺跡や広合遺跡、中見代遺跡などの遺跡が密集して分布していることから、足高尾上遺跡群としてその遺跡様相は全国的に有名である。これらの遺跡は県営愛鷹運動公園の建設や第二東名建設工事に伴って発掘調査が実施された。

一方、高橋川以西の愛鷹山南麓は地質的に中期凝灰角礫岩が堆積している箇所に相当しており、比較的古い約17万年前の第2ステージ(中期I)に形成された地層の上に富士火山の噴出物が堆積している。また、高橋川以西から富士市にかけては、標高250m付近の傾斜変化点から湧き出る湧水の水流による開析作用を受けたために複雑な地形が形成されている。前述した足高尾上遺跡群が存在する愛鷹山東南麓とは、地質的な特徴や地形(尾根の形状)についても特徴が異なっている。

本書において報告する土橋第Ⅱ遺跡、土橋第Ⅲ遺跡は高橋川以東の愛鷹山東南麓に位置しており、渕ヶ



第22図 遺跡位置図

沢遺跡、長坂遺跡、小坂上北遺跡、井戸川遺跡、井戸川西遺跡、赤野西遺跡は高橋川以西に存在し、愛 鷹山南麓の尾根上に位置している。

第2節 周辺遺跡と歴史的環境

【旧石器時代】

旧石器時代の遺構や遺物は、本書で報告する渕ヶ沢遺跡、長坂遺跡、小坂上北遺跡、土橋第Ⅱ遺跡、赤野西遺跡で検出されているが、この他に伊良宇祢遺跡、第二東名建設に伴って発掘調査が行われた元野遺跡 (№ 19 地点)、イタドリC遺跡 (№ 15 地点)、秋葉林遺跡 (№ 25 地点) や的場遺跡 (№ 26 地点)、茗荷沢遺跡 (№ 30 地点)、藤ボサ遺跡 a 区 (№ 31 地点) において確認されている。

愛鷹山麓における後期旧石器時代はいわゆる愛鷹編年として現在5期に分類されており、これらの遺跡でも各時期に対応する石器群が確認されている。特に第5期に相当する休場層から漸移層にかけて多くの遺物が確認されている。しかし近年になり、第VII黒色帯や第IVスコリア層などの愛鷹編年では想定していなかった上部ローム層の最下層においても、石器群が確認されるようになっている。旧石器時代の遺跡に関連した調査の総数では高橋川以東でその事例が多いものの、後期旧石器時代初頭の遺跡に関しては高橋川以西で多く確認されている。

元野遺跡では第IVスコリア層、第III黒色帯で剥片類や石核が検出されており、出土した黒曜石の原産地分析では信州系であることが判明した。県埋文が調査を実施した秋葉林遺跡では第IVI黒色帯において石器集中箇所が確認され、ホルンフェルス製の礫器や石核などが出土している。また、沼津市が発掘調査を実施した井出丸山遺跡においては第IVスコリア層〜第III黒色帯下半部にかけて、9か所の石器ブロックが確認され、合計1,300点以上の石器、剥片、砕片が出土している。石材の原産地分析を行った結果、在地系の石材であるホルンフェルス以外に信州系や神津島恩馳島産の黒曜石、下呂石が確認された。特に神津島産の黒曜石は、国内で発見された神津島産の黒曜石で最古のものであり注目される。

【縄文時代】

愛鷹山麓中の遺跡のうち最も遺跡数が多いのが縄文時代である。本報告で取り上げる渕ヶ沢遺跡、長坂遺跡、小坂上北遺跡、土橋第II遺跡、井戸川遺跡、赤野西遺跡では縄文時代の土器や石器が出土している。また、これらの遺跡に近接する藤ボサ遺跡や茗荷沢遺跡、的場遺跡、秋葉林遺跡、赤野遺跡、元野遺跡といった遺跡では、第二東名建設工事に関連した発掘調査によって膨大な数の土器や石器が出土している。

各遺跡から出土する土器は草創期~後期にかけての長期に及んでいるが、特に早期前半(押型文土器)、早期後半(条痕文土器)、前期後葉(諸磯b式)、前期末葉~中期初頭(十三菩提式~五領ヶ台式)にかけての遺物が多く見られる。ただし、大半の遺跡で土坑や焼土、集石といった遺構の検出はあるものの、住居址については的場遺跡で2基が検出されているにすぎないことから、この地域における縄文時代の人々の居住形態は不明な点が多い。これは、発掘の段階において愛鷹ローム層における縄文時代の時期に相当する栗色土層や富士黒土層では住居址プランの見極めが困難な場合が多いことから、単に確認されていないだけの可能性もある。なお的場遺跡では、早期前葉の土器である小形の田戸下層式土器の中に小形の楕円押型文土器が入っている「入れ子」の状態での出土事例があり、特異な出土事例として注目される。

【弥生時代】

沼津市域においては、縄文時代晩期~弥生時代中期の遺跡は極めて少なく、弥生時代後期に入ると急激に増加する傾向にある。愛鷹山麓の尾上足高丘陵上においては、八兵衛洞遺跡や八兵衛屋敷遺跡、植出遺跡などといった弥生時代後期~古墳時代初頭にかけての遺跡が複数確認されている。これらの遺跡

第23 図 周辺主要遺跡分布図

第1表 周辺主要遺跡一覧表

番号	遺跡名	沼津市 遺跡番号	第二東名関連地点	発掘調査報告書等	番号	遺跡名	沼津市 遺跡番号	第二東名関連地点	発掘調査報告書等
1	長坂遺跡	414	No. 36 地点	本報告	38	根古屋古墳群	422		
2 /]	小坂上北遺跡	326	No. 35 地点	本報告	39	光厳寺沢遺跡	38		
3 4	石川古墳群	91	No. 34 地点	沼津市 2006	40	興国寺城跡	35		
4	猫山遺跡	15			41	中アラク遺跡	37		
5 10	吹上遺跡	12		沼津市 1985	42	根古屋丸尾遺跡	36		
烈 9	道ノ下遺跡	13			43	古城遺跡	34		
7	葱川遺跡	14			44	根古屋清水遺跡	46		
8	ヌタバ遺跡	17			45	下岡遺跡	47		
9	藤ボサ古墳	408	No. 32 地点	静岡県 2010	46	青野中荒工遺跡	45		
10 康	藤ボサ遺跡	407	No. 31・32 地点	静岡県 2010	47	赤野西遺跡	遺跡外	No. 24 地点	本報告
11 🛨	丸山橋上遺跡	18			48	赤野遺跡	28	No. 23 地点	沼津市 2012
12 幸	茗荷沢遺跡	406	No. 30 地点	静岡県 2010	49	井戸川西遺跡	388	No.21、CR-1 地点	本報告、沼津市 2012
13 愈	銭神遺跡	405	No. 29 地点	静岡県 2012	20	井戸川遺跡	387	No. 20 地点	本報告
14 愈	銭神南遺跡	42			51	元野馬牧土手遺跡	72		
15 塩	堀込遺跡	23			52	元野遺跡	71	No. 19 地点	沼津市 1976、静岡県 2008
16	段崎遺跡	32			53	土橋第川遺跡	遺跡外	No. 18 地点	本報告
17 陽	開峯遺跡	33			54	土橋第川遺跡	389	No.17 地点	本報告
18	川上遺跡	19			55	元野第=遺跡	328		
19 ≠	井出丸山古墳	25			56	元野第川遺跡	329		
50 ≠	井出丸山遺跡	411		沼津市 2011	22	四ツ塚古墳群	20		
21 海	焼畑遺跡	27			58	伊良宇祢A遺跡	22		
22 #	井出古墳群	412		静岡県 1968、沼津市 1994	59	伊良宇祢B遺跡	57		
23 ±	土櫓遺跡	70			09	大廓遺跡	54		
24	川上古墳群	21			61	柳沢古墳群	418		
25 枚	松木遺跡	22			62	角右衛門アラク遺跡	59		
26 ≉	神田遺跡	24			63	大芝原遺跡	09		
27 16	阿野氏館跡	324			64	トヤ坂遺跡	53		
28 1	北畑遺跡	87			92	ラカメ遺跡	52		
29 厘	馬場地下式横穴群	56			99	藤ヶ久保遺跡	288		
30 摩	雌鹿塚遺跡	203			29	鳥谷アラク遺跡	287		沼津市 2000
31	鎌ヶ沢遺跡	404	No. 28 地点	静岡県 2012	89	東原古墳群	19		
32 漢	渕ヶ沢遺跡	403	No. 27 地点	本報告、静岡県 2013	69	元野橋南遺跡	335		
33	的場遺跡・的場古墳群	405 • 41	No. 26 地点	静岡県 2010	70	芝荒2号墳	365		
34 極	秋葉林遺跡	988	No. 25 地点、CR-2 地点	静岡県 2009・2010、沼津市 2012	71	芝荒古墳	73		
35	青野仲山古墳	373			72	三角遺跡	310		
36 戸	元野古墳群	4			73	イタドリC遺跡	401	No.15 地点	静岡県 2009
37 ×	丸尾古墳群	40							

は、後述する高尾山古墳との関連が想定されている。また、浮島沼北東岸の縁辺部(愛鷹山東南麓が伸びる尾根の先端部)では目黒身遺跡や尾崎遺跡などの弥生時代後期の集落が確認されている。

本書で報告する各遺跡の周辺では弥生時代の遺構や遺物が確認されている遺跡の事例は少なく、明確な住居址等は皆無に近い状態である。住居址の可能性がある遺構としては、静岡県によって調査された秋葉林遺跡において後期に属する竪穴状遺構が検出されているのみであり、遺物は土器片と磨製石鏃2点が出土している。また、古城遺跡において弥生時代中期~後期にかけての遺物が出土している。この古城遺跡は興国寺城の内部(伝東船着場跡地点その他)に位置しており、遺構は検出されていないものの、興国寺城北曲輪において弥生時代中期の方形周溝墓が検出されていることから、当該期の集落が存在したものと推測される。これらは愛鷹山麓中の事例であるが、異なる様相の遺跡として浮島沼内の微高地に集落を形成する雌鹿塚遺跡が存在しており、弥生時代中期~後期の土器や、多数の木器類が出土している。

【古墳時代】

近年、静岡県東部地域では古墳時代初頭ないし前期の古墳が数多く確認されるようになってきている。なかでも、愛鷹山東南麓の南端である沼津市東熊堂に所在する高尾山古墳は古墳時代最初頭の前方後方墳として位置付けられており、古墳時代初頭における静岡県東部地域の政治的構造を検討するうえで重要な古墳である。この高尾山古墳の周辺には後期の長塚古墳や時期不明の子ノ神古墳といった前方後円墳が存在している。また、千本砂礫州上には神明塚古墳が存在しており、当初は中期の前方後円墳と想定されていたが、近年の発掘調査によって前期に属するものであることが判明した。

しかしながら、本書で報告する遺跡のほとんどが位置している愛鷹山南麓には前述したような前方後 円墳や前方後方墳は確認されておらず、大半は古墳時代後期~末期に属する単独の円墳や古墳群である。 なお、明確に墳丘が確認できない箇所においても発掘調査の最中に古墳が発見される場合もあり、愛鷹 山麓における古墳は膨大な数に及ぶものと推測される。また、この様相は愛鷹山麓の富士市側において も同様であり、愛鷹山麓における古墳の総数は不明である。

愛鷹山麓においては古墳の様相は把握されているものの、古墳時代における集落の様相は不明な点が多い。単純に集落が発見されていないだけの可能性もあるが、浮島沼を挟んだ愛鷹山麓の対岸に位置する千本砂礫州上には古墳時代後半以降の集落遺跡が数多く確認されている。一方で、墓域となる古墳群は片浜地区周辺に広がる松長古墳群を除いて、少ないのが現状である。これらのことから、愛鷹山南麓における古墳群は千本砂礫州上にある集落の墓域であった可能性がある。

本書において報告する小坂上北遺跡の東側には石川古墳群、渕ヶ沢遺跡の西側には井出古墳群、東側には的場古墳群、根古屋古墳群、井戸川遺跡、井戸川西遺跡の南には柳沢古墳群と、古墳時代後期~末期にかけての多数の古墳群が存在している。また、浮島沼の縁辺部である吹上遺跡(平沼吹上遺跡)において2基の円墳が確認されていることから、愛鷹山麓標高200m付近から浮島沼に向かって延びる尾根の先端部までの間に古墳が築かれている。これらのうち秋葉林遺跡で5基、的場古墳群で5基(沼津市調査1基、県調査4基)、井出丸山古墳で1基、石川古墳群で31基の発掘調査が行われている。いずれも古墳時代後期に属する円墳で、周溝を有する横穴式石室であり、袖を有しているものと有していないものが存在している。遺物は須恵器や土師器といった土器類の他、太刀や刀子、鉄鏃などの金属製品や、勾玉、管玉、小玉などの玉類、耳環などの装飾品が出土している。

【古代(律令期)以降】

奈良時代~平安時代の遺跡では、秋葉林遺跡で8世紀に属すると思われる方形周溝墓が2基存在しており、3号墳(円墳)においても同時期の遺物が出土している。また、的場古墳群では平安時代の住居址が1基検出されている。これらの遺跡のように断片的な事例を示す遺跡は他にも存在しているが、愛

鷹山南麓における遺跡において、遺構や遺物がまとまって検出されている事例は皆無である。

中世(戦国時代)の遺跡では、北条早雲旗揚げの城として知られる興国寺城跡が存在する。また、赤野遺跡では中世以降の溝状遺構が検出され、それに伴って陶磁器類が出土している。

第3節 遺跡の土層

(1) 愛鷹ローム層

第1節において触れたように、愛鷹山麓における尾根の傾斜地には「愛鷹ローム」と呼ばれる火山噴出物が厚く堆積している。約8万年前に開始したと考えられる「古富士火山」の活動により形成された愛鷹山麓のローム層は、下部ローム層・中部ローム層・上部ローム層という3期に大別されている(愛鷹ローム団研1969)。

上部ローム層はスコリア層と腐食し土壌化の進んだ黒色帯が交互に層を成している点に特徴があり、各土層のおおよその堆積年代も明らかにされている。年代的には3万数千年前まで遡ることが可能であり、おおむね関東ローム層の立川ローム層に対応するものと考えられている。考古学的な遺物は、現在までのところすべて上部ローム層で確認されている。中部ローム層以下で明確なヒトの活動の痕跡は確認されていないため、発掘調査は上部ローム層のみで実施され、中部ローム層を掘り込む調査はほとんど実施されていない。

各層の呼称については、市町の埋蔵文化財担当者や愛鷹ローム層の研究者らの間で検討を重ね、考古 学および地質学の調査・研究による検証作業が行われて統一された。各層には上から順に番号が付され ており、発掘調査時における層位の名称はこれらに基づいて表記されている。

(2) 各層の特徴

以下、愛鷹山麓における上部ローム層の基本的な層序を示し、その特徴を述べる。

新期スコリア層(新SC)…暗黄褐色を呈し、褐色のスコリアが密集している。弥生時代~古墳時代の遺物が含まれる。

栗色土層(KU)…黄褐色のローム層に似た色調を示すが、休場層よりもやや暗い。上部にはカワゴ平パミスと呼ばれる細かな白色の軽石粒を含む。縄文時代前期~晩期の遺物が含まれる。

富士黒土層(FB)…黒色を呈し、緻密で粘性が強い。縄文時代草創期から前期にかけての遺物を含む。 漸移層(ZN)…やや黒ずんだ黄褐色を呈している層で、休場層との境界が不明瞭となっている。その 名のとおり漸移的な土壌の変質を示している。出土する遺物は少ないものの、旧石器時代と縄文時代の 遺物を含む。

休場層(YL)…粘性の強いローム層で、通常 $50 \sim 60$ cmの層厚を持つ。箱根山西麓では 1 mに達する箇所も存在する。特徴から上層(YLU)・中層(YLM)・下層(YLL)の 3 層に細分され、愛鷹山麓における旧石器時代では最も石器の出土例が多い層である。下層はスコリアを多く含んでいるため赤味が強く硬くなっており、中層・上層に比べると遺物量が少ない。中層はやや黒ずんだ黄褐色を呈し、スコリアをわずかに含む。上層は 3 層のなかで最も鮮やかな黄褐色を呈し、粘性が強い。

休場層下部黒色帯 (BBO) …暗褐色を呈し、赤褐色・橙色のスコリアを比較的多く含む。かつては「YLLB」の名称で呼ばれたが、現在では「BBO」の名称に変更された。

第 | スコリア層 (SCI) …橙色を呈したスコリアから成る。

第1黒色帯(BBI)…乾くとブロック状に割れる。下半で黒味が強く、上半は風化の進んだ細かいスコリアが多く含まれる。休場層に次いで石器が多く出土し、下底から彫器が特徴的に出土する。

ニセローム層(NL)…黄褐色を呈し、離れるとローム層のように見えるためこのように呼ばれるが、

実際には風化したスコリアと火山ガラスから成る層である。姶良丹沢火山灰(AT)がパッチ状に含まれている。

第Ⅱ黒色帯(BBⅡ) …黒褐色を呈し、よく締まっている。下部には比較的大粒の橙色スコリアが多く含まれ、上部に向けて漸移的に減少するため、第Ⅱスコリア層との明瞭な区分が困難である。

第**Ⅱスコリア層(SCⅡ)**…暗橙色を呈し、大粒の 橙色スコリアから成る。

第Ⅲ黒色帯 (BBⅢ) …はっきりとした漆黒色を呈し、非常に目立つ層である。複数の遺跡で小形のナイフ形石器を主体とする石器群が出土している。

第Ⅲスコリア帯(SCⅢ)…5枚のスコリア層(s 1~s5)と2枚の黒色帯(b1・b2)から構成されている。下部3枚のスコリア層のうち中位の層は、黄褐色で非常に硬く締まっていることから明瞭に識別が可能であり、箱根山西麓と対比する際の鍵となる。その上位には層厚10cm弱ほどの黒色帯が2層存在する。両層とも他の黒色帯に比べてスコリアを多く含み黒味が弱いが、b2は特にその傾向が強い。

第IV黒色帯 (BBIV) …第V黒色帯よりも黒味が強い。乾くと硬く締まり脱色する。下部のスコリア層は赤褐色や黒色のスコリアが密集しているためとても硬く、調査時の面的な把握が容易である。

第V黒色帯 (BBV) … 黒味がやや薄く、灰色がかった黒褐色を呈し、乾くと硬く締まるため、クラックが入りやすい。第IV~VI黒色帯のなかでは層厚が薄めである。

第VI黒色帯 (BBVI) …径7~8㎜の下部スコリア 帯との境界を明確にすることが難しい。スコリアが 混じり、乾くと硬く締まるためクラックが入りやすい。

第VII黒色帯(BBVII)・・・漆黒色を呈した風化埋没土 壌層である。土壌化が進んでいるため、他の黒色帯 に比べて粘性が強く識別もしやすい。

第Ⅳスコリア層 (SCIV) …橙色スコリアから成り、 褐色を呈する。(小崎)

\downarrow \downarrow \downarrow	
	表土
	 新期スコリア層(新 SC)
	栗色土層(KU)
	富士黒土層(FB)
	 漸移層(ZN)
	ーーーーーーーー 休場層上層(YLU)
	休場層中層(YLM) 休場層
	─
	 休場層下部黒色帯(BBO)
	第Iスコリア層(SCI)
	第1黒色帯(BBI)
00000000	ニセローム層 (NL)
	第Ⅱ黒色帯(BBⅡ)
	第Ⅱスコリア層(SCⅡ)
	第Ⅲ黒色帯(BBⅢ)
	SCIIIs1 ¬
	 SCIIIb1
	— — — SCⅢs2 第Ⅲスコリア帯
	SCIIIb2 (SCIII)
	第IV黒色帯(BBIV)
	SC
	第V黒色帯(BBV)
	S C
	S C = = 第VII黒色帯(BBVII)
	S C
中部ローム層	

第24図 愛鷹ローム層基本層序柱状図

第Ⅲ章 渕ケ沢遺跡 (No. 27 - 2 地点)

第Ⅲ章 渕ヶ沢遺跡 (No. 27 - 2地点) の調査

第1節 遺跡の概要

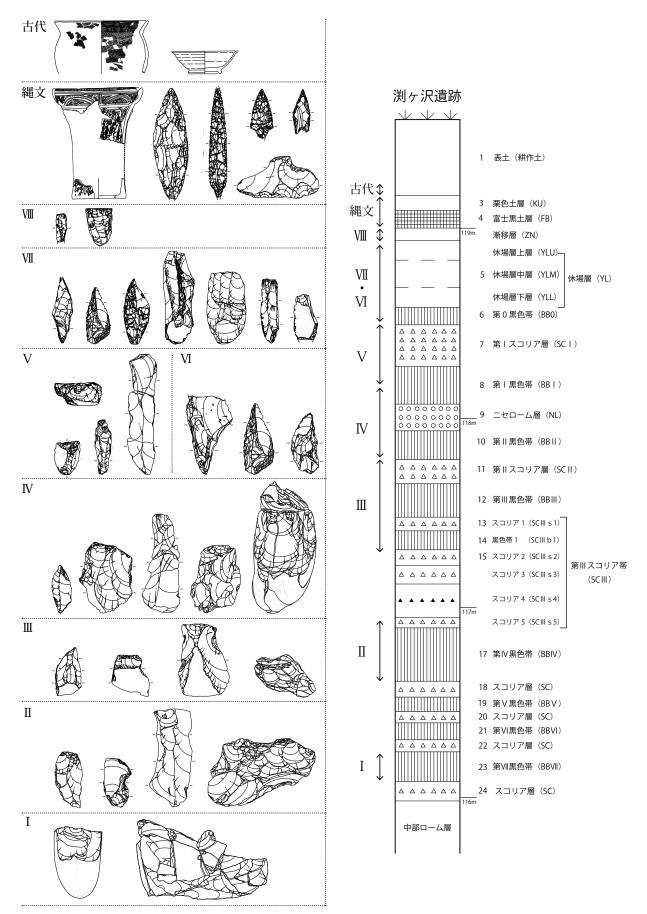
渕ヶ沢遺跡は沼津市根古屋字渕ヶ沢 958 - 49 他に所在し、本遺跡から南に 600 mほどの位置には東名高速道路が東西に走っている。愛鷹山南麓の南に延びる尾根の上に位置しているが、東西に入る支谷が本尾根の南側(標高約 80 mの地点)で合流している。このため、本遺跡は舌状の形状を呈した独立した尾根上に位置しており、尾根の形状に沿って標高約 110 ~ 180 mの高さに遺跡が広がり、遺跡の範囲は南北約 600 mに及んでいる。なお、本遺跡箇所の南西側の谷部と西側の尾根の一部は第二東名建設工事以前から採土場となっていたため、地形が大きく改変されている。

本遺跡が立地する尾根と谷を挟んだ西側の尾根には鎌ヶ沢遺跡、東側の尾根には的場遺跡および的場古墳群が存在している。鎌ヶ沢遺跡は第二東名建設に伴って発見された遺跡であり、第二東名№ 28 地点として静岡県埋蔵文化財調査研究所(以下、県埋文)によって平成13・14 年度に発掘調査が実施され、平成23 年度に発掘調査報告書が刊行されている。また、的場遺跡および的場古墳群については、第二東名№ 26 地点として県埋文によって平成11 年度から複数年に渡って発掘調査が実施されており、平成21 年度に発掘調査報告書が刊行されている。

本遺跡は第二東名建設工事以前まで遺跡の存在が確認されておらず、茶畑が広がっているのみであった。また、第二東名建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査が実施される前までは、当該地点では開発に伴う試掘調査等は一度も実施されていなかった。このような状況のなかで平成7年4月26日に沼津市教育委員会によって実施された第二東名建設事業に伴う事前の踏査において、本線通過部分(東側斜面)において数点の土器片が採取され、確認調査の実施が必要とされた。このため第I章に記したように、平成12年および平成14年度において当該箇所の確認調査が県埋文によって実施され、旧石器時代、縄文時代、古墳時代の遺構や遺物が確認されたことから当該地点に遺跡の存在が明らかとなり、埋蔵文化財包蔵地として扱われることになった。

今回の発掘調査では、旧石器時代、縄文時代、古墳時代以降の遺構と遺物が確認されている。特に旧石器時代では休場層〜第VII黒色帯にかけて複数の文化層が確認されており、休場層で石囲炉といった遺構や多数の尖頭器、細石刃が検出された。縄文時代については縄文時代草創期〜後期末・晩期初頭にかけての多時期に渡る土器や石器が出土しており、古墳時代以降については、古代の住居址などとともに土器片が出土している。

以下、検出された遺構と遺物の詳細について、時代別に報告する。(小崎)



第25図 渕ヶ沢遺跡の土層柱状図と文化層

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

渕ヶ沢遺跡は調査区の中央を南北に走る埋没谷によって区画されているので、便宜的に東尾根、中央谷、西尾根と呼称する(第3図)。発掘調査の結果、共通する層位で平安時代の住居址・溝状遺構・灰釉陶器、縄文時代の土坑・焼土址・集石・土器・石器、旧石器時代の土坑・石囲炉・配石・礫群・石器群が確認された。

東西の尾根で関連性の低い石器群は第 I 文化層が挙げられるものの、それ以外の文化層の石器は類似の石器類が出土していたり、同一の石材および同一の産地の石器類が出土したりと、東西の尾根の関連性を指摘できる状態を示していた。なお、石器群や出土層位から関連性を指摘できる文化層では、東西の尾根の関係を把握するために尾根間の接合を試みたが、接合資料は確認されなかった。

出土遺物の報告にあたり文化層名は統一した呼称を用い、遺構と遺物に分けて記述していくことにした。各文化層の内訳は第2表に示したが、文化層ごとに構成石器量の相違が著しく、個々の文化層において遺跡そのものの性格が違っていることが推定されるとともに、各文化層で出土地点が異なる傾向にあることが指摘される。

文化層のほとんどがナイフ形石器石器群に比定される石器群であったが、第 I・V・VI文化層においては文化層の主体的な器種が出土しなかったため、石器群の全体像は不明な点が多い。それ以外の第 II・III・IV・VII文化層は広域火山灰層である姶良・丹沢パミスを含むニセローム層を挟んで、上位と下位の層準からナイフ形石器石器群が出土しており、石器群の変遷を検討するうえで有益な資料であることが指摘できる。

・第 I 文化層 層位:第VII黒色帯

・第**Ⅱ文化層** 層位:第IV黒色帯~第IIIスコリア帯スコリア 5

・第Ⅲ文化層 層位:第Ⅲスコリア帯黒色帯1~第Ⅱスコリア層

· 第IV文化層 層位:第Ⅱ黒色帯~第Ⅰ黒色帯

第V文化層 層位:第I黒色帯~第Iスコリア層

•第VI文化層 層位:休場層下部黒色帯~休場層

· 第Ⅵ文化層 層位:休場層下部黒色帯~休場層

・第₩文化層 層位:漸移層(細石刃を抽出)

第2表 渕ヶ沢遺跡 旧石器時代文化層概要

文化層	層位	配 石	· 礫 群	礫(合計)	石器ブロック	石器(合計)	炭化物	炉 址	土坑	遺 構
第丨文化層	BB VII			3	2	32			1	SBL16·17、SK10
第Ⅱ文化層	BB IV~ SC III s5	2		11	6	158	4			SBL11·14·26·28·29·30、配石 1·2
第Ⅲ文化層	SC III b1 ∼ SC II	6	2	18	7	333	26			SBL13·18·20~23·37、PH13·14、配石3~8
第Ⅳ文化層	BB II∼BB I	3	1	19	7	736			1	SBL4·5·7~9·36·38、SK9、PH15、配石9~11
第V文化層	BB I∼SC I	4		20	1	18				SBL33、配石 12~ 15
第VI文化層	BBO ∼ YL					21				
第VII文化層	BBO ∼ YL	46	9	468	6	1575	2	4		SBL1・2・25・27・31・32、PH1 ~ 3・5・7 ~ 9・11・12 配石 16 ~ 61、石囲炉 1 ~ 4
第Ⅷ文化層	ZN			22		99				
計		61	12	561	29	2972	32	4	2	

(1) 第 | 文化層の遺構と遺物の分布状況(第26図)

第 I 文化層の遺構・遺物は、井出大川に隣接する西尾根に土坑・礫・石器、井出大川の支流に隣接する東尾根に石器が分布している。本文化層では土坑 1 基が検出され、単独出土の礫 3 点からなる総計 3 点の礫と、石器ブロック 2 か所 26 点、単独出土の 6 点からなる総計 32 点の石器群が検出された。

① 遺 構

a . 土坑

第10号土坑 (第27図)

西尾根の 13 - 29 グリッドで確認した土坑である。検出層位は第VII黒色帯、平面形は楕円形である。土坑の規模は、長軸約 1.2 m、短軸約 0.6 m、深さ約 0.6 mを測る。遺構検出面は第VII黒色帯で、底面は第IVスコリア層に達している。底面は第IVスコリア層の傾きに沿って傾斜しており、断面の形状から木の根などの可能性がある。覆土は自然堆積層で、坑底付近に第 3 層暗褐色土が堆積した後、第 2 層黒褐色土・第 1 層暗赤褐色土が埋没している。遺物は出土していない。

b. 石器ブロック

第 16 号石器ブロック (第 28 図)

西尾根の 10-28 グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 3.9 m、短軸約 2.4 m である。石器類は標高 $124.1\sim124.4$ mにかけて約 30cmのレベル差が生じていた。確認された石器群は石核 1 点、剥片 12 点の合計 13 点が出土している。石材は富士川系ホルンフェルス(以下、F . ホルンフェルスとする)が 13 点出土し、100%を占める。接合資料は石器ブロック内で 1 例が接合する。

第17号石器ブロック (第28図)

西尾根の $10-23\cdot24$ グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 2.0 m、短軸約 1.2 mである。石器類は標高 $118.9 \sim 119.1$ mにかけて約 20cmのレベル差が生じていた。確認された石器群は剥片・砕片 13 点の合計 13 点が出土している。石材はF. ホルンフェルスが 13 点出土し、100% を占める。接合資料は石器ブロック内で 2 例が接合する。

②遺 物

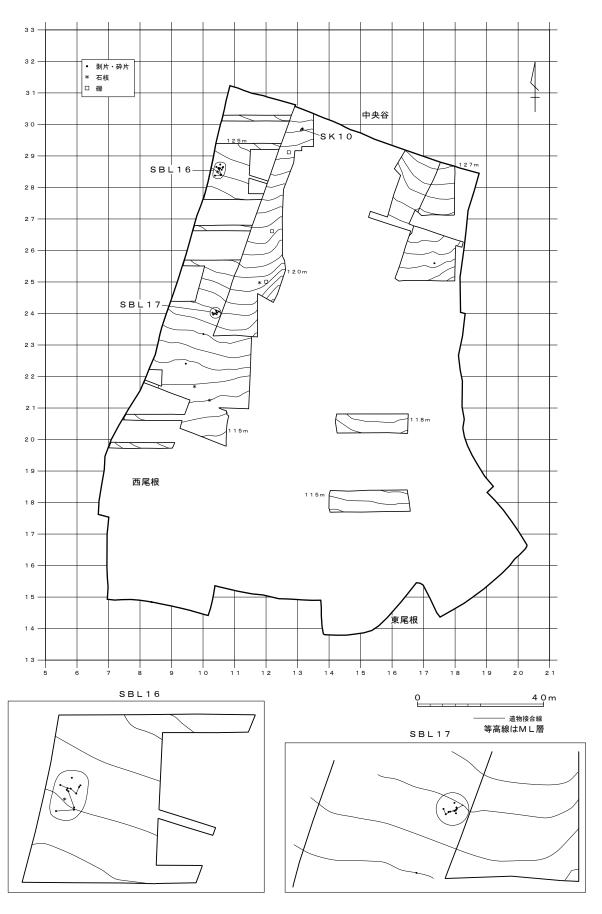
第 I 文化層出土の遺物は、石器ブロック 2 か所 26 点と単独出土 6 点の総計 32 点の石器群によって構成されている。器種は石核 4 点、剥片・砕片 28 点が出土している。

石核 (第29図1~第31図4)

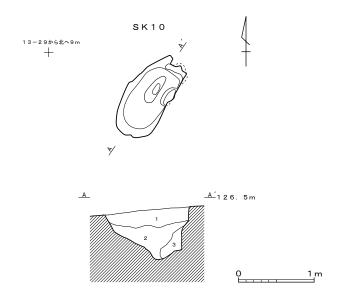
4点が出土し、すべて図示した。第29図1~第31図4は石核の素材と思われる礫に数回の剥離を加えているもので、石核というよりも素材礫に近い石核である。いずれもF.ホルンフェルスの海浜礫を素材としている。これらのなかには、打面を形成しているもの(1~3)と自然面を打面とするもの(4)がある。打面を形成するものは単剥離打面(1~3)が多く、剥片剥離作業面も正面に限定されている(2~4)。剥離作業面の剥離痕を観察すると、幅広い剥片を作出していたと思われる。打面と剥離作業面以外は自然面(1・3・4)が残り、側面に調整剥離が認められるもの(2)が少ない。

第29図1は右側縁からの剥離により打面を形成している。打面は単剥離打面で正面と裏面に剥片剥

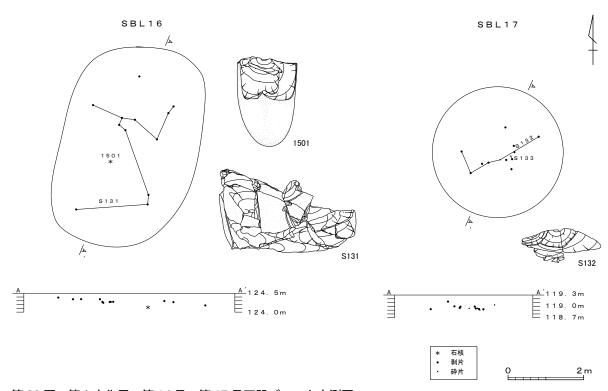
第3表 第1文化層 出土石器一覧表



第 26 図 第 1 文化層 遺構および遺物分布図



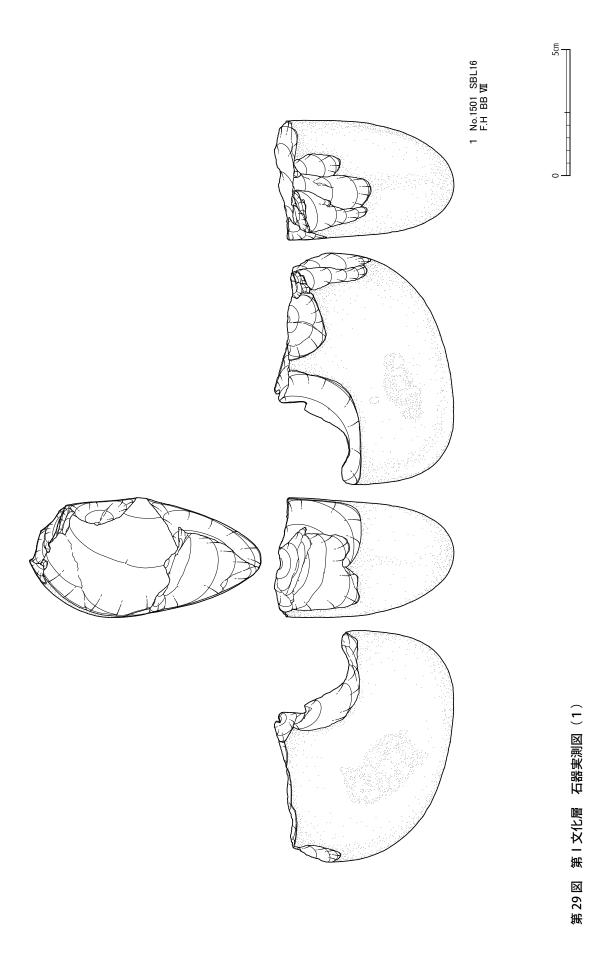
第 27 図 第 I 文化層 第 10 号土坑実測図



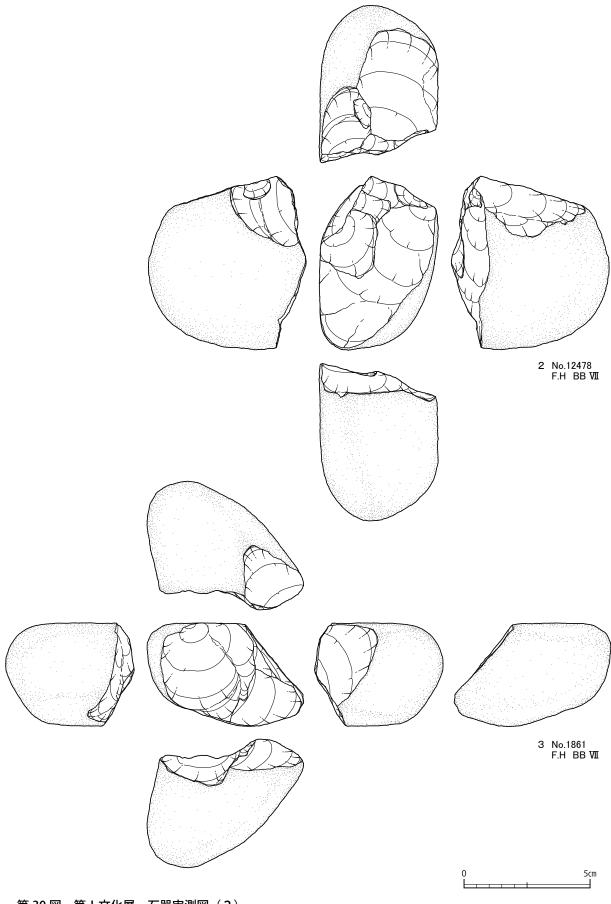
第28図 第1文化層 第16号・第17号石器ブロック実測図

離作業面が認められる。正面の剥離作業面の観察では、大きく抉り取られるような剥離によって、剥離作業面が失われている。打面と作業面以外は自然面で、右側縁と左側縁に打痕が観察できる。受熱による赤変が認められる。

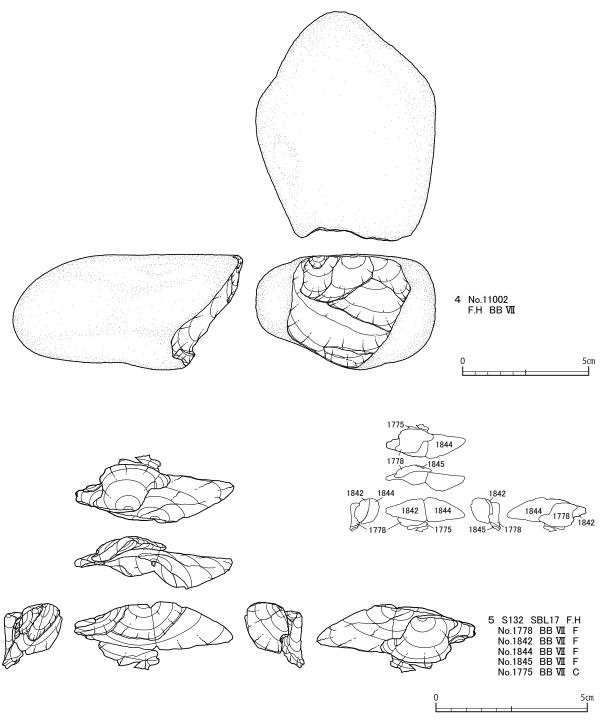
第30図2は正面からの剥離により打面を形成している。打面は単剥離打面で、正面に剥片剥離作業面が認められる。正面の剥離作業面の観察では、左側縁の調整剥離を打面として調整剥離が行われている。3は自然面を打面として正面に剥片剥離作業面が認められる。右側縁には正面を打面とする調整剥



-53-



第30図 第1文化層 石器実測図(2)



第31図 第I文化層 石器実測図(3)

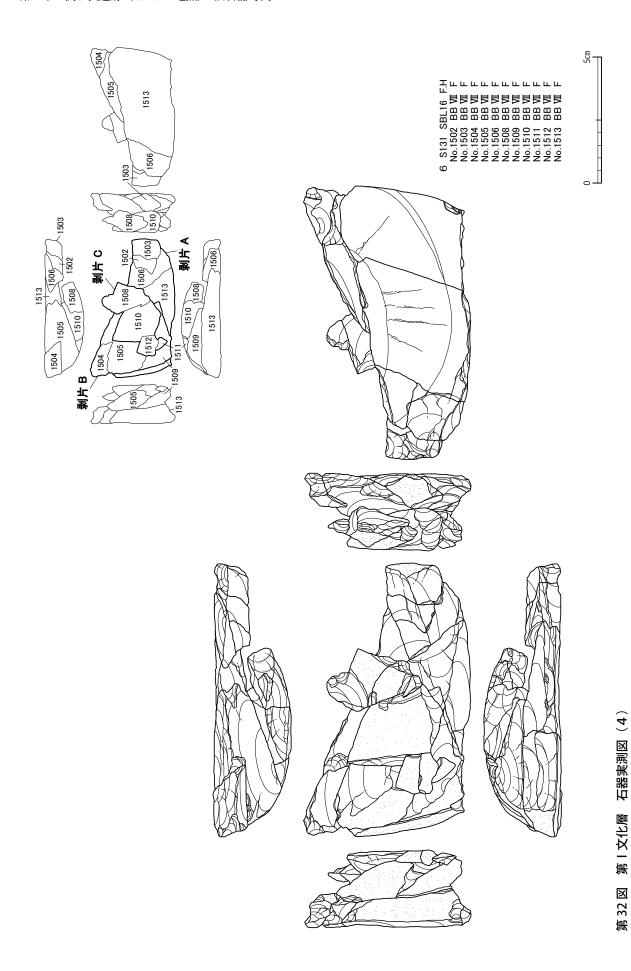
離が行われている。

第31図4は自然面を打面として正面に剥片剥離作業面が認められる。正面の剥離作業面の観察では、数回の剥片剥離作業が行われている。

接合資料 (第31図5・第32図6・第33図)

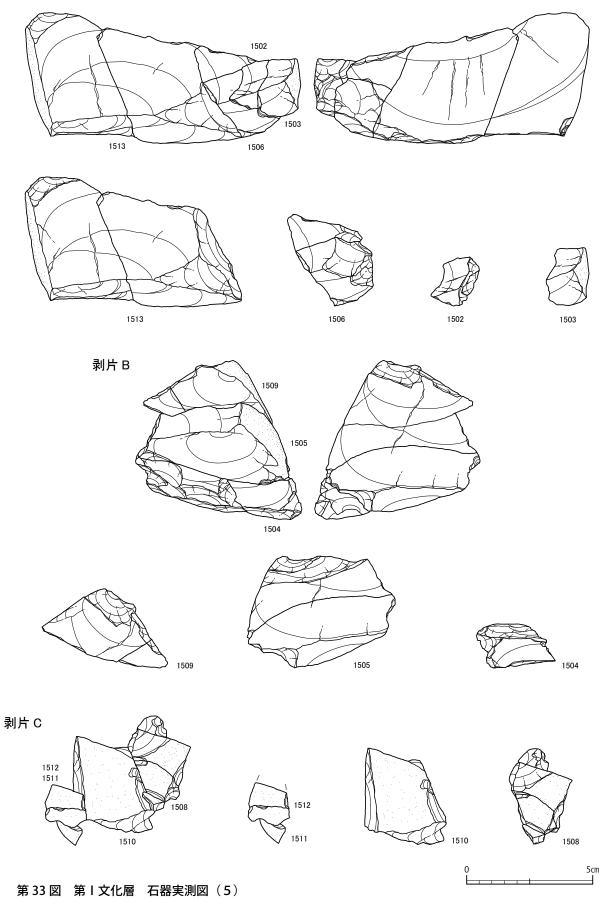
本文化層では石器製作と剥片剥離に関する接合資料が2例認められた。

第 31 図 5 は剥片・砕片 5 点 (1778・1842・1844・1845・1775) の接合資料である。 5 の接合 状態を見ると、同一打面からの連続的な剥片剥離作業を示している。剥片の剥離過程は、まず 1842・



-56-

剥片 A



-57-

1844 が剥離され、次に 1775・1778・1845 が剥離されている。石材は F. ホルンフェルスである。

第 32 図 6 は剥片 11 点(1502 ~ 1506・1508 ~ 1513)の接合資料である。 6 の接合状態を見ると、石器ブロックに分割した礫から剥離した剥片 A・剥片 B と節理面で割れた剥片 C が接合している。剥片の剥離過程は、まず分割した礫の自然面を打面として、剥片 A →剥片 B を剥片剥離している。その後、剥片 A は剥片(1513)に調整加工を施しており、剥片 B は剥片 B に調整加工を施しており、剥片 B に調整加工剥片 B に調整加工剥片 B が接合する。剥片 B は剥片 B から節理面で分離しており、その際の衝撃で B 1508・1510・1511・1512 に分かれている。石材は B ホルンフェルスである。

〈まとめ〉

第 I 文化層は、2 か所の石器ブロックから検出された 26 点と単独出土 6 点の、合計 32 点の石器群で構成される文化層である。石器組成は断片的で、石核 4 点、剥片・砕片 28 点である。定型的な石器は認められなかった。

石材組成は、F. ホルンフェルス 32 点、1,389.0g(100%)であった。石器石材は、剥片・砕片・石核ともにF. ホルンフェルスとなっている。

剥片剥離技術は、F.ホルンフェルス製の剥片や円礫素材の石核ならびに接合資料の観察から、自然面や剥離面を打面として数回の剥離を加え、幅広の剥片を目的とする剥片剥離技術の存在がうかがえる。そして剥片類の観察でも、剥片剥離方向を一定方向にしたものが主体を占めていた。

(2) 第11 文化層の遺構と遺物の分布状況(第34図)

第Ⅱ文化層の遺構・遺物は、井出大川に隣接する西尾根に礫・配石・石器、井出大川の支流に隣接する東尾根に礫が分布しており、配石 2 基、単独出土の礫 9 点からなる総計 11 点の礫と、石器ブロック 6 か所 153 点、単独出土の 5 点の総計 158 点の石器群、炭化物 4 点が検出された。

1) 遺 構

a . 配石

2基2個からなる配石が検出された。これらは出土礫のなかで、900g以上のものを配石として分類したものである(竹内 1994)。配石は西尾根に第1号・第2号配石が分布する。出土層位は第IV黒色帯である。第1号配石の重量は6,517g、状態は非赤化完形礫1点、石材は安山岩であった。第2号配石の重量は2,311g、状態は礫面非赤変破損礫1点、石材は安山岩であった。

b. 石器ブロック

第11号石器ブロック (第35図)

西尾根の9-22 グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約3.6 m、短軸約2.3 mである。石器類は標高 $117.31 \sim 117.63$ mにかけて約32cmのレベル差が生じていた。確認された石器群は加工痕のある剥片(図中ではRフレイクと表記)3 点、使用痕のある剥片(図中ではUフレイクと表記)1 点、石核1 点、剥片 12 点の合計 17 点である。石材は水晶9 点、F . ホルンフェルス5 点、黒曜石2 点、珪質頁岩1 点である。黒曜石の産地は、蓼科冷山産が2 点であった。

第 14 号石器ブロック (第 35 図)

西尾根の $9-21\cdot22$ グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約5.0 m、短軸約2.8 mである。石器類は標高 $117.00\sim117.47$ mにかけて約47cmのレベル差が生じていた。確認された石器群は使用痕のある剥片4点、石核2点、剥片 \cdot 碎片76点の合計82点である。石材は黒曜石38点、水晶27点、ガラス質黒色安山岩15点、F.ホルンフェルス<math>2点である。黒曜石の産地は、蓼科冷山産が9点、神津島恩馳島産3点、天城柏峠産1点、不可他25点である。

第26号石器ブロック (第35図)

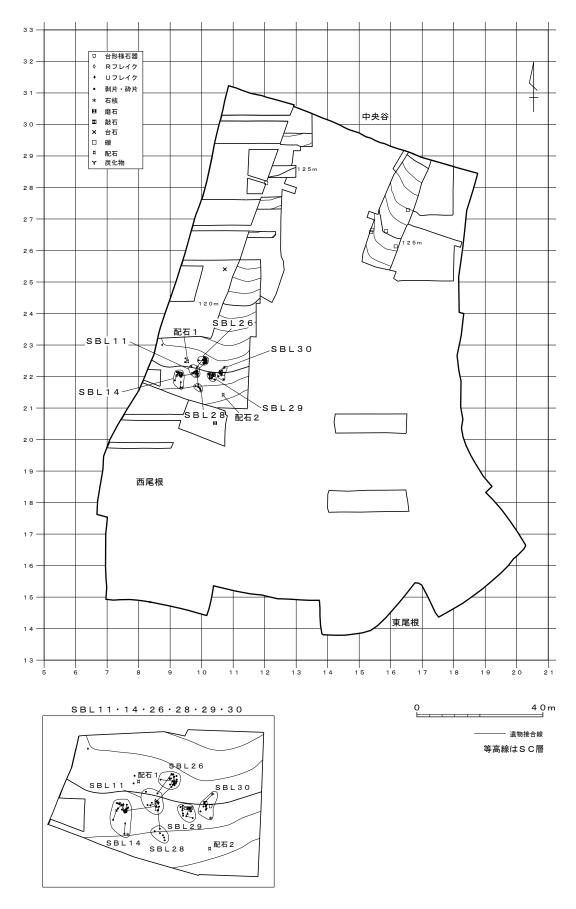
西尾根の $9\cdot10-22$ グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約2.6 m、短軸約2.0 mである。石器類は標高 $117.75\sim117.96$ mにかけて約21cmのレベル差が生じていた。確認された石器群は加工痕のある剥片1点、剥片18点、敲石2点の合計21点である。石材はF.ホルンフェルス16点、水晶3点、安山岩2点である。

第28号石器ブロック (第36図)

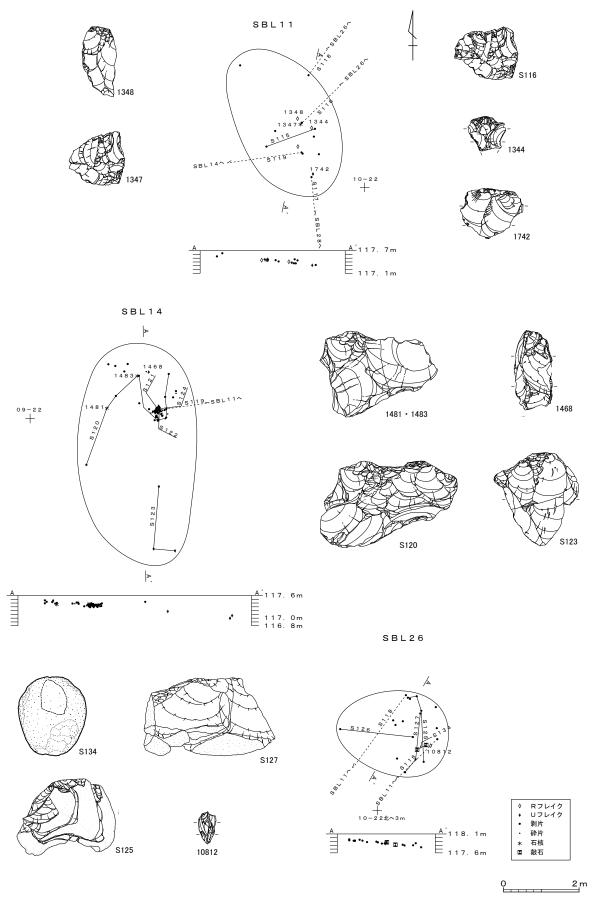
炭化物

石	器種材	台形様石器	ナイフ形石器	尖頭器	掻器	削器	彫器	楔形石器	石錐	ハンマー	磨石	敲石	台石	原石	加工痕のある	使用痕のある	石刃	剥片	砕片	石核	細石刃	細石刃石核	計
	蓼科冷山															2		9	1	1			13
黒曜石	天城柏峠																	1					1
無唯仁	神津島恩馳島															4							4
	不可他																	3	22				25
F.	F . ホルンフェルス														1			53		1			55
ガラ	ガラス質黒色安山岩																	12	1	2			15
	珪質頁岩																	1					1
	水晶	1													3			23	12	1			40
	安山岩										1	2	1										4
	計	1									1	2	1		4	6		102	36	5			158
	及												11										

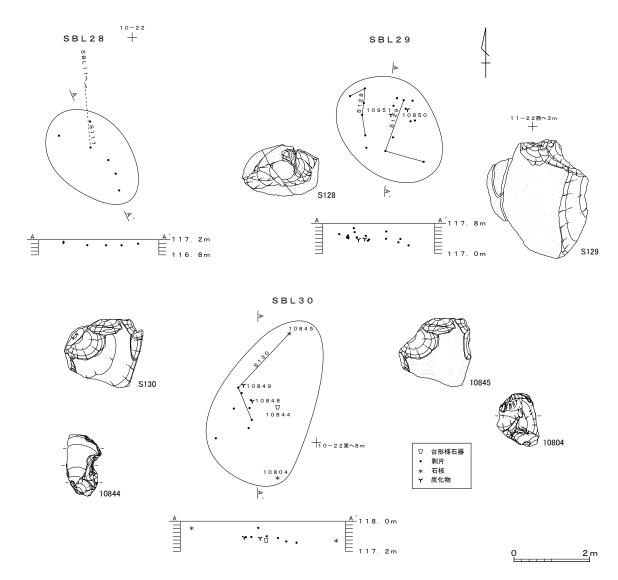
第4表 第 || 文化層 出土石器一覧表



第34図 第 || 文化層 遺物分布図



第35図 第 || 文化層 第11号・第14号・第26号石器ブロック実測図



第36図 第11文化層 第28号~第30号石器ブロック実測図

西尾根の9-21 グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 $2.1 \,\mathrm{m}$ 、短軸約 $0.8 \,\mathrm{m}$ である。石器類は標高 $117.05 \sim 117.15 \,\mathrm{m}$ にかけて約 $10 \,\mathrm{cm}$ のレベル差が生じていた。確認された石器群は剥片 6 点である。石材は F . ホルンフェルス 6 点である。

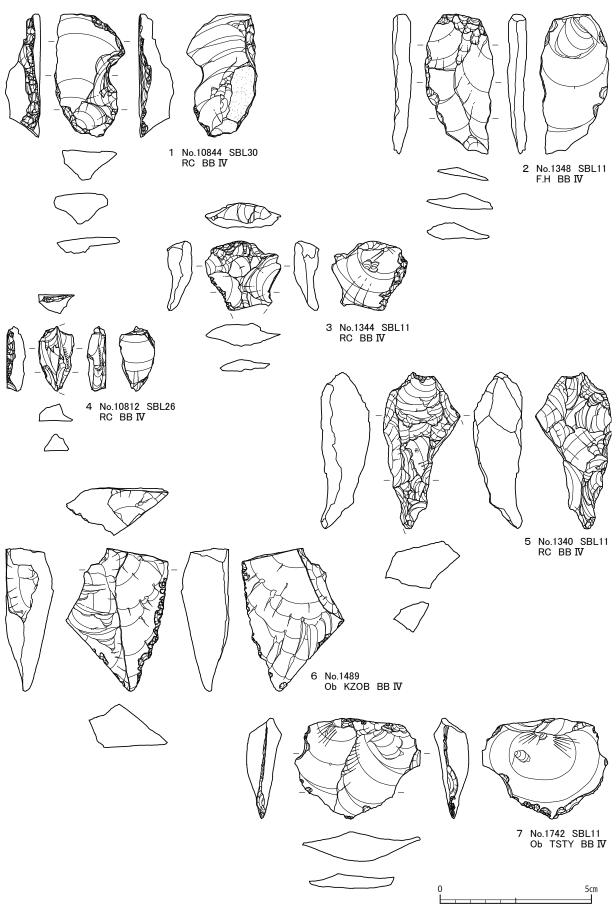
第29号石器ブロック (第36図)

西尾根の $10-21\cdot22$ グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 2.6 m、短軸約 1.6 mである。石器類は標高 $117.22\sim117.68$ mにかけて約 46cmのレベル差が生じていた。確認された石器群は剥片 16点である。この他に炭化物 2点が検出されている。石材は F.ホルンフェルス 16点である。

第30号石器ブロック (第36図)

西尾根の $10-21\cdot22$ グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 3.8 m、短軸約 1.7 mである。石器類は標高 $117.43\sim117.82$ mにかけて約 39cmのレベル差が生じていた。確認された石器群は台形様石器 1 点、石核 2 点、剥片 8 点の合計 11 点である。この他に炭化物 2 点が検出されている。石材は F . ホルンフェルス 8 点、黒曜石 2 点、水晶 1 点である。黒曜石の産地は、蓼科冷山産が 2 点であった。

②遺 物



第37図 第 || 文化層 石器実測図 (1)

第Ⅱ文化層出土の遺物は、石器ブロック6か所153点と単独出土5点の総計158点の石器群によって構成されている。石器は台形様石器1点、加工痕のある剥片4点、使用痕のある剥片6点、石核5点、剥片・砕片138点、磨石1点、敲石2点、台石1点が出土している。

台形様石器 (第37図1)

1点が出土した。第37図1は幅広の剥片を縦位に用いて、両側縁を調整した台形様石器である。全長4.0cmで、刃部を除く両側縁に平坦剥離と急斜度の調整を加えている。両側縁の調整加工は直交するように表面と裏面から施される。この他、基部側の表面に両側縁を打面とする平坦な剥離が施される。素材となる剥片には、表面と裏面に主要剥離面が形成されていることから、主要剥離面側を剥片剥離作業面とする石核から作出された可能性が高い。刃部には使用痕と思われる剥離痕が観察される。石材は水晶である。

加工痕のある剥片(第37図2~5)

4点が出土し、すべて図示した。これらのなかには、側縁に削器の刃部のような調整が施されたもの(2・3)や側縁の一部にブランティング状の荒い急斜な加工が加えられているもの(4)がある。

第37図2は縦長剥片を素材として、左側縁に主要剥離面側からの調整剥離が施されるものである。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。このような素材剥片のあり方から、この加工痕のある剥片の素材剥片は打面を一定にして剥片剥離作業を行う石核から作出された可能性が高い。石材はF.ホルンフェルスである。3は幅広な剥片を素材として、左側縁に剥離面側と主要剥離面側からの調整剥離が施されるものである。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離方向が90度異なるものであった。この素材剥片は打面転移を繰り返して剥片剥離作業を行う石核から作出された可能性が高い。石材は水晶である。

4は縦長剥片を素材として、左側縁に主要剥離面側から急斜度の調整剥離が施されるもので、右側縁を欠損している。石材は水晶である。5は表面と裏面の両面に調整加工が施されるもので、下半部を欠損する。石材は水晶である。

使用痕のある剥片 (第37図6~第38図9)

6点が出土し、4点を図示した。第37図6~第38図9は使用痕と考えられる細かな剥離が認められるもので、縦長剥片(8)、幅広な剥片(6・7・9)等が素材となっている。これらのなかには、使用痕が表面や裏面の側縁に部分的に認められるもの(9)、一方の側縁に片寄っているもの(6・8)、表裏一方の面に片寄って確認されるもの(7)がある。第38図9は切断した剥片が接合している。石材はすべて黒曜石で、6・9が神津島恩馳島産、7・8が蓼科冷山産である。

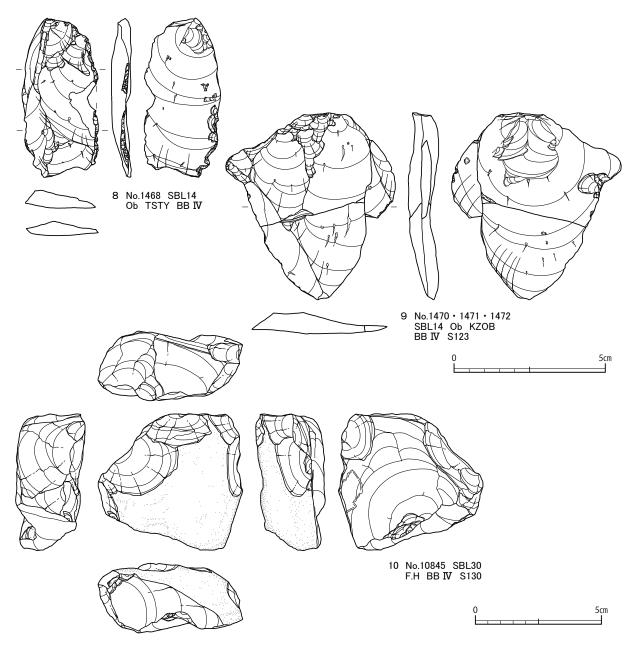
石核 (第 38 図 10 ~第 39 図 13)

5点が出土し、4点を図示した。いずれも剥片剥離作業が二方向以上に観察される石核である。

第38図10は肉厚な幅広剥片を素材としており、剥片剥離作業面は正裏左右の4面に確認できる。 正面の剥離作業面には上左右面を打面とする求心的な剥離痕が認められる。左右の剥離作業面における 打面は、正面や裏面の剥離作業面を打面としており、打面調整は認められない。剥離作業面に残る剥離 痕の観察から、作出された剥片は幅広い剥片と推測される。正面には自然面が残る。石材はF.ホルンフェ ルスである。

第39図11は肉厚な幅広い剥片を素材とした石核で、剥片剥離作業面は正右面に認められる。正面の剥離作業面は上面と裏面の打面からの剥片剥離作業を示す剥離痕、右面の剥離作業面における打面は、正面の剥離作業面から行われるなどと頻繁な打面転移が認められる。剥離作業面に残る剥離痕の観察から、作出された剥片は幅広い剥片と推測される。石材は蓼科冷山産の黒曜石である。

12 は剥片剥離作業面が正右裏面に認められる。正面の剥離作業面は上面と裏面の打面から、右面の



第38図 第 || 文化層 石器実測図(2)

剥離作業面における打面は下面から、裏面の剥離作業面における打面は下面から行われるなどと頻繁な打面転移が行われている。石材は水晶である。13 は剥片剥離作業面が正左面に認められる。正面の剥離作業面は上面と左面の打面から、左面の剥離作業面は、裏面の自然面からなどと頻繁な打面転移が行われている。正面の打面は打面調整を行っている。石材はガラス質黒色安山岩である。

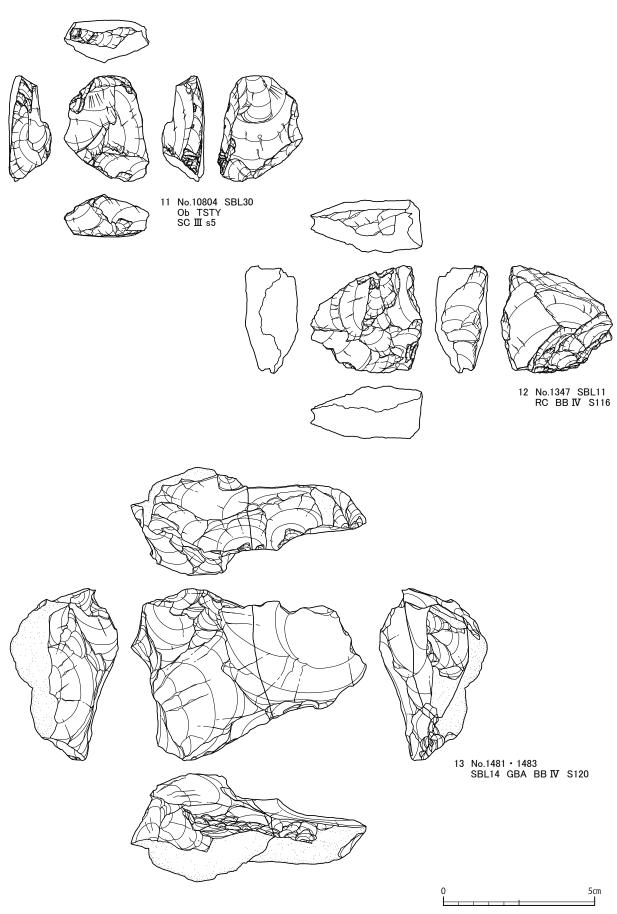
敲石 (第 40 図 14)

2点が出土し、1点を図示した。第40図14は下面に剥離を伴う礫面の潰れた範囲が形成されており、右面と左面にはベルト状の潰れや敲打痕が観察できることから、繰り返し打撃が加えられていることがわかる。石材は安山岩である。

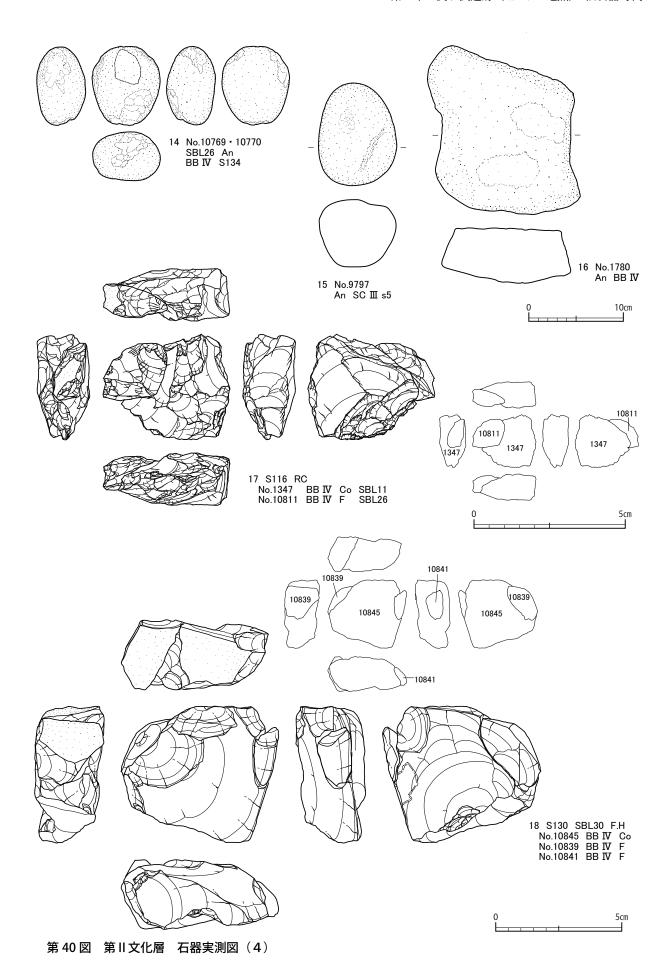
磨石 (第 40 図 15)

1点が出土した。第40図15は表面を中心に磨面と打痕が観察できる。石材は安山岩である。

台石 (第 40 図 16)



第39図 第11文化層 石器実測図(3)



-67-

1点が出土した。第40図16は板状の安山岩の表面に打痕が観察できる。

接合資料 (第 40 図 17 ~第 43 図 23)

石器製作に関するものと剥片剥離に関するもの7例を図示した。

第40図17は石核1点(1347)と剥片1点(10811)の接合資料である。17の接合状態を見ると、上面の打面から正面を剥片剥離作業面として10811の剥片剥離作業を行っている。石材は水晶である。18は石核1点(10845)と剥片2点(10839・10841)の接合資料である。18の接合状態を見ると肉厚で幅広な剥片を石核素材とし、正面の打面から左面を剥片剥離作業面として10839の剥片剥離作業を行っている。そして、180度打面転移して裏面の打面から10841を剥離している。石核(10845)は上面に自然面を残しており、剥片剥離工程の早い段階の剥離作業であることがわかる。石材はF.ホルンフェルスである。

第 41 図 19 は石核 1 点(1481・1483)と打面調整剥片 2 点(1454・1478)、剥片 6 点(1455・1457・1473・1477・1480・1482)の接合資料である。19 の接合状態を見ると、上面の打面から正面を剥片剥離作業面として 1455・1457・1473・1482 の剥片剥離作業を行う。次に、打面調整のため 1478・1454 を剥離しているが、衝撃で 1481 と 1483 に分割された。その後、左面に 90 度打面転移して 1480 \rightarrow 1477 を剥離している。石核は裏面に自然面を残している。石材はガラス質黒色安山岩である。

第 42 図 20 は剥片 5点(10801・10824 ~ 10827)の接合資料である。20 の接合状態を見ると、右面の打面から正面を剥片剥離作業面として 10827 の剥片剥離作業を行う。次に、90 度打面転移して上面の打面から $10825 \rightarrow 10824 \rightarrow 10801 \rightarrow 10826$ を剥離している。剥片類は表面に自然面を残しており、剥片剥離工程の早い段階の剥離作業であることがわかる。21 は剥片 4点(1333・10805・10807・10813)の接合資料である。21 の接合状態を見ると、上面の打面から正面を剥片剥離作業面として $10807 \rightarrow 10813 \rightarrow 10805 \rightarrow 1333$ の剥片剥離作業を行う。剥片類は表面に自然面を残しており、剥片剥離工程の早い段階の剥離作業であることがわかる。

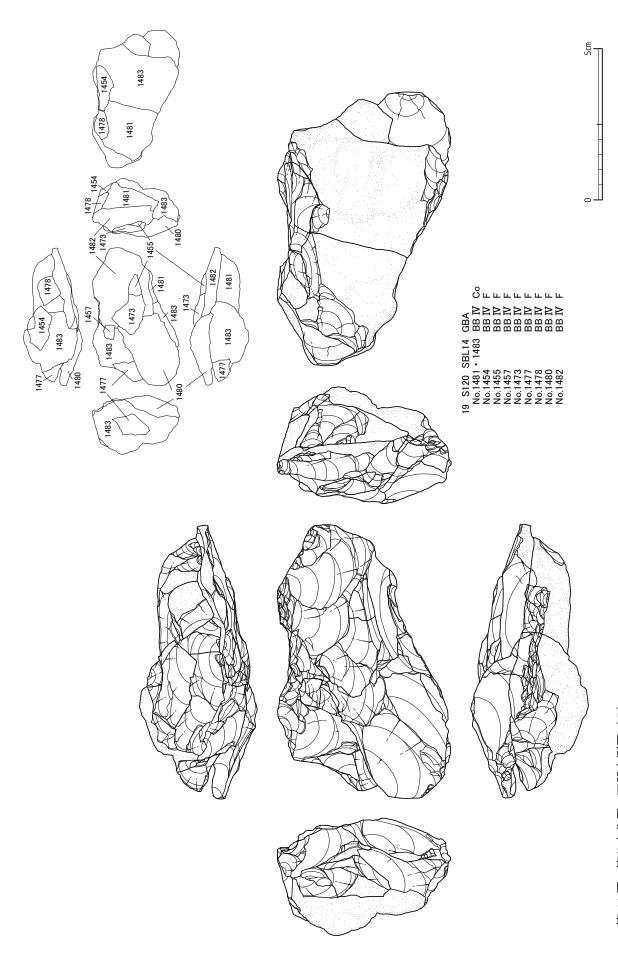
第 43 図 22 は剥片 3 点(10808・10814・10815)の接合資料である。22 の接合状態を見ると、上面の打面から正面を剥片剥離作業面として 10814・10815 \rightarrow 10808 の剥片剥離作業を行う。剥片類は表面に自然面を残しており、剥片剥離工程の早い段階の剥離作業であることがわかる。23 は剥片 3 点(10829・10832・10836)の接合資料である。23 の接合状態を見ると、上面の打面から正面を剥片剥離作業面として 10836 を剥離した後、打面を転移しての剥片剥離作業を行っている。次に、再び上面を打面として 10832 \rightarrow 10829 の剥離を行っている。剥片類は表面に自然面を残しており、剥片剥離工程の早い段階の剥離作業であることがわかる。20 \sim 23 はすべて F . ホルンフェルスを石材とする。

〈まとめ〉

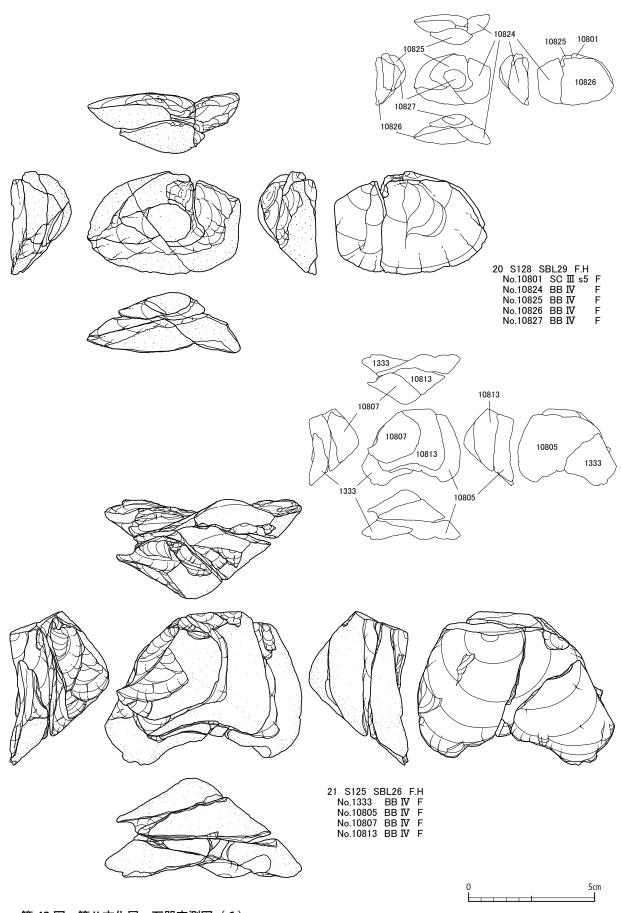
第Ⅱ文化層は、石器ブロック6か所 153 点と単独出土5点の合計 158点の石器群によって構成される文化層である。石器組成は台形様石器を組成する台形様石器石器群である。台形様石器は両側縁に調整加工が認められた。

石材組成は、第1石材がF.ホルンフェルス55点(35%)、1,152.9g(23%)、第2石材が黒曜石43点(27%)、78.7g(2%)、第3石材が水晶40点(25%)、89.9g(2%)である。石器石材は、台形様石器が水晶1点、加工痕のある剥片が水晶3点、F.ホルンフェルス1点となっている。

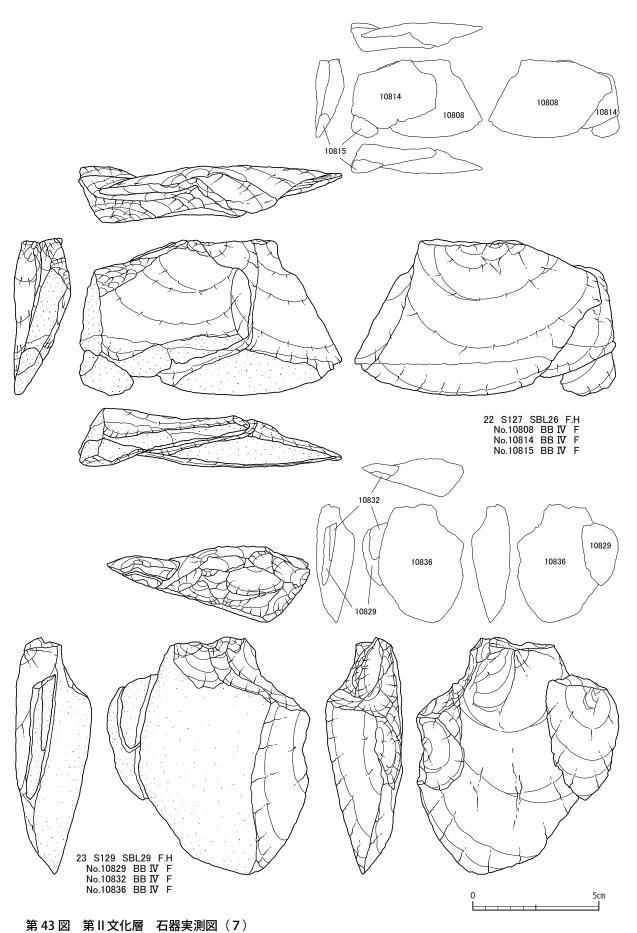
剥片剥離技術は、台形様石器や加工痕のある剥片素材から幅広の剥片を作出する剥片剥離技術の存在がうかがえる。そして、石核と接合資料の観察では、頻繁に打面転移を繰り返す石核や求心的な剥離を行う石核から幅広の剥片を作出していることが明らかとなった。



第41図 第11文化層 石器実測図(5)



第42図 第11文化層 石器実測図(6)



(3) 第Ⅲ文化層の遺構と遺物の分布状況 (第44・46 図)

第Ⅲ文化層の遺構と遺物は、東尾根・中央谷・西尾根に分布しており、配石 6 基 6 点、礫群 2 基 10 点、単独出土の礫 2 点からなる合計 18 点の礫と、石器ブロック 7 か所 318 点、単独出土した 15 点の合計 333 点の石器が検出された。

配石は6基検出した。これらは、東尾根に4基(67%)、中央谷に2基(33%)が分布している。検出層位は第Ⅲ黒色帯である。総重量は 14,911g、平均重量は 2,485g である。構成礫は、非赤化完形礫が1基(16.6%)、礫面非赤変破損礫が4基(66.8%)、礫面赤変割面非赤変破損礫1基(16.6%)である。石材は、安山岩が6基(100%)を占めている。接合関係は認められない。

石器ブロックは7か所検出している。これらは東尾根に4か所(57.1%)、中央谷に1か所(14.3%) 西尾根に2か所(28.6%)が分布している。検出層位は第III黒色帯 265点(83%)、第III 黒色帯 25点(8%)、ニセローム層 13点(4%)、第III スコリア層 8点(3%)、第III スコリア帯黒色帯 1が4点(1%)、第III 黒色帯 3点(1%)である。

【東尾根の遺構と遺物】

東尾根の遺構と遺物は、4基の配石、1基の礫群、4か所の石器ブロックから検出されたナイフ形石器2点、楔形石器1点、加工痕のある剥片5点、使用痕のある剥片1点、石核3点、剥片•砕片220点と、単独出土の加工痕のある剥片1点、使用痕のある剥片1点、剥片2点の合計236点の石器群によって構成されている。

1遺 構

a . 礫群

第13号礫群(第45図)

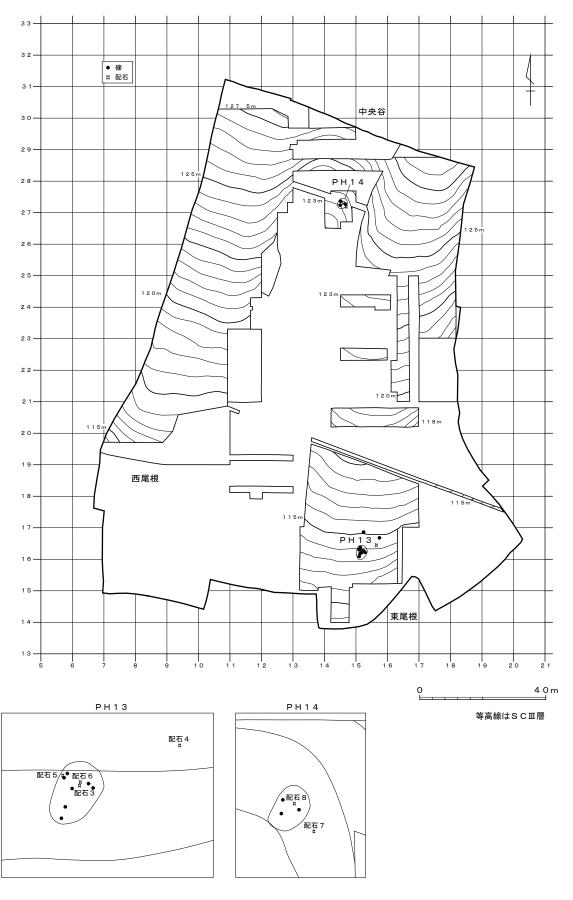
東尾根の 15-16 グリッドに位置する。構成礫は 7 点で、長軸約 2.1 m、短軸約 1.7 mの範囲に分布する。検出層位は第Ⅲ黒色帯である。垂直分布は標高 $114.21\sim114.41$ mにかけて約 20cmの分布幅を形成しており、大部分の礫は標高 114.32 m付近に礫の底面を置いている。総重量は 1,016.0g、平均重量は 145.1g である。構成礫は割面非赤変破損礫 6 点、礫面非赤変破損礫 1 点である。石材は安山岩 7 点である。接合関係は認められない。

b.配石

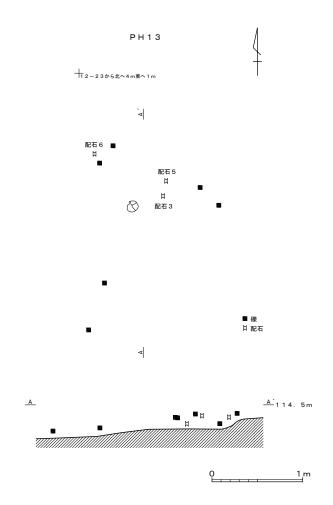
配石は4基検出した。検出層位は第Ⅲ黒色帯である。総重量は9,128g、平均重量は2,282.0gである。 構成礫は礫面非赤変破損礫が3基、非赤化完形礫が1基である。石材はすべて安山岩である。接合関係

おり衣 第川文111/間 山土口品 ^一 見衣																					
石	器種材	台形様石器	ナイフ形石器	尖頭器	掻器	削器	彫器	楔形石器	石錐	ハンマー	磨石	敲石	台石	原石	加工痕のある	使用痕のある	石刃	剥片	砕片	石核	ii+
	和田小深沢															1					1
	諏訪星ヶ台														1	1		6			8
黒曜石	天城柏峠																	1		1	2
	箱根畑宿															1		1			2
	不可他																	1	3		4
F.	F . ホルンフェルス		2					1							6			275	9	8	301
ガラ	ス質黒色安山岩																	11			11
	珪質頁岩																	2			2
	チャート																	1			1
	安山岩															1					1
計			2					1							7	4		298	12	9	333
	礫 配石6 礫群2											18									
炭化物												26									

第5表 第Ⅲ文化層 出土石器一覧表



第44図 第Ⅲ文化層 礫群・配石分布図



第 45 図 第Ⅲ文化層 第 13 号礫群実測図

は認められない。配石3基は第13号礫群に隣接する。

c. 石器ブロック

石器ブロックは東尾根の南側に位置する第20~23号石器ブロック4か所が南向きの緩斜面に分布する。

第20号石器ブロック (第47図)

東尾根の 15 - 16 グリッドで確認した石器 ブロックである。規模は、長軸約 3.7 m、短 軸約 1.9 mである。石器類は標高 114.81 ~ 115.11 mにかけて約 30cmのレベル差が生じて いた。確認された石器はナイフ形石器 1 点、楔 形石器 1 点、加工痕のある剥片 1 点、剥片・砕 片 35 点の合計 38 点が出土している。石材は、 F.ホルンフェルスが 38 点出土している。

第21号石器ブロック (第47図)

東尾根の 15 - 16 グリッドで確認した石器 ブロックである。規模は、長軸約 4.3 m、短 軸約 2.7 mである。石器類は標高 114.08 ~ 114.65 mにかけて約 57cmのレベル差が生じて いた。確認された石器はナイフ形石器 1 点、加 工痕のある剥片 4 点、石核 2 点、剥片・砕片 177 点の合計 184 点が出土している。石材は、 F. ホルンフェルスが 184 点である。

第22号石器ブロック (第47図)

東尾根の 15-16 グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 2.7 m、短軸約 2.1 m である。石器類は標高 $114.61\sim114.89$ mにかけて約 28cmのレベル差が生じていた。確認された石器は石核 1 点、剥片 5 点の合計 6 点が出土している。石材は、F . ホルンフェルスが 6 点である。

第 23 号石器ブロック (第 47 図)

東尾根の 13-15 グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 4.9 m、短軸約 1.4 m である。石器類は標高 $113.03\sim113.62$ mにかけて約 59cmのレベル差が生じていた。確認された石器は使用痕のある剥片 1 点、剥片 3 点の合計 4 点が出土している。石材は黒曜石が 4 点出土しており、黒曜石の産地は、箱根畑宿産が 2 点、諏訪星ヶ台産が 2 点であった。

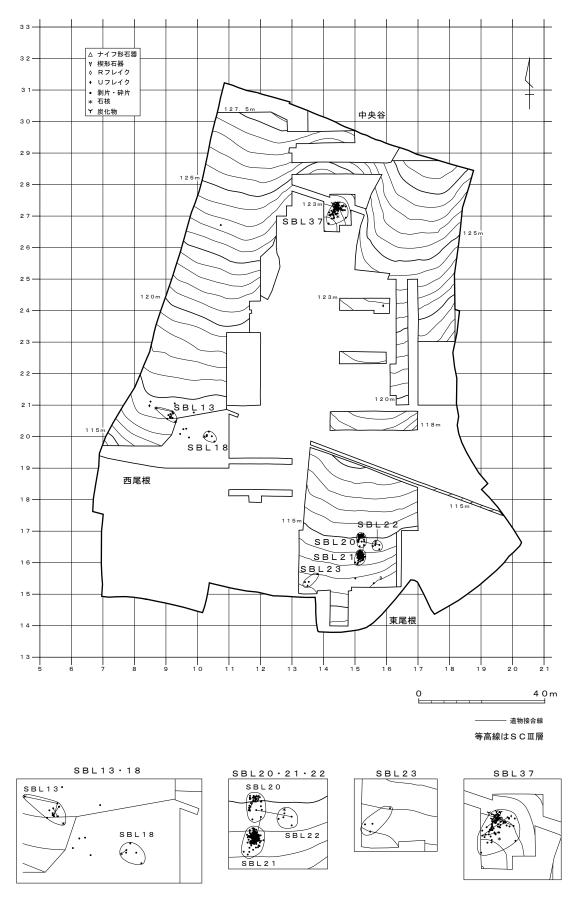
2遺 物

石器は、石器ブロックから検出された232点と単独出土した4点の合計236点によって構成される。石器群の内訳はナイフ形石器2点、楔形石器1点、加工痕のある剥片6点、使用痕のある剥片2点、石核3点、剥片・砕片222点であった。

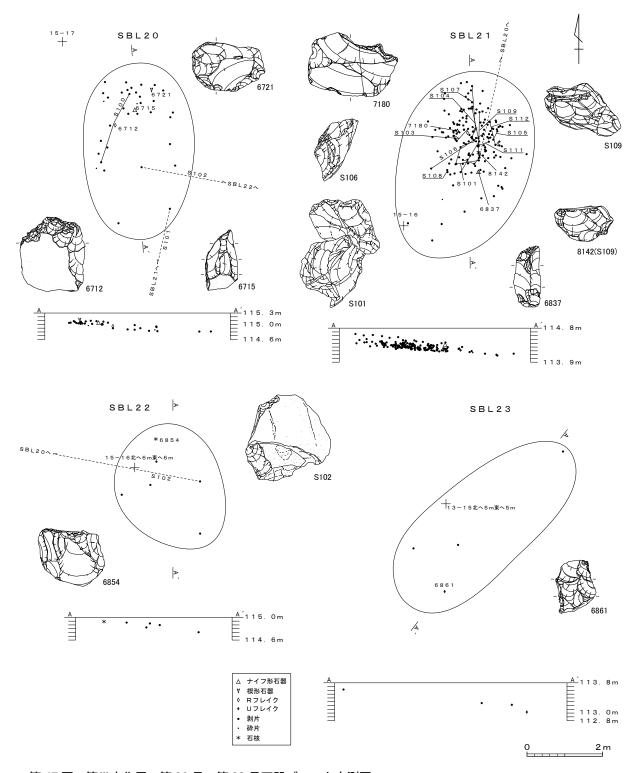
ナイフ形石器形 (第48図1・2)

2点が出土し、ともに図示した。これらは最大長が5cm未満、3cm以上の中形の一側縁加工のナイフ 形石器である。

第48図1は最大長が3.7cmを測る。縦長剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して



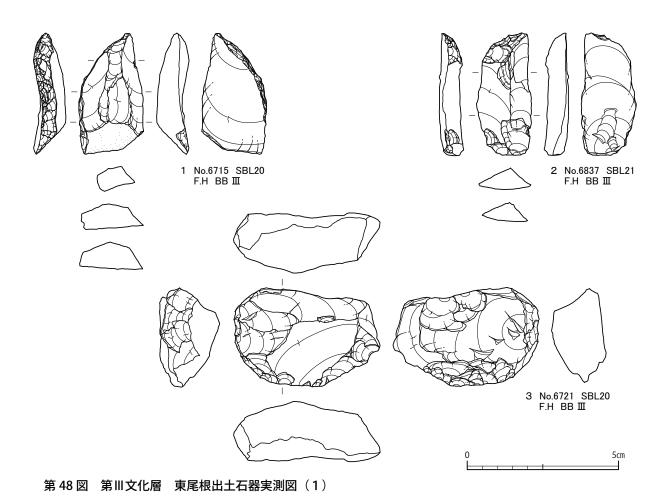
第 46 図 第Ⅲ文化層 石器分布図



第 47 図 第Ⅲ文化層 第 20 号~第 23 号石器ブロック実測図

器体を整形しており、素材の左側縁に入念な調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から素材を斜めに横断するように行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と 90 度剥離方向が異なる剥離面が形成されている。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は F. ホルンフェルスである。

2は最大長が 4.0cmを測る。縦長剥片を素材とし、右側縁の先端部と基部にブランティングを施して



器体整形をしている。先端部は素材に対して斜めに調整を加えている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成

楔形石器 (第48図3)

F.ホルンフェルスを石材とする1点が出土した。第48図3は肉厚の縦長剥片を横位に用いている。素材の両側縁に線状に潰れた打面が形成され、縁辺に小さな剥離が重複して存在しており、その多くが階段状剥離になっている。

加工痕のある剥片(第49図4~6)

される。石材は F. ホルンフェルスである。

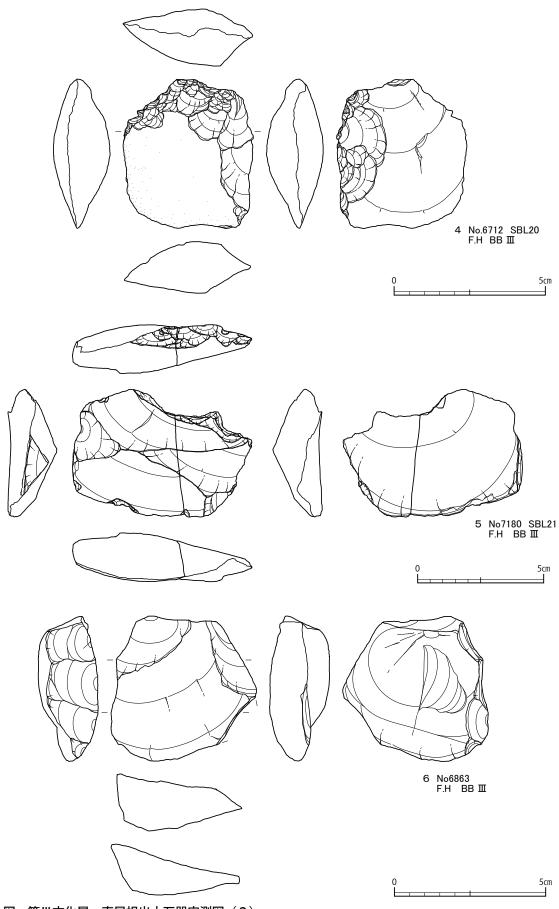
6点が出土し、3点を図示した。これは何らかの目的で素材に調整が施されているものであるが、目的が明確に判断できないため加工痕のある剥片とした。第49図4は素材剥片の上端部と右側縁に調整面を形成している。調整加工は上端部が主要剥離面側から、右側縁が剥離面側から施される。5は素材剥片の上端部に主要剥離面側から急斜な刃部が作成されている。刃部はやや内湾する形状から、抉入石器や錐の機能が考えられるが、意図的な内湾と考えがたいので加工痕のある剥片とした。6は素材の左側に、粗い調整加工で刃部が形成されている。石材は3点ともにF.ホルンフェルスである。

使用痕のある剥片(第50図7・8)

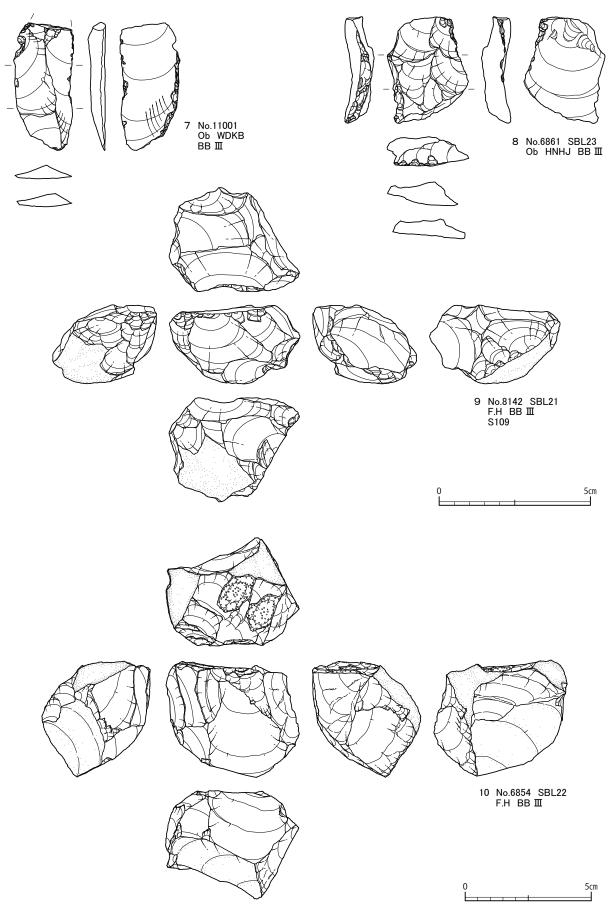
2点が出土し、ともに図示した。これらは素材となる縦長剥片の鋭い縁辺に、調整加工とは考えられない微細な剥離が観察される。石材は黒曜石で、第 50 図 7 が和田小深沢産、 8 が箱根畑宿産である。

石核 (第50図9・10)

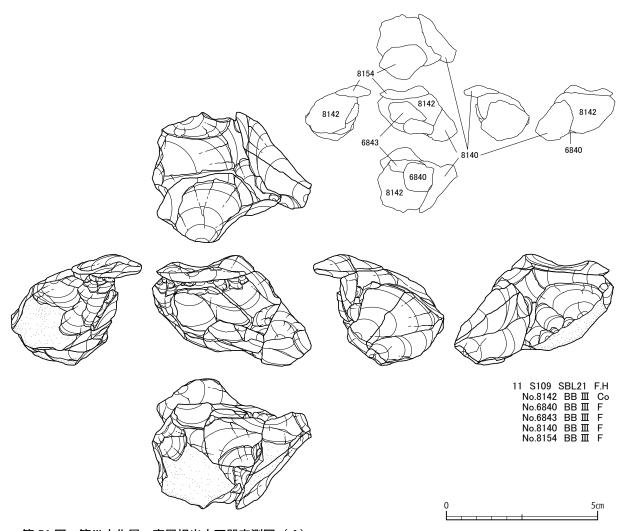
3点が出土し、2点を図示した。いずれも、剥片剥離作業が二方向以上に観察される石核である。



第49図 第Ⅲ文化層 東尾根出土石器実測図(2)



第50図 第Ⅲ文化層 東尾根出土石器実測図(3)



第 51 図 第Ⅲ文化層 東尾根出土石器実測図 (4)

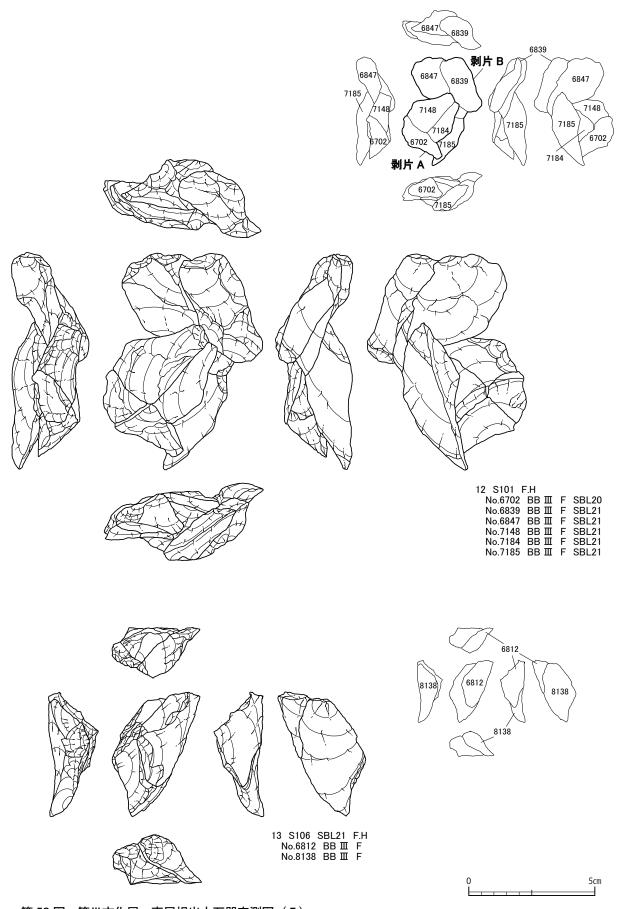
第50図9は剥片剥離作業面が正右左面に認められる。正面の剥離作業面は上面の打面から剥片剥離作業が行われている。また、右面の剥離作業面における打面は下面から行われ、左面の剥離作業面における打面は上面から行われるなど、頻繁な打面転移が認められる。剥離作業面に残る剥離痕の観察から、作出された剥片は幅広い剥片と推測される。石材はF.ホルンフェルスである。

10 は剥片剥離作業面が正右左裏面に認められる。正面の剥離作業面は上面、右面の剥離作業面における打面は上面、左面の剥離作業面における打面は裏面から行われるなど頻繁な打面転移が認められる。剥離作業面に残る剥離痕の観察から、作出された剥片は幅広い剥片と推測される。石材はF.ホルンフェルスである。

接合資料 (第51 図 11 ~ 第52 図 13)

剥片剥離作業に関する3点を図示した。石材はすべてF.ホルンフェルスである。第51図11は石核1点(8142)と剥片4点(6840・6843・8140・8154)の接合資料である。11の接合状態を見ると、90度あるいは180度の打面転移を行いながら剥片剥離作業が行われている。まず、正面の剥片剥離作業面を打面とし、上面を剥離作業面として8154の剥離作業を行う。次に、右面を剥離作業面として8140の剥片剥離作業を行っている。その後、右面に打面を転移して6840の剥離を行う。最後に、打面を上面に転移して6843を剥離している。石核は下面に自然面を残している。

第 52 図 12 は剥片 6 点 (6702・6839・6847・7148・7184・7185) の接合資料である。12 の接合状態を見ると、礫から石核の素材となる剥片を剥離し、この剥片の主要剥離面や剥離面を打面と



第52図 第Ⅲ文化層 東尾根出土石器実測図 (5)

して剥片剥離作業を行っている。まず、剥片の主要剥離面を打面として剥片 A を剥離している。剥片 A は剥離面を打面として $6702 \rightarrow 7148 \cdot 7184$ を剥離している。次に、剥片 B は剥離面を打面として $6839 \rightarrow 6847 \rightarrow 7185$ を剥離している。

13 は剥片 2 点 (6812・8138) の接合資料である。13 の接合状態を見ると、同一打面からの連続的な剥片剥離作業を示している。剥片剥離作業は $6812 \rightarrow 8138$ に進行している。

〈東尾根のまとめ〉

第Ⅲ文化層の東尾根は、石器ブロック4か所232点と単独出土4点の合計236点の石器群によって構成される文化層である。石器組成は、ナイフ形石器を組成するナイフ形石器石器群である。ナイフ形石器は中形の一側縁加工のナイフ形石器が認められた。

石材組成は、第1石材が F. ホルンフェルス 230 点 (97%)、1,453.3g (98%)、第2石材が黒曜石 5点 (2%)、15g (1%)、第3石材が珪質頁岩 1点 (1%)、13.1g (1%) である。石器石材は、ナイフ形石器 2点・楔形石器 1点・加工痕のある剥片 5点が F. ホルンフェルス、使用痕のある剥片 2点 が黒曜石となっている。黒曜石の産地は箱根畑宿と和田小深沢である。

剥片剥離技術は、ナイフ形石器や加工痕のある剥片・接合資料から縦長剥片を作出する剥片剥離技術の存在がうかがえる。そして、石核・接合資料の観察では、単設打面の石核や90度あるいは180度の打面転移を繰り返す石核から縦長剥片を作出していることが明らかとなった。

【中央谷の遺構と遺物】

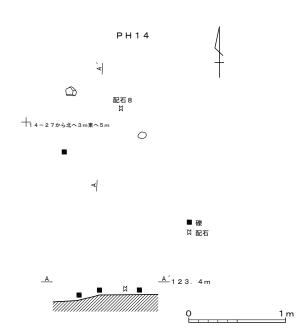
中央谷の遺構と遺物は、2基の配石、1基の礫群、1か所の石器ブロックから検出された加工痕のある剥片1点、使用痕のある剥片1点、石核2点、剥片・砕片60点の合計64点の石器群、炭化物26点によって構成されている。

①遺 構

a . 礫群

第 14 号礫群 (第 53 図)

中央谷の 14-27 グリッドに位置する。構成礫は 3 点で、長軸約 1.0 m、短軸約 0.6 mの範囲に分布する。検出層位は第 \blacksquare 黒色帯である。垂直分布は標高 $123.26 \sim 123.32$ mにかけて約 6 cmの分布幅



第53図 第Ⅲ文化層 第14号礫群実測図

を形成しており、大部分の礫は標高 123.30 m付近に 礫の底面を置いている。総重量は 971g、平均重量は 323.7g である。構成礫は、非赤化完形礫 3 点である。 石材は安山岩 2 点、デイサイト 1 点である。接合関係 は認められない。

b.配石

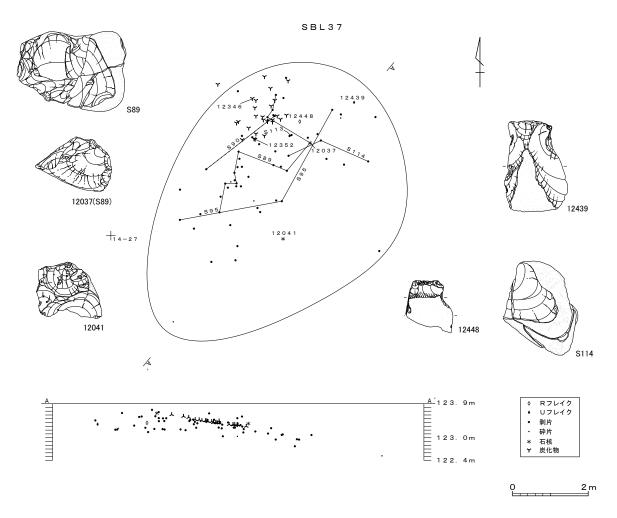
2基2個からなる配石が検出された。配石は第7号配石と第8号配石が分布する。出土層位は第Ⅲ黒色帯である。配石の総重量は5,783g、平均重量は2,891.5g、状態は礫面非赤変破損礫1点、礫面赤変割面非赤変破損礫1点、石材は安山岩2点であった。

c . 石器ブロック

石器ブロックは中央谷の北側に第37号石器ブロック1か所が分布する。

第37号石器ブロック (第54図)

中央谷の14-26・27 グリッドで確認した石器ブ



第54図 第Ⅲ文化層 第37号石器ブロック実測図

ロックである。規模は、長軸約 $7.5\,\mathrm{m}$ 、短軸約 $5.3\,\mathrm{m}$ である。石器類は標高 $122.52\sim123.74\,\mathrm{m}$ にかけて約 $122\mathrm{cm}$ のレベル差が生じていた。確認された石器は加工痕のある剥片 $1\,\mathrm{点}$ 、使用痕のある剥片 $1\,\mathrm{点}$ 、石核 $2\,\mathrm{点}$ 、剥片・砕片 $60\,\mathrm{点}$ の合計 $64\,\mathrm{点}$ が出土している。この他に炭化物 $26\,\mathrm{点}$ が検出されている。石材は、F. ホルンフェルスが $44\,\mathrm{点}$ 、ガラス質黒色安山岩が $10\,\mathrm{点}$ 、黒曜石が $9\,\mathrm{点}$ 、安山岩が $1\,\mathrm{点}$ 出土している。黒曜石の産地は、諏訪星ヶ台産が $4\,\mathrm{点}$ 、天城柏峠産が $1\,\mathrm{点}$ 、不可他 $4\,\mathrm{点}$ である。

②遺 物

加工痕のある剥片 (第55 図 14)

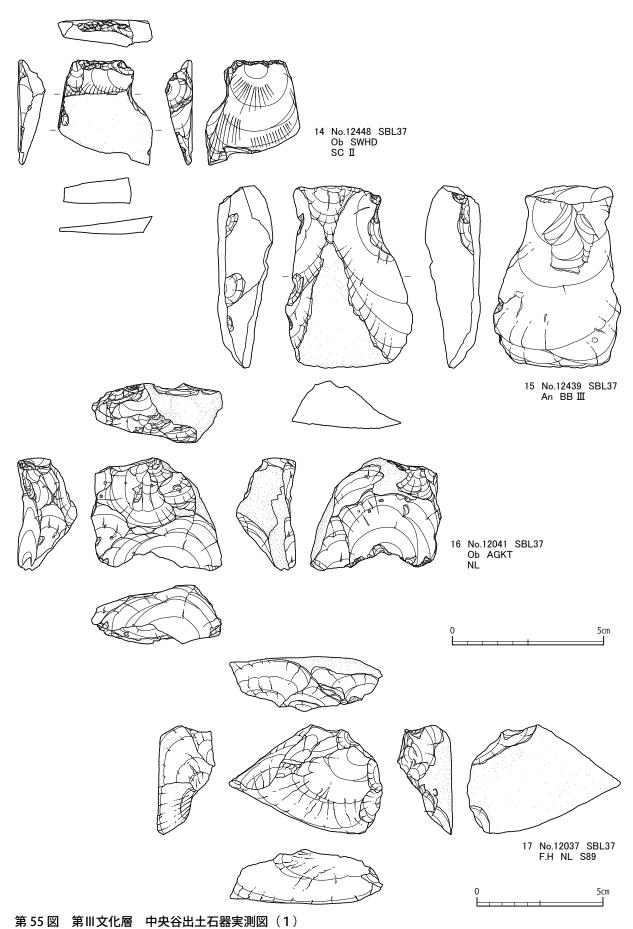
1点が出土した。何らかの目的で素材に調整が施されているものであるが、目的が明確に判断できないため加工痕のある剥片とした。第55図14は素材剥片の上端部に調整面を形成し、右側縁に調整剥離が認められる。上端部は主要剥離面側から急斜な刃部が作成されている。右側縁は剥離面側から調整剥離が施される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

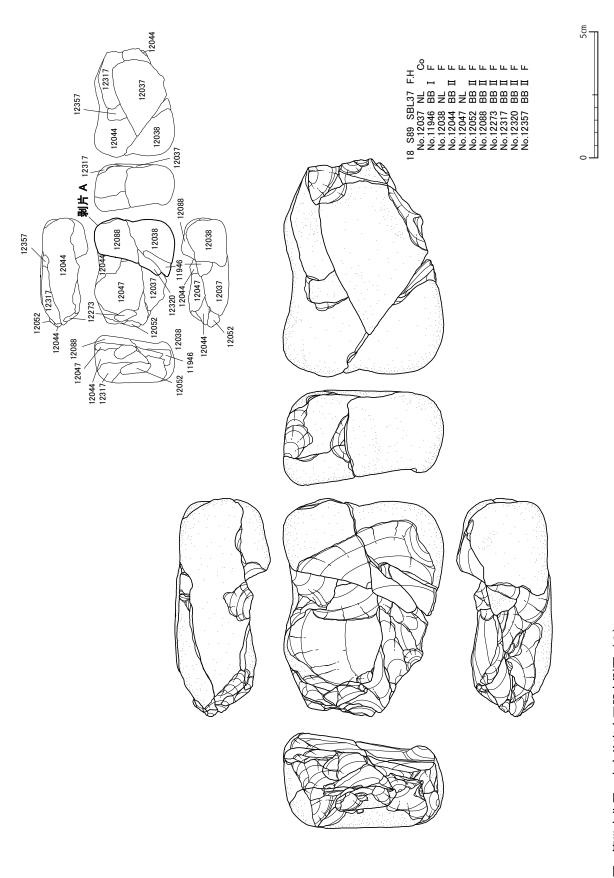
使用痕のある剥片 (第55 図 15)

1点が出土した。第 55 図 15 は、素材剥片の右側縁と左側縁に使用によって生じたと考えられる剥離が認められる。石材は安山岩である。

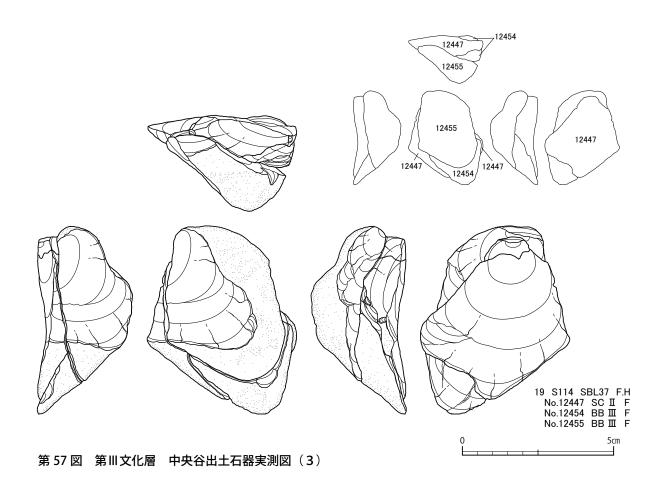
石核 (第55 図 16・17)

2点が出土し、ともに図示した。第55図16は両設打面石核で、剥片の剥離方向が180度異なるも





第56 図 第Ⅲ文化層 中央谷出土石器実測図(2)



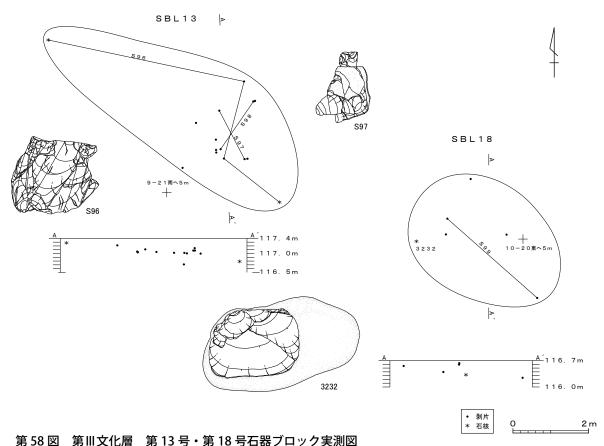
のである。剥片剥離作業面は、正裏面に認められる。正面の剥離作業面における打面は、上設打面と下 設打面から行われる。下設打面は裏面の剥片剥離作業で失われている。剥離作業面に残る剥離痕の観察 から、作出された剥片は幅広い剥片と推測される。石材は天城柏峠産の黒曜石である。

17 は剥片の剥離方向が 180 度異なるものである。剥片剥離作業面は、正左面に認められる。正面の剥離作業面における打面は上面、左面の剥離作業面における打面は下面から行われる。下面は正面の剥片剥離作業で失われている。剥離作業面に残る剥離痕の観察から、作出された剥片は幅広い剥片と推測される。石材は F. ホルンフェルスである。

接合資料 (第 56 図 18・第 57 図 19)

剥片剥離技術に関わる資料 2 例を図示した。石材はともに F . ホルンフェルスである。第 56 図 18 は石核 1 点(12037)と剥片 10 点(11946・12038・12044・12047・12052・12088・12273・12317・12320・12357)の接合資料である。18 の接合状態を見ると、自然面を打面とする石核から 180 度打面転移を行いながら剥片剥離作業を行っている。まず、下面を打面として剥片 A(12088・12038・11946・12320)を剥離している。次に、180 度打面を転移して上面の打面から12273 \rightarrow 12052 を剥離している。さらに、180 度打面転移して下面の打面から 12047 を剥離している。最後に 180 度打面を転移して、上面の打面から 12037 \rightarrow 12317・12357 を剥離している。なお、剥片 A は剥離時の衝撃で 12088 が割れ、次に上面の打面から 12320 \rightarrow 11946 を剥離している。

第 57 図 19 は剥片 3 点(12447・12454・12455)の接合資料である。19 の接合状態を見ると、正面を剥片剥離作業面として 90 度打面転移を行いながら剥片剥離作業を行っている。まず、上面を打面として 12455 を剥離している。次に、打面を 90 度転移して右側面に打面を準備し、12454 を剥離している。これらの剥片は自然面を残しており、剥片剥離工程の早い段階の剥離作業であることがわか



る。

〈中央谷のまとめ〉

第Ⅲ文化層の中央谷は、石器ブロック 1 か所 64 点の石器群によって構成される文化層である。 石器組成は断片的で、示準的な石器が認められなかった。

石材組成は、第1石材がF.ホルンフェルス 44点(69%)、585.0g(68%)、第2石材がガラス質 黒色安山岩 10点(16%)、211.9g(25%)、第3石材が黒曜石9点(14%)、27.9g(3%)である。 石器石材は、加工痕のある剥片が諏訪星ヶ台産の黒曜石1点、使用痕のある剥片が安山岩1点となって いる。

剥片剥離技術は、加工痕のある剥片などの素材から幅広の剥片や縦長剥片を作出する剥片剥離技術の存在がうかがえる。そして、石核・接合資料の観察では、両設打面石核や90度の打面転移を行う石核から剥片剥離作業を行っていることが明らかとなった。

【西尾根の遺構と遺物】

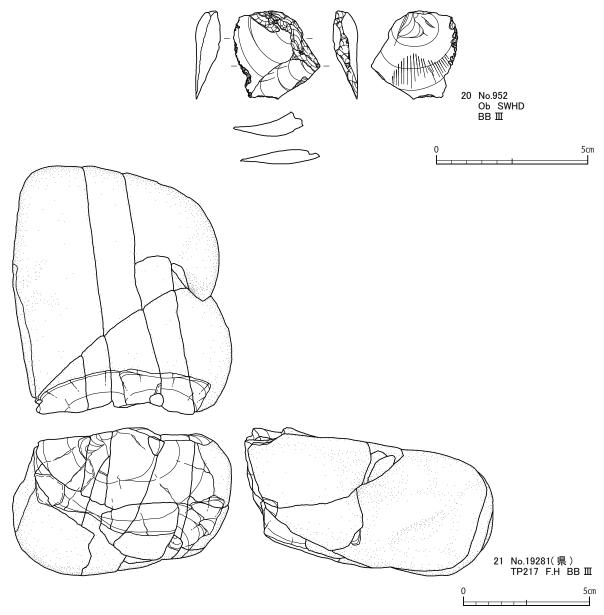
西尾根の遺構と遺物は、2か所の石器ブロックから検出された石核3点、剥片19点と、単独出土の使用痕のある剥片1点、石核1点、剥片9点の合計33点の石器群によって構成されている。

1遺 構

a . 石器ブロック

第13号石器ブロック (第58図)

西尾根の 9-20 グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 7.5 m、短軸約 2.8 mである。石器類は標高 $116.71 \sim 117.28$ mにかけて約 57cmのレベル差が生じていた。確認された石器は石核 2 点、剥片 14 点の合計 16 点が出土している。石材は、F . ホルンフェルス 14 点、黒曜石 1 点、珪質頁



第59図 第Ⅲ文化層 西尾根出土石器実測図(1)

岩1点である。黒曜石の産地は、諏訪星ヶ台産が1点であった。

第18号石器ブロック (第58図)

西尾根の $10-19\cdot 20$ グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 3.7 m、短軸約 2.2 mである。石器類は標高 $116.24 \sim 116.63$ mにかけて約 39cmのレベル差が生じていた。確認された石器は石核 1 点、剥片 5 点の合計 6 点が出土している。石材は、F . ホルンフェルスが 4 点、チャートが 1 点、黒曜石が 1 点である。黒曜石の産地は、天城柏峠産であった。

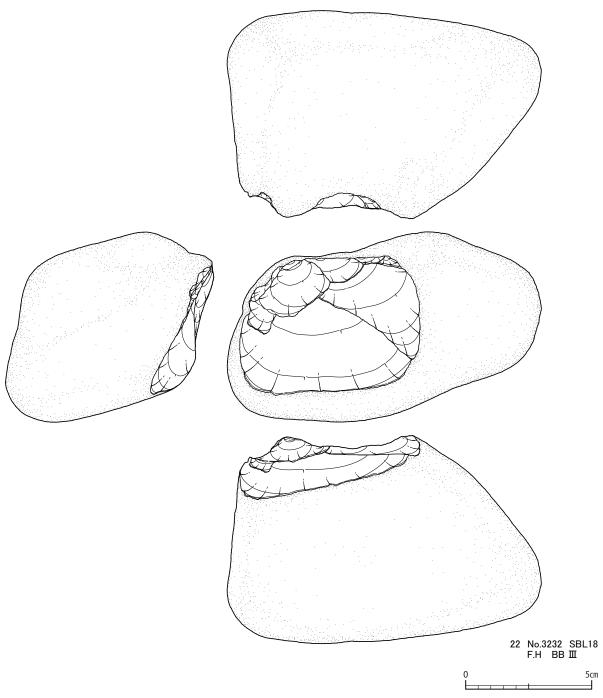
②遺 物

使用痕のある剥片 (第59図20)

1点が出土した。第59図20は素材となる打面再生剥片の鋭い縁辺に、調整加工とは考えられない 微細な剥離が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

石核 (第59図21・第60図22)

4点が出土し、2点を図示した。これらはF.ホルンフェルスを石材とする扁平な海浜礫を素材とし



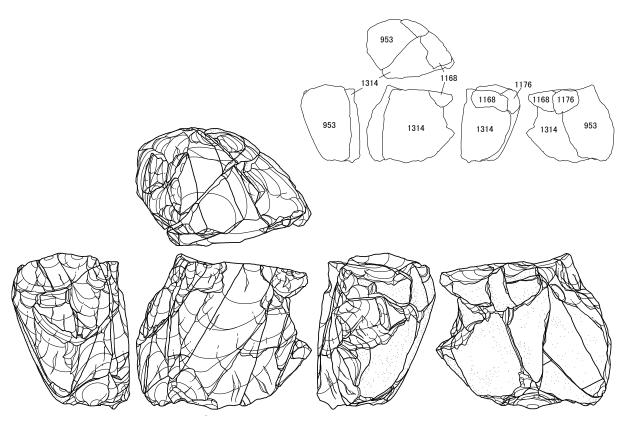
第60図 第Ⅲ文化層 西尾根出土石器実測図(2)

た石核素材に近い石核である。

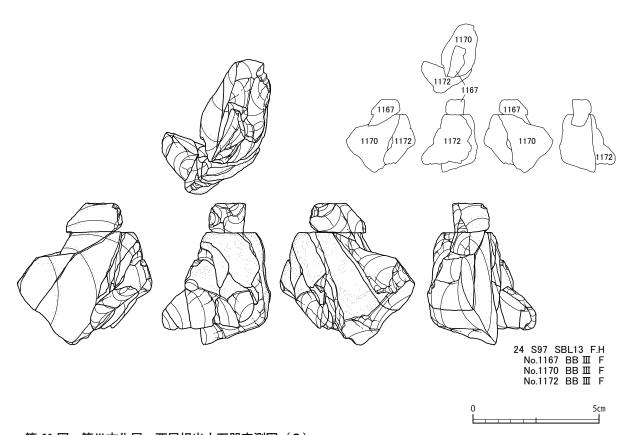
第59図21は上面に打面調整を行い、正面を剥片剥離作業面として、数回の剥片剥離作業を行っている。剥離作業面に残る剥離痕の観察では、幅広の剥片を作出している。第60図22は上面の自然面を打面として、正面の剥片剥離作業面で数回の剥片剥離作業を行っている。剥離作業面に残る剥離痕を観察すると、幅広の剥片を作出している。

接合資料 (第61 図 23・24)

石核と剥片の接合など剥片剥離技術に関わる資料 2 例を図示した。石材はともに F. ホルンフェルスである。第 61 図 23 は両設打面石核(953・1314)と剥片(1168・1176)の接合資料である。23



23 S96 SBL13 F.H No.953 BB III Co No.1314 BB III Co No.1168 BB III F No.1176 BB III F



第61図 第Ⅲ文化層 西尾根出土石器実測図 (3)

の接合状態を見ると、上面の打面から正面を剥片剥離作業面として剥片剥離を行った後に 90 度打面転移を行い、正面を打面とし、上面を剥離作業面として剥片(1168・1176)を剥離している。石核の裏面には自然面が残る。

24 は剥片 3 点(1167・1170・1172)の接合資料である。24 の接合状態を見ると、上面を打面として 1172 を剥離している。その後、1170 の上面を打面として 1167 を剥離しており、その際、節理面で剥離している。

〈西尾根のまとめ〉

第Ⅲ文化層の西尾根は、2 か所の石器ブロックから検出された 22 点と単独出土の 11 点の、合計 33 点の石器群で構成される文化層である。石器組成は断片的で、定型的な石器は認められなかった。

石材組成は、第1石材が F. ホルンフェルス 27点 (82%)、2,253.9g (97%) であった。石器石材は、 剥片・砕片・石核ともに F. ホルンフェルスが中心となっている。

剥片剥離技術は、F.ホルンフェルス製の剥片素材や円礫素材の石核・接合資料から自然面や複剥離打面を打面として、単設打面石核や両設打面石核から幅広の剥片を目的とする剥片剥離技術の存在がうかがえる。そして剥片類の観察では、剥片剥離方向を一定方向にしたものが主体を占めている。

(4) 第Ⅳ文化層の遺構と遺物の分布状況 (第62・63 図)

第IV文化層の遺構・遺物は、東尾根・中央谷・西尾根に分布しており、土坑 1 基および配石 3 基 3 点、 礫群 1 基 4 点、単独出土の礫 12 点からなる合計 19 点の礫と、石器ブロック 7 か所 715 点、単独出土した 21 点の合計 736 点の石器が検出された。

配石は3基検出した。これらは東尾根に1基、西尾根に2基が分布している。検出層位は第II黒色帯である。総重量は7,943g、平均重量は2,647.7gである。構成礫は礫面非赤変破損礫が1基、非赤化完形礫が2基である。石材は安山岩が1基、砂岩が2基を占めている。接合関係は認められない。

【東尾根の遺構と遺物】

東尾根の遺構と遺物は、配石1基、単独出土の礫1点と、単独出土の石刃1点、剥片6点、石核1点の合計8点の石器群によって構成されている。

1)遺 構

a . 配石

配石は1基が検出された。検出層位は第II黒色帯で、重量は3,266gである。構成礫は礫面非赤変破損礫で、石材は安山岩である。接合関係は認められない。

②遺 物

石刃 (第64図1)

1点が出土した。第64図1は一定した剥片剥離方向を持つ工程から作出されたもので、剥離面や主要剥離面で観察される剥離痕が同一方向の剥離で形成されている。打面は調整打面である。石材はF.ホルンフェルスである。

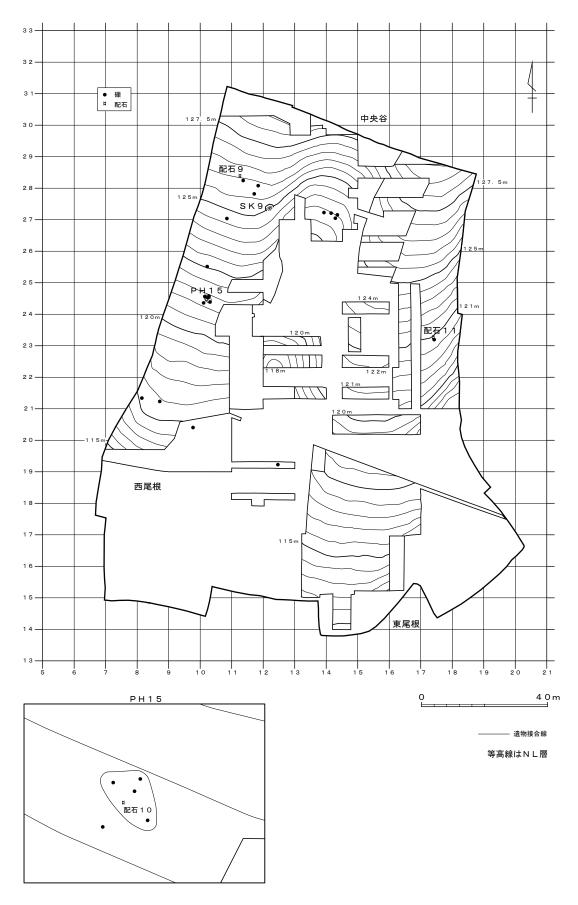
石核 (第64図2)

1点が出土した。第64図2は両設打面石核で、剥片の剥離方向が180度異なるものである。上設打面と下設打面は調整打面である。剥片剥離作業面は、正左右裏面に認められる。正面と右面の剥離作業面における打面は上設打面から行われており、左面の剥離作業面における打面は下設打面から行われる。剥離作業面に残る剥離痕の観察から、作出された剥片は縦長剥片と推測される。石材は珪質頁岩である。

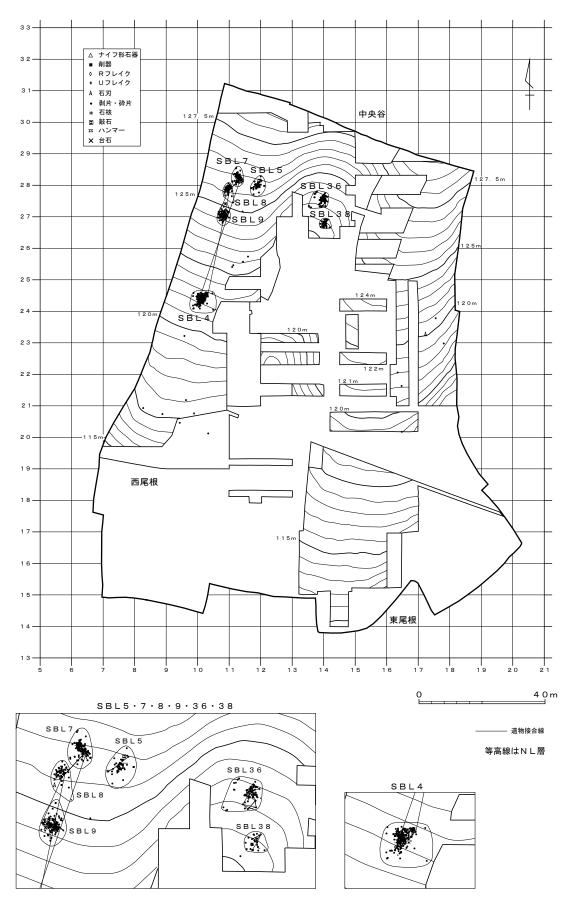
〈東尾根のまとめ〉

第6表 第Ⅳ文化層 出土石器一覧表

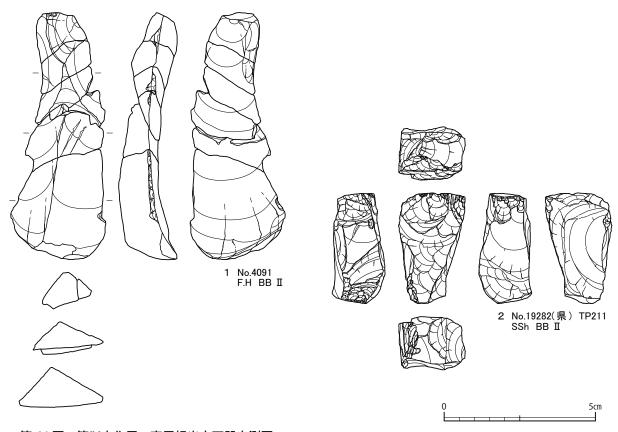
石	器種材	台形様石器	ナイフ形石器	尖頭器	掻器	削器	彫器	楔形石器	石錐	ハンマー	磨石	敲石	台石	原石	加工痕のある	使用痕のある	石刃	剥片	砕片	石核	細石刃	細石刃石核	計
	和田フヨーライト																	10					10
	和田鷹山															2		17					19
	諏訪星ヶ台															1		1					2
黒曜石	蓼科冷山														1	1		5					7
	天城柏峠															1		5					6
	箱根畑宿																	1					1
	不可他																	12	17				29
F	. ホルンフェルス		1												1		2	599	12	18			633
ガラ	ガラス質黒色安山岩																	13					13
	珪質頁岩																	2		1			3
	チャート					1																	1
	安山岩											5						1					6
	砂岩									4			1										5
	緑色凝灰岩																	1					1
計			1			1				4		5	1		2	5	2	667	29	19			736
礫 配石3 礫群										群 1	19												



第62図 第Ⅳ文化層 遺構および礫群・配石分布図



第63 図 第IV文化層 石器分布図



第64図 第Ⅳ文化層 東尾根出土石器実測図

東尾根では、石刃1点、石核1点、剥片6点の合計8点の石器が出土した。これらは単独出土例である。定形的な石器は認められなかった。

石材組成は、黒曜石4点、F.ホルンフェルス2点、珪質頁岩2点である。黒曜石の産地は、天城柏 峠産2点、箱根畑宿産1点、和田鷹山産1点である。

剥片剥離技術は、石刃や縦長剥片の観察では、剥片剥離方向を一定方向にしたものと 90 度打面転移 したものが認められた。石核には 180 度の打面転移が行われており、石刃や縦長剥片の作出を目的と していたと思われる。このように、石刃技法を技術基盤としてこれらの剥片類を生産している可能性が うかがえる。

【中央谷の遺構と遺物】

中央谷の遺構と遺物は、単独出土の礫 4 点と、2 か所の石器ブロックから出土した削器 1 点、石核 2 点、剥片・砕片 93 点の合計 96 点の石器群によって構成されている。

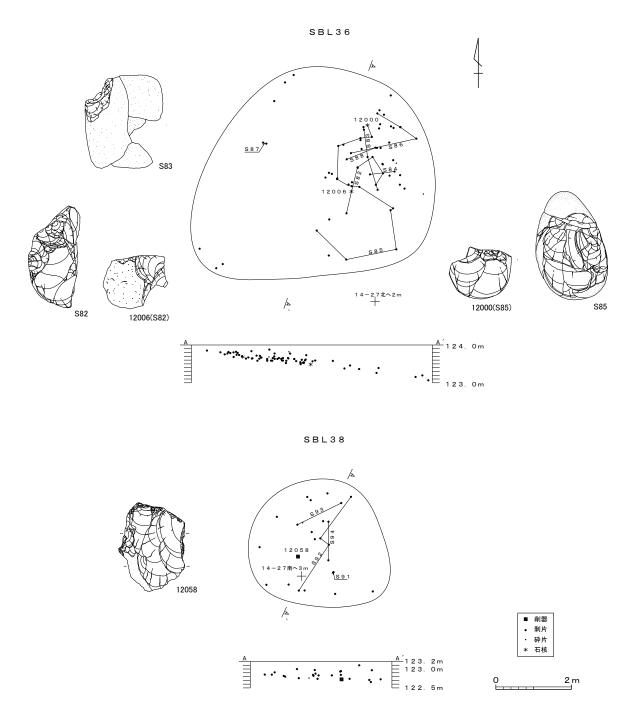
①遺 構

a . 石器ブロック

第36号石器ブロック (第65図)

中央谷の $13\cdot 14-27$ グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 $6.4\,\mathrm{m}$ 、短軸約 $5.3\,\mathrm{m}$ である。石器類は標高 $123.07\sim 123.88\,\mathrm{m}$ にかけて約 $81\mathrm{cm}$ のレベル差が生じていた。確認された石器群は石核 $2\,\mathrm{d}$ 、剥片・砕片 $69\,\mathrm{d}$ の合計 $71\,\mathrm{d}$ が出土している。石材は、F. ホルンフェルスが $66\,\mathrm{d}$ 出土し、93%を占める。この他にガラス質黒色安山岩 $4\,\mathrm{d}$ ($6\,\%$)と黒曜石 $1\,\mathrm{d}$ ($1\,\%$)が出土している。黒曜石の産地は、天城柏峠産である。

第38号石器ブロック (第65図)



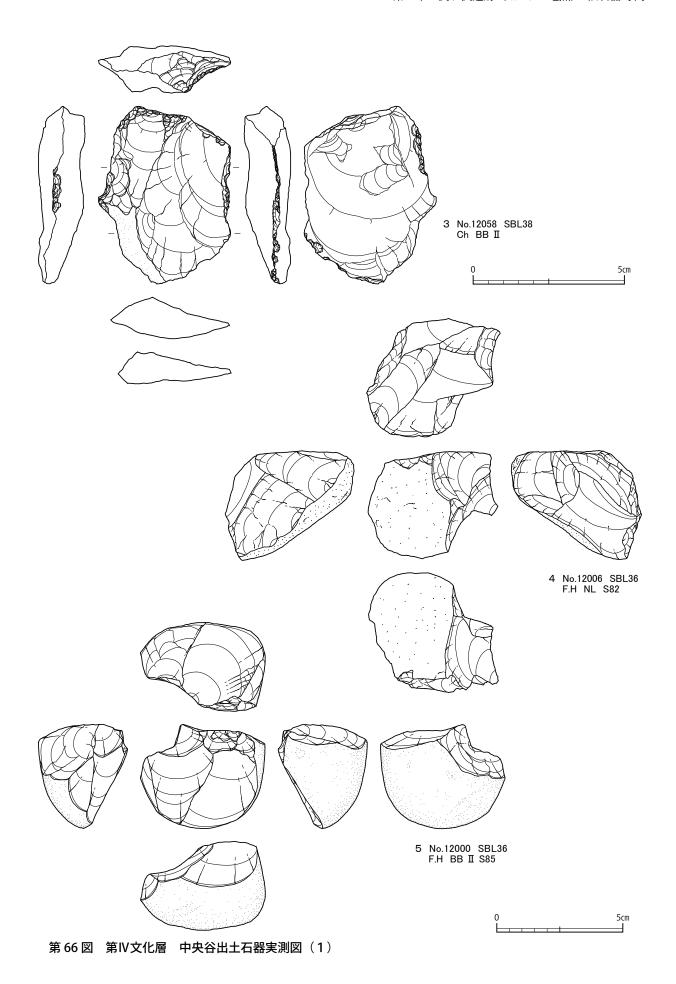
第65図 第Ⅳ文化層 第36号・第38号石器ブロック実測図

中央谷の $13\cdot 14-26$ グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 3.2 m、短軸約 2.9 mである。石器類は標高 $122.66\sim 123.10$ mにかけて約 44cmのレベル差が生じていた。確認された石器群は削器 1 点、剥片・砕片 24 点の合計 25 点が出土している。石材は F . ホルンフェルスが 16 点出土し、64%を占める。これ以外にガラス質黒色安山岩 7 点(28%)等がある。

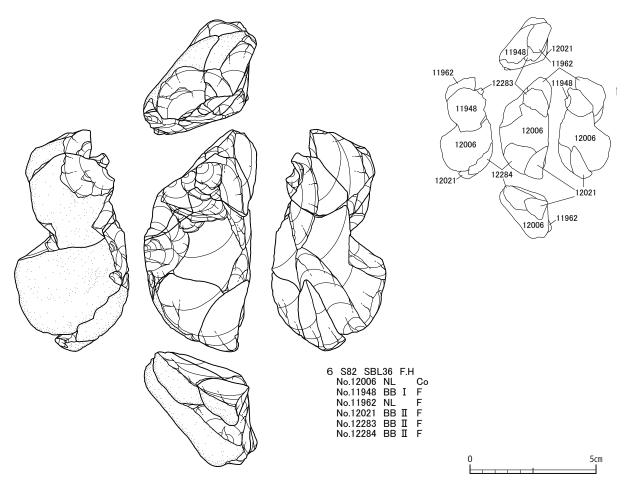
2遺 物

削器 (第66図3)

1点が出土した。第66図3は縦長剥片の左側縁と右側縁に急斜な刃部が作成されている。石材はチャートである。



-97-



第67図 第Ⅳ文化層 中央谷出土石器実測図(2)

石核 (第66 図4・5)

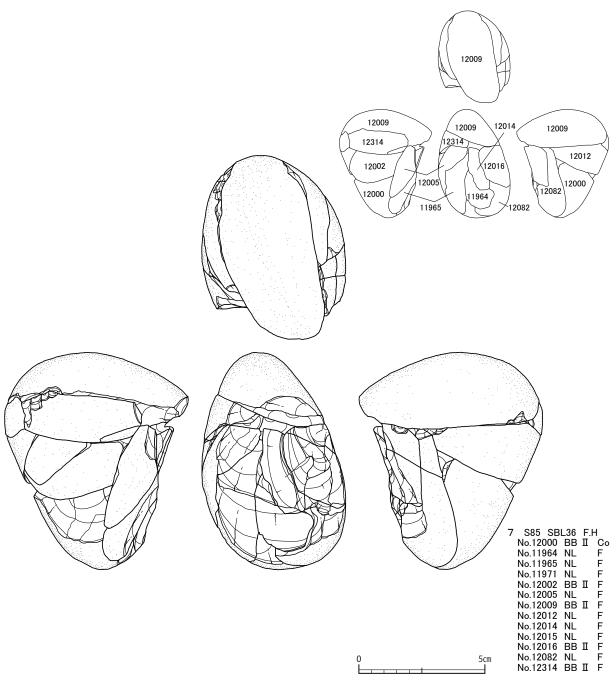
2点が出土し、ともに図示した。第66図4は両設打面石核で、剥片の剥離方向が180度異なるものである。上設打面が調節打面で下設打面が自然面である。剥片剥離作業面は裏面に認められる。裏面の剥離作業面における打面は、上設打面と下設打面から行われる。剥離作業面に残る剥離痕の観察から、作出された剥片は幅広な剥片と推測される。裏面には自然面が残る。石材はF.ホルンフェルスである。

5は単設打面石核である。正面からの剥離により打面を再生している。打面は複剥離打面で正面と左面に剥片剥離作業面が認められる。側面の剥離作業面の観察では、大きく抉り取られるような剥離によって、剥離作業面が失われている。打面と剥離作業面以外は自然面である。石材はF.ホルンフェルスであった。

接合資料 (第67 図6~第69 図8)

石核と剥片の接合を中心に、剥片剥離技術に関わる資料 3 例を図示した。石材はすべて F . ホルンフェルスである。第 67 図 6 は石核 1 点(12006)と剥片 5 点(11948・11962・12021・12283・12284)の接合資料である。6 の接合状態を見ると、両設打面から 180 度の打面転移を行いながら剥片剥離作業が行われている。まず、正面の剥片剥離作業面を打面とし、上面を剥離作業面として11962 \rightarrow 12283 の剥離作業を行い、その衝撃で上設打面(11948)が失われる。そこで、180 度打面を転移して 12021 \rightarrow 12284 の剥離を行っている。

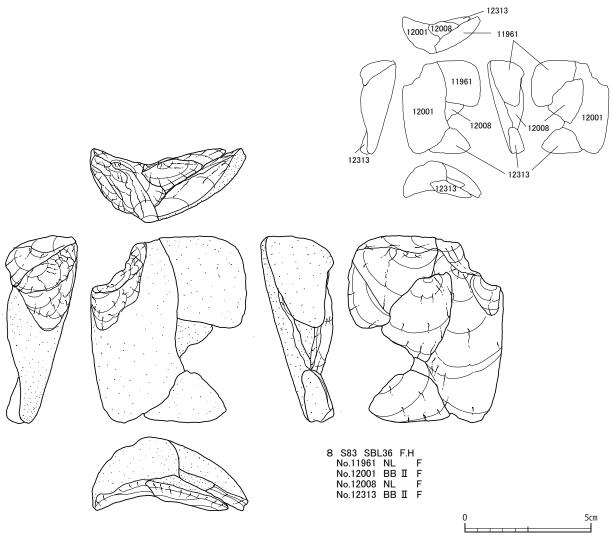
第 68 図 7 は 石 核 1 点(12000)と 剥片 12 点(11964・11965・11971・12002・12005・12009・12012・12014・12015・12016・12082・12314)の接合資料である。7 の接合状態を見



第68図 第Ⅳ文化層 中央谷出土石器実測図(3)

ると、打面は調整打面で、正面と上面に剥片剥離作業面が認められ、90 度打面転移を繰り返しながら剥片剥離作業が行われている。まず、正面の剥離作業面を打面として、上面の剥離作業面で 12009 の剥離作業を行う。次に 90 度打面転移し、正面を剥離作業面として上面の打面から 12016 \rightarrow 12014・11964・11965・12005 \rightarrow 12082・12015 の剥片剥離作業を行っている。その後、90 度打面転移し、正面を打面として上面の剥離作業面から 12314・11971 \rightarrow 12012 \rightarrow 12002 の剥離を行う。石核と剥片は一部に自然面を残している。

第69図8は剥片4点(11961・12001・12008・12313)の接合資料である。8の接合状態を見ると、正面を剥片剥離作業面として上面の打面から連続的に剥片剥離作業を行っており、12001・12313 \rightarrow 11961 \rightarrow 12008の順で剥離している。これらの剥片は自然面を残しており、剥片剥離工程



第69 図 第Ⅳ文化層 中央谷出土石器実測図 (4)

の早い段階の剥離作業であることがわかる。

〈中央谷のまとめ〉

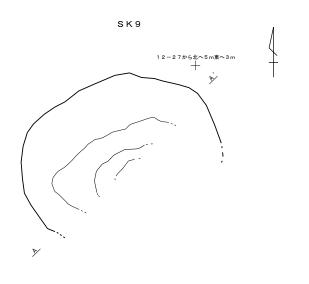
第IV文化層の中央谷は、石器ブロック 2 か所 96 点の石器群によって構成される文化層である。石器組成は定型的な石器が認められなかった。

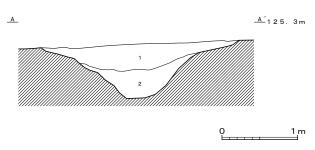
石材組成は、第 1 石材が F . ホルンフェルス 82 点(85%)、1,248.6g(89.2%)、第 2 石材がガラス 質黒色安山岩 11 点(11%)、65.9g(5%)である。石器石材は、削器 1 点がチャートである。

剥片剥離技術は、削器や剥片から縦長剥片を作出する剥片剥離技術の存在がうかがえる。そして、石核・接合資料の観察では、両設打面石核で剥片の剥離方向が 180 度異なるもの、単設打面石核で剥離方向を一定にして剥片剥離作業を行うもの、90 度の打面転移を繰り返しながら剥片剥離作業が行われているものが認められた。

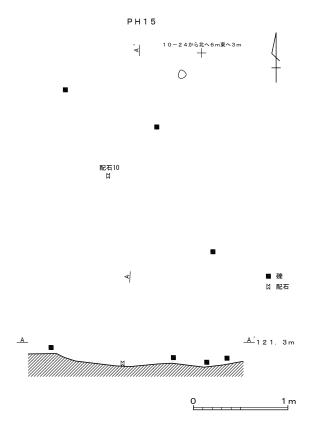
【西尾根の遺構と遺物】

西尾根の遺構と遺物は、1基の土坑、2基の配石、1基の礫群、5か所の石器ブロックから検出されたナイフ形石器1点、加工痕のある剥片2点、使用痕のある剥片4点、石刃1点、石核16点、剥片・砕片585点、ハンマー4点、敲石5点、台石1点と、単独出土の使用痕のある剥片1点、剥片12点の合計632点の石器群によって構成されている。





第70回 第Ⅳ文化層 第9号土坑実測図



第71 図 第IV文化層 第15号礫群実測図

1遺 構

a . 土坑

第9号土坑 (第70図)

西尾根の12-27 グリッドで確認した土坑である。検出層位はニセローム層、平面形は楕円形である。土坑の規模は、長軸約2.6 m、短軸約1.2 m、深さ約0.7 mを測る。底面は第Ⅲスコリア帯スコリア1に達している。底面は第Ⅲスコリア帯スコリア1に沿って水平で、断面の形状が第Ⅲ黒色帯の陥穴と異なっている。断面の形状から木の根などの可能性がある。覆土は自然堆積層で、坑底付近に第2層暗褐色土が堆積した後、第1層灰褐色土が堆積して埋没している。遺物は出土していない。

b . 礫群

第 15 号礫群 (第 71 図)

西尾根の10-24 グリッドに位置する。構成礫は4点で、長軸約2.3 m、短軸約1.1 mの範囲に分布する。検出層位は第II 黒色帯である。垂直分布は標高121.09~121.25 mにかけて約16cmの分布幅を形成しており、大部分の礫は標高121.16 m付近に礫の底面を置いている。総重量は679g、平均重量は169.8gである。構成礫は、非赤化完形礫1点、礫面赤変割面赤変破損礫1点、礫面非赤変破損礫1点、礫面非赤変破損礫1点、割面非赤変破損礫1点であった。石材は安山岩3点、砂岩1点である。接合関係は認められない。第4号石器ブロックに重複している。

c.配石

配石は2基が分布している。検出層位は第II 黒色帯で、重量は4,677gである。構成礫は、 非赤化完形礫が2基であった。石材はともに砂 岩である。接合関係は認められない。

d. 石器ブロック

第4号石器ブロック (第72図)

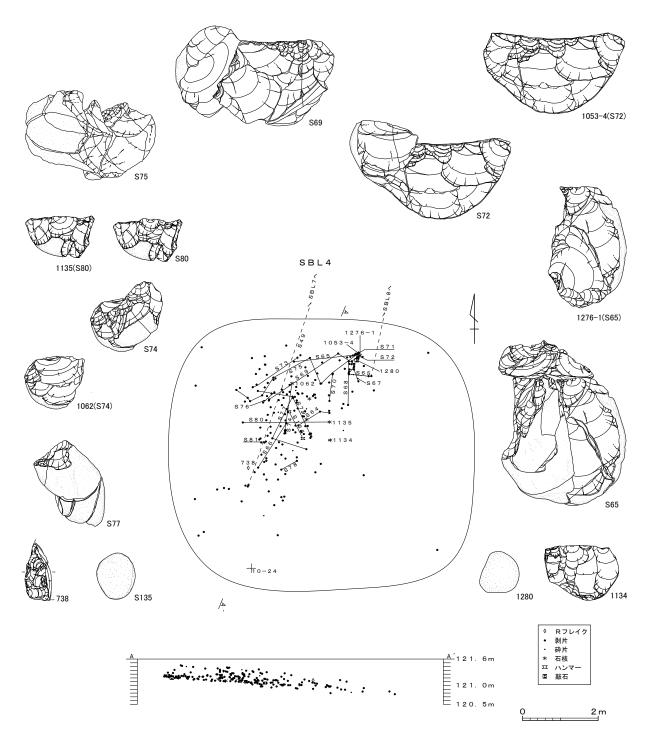
西尾根の $9 \cdot 10 - 24$ グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約8.1 m、短軸約7.8 mである。石器類は標高 $120.67 \sim 121.46$ mにかけて約79cmのレベル差が生じていた。確認された石器群は加工痕のある剥片1点、石核7点、剥片·砕片214点、ハンマー2点、

敲石1点の合計225点が出土している。

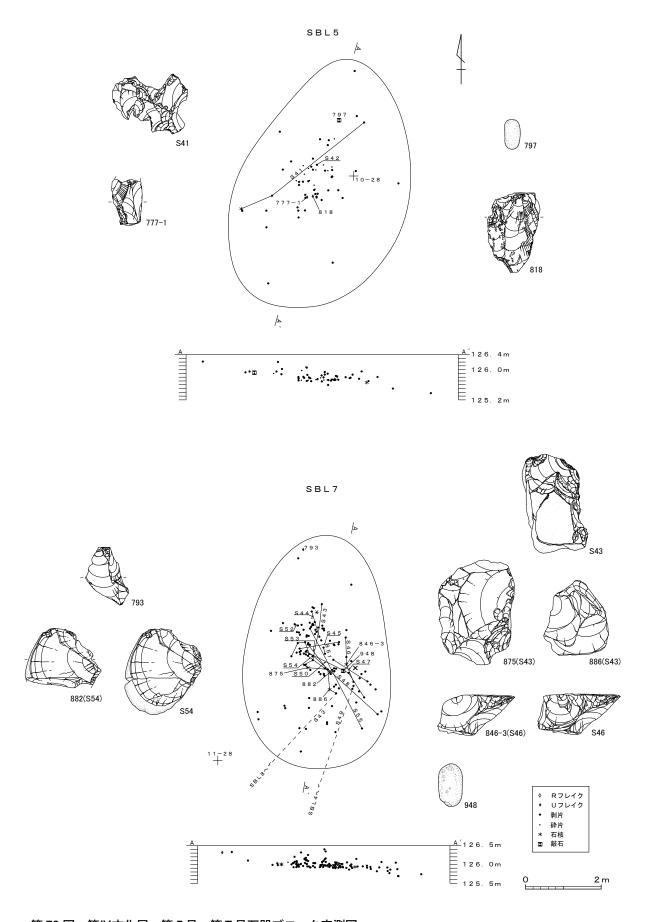
石材は、F. ホルンフェルス 203 点、黒曜石 19 点、砂岩 2 点、安山岩 1 点が出土している。黒曜石の産地は、蓼科冷山産 4 点、和田フヨーライト産 3 点、和田鷹山産 3 点、天城柏峠産 1 点である。

第5号石器ブロック (第73図)

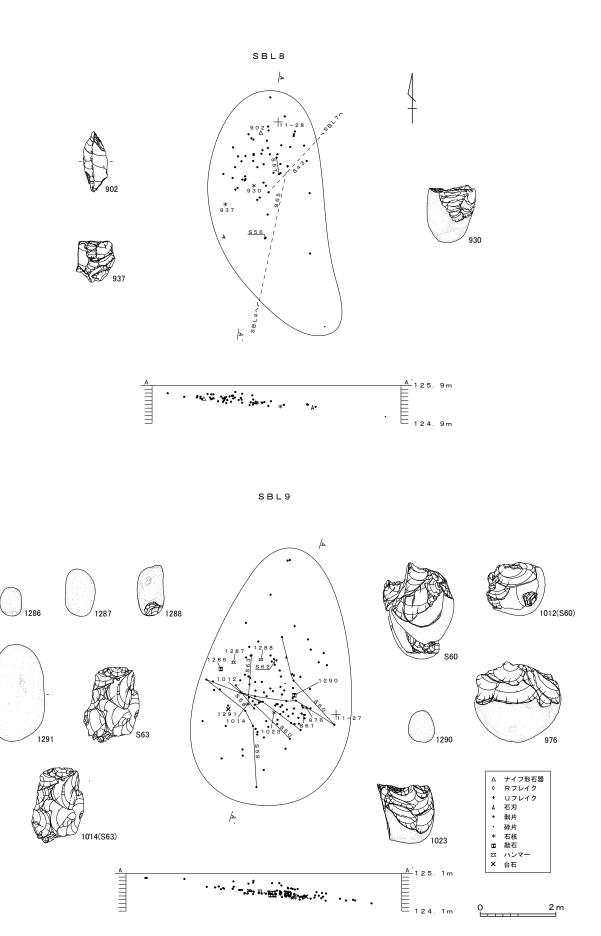
西尾根の $11-27\cdot28$ グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 6.0 m、短軸約 3.4 mである。石器類は標高 $125.38\sim126.21$ mにかけて約 83cmのレベル差が生じていた。確認された石器群は使用痕のある剥片 2 点、剥片・砕片 59 点、敲石 1 点の合計 62 点が出土している。石材は黒



第72図 第Ⅳ文化層 第4号石器ブロック実測図



第73 図 第IV文化層 第5号・第7号石器ブロック実測図



第74図 第Ⅳ文化層 第8号・第9号石器ブロック実測図

曜石 40 点、F . ホルンフェルス 21 点、安山岩 1 点が出土している。 黒曜石の産地は、和田鷹山産 12 点、和田フヨーライト産 6 点、 天城柏峠産 1 点、 不可他 21 点である。

第7号石器ブロック (第73図)

西尾根の 11-28 グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 5.4 m、短軸約 3.2 m である。石器類は標高 $125.69\sim126.12$ mにかけて約 43cmのレベル差が生じていた。確認された石器群は加工痕のある剥片 1 点、使用痕のある剥片 1 点、石核 3 点、剥片・砕片 146 点、敲石 1 点の合計 152 点が出土している。石材は 152 点が出土している。石材は 152 点が出土している。 温曜石の産地は天城柏峠産 152 点、和田鷹山産 152 点である。

第8号石器ブロック (第74図)

西尾根の $10 \cdot 11 - 27$ グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 6.3 m、短軸約 2.4 mである。石器類は標高 $125.08 \sim 125.73$ mにかけて約 65cmのレベル差が生じていた。確認された石器群はナイフ形石器 1 点、石刃 1 点、石核 2 点、剥片・砕片 57 点の合計 61 点が出土している。石材は F . ホルンフェルス 61 点である。

第9号石器ブロック (第74図)

西尾根の $10-26\cdot 27$ グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 6.0 m、短軸約 3.5 mである。石器類は標高 $124.31\sim 124.98$ mにかけて約 67cmのレベル差が生じていた。確認された石器群は使用痕のある剥片 1 点、石核 4 点、剥片・砕片 109 点、ハンマー 2 点、敲石 2 点、台石 1 点の合計 119 点が出土している。石材は F . ホルンフェルス 110 点、黒曜石 4 点、砂岩 3 点、安山岩 2 点である。黒曜石の産地は蓼科冷山産 3 点、和田鷹山産 1 点である。

②遺 物

ナイフ形石器 (第75図9)

二側縁加工のナイフ形石器が1点出土した。第75図9は長さが4cmを測る、中形のナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし、ブランティングを施して器体を整形しており、右側縁と基部の縁辺に入念な調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側と剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面が180度異なる剥離痕によって構成されたものであった。石材はF.ホルンフェルスである。

加工痕のある剥片 (第75 図 10・11)

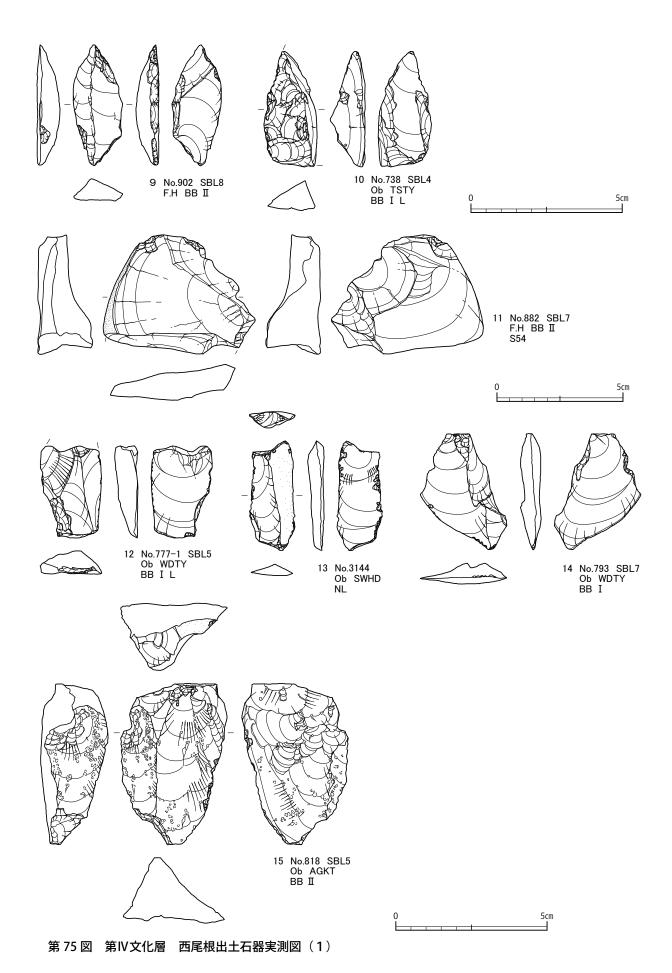
2点が出土し、ともに図示した。第75図10は右側縁を欠損している。幅広の剥片を素材とし、素材の左側縁に調整剥離を加えている。調整は主要剥離面側と剥離面側から行われる。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は蓼科冷山産の黒曜石である。11は幅広な剥片を素材とし、調整加工を施している。調整加工は剥離面側から行われる。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面が90度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。石材はF.ホルンフェルスである。

使用痕のある剥片 (第75 図 12 ~ 15)

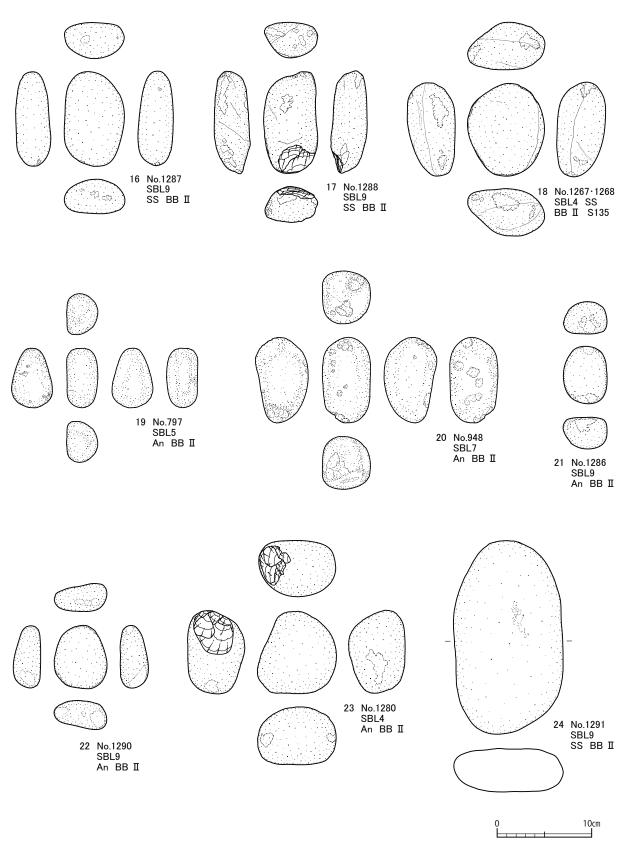
5点が出土し、4点を図示した。第 75 図 $12 \sim 15$ は縦長剥片が素材となっており、これらには、表面や裏面の側縁に使用痕と考えられる細かな剥離が観察できる。石材は黒曜石で、第 75 図 $12 \cdot 14$ が和田鷹山産、13 が諏訪星ヶ台産、15 が天城柏峠産である。

ハンマー (第76図16~18)

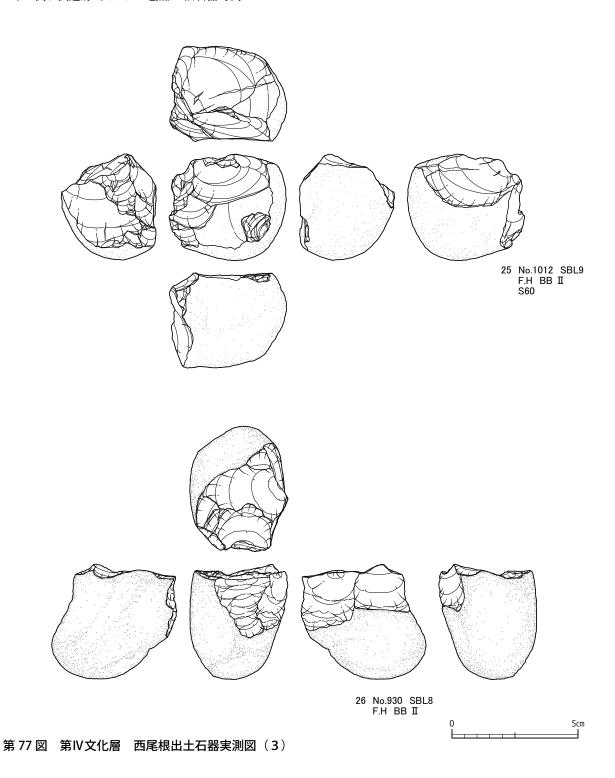
4点が出土し3点を図示した。すべて砂岩製である。第76図16は上面と下面に打痕と思われる面的な潰れが観察できる。17は上面と下面と左側面にベルト状の潰れが確認でき、特に下面は衝撃による剥離が認められる。18は衝撃で破損したハンマーが接合したものである。上面と下面と左側面にベ



-106-



第76図 第IV文化層 西尾根出土石器実測図(2)



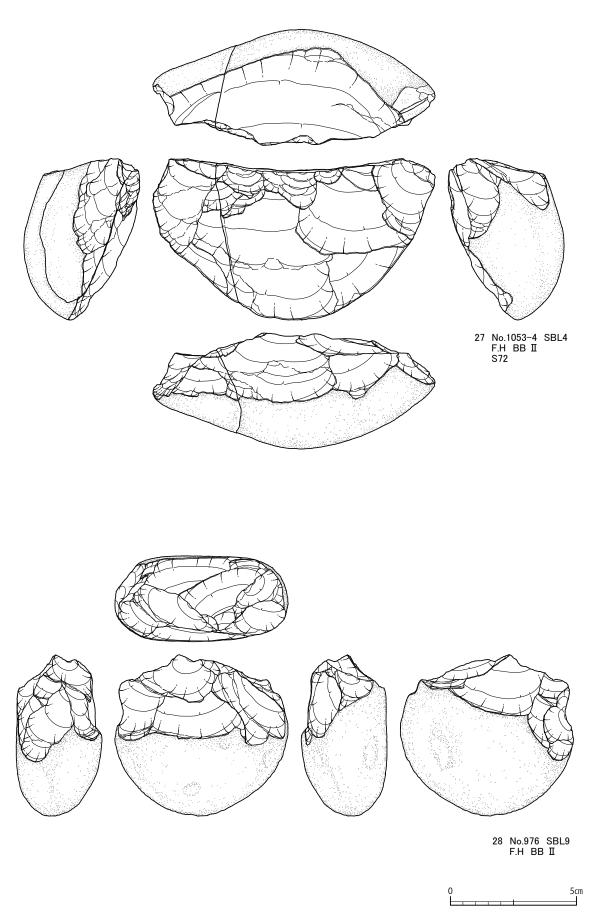
ルト状の潰れが確認できる。

敲石 (第 76 図 19 ~ 23)

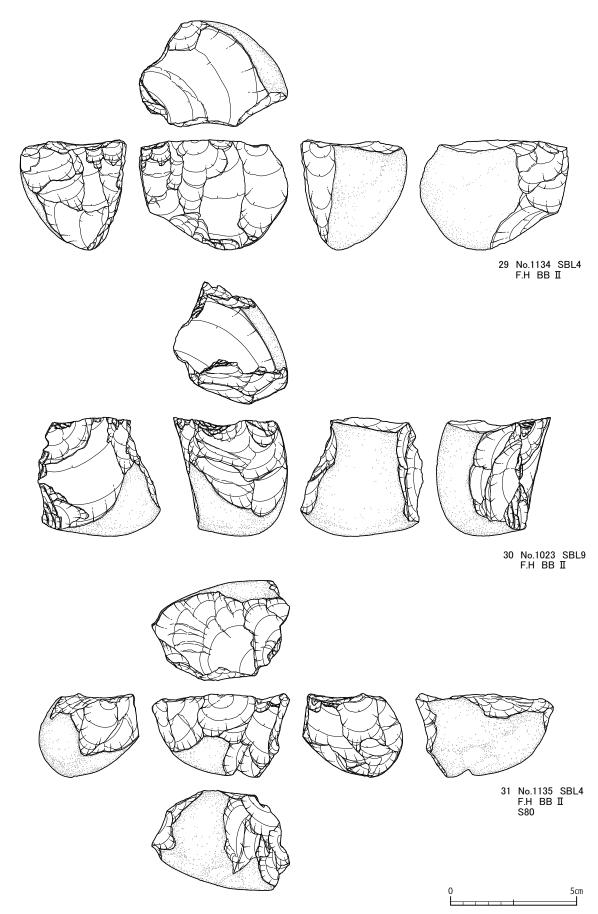
5点が出土し、すべて図示した。第76図19は小形の敲石で、上面と下面に面的な潰れが確認できる。20は上面と下面に打痕と思われる剥落、正面と裏面に打痕と思われる潰れが観察できる。21は上面と下面に打痕と思われる剥落と潰れが観察できる。22は上面と下面に打痕と思われる潰れが観察できる。23は上面に打痕と思われる剥落、下面と裏面に潰れが観察できる。石材はすべて安山岩である。

台石 (第76 図 24)

1点が出土した。第76図24は扁平な砂岩製の台石で、正面に打痕と思われるベルト状の潰れが認



第78 図 第Ⅳ文化層 西尾根出土石器実測図(4)



第79図 第Ⅳ文化層 西尾根出土石器実測図(5)

められる。

石核 (第77 図 25 ~ 第82 図 38)

16 点が出土し、うち 14 点を図示した。これらは剥片剥離方向の違いや状態から 2 類に分類される。 I 類(第77 図 25 ~ 第79 図 31) 単設の打面を有するもの。

石核調整を除く、剥片剥離方向が同一の方向に限られているもので、F.ホルンフェルスを石材とする7点を図示した。

第77図25(S60)は左面からの剥離により打面を形成している。打面は単剥離打面で、左面に剥片 剥離作業面が認められる。正面の剥離作業面の観察では、左側縁の調整剥離を打面として調整剥離が行 われている。剥離作業面の観察では、縦長剥片を作出していたと思われる。

26 は右側縁からの剥離により打面を形成している。打面は複剥離打面で正面と右面に剥片剥離作業面が認められる。打面と剥離作業面以外は自然面である。剥離作業面の観察では、幅広な剥片を作出していたと思われる。

第78 図27 (S72) は正面からの剥離により打面を形成している。打面は複剥離打面で、正面に剥片 剥離作業面が認められる。正面の剥離作業面の観察では、幅広な剥片を作出していたと思われる。打面 と剥離作業面以外は自然面である。

28 は正面と右面からの剥離により打面を形成している。打面は複剥離打面で、正面に剥片剥離作業面が認められる。正面の剥離作業面の観察では、幅広な剥片を作出していたと思われる。打面と剥離作業面以外は自然面である。

第79図29は左側縁からの剥離により打面を形成している。打面は単剥離打面で、正面と左面に剥片剥離作業面が認められる。正面や左面の剥離作業面の観察では、縦長剥片を作出していたと思われる。打面と剥離作業面以外は自然面である。

30 は左側縁からの剥離により打面を形成している。打面は単剥離打面で、正面と裏面に剥片剥離作業面が認められる。打面と剥離作業面以外は自然面である。正裏面の剥離作業面の観察では、縦長剥片を作出していたと思われる。

31 (S80) は正面と右面からの剥離により打面を形成している。打面は複剥離打面で、正左右面に剥 片剥離作業面が認められる。正左右面の剥離作業面の観察では、縦長剥片を作出していたものと思われ る。打面と剥離作業面以外は自然面である。

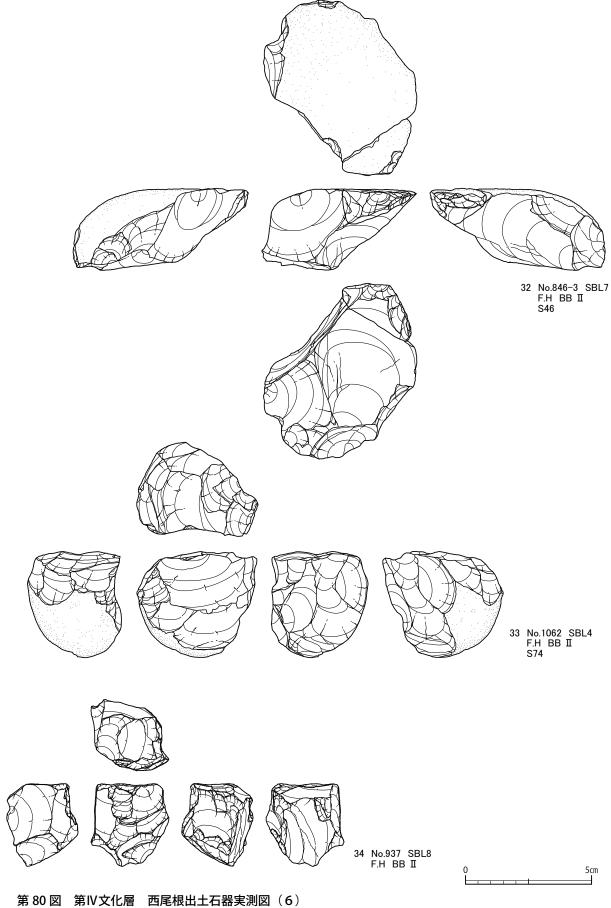
Ⅱ類(第80 図 32 ~第82 図 38) 剥片剥離作業が二方向以上に観察されるもの。

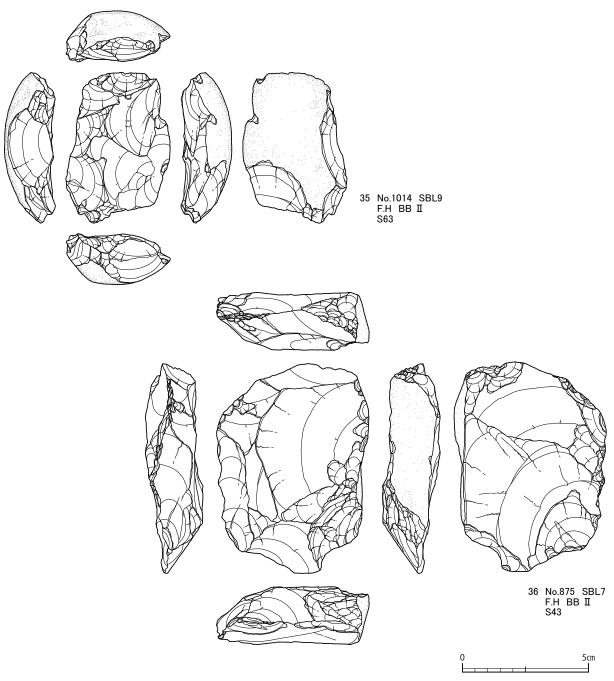
剥片剥離工程のなかに 180 度あるいは 90 度の打面転移技術を持つもので、F. ホルンフェルスを石材とする 7 点を図示した。

第80図32(S46)は剥片剥離作業面が正面に確認できる。正面の剥離作業面には、裏面を打面とする剥離痕が認められる。裏面は自然面が打面となっている。剥離作業面に残る剥離痕の観察から、作出された剥片は横長剥片と推測される。裏面には自然面が残る。

33 (S74) はサイコロ状を呈する石核である。剥片剥離作業は正右上裏面に認められる。正右面の剥片剥離作業面は上面を打面とする剥片剥離作業を示す剥離痕、裏面の剥離作業面は上面と右面を打面とする剥片剥離作業を示す剥離痕など、90 度打面を転移しながら剥片剥離作業が行われている。剥離作業面に残る剥離痕の観察から、作出された剥片は幅広な剥片と推測される。

34 はサイコロ状を呈する石核である。剥片剥離作業は正右左上下裏面に認められる。正面の剥片剥離作業面は上面を打面とする剥片剥離作業を示す剥離痕、右面の剥離作業面は下面を打面とする剥片剥離作業を示す剥離痕など、90 度打面を転移しながら剥片剥離作業が行われている。剥離作業面に残る剥離痕の観察から、作出された剥片は縦長剥片と推測される。



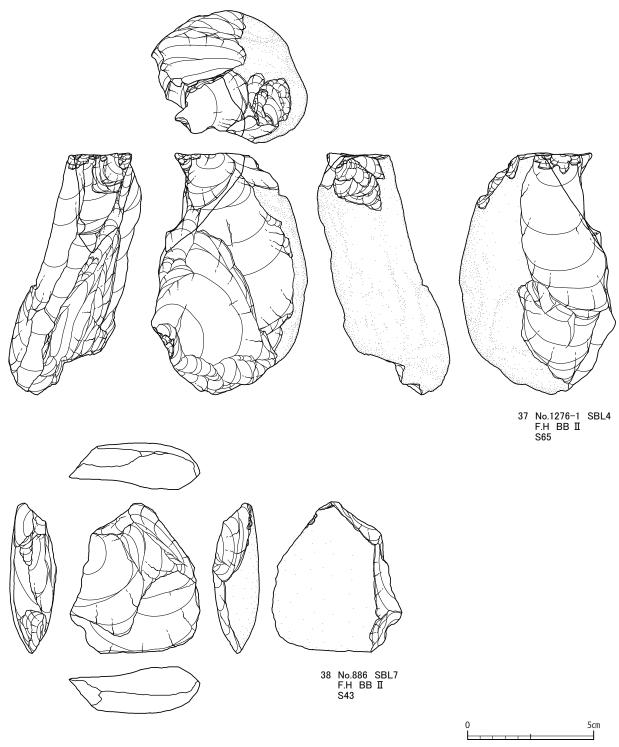


第81 図 第Ⅳ文化層 西尾根出土石器実測図 (7)

第81図35(S63)は剥片剥離作業面が正面に確認できる。正面の剥離作業面には上右左面を打面とする求心的な剥離痕が認められる。左面の打面は調整打面であるが、上面と下面の打面は自然面が打面となっている。剥離作業面に残る剥離痕の観察から、作出された剥片は幅広い剥片と推測される。裏面には自然面が残る。

36 (S43) は剥片剥離作業が正裏面に認められる。正面の剥片剥離作業面は下面と右面を打面とする剥片剥離作業を示す剥離痕、裏面の剥離作業面は下面を打面とする剥片剥離作業を示す剥離痕など、90 度打面を転移しながら剥片剥離作業が行われている。剥離作業面に残る剥離痕の観察では、幅広い剥片を作出していたと思われる。

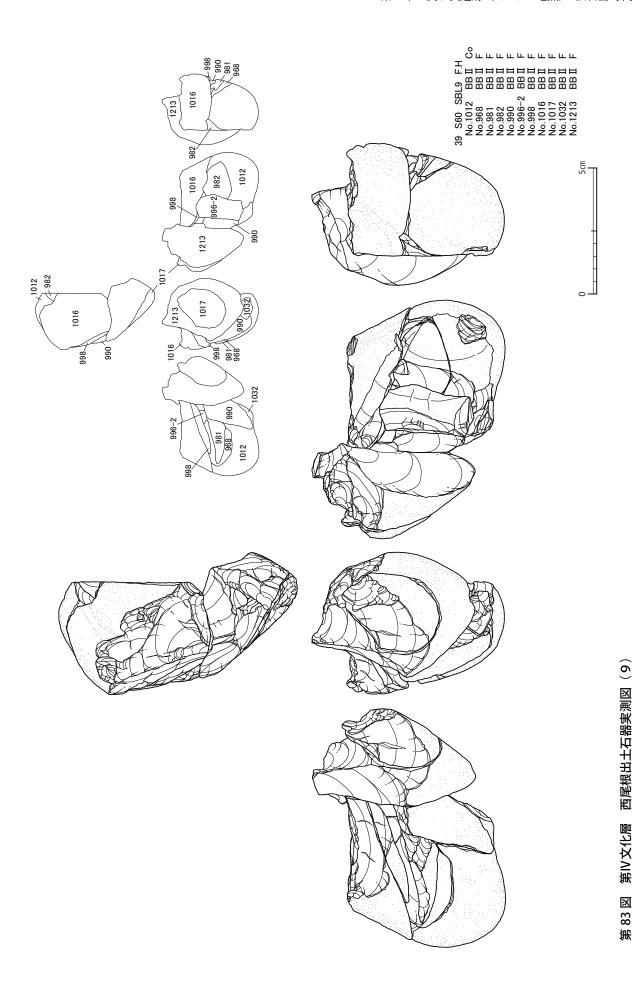
第82 図37 (S65) は剥片剥離作業面が正左裏面に確認できる。正面の剥離作業面には上面と左面を



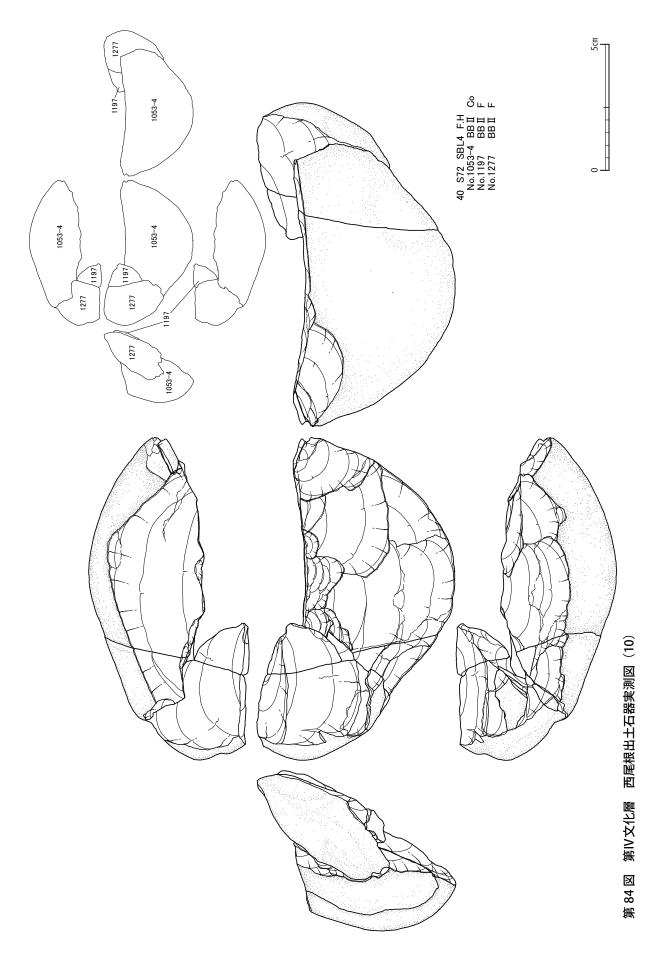
第82 図 第IV文化層 西尾根出土石器実測図(8)

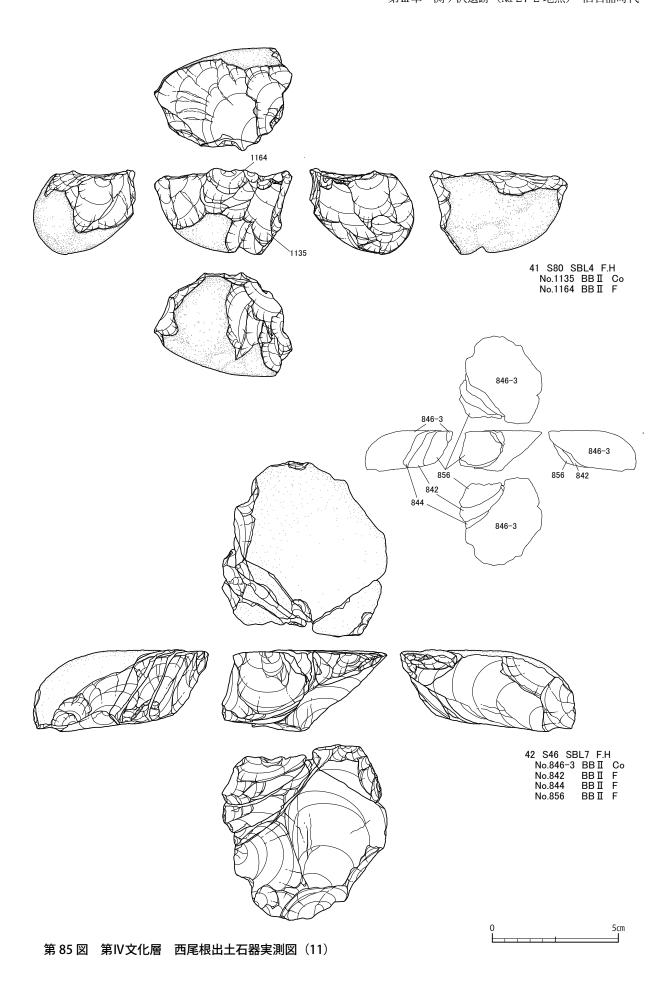
打面とする剥離痕が認められることから、90度打面転移が行われている。左面と裏面は上面の打面からの剥離痕が観察される。上面の打面は調整打面であるが、左面は剥離作業面を打面としている。剥離作業面に残る剥離痕の観察から、作出された剥片は縦長剥片と推測される。右面には自然面が残る。

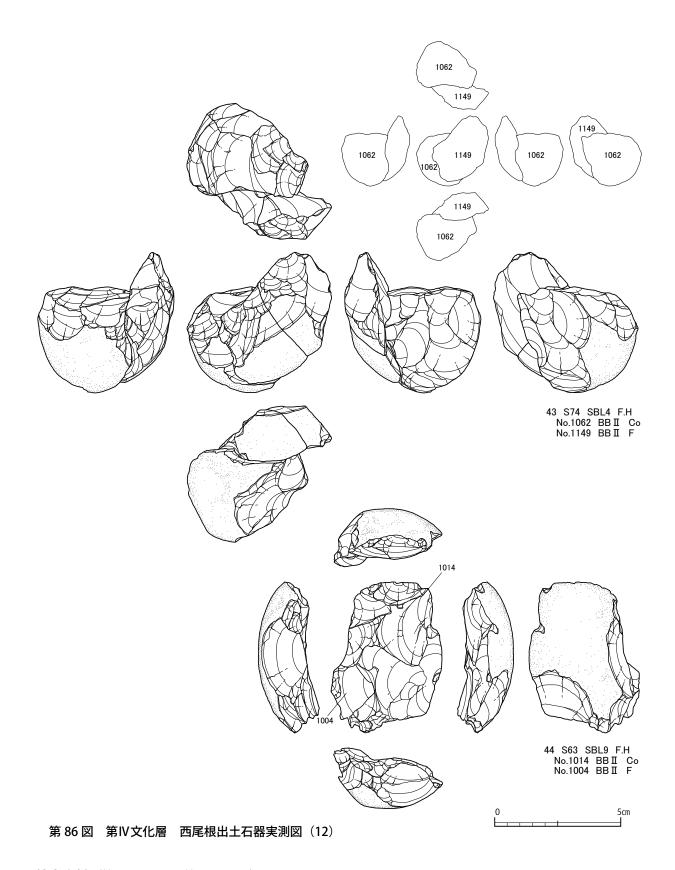
38 (S43) は剥片剥離作業面が正裏面に確認できる。正面の剥離作業面には上左面を打面とする剥離 痕が認められることから、90 度打面転移が行われている。剥離作業面に残る剥離痕の観察から、作出 された剥片は幅広な剥片と推測される。裏面には自然面が残る。



-115-



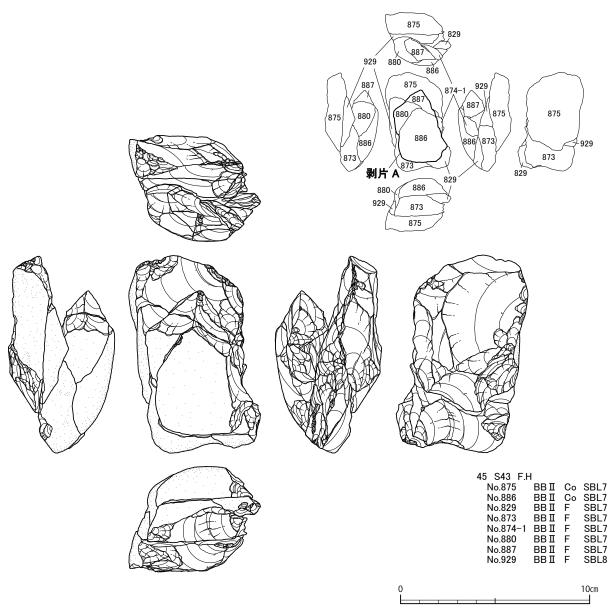




接合資料 (第83 図39~第89 図48)

石核と剥片の接合資料を中心に剥片剥離技術に関わる資料 10 例を図示した。石材は第83 図39 ~ 第89 図47 が F. ホルンフェルス、第89 図48 が和田鷹山産の黒曜石である。

第83 図 39 は石核 1 点(1012) と剥片 10 点(968・981・982・990・996 - 2・998・1016・

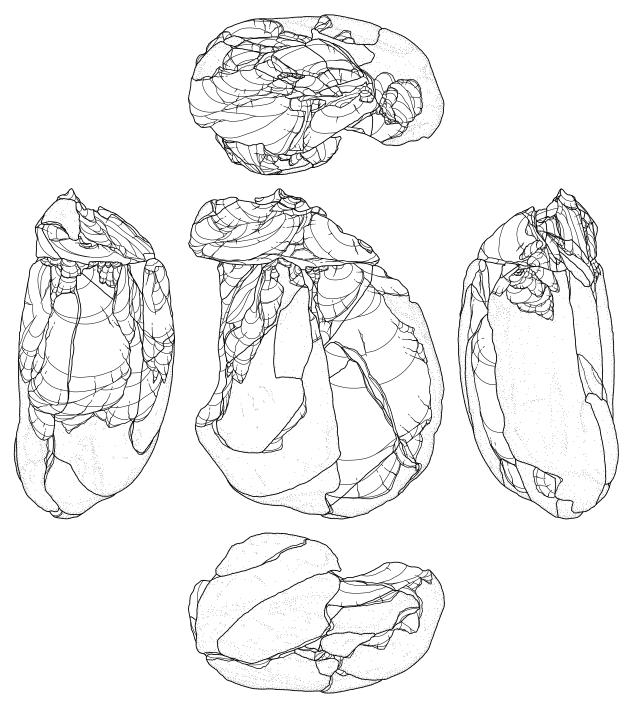


第87図 第Ⅳ文化層 西尾根出土石器実測図(13)

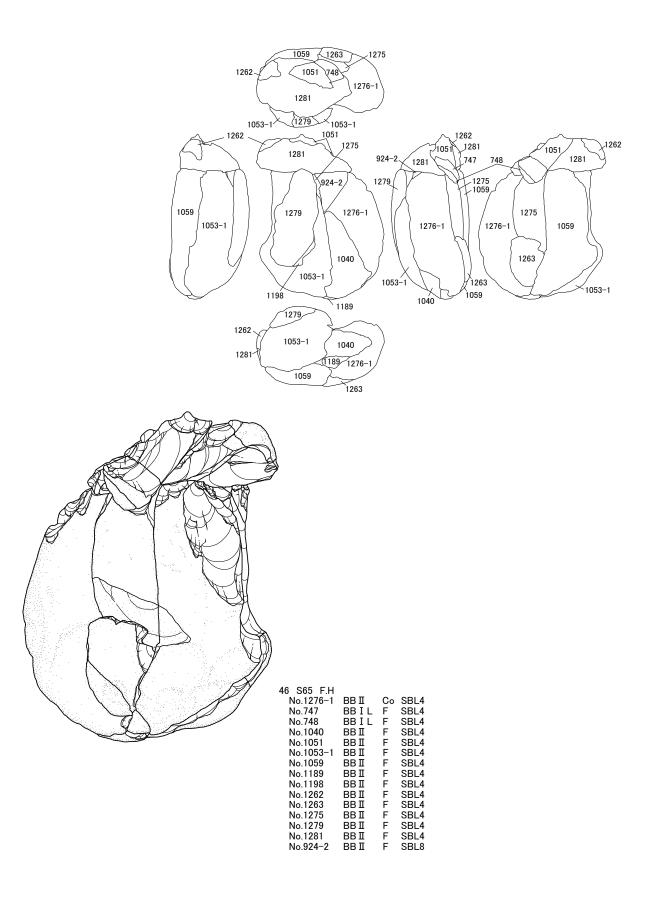
1017・1032・1213)の接合資料である。39の接合状態を見ると、石核調整した単設打面の石核から打面再生と剥片剥離作業を交互に行っている。まず、正面の剥片剥離作業面に調整剥離(1017)で石核調整を行い、上面の打面から 1213 を剥離している。次に 90 度打面転移し、正面の剥離作業面を打面として打面再生剥片 1016・998 を剥離している。次に 90 度打面転移し、上面の打面から正面を剥離作業面として 996 $-2 \rightarrow 1032 \rightarrow 990$ を剥離している。次に 90 度打面転移し、正面の剥離作業面を打面として打面再生剥片 981 \rightarrow 968 を剥離している。最後に、90 度打面転移して上面の打面から正面を剥離作業面として 982 を剥離している。

第84図40は石核1点(1053 - 4)と剥片2点(1197・1277)の接合資料である。40の接合状態を見ると、単設打面石核から剥片剥離作業が行われている。上面の調整打面から正面の剥片剥離作業面で1197・1277を剥離している。

第85図41は石核1点(1135)と剥片1点(1164)の接合資料である。41の接合状態を見ると、 単設打面石核から剥片剥離作業が行われている。上面の調整打面から正面の剥片剥離作業面で1164を



第88 図 第IV文化層 西尾根出土石器実測図(14)



剥離している。42 は石核 1 点(846 - 3)と剥片 3 点(842・844・856)の接合資料である。42 の接合状態を見ると、求心的な剥離を行う石核から剥片剥離作業が行われている。上面の自然面を打面として正面の剥片剥離作業面から 856 \rightarrow 842 \rightarrow 844 を剥離している。

第86図43は石核1点(1062)と剥片1点(1149)の接合資料である。43の接合状態を見ると、単設打面石核から剥片剥離作業が行われている。上面の調整打面から正面の剥片剥離作業面で1149を剥離している。44は石核1点(1014)と剥片1点(1004)の接合資料である。44の接合状態を見ると、求心的な剥離を行う石核から剥片剥離作業が行われている。正面の剥片剥離作業面で左面を打面として1004を剥離している。

第 87 図 45 は石核 2 点(875・886)と剥片 6 点(829・873・874 - 1・880・887・929)の接合資料である。45 の接合状態を見ると、90 度の打面転移を行いながら剥片剥離作業が行われている。まず、右面の打面から正面を剥片剥離作業面として剥片 A(874 - 1・887・880・886)を剥離している。次に、90 度打面を転移して上面の打面から 829 \rightarrow 873・929 \rightarrow 875 の剥離を行っている。剥片 A は上面の打面から裏面を剥離作業面として 874 - 1 \rightarrow 887 \rightarrow 880 \rightarrow 886 の剥離を行っている。作出された剥片は幅広な剥片である。

第 88 図 46 は石核 1 点(1276 - 1)と剥片 14 点(747・748・924 - 2・1040・1051・1053 - 1・1059・1189・1198・1262・1263・1275・1279・1281)の接合資料である。46 の接合状態を見ると、石核調整した単設打面石核から剥片剥離作業を行っている。まず、上面の打面に調整剥離(1262 と 748・747・1051)を行ってトサカ状稜を準備している。次に 90 度打面転移し、左面を打面として石核稜付き剥片(1281)を作出している。さらに、90 度打面転移して正面を剥片剥離作業面とし、1198・1279 \rightarrow 1053 - 1 \rightarrow 1059 \rightarrow 1275・1263 を剥離している。最後に、下面に打面転移して 1040・1189 を剥離している。

第89図47は加工痕のある剥片1点(882)と剥片2点(1232・1239)の接合資料である。47の接合状態を見ると、加工痕のある剥片(882)と調整剥片(1232)が接合しており、衝撃で1239が割れている。48は衝撃で799・822・823・824が割れている(石核は無い)。

〈西尾根のまとめ〉

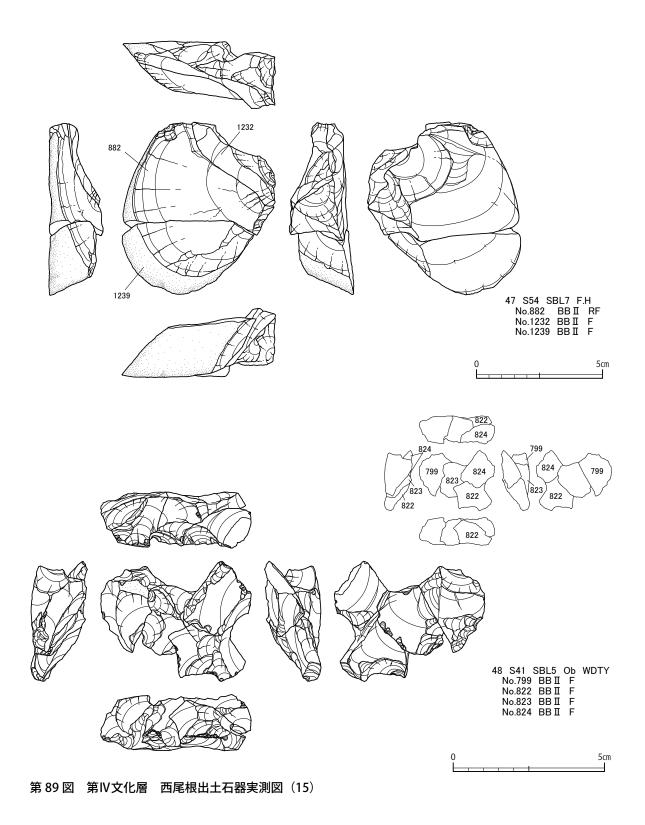
第IV文化層の西尾根は、ナイフ形石器 1 点、加工痕のある剥片 2 点、使用痕のある剥片 5 点、石刃 1 点、石核 16 点、剥片・砕片 597 点、ハンマー 4 点、敲石 5 点、台石 1 点の合計 632 点の石器群によって構成されている。このうち、ナイフ形石器 1 点、加工痕のある剥片 2 点、使用痕のある剥片 4 点、石刃 1 点、石核 16 点、剥片・砕片 585 点、ハンマー 4 点、敲石 5 点、台石 1 点は石器ブロックの構成石器である。

文化層の示準的な器種はナイフ形石器で、これに加工痕のある剥片や使用痕のある剥片、ハンマー、 石核、台石等の各器種が伴うナイフ形石器石器群である。

石材組成は、第1石材がF.ホルンフェルス549点(86.8%)、9,190.3g(73.1%)であり、出土点数と重量の比率が高い。第2石材は黒曜石69点(10.9%)、144.1g(1.1%)で、黒曜石の原産地は信州系が37点(54%)、104.0g(72%)と比率が高く、伊豆・箱根系が3点(4.3%)、31.5g(21.9%)であった。

剥片剥離技術は、信州系の黒曜石やF.ホルンフェルスを素材とする石器類の観察から、幅広な剥片を目的としていたと思われる。そして、石器類の多くが幅広で肉厚な剥片を素材としていることから、幅広な縦長剥片剥離技術を技術基盤としてこれらの剥片類を生産していると考えられる。

石核は単設打面石核が7例、剥片剥離作業が二方向以上に観察される石核が7例認められた。これらの剥片剥離作業面を観察すると、幅広な縦長剥片を作出していたと思われるものが多い。接合資



料は、石核調整を施した単設打面石核から一定方向に剥片剥離を行う工程と、剥片剥離作業が二方向以上に観察される石核から 90 度の打面転移を行いながら剥片剥離作業が行われている工程を確認した。これらの接合資料の観察から、幅広な縦長剥片を目的的剥片として作出していることが明らかとなった。

(5) 第V文化層の遺構と遺物の分布状況(第90図)

第V文化層の遺構・遺物は、東尾根・中央谷・西尾根に分布しており、配石 4 基、単独出土の礫 16 点からなる合計 20 点の礫と、石器ブロック 1 か所 3 点、単独出土した 15 点の石器が検出された。

配石は4基検出した。これらは東尾根に1基、中央谷に1基、西尾根に2基が分布している。検出層位は第I黒色帯〜第Iスコリア層である。総重量は6,934g、平均重量は1,733.5gである。構成礫は、非赤化完形礫が1基、礫面非赤変破損礫が3基である。石材はすべて安山岩であった。接合関係は、単独礫と1例認められた。

【東尾根の遺構と遺物】

1遺 物

石刃 (第92図1)

1点が出土した。第92図1は縦長の状態に作出された定形剥片で、上設打面からの剥離痕と主要剥離面で構成される。石材はF.ホルンフェルスである。

【中央谷の遺構と遺物】

①遺 構

a. 石器ブロック

西側で1か所が検出されている。検出層位は第1黒色帯である。

第33号石器ブロック (第91図)

西尾根の $12 \cdot 13 - 28$ グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 1.3 m、短軸約 0.3 mである。石器類は標高 $125.93 \sim 126.13$ mにかけて約 20cmのレベル差が生じていた。確認された石器群は石刃 1 点、剥片 2 点の合計 3 点が出土している。石材は F . ホルンフェルス 2 点、黒曜石 1 点である。黒曜石の産地は諏訪星ヶ台産である。

②遺 物

石刃 (第92図2)

1点が出土した。第92図2は剥離面や主要剥離面で観察される剥離痕が同一の方向の剥離で形成されている。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

【西尾根の遺構と遺物】

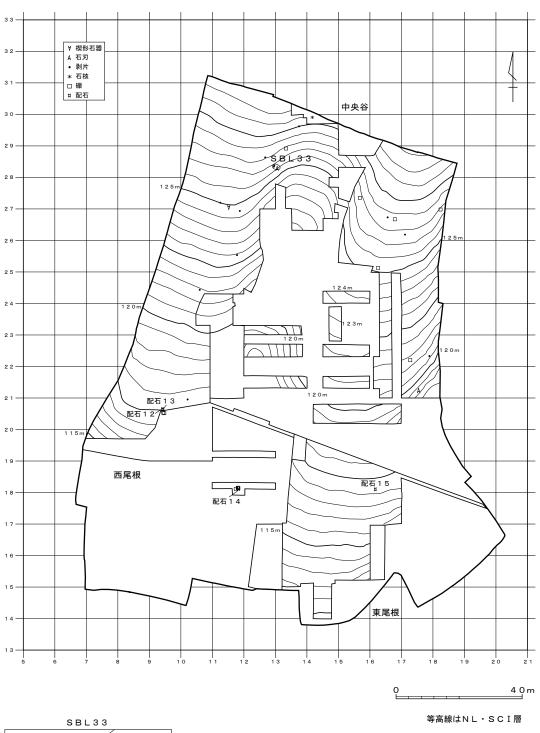
①遺 物

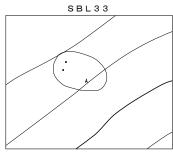
楔形石器 (第93図3)

1点が出土した。第93図3は剥片剥離の生じている縁辺が、器体の相対する両極で構成される。第93図3は両極打法により形成されたもので、打面部は線状に潰れ、縁辺に小さな剥離が重複して存在し、その多くが階段状剥離となっている。石材は蓼科冷山産の黒曜石である。

第7表 第7文化層 出土石器一覧表

石	器種材	台形様石器	ナイフ形石器	尖頭器	掻器	削器	彫器	楔形石器	石錐	ハンマー	磨石	敲石	台石	原石	加工痕のある	使用痕のある	石刃	剥片	砕片	石核	細石刃	細石刃石核	計
黒曜石	和田フヨーライト																	1					1
	諏訪星ヶ台																1						1
	蓼科冷山							1															1
	天城柏峠																	1		1			2
	箱根畑宿																	3					3
F . ホルンフェルス																	1	9					10
計								1									2	14		1			18
																				配	石 4	20	





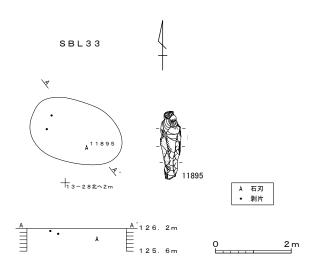
第90図 第V文化層 遺物分布図

石核 (第93図4)

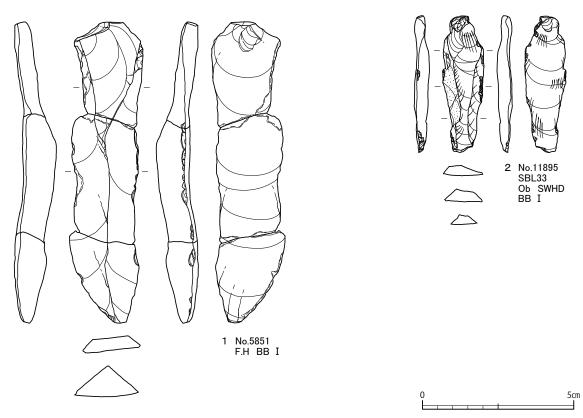
1点が出土した。第93図4は明確な剥片剥離作業が行われたものではなく、板状の礫に数回の剥離を加えている。打面は複剥離打面で、剥片剥離作業面は正面に認められる。右裏面は折損している。石材は天城柏峠産の黒曜石である。

〈まとめ〉

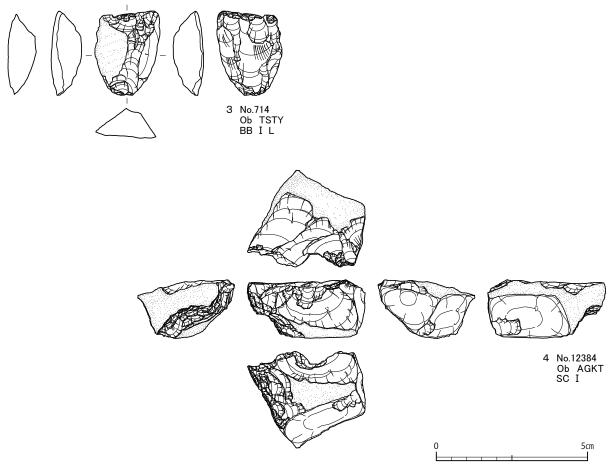
第V文化層は、楔形石器 1 点、石刃 2 点、石核 1 点、剥片 14 点の合計 18 点で構成されている。こ



第91図 第V文化層 第33号石器ブロック実測図



第92図 第V文化層 東尾根および中央谷出土石器実測図



第93 図 第V文化層 西尾根出土石器実測図

れらは単独出土例が多く、定型的な石器は認められなかった。

石材組成は、F. ホルンフェルス 10点 (55.6%)、194.0g (81%)、黒曜石 8点 (44.4%)、45.4g (19%) である。黒曜石の原産地は伊豆・箱根系が 5点、31.8g、信州系が 3点、13.6g であった。

剥片剥離技術は、F.ホルンフェルスや黒曜石を素材とする石器類の観察から、石刃や縦長剥片を目的としていたと思われる。そして、石器類に石刃や縦長剥片が含まれることから、石刃技法を技術基盤としてこれらの剥片類を生産していると推定される。石刃・縦長剥片の観察では、剥片剥離方向を一定方向にしたものと 90 度打面転移したものが認められた。

(6) 第VI文化層の遺構と遺物の分布状況 (第94図)

第VI文化層は休場層下部黒色帯~休場層にかけて出土した石器のなかから、鋸歯状の調整加工、肉厚な素材剥片、素材剥片の打面を残す等の特徴を有するナイフ形石器を抽出したものである。これらの分布を確認するとすべて単独出土であり、関連する配石・礫群・石器ブロックは認められなかった。また、石材と黒曜石の産地に分類して供伴する石器類を検討したが、特定するには至らなかった。

【東尾根の遺構と遺物】

①遺 物

東尾根の石器は、単独出土した 4 点によって構成される。石器群の内訳はナイフ形石器 4 点であった。 ナイフ形石器(第 95 図 $1 \sim 4$)

4点が出土し、すべて図示している。二側縁加工のものを I 類、一側縁加工のものを I 類として分類 し、さらに最大長が 5 cm以上のものを a、3 cm以上 5 cm未満のものを b、3 cm未満のものを c と細分した。

I類b (第95図1~3) 二側縁加工のナイフ形石器のなかで、最大長が3㎝以上、5㎝未満のもの。本類には3点が含まれる。第95図1は石刃を素材とし、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整としては裏面の基部に平坦な調整加工が認められる。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が180度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材はチャートである。

2は縦長剥片を素材とし、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

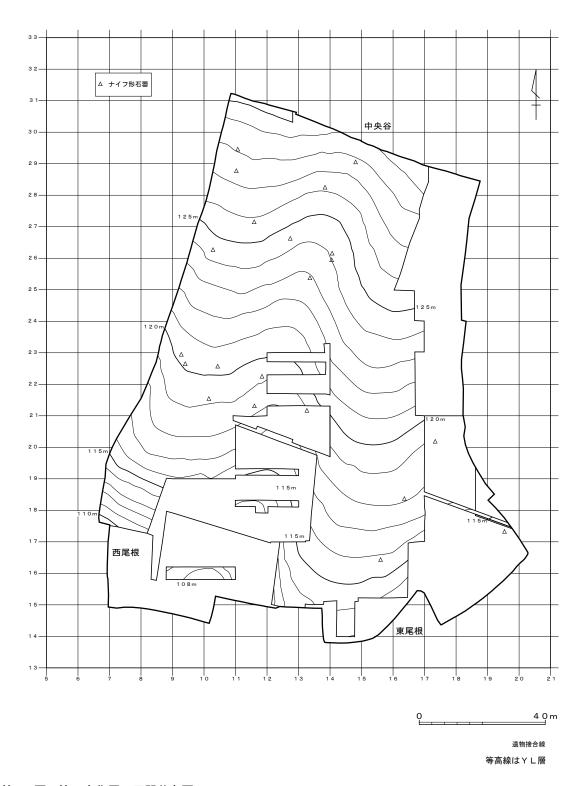
3は石刃を素材とし、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。基部に素材剥片の打面を残置している。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は蓼科冷山産の黒曜石である。

Ⅰ類 c (第95 図4) 二側縁加工のナイフ形石器のなかで、最大長が3 cm未満のもの。

第95図4は石刃を素材とし、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。基部に素材剥片の打面を残置している。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が一致する方向の剥離痕

 																							
石	器種材	台形様石器	ナイフ形石器	尖頭器	掻器	削器	彫器	楔形石器	石錐	ハンマー	磨石	敲石	台石	原石	加工痕のある	使用痕のある	石刃	剥片	砕片	石核	細石刃	細石刃石核	計
	和田小深沢		1																				1
	諏訪星ヶ台		7																				7
	蓼科冷山		1																				1
	天城柏峠		2																				2
	箱根畑宿		3																				3
	不可他		1																				1
F.	F . ホルンフェルス		1																				1
	珪質頁岩		3																				3
	チャート		1																				1
玉髄			1																				1
計			21																				21

第8表 第VI文化層 出土石器一覧表



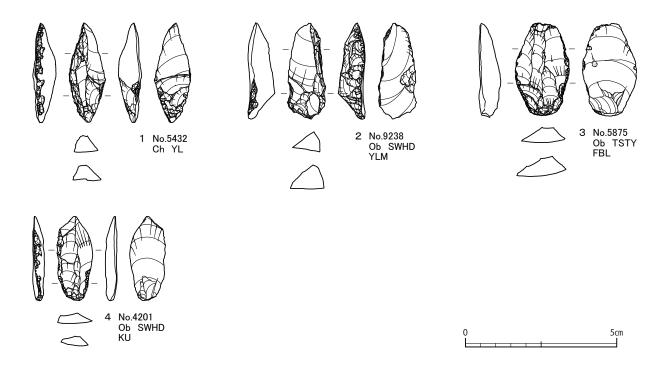
第94図 第VI文化層 石器分布図

によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

【中央谷の遺構と遺物】

①遺 物

中央谷の石器は単独出土した9点で構成される。石器群の内訳はナイフ形石器9点である。



第 95 図 第 VI 文化層 東尾根出土石器実測図

ナイフ形石器 (第96図5~第97図13)

9点が出土し、すべて図示した。二側縁加工のものを I 類、一側縁加工のものを II 類、基部加工のものを II 類として分類し、さらに最大長が 5 cm以上のものを a、 3 cm以上 5 cm未満のものを b、 3 cm未満のものを c と細分した。

Ⅰ類a(第96図5) 二側縁加工のもののなかで、最大長が5cm以上のもの。

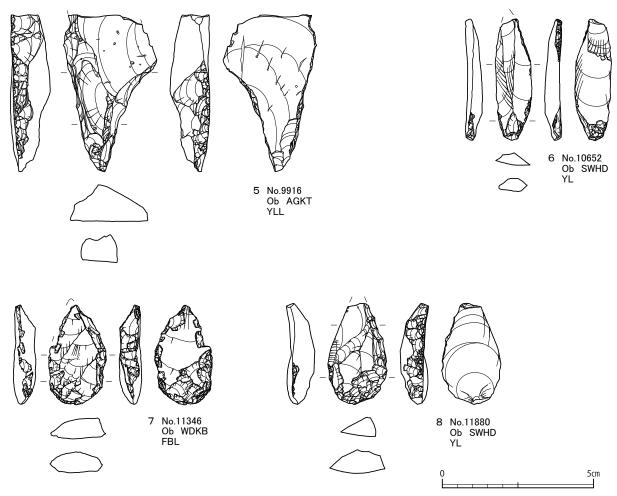
本類には1点が含まれる。第96図5は厚手の縦長剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、先端部を欠損している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。石材は天城柏峠産の黒曜石である。

Ⅰ類b(第96図6~8) 二側縁加工のもののなかで、最大長が3cm以上、5cm未満のもの。

本類には3点が含まれる。第96図6は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁の先端部側と基部側に調整を加えている。ブランティングは剥離面と主要剥離面側から行われ、先端部を欠損している。ブランティング以外の調整としては、主要剥離面側の基部に平坦な剥離が施される。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

7は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整としては主要剥離面側の端部に平坦な剥離が施される。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には剥離痕が観察される。石材は和田小深沢産の黒曜石である。

8 は厚手の石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左



第 96 図 第 VI 文化層 中央谷出土石器実測図 (1)

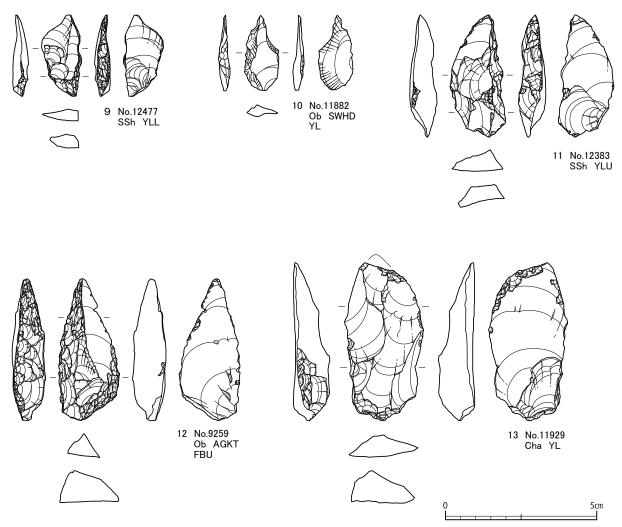
側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、先端部を欠損 している。ブランティング以外の調整は認められない。基部に素材剥片の打面を残置している。素材を 構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。 刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

I類 c (第97回9・10) 二側縁加工のもののなかで、最大長が3cm未満のもの。

本類には2点が含まれる。第97図9は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。基部に素材剥片の打面を残置している。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。石材は珪質頁岩である。

10 は幅広な剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁と右側縁の一部に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面が90度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

Ⅱ類b (第97 図 11・12) 一側縁加工のもののなかで、最大長が3 cm以上、5 cm未満のもの。 本類には2点が含まれる。第97 図 11 は縦長剥片を素材とし、調整加工として鋸歯状のブランティ



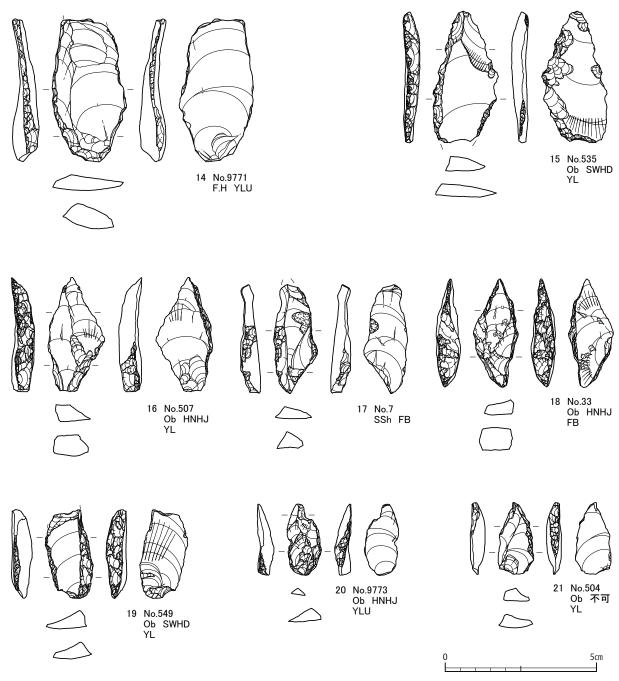
第 97 図 第 VI 文化層 中央谷出土石器実測図 (2)

ングを施して器体を整形しており、素材の右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側 から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は珪質頁岩である。

12 は厚手の縦長剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。基部に素材剥片の打面を残置している。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は天城柏峠産の黒曜石である。

Ⅲ類b (第97図13) 基部加工のナイフ形石器で、最大長が3cm以上、5cm未満のもの。

第97図13は厚手の縦長剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われる。ブランティング以外の調整は認められない。基部に素材剥片の打面を残置している。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面が90度あるいは180度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には剥離痕が観察される。石材は玉髄である。



第 98 図 第 VI 文化層 西尾根出土石器実測図

【西尾根の遺構と遺物】

西尾根の石器は単独出土した8点で構成される。石器群の内訳はナイフ形石器8点である。

①遺 物

ナイフ形石器 (第98図14~21)

8点が出土し、すべて図示した。二側縁加工のものを I 類、一側縁加工のものを II 類として分類し、さらに最大長が 5 cm以上のものを a、3 cm以上 5 cm未満のものを b、3 cm未満のものを c と細分した。

I類a(第98図14) 二側縁加工のもののなかで、最大長が5cm以上のもの。

本類には1点が含まれる。第98図14は5cm以上の大きさを示しており(推定値)、ナイフ形石器の

なかでも大形の部類に入るものである。石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、先端部を欠損している。ブランティング以外の調整は認められない。基部に素材剥片の打面を残置している。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材はF.ホルンフェルスである。

I類b (第98 図 15 ~ 18) 二側縁加工のもののなかで、最大長が3 cm以上、5 cm未満のもの。

本類には 4 点が含まれる。第 98 図 15 は縦長剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁と右側縁の基部に鋸歯状の加工が認められる。ブランティングは主要剥離面側から行われる。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面が 180 度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

16 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは剥離面側と主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。基部に素材剥片の打面を残置している。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

17 は縦長剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁に調整を加えている。右側縁に素材剥片の打面を残置している。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は珪質頁岩である。

18 は縦長剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面が同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には新しい剥離痕が観察される。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

I類 c (第98 図 19・20) 二側縁加工のもののなかで、最大長が3 cm未満のもの。

本類には2点が含まれる。第98図19は縦長剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われる。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部を欠損している。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

20 は縦長剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。基部に素材剥片の打面を残置している。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面が 180 度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

Ⅱ類 c (第98 図 21) 一側縁加工のもののなかで、最大長が3 cm未満のもの。

第98図21は縦長剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、

素材の右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には剥離痕が観察される。石材は黒曜石である。

〈まとめ〉

第VI文化層の石器群は、東尾根・中央谷・西尾根に分布しており、単独出土した 21 点のナイフ形石器が検出された。

石器組成はナイフ形石器を組成するナイフ形石器石器群である。ナイフ形石器は厚手の石刃や縦長剥片を素材とした3~5cmの二側縁加工ナイフ形石器が主体を占める。これらの多くは基部に素材剥片の打面を残置しており、鋸歯状の加工も認められる。

石器石材はナイフ形石器が黒曜石 15 点を占める。黒曜石の産地は諏訪星ヶ台産が7点と多く、箱根畑宿産3点、天城柏峠産2点、蓼科冷山産1点、和田小深沢産1点である。

剥片剥離技術は、ナイフ形石器の素材となる剥片から石刃や縦長剥片を作出する剥片剥離技術の存在がらかがえる。そして剥離面の観察では、単設打面の石核や両設打面の石核から石刃や縦長剥片を作出していることが明らかとなった。

(7) 第VII文化層の遺構と遺物の分布状況 (第99·100 図)

第VII文化層の遺構・遺物は東尾根・中央谷・西尾根に分布しており、石囲炉 4 基 33 点、配石 46 基 46 点、 礫群 9 基 79 点、単独出土の礫 310 点からなる合計 468 点の礫と、石器ブロック 6 か所 634 点、礫群 3 基 10 点、石囲炉 4 基 76 点、単独出土した 855 点の合計 1,575 点の石器が検出された。

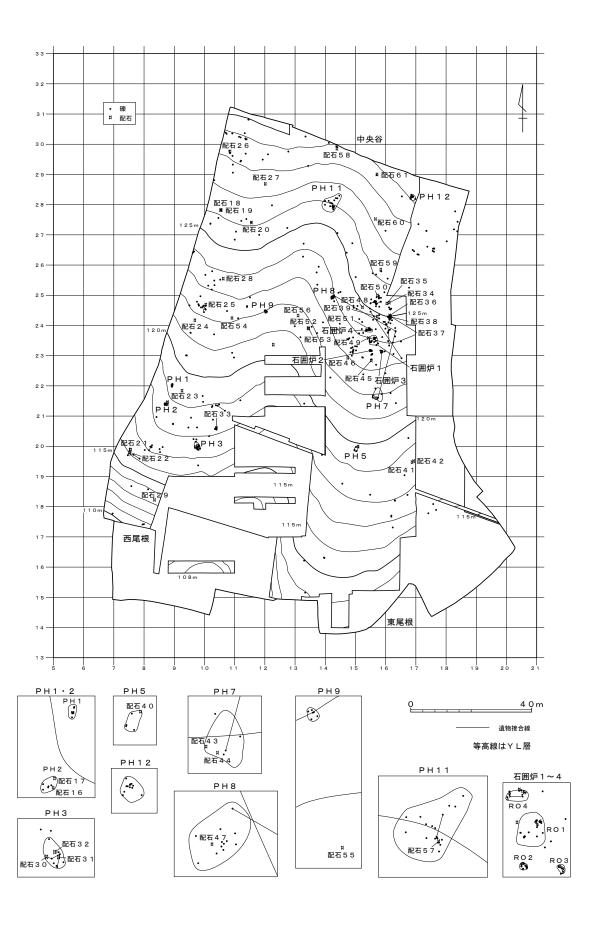
石囲炉は4基を検出している。これらの石囲炉は休場層で検出され、縄文時代に堆積したと考えられる富士黒土層が認められないことから、旧石器時代に構築したものと考えられる。4基ともに東尾根に分布する。

配石は 46 基を検出している。これらは東尾根に 21 基 (46%)、中央谷に 5 基 (11%)、西尾根に 20 基 (43%) が分布している。検出層位は休場層が 33 基 (72%)、休場層中層が 6 基 (13%)、休場 層上層が 7 基 (15%) である。総重量は 119,497g、平均重量は 2,598g である。構成礫は、非赤化完 形礫 11 点 (24%)、礫面非赤変破損礫 21 点 (45%)、赤化完形礫 4 点 (9%)、割面非赤変破損礫 6 点 (13%)、礫面赤変割面非赤変破損礫 4 点 (9%) である。石材は安山岩が 45 基 (98%)、礫岩が 1 基 (2%) を占めている。接合関係は、第 25 号配石と単独出土の礫が 1 例、第 30 号配石と第 3 号礫群が 1 例、第 32 号配石と第 3 号礫群が 1 例認められた。

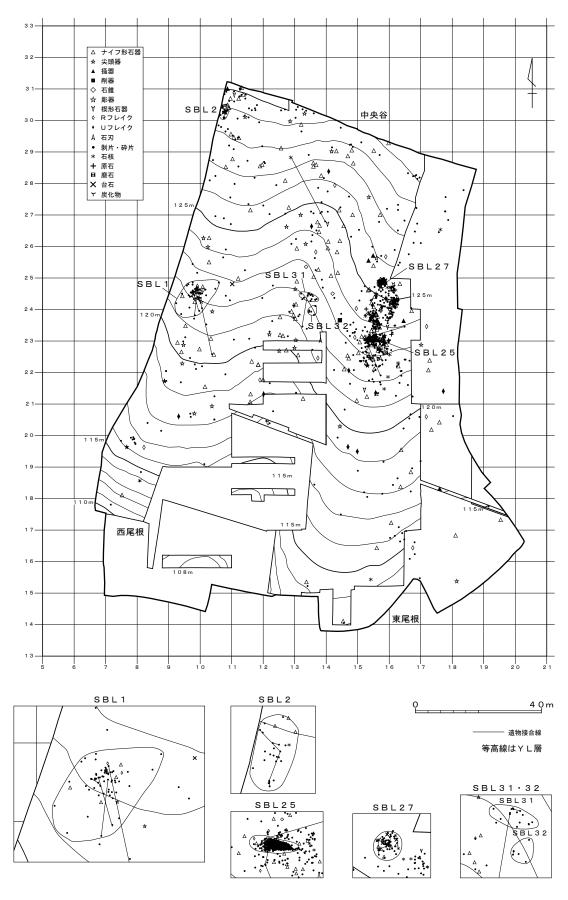
礫群は9基を検出している。これらは東尾根に4基、中央谷に2基、西尾根に3基が分布していた。 検出層位は休場層が8基、休場層上層が1基である。総重量は22,321g、平均重量は282.5gである。 構成礫は、非赤化完形礫9点(11.4%)、礫面非赤変破損礫32点(40.5%)、赤化完形礫7点(8.9%)、 割面赤変破損礫4点(5.1%)、割面非赤変破損礫11点(13.9%)、礫面赤変割面非赤変破損礫6点(7.6%)、 礫面赤変割面赤変破損礫10点(12.6%)である。石材は安山岩77点、砂岩1点、玄武岩1点であった。 単独出土の礫は310点検出している。これらは東尾根に165点(53.2%)、中央谷に21点(6.8%)、

第9表 第VII文化層 出土石器一覧表

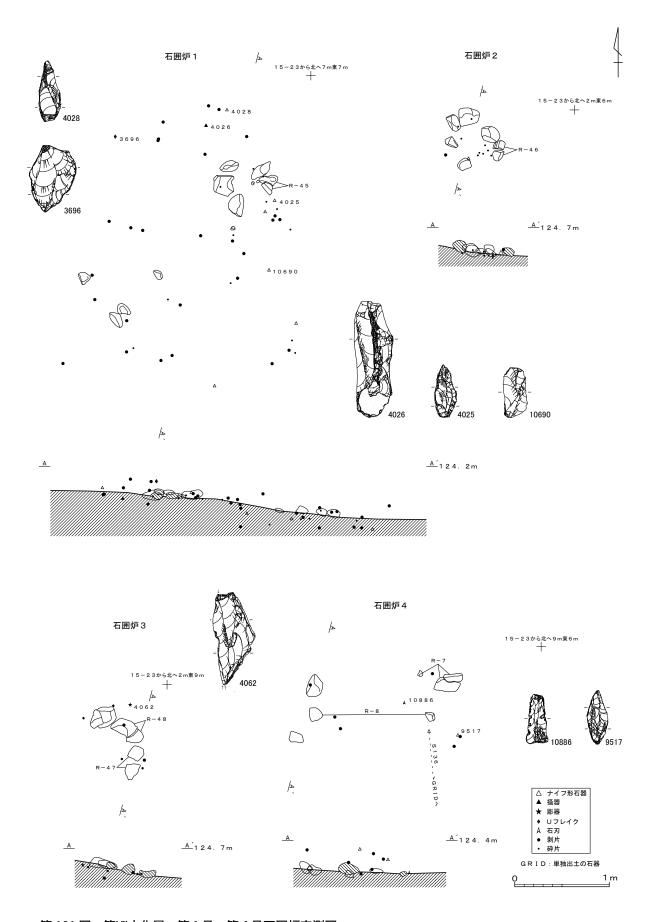
石	器種材	台形様石器	ナイフ形石器	尖頭器	掻器	削器	彫器	楔形石器	石錐	ハンマー	磨石	敲石	岩	原石	加工痕のある	使用痕のある	石刃	剥片	砕片	石核	細石刃	細石刃石核	<u>=</u> +
黒曜石	和田鷹山		21	5	1			1	2						2	3		8		1			44
	和田小深沢		3	4				1										6					14
	和田土屋橋北		1	1																			2
	和田土屋橋西			1			1											1					3
	和田土屋橋南		1																				1
	和田古峠		1																				1
	和田高松沢		1																				1
	諏訪星ヶ台		62	10	2		3	2							7	10	6	86	2	2			192
	蓼科冷山		4	2														4					10
	天城柏峠															1		5					6
	箱根畑宿		29	2	1	1		2							5	1		102		1			144
	箱根上多賀																	1					1
	神津島恩馳島			1											2			10	1	1			15
	不可他		16	1											9	1	1	95	618				741
F . ホルンフェルス			5	2											2			263	27	13			312
ガラス質黒色安山岩																1		12	1				14
珪質頁岩			3		1		2									1		33		4			44
チャート					1											1		2					4
玉髄			1															5		1			7
赤玉石														2				7					9
砂岩																		1					1
安山岩													4						1				5
緑色凝灰岩																		3					3
黄玉石																			İ	1			1
計			148	29	6	1	6	6	2				4	2	27	19	7	644	650	24			1575
	·····································																	配石 46 礫群 9			石囲	炉 4	468
	炭化物																						2



第 99 図 第 VII 文化層 礫群·配石分布図



第 100 図 第 VII 文化層 遺物分布図



第 101 図 第 VII文化層 第 1 号~第 4 号石囲炉実測図

西尾根に 124 点 (40.0%) が分布している。検出層位は休場層が 205 点 (66.1%) と多く、休場層中層が 51 点 (16.5%)、休場層上層が 48 点 (15.5%)、休場層下層が 6 点 (1.9%) である。総重量は 69,805g、平均重量は 225.2g である。構成礫は、非赤化完形礫 37 点 (11.9%)、礫面非赤変破損礫 173 点 (55.8%)、赤化完形礫 31 点 (10.0%)、割面赤変破損礫 8 点 (2.6%)、割面非赤変破損礫 28点 (9.0%)、礫面赤変割面非赤変破損礫 13点 (4.2%)、割面赤変破損礫 20点 (6.5%) であった。石材は安山岩が 293点 (94.5%)、砂岩 9点 (2.9%)、デイサイト 4点 (1.3%)、玄武岩 3点 (1.0%)、石英 1点 (0.3%) である。接合関係は、配石と単独出土の礫が 1 例、単独出土の礫と石囲炉の礫が 1 例、単独出土の礫と単独出土の礫が 1 の認められた。

石器ブロックは6か所を検出している。これらは東尾根に2か所、中央谷に2か所、西尾根に2か所が分布している。検出層位は休場層中層が513点(81%)と多く、休場層が109点(17%)、休場層下層が12点(2%)である。

【東尾根の遺構と遺物】

①遺 構

a . 石囲炉

石囲炉は4基を検出した。これらは、いずれも重量900g以上の礫を数点配置している。

第1号石囲炉(第101図)

東尾根の 15-23 グリッドに位置する。構成礫は 13 点で、長軸約 0.7 m、短軸約 0.6 mの範囲に分布する。検出層位は休場層中層である。垂直分布は標高 $123.84\sim123.90$ mにかけて約 6 cmの分布幅を形成しており、大部分の礫は標高 123.87 m付近に礫の底面を置いている。総重量は 15,202g、平均重量は 1,689.1g である。構成礫は、赤化完形礫 4 点、礫面赤変割面赤変破損礫 5 点である。石材はすべて安山岩であった。接合関係は石囲炉内で 1 例が認められた。 $1.0\sim1.5$ m離れて礫 4 点が散在する(現地調査後に廃棄されたため、赤化等の観察は実施できず)。炉の周辺から、ナイフ形石器 6 点、掻器 1 点、使用痕のある剥片 1 点、剥片・砕片 41 点の合計 49 点が出土している。

第2号石囲炉(第101図)

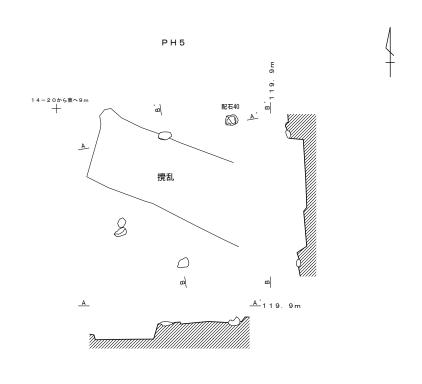
東尾根の 15 - 23 グリッドに位置する。構成礫は 8 点で、長軸約 0.7 m、短軸約 0.6 mの範囲に分布する。検出層位は休場層中層である。垂直分布は標高 123.39 ~ 123.44 mにかけて約 5 cmの分布幅を形成しており、大部分の礫は標高 123.42 m付近に礫の底面を置いている。総重量は 16,137g、平均重量は 2,017.1g である。構成礫は、赤化完形礫 3 点、礫面赤変割面赤変破損礫 3 点、礫面赤変割面非赤変破損礫 2 点である。石材はすべて安山岩であった。接合関係は石囲炉内で 1 例が認められた。炉の周辺から、ナイフ形石器 1 点、剥片・砕片 10 点の合計 11 点が出土している。

第3号石囲炉(第101図)

東尾根の 15 - 23 グリッドに位置する。構成礫は 5 点で、長軸約 0.8 m、短軸約 0.4 mの範囲に分布する。検出層位は休場層中層である。垂直分布は標高 123.39 ~ 123.49 mにかけて約 10cmの分布幅を形成しており、大部分の礫は標高 123.45 m付近に礫の底面を置いている。総重量は 21,560g、平均重量は 4,312.0g である。構成礫は、赤化完形礫 1 点、礫面赤変割面赤変破損礫 4 点である。石材はすべて安山岩であった。接合関係は石囲炉内で 2 例が認められた。炉の周辺から、彫器 1 点、剥片・砕片 6 点の合計 7 点が出土している。

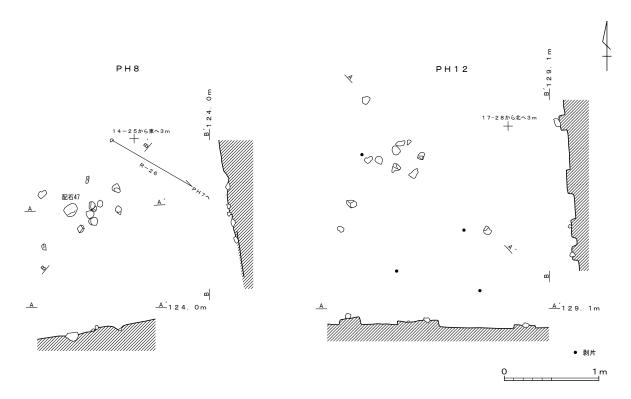
第4号石囲炉(第101図)

東尾根の 15-23 グリッドに位置する。構成礫は 7 点で、長軸約 2.0 m、短軸約 0.9 mの範囲に分布する。検出層位は休場層中層である。垂直分布は標高 $124.01\sim124.08$ mにかけて約 7 cmの分布幅を形成しており、大部分の礫は標高 124.04 m付近に礫の底面を置いている。総重量は 15,157g、平均



P H 7

第 102 図 第VII文化層 第 5 号 · 第 7 号礫群実測図



第 103 図 第VII文化層 第 8 号 · 第 12 号礫群実測図

重量は 2,165.3g である。構成礫は、非赤化完形礫 1 点、礫面非赤変破損礫 6 点である。石材はすべて安山岩であった。接合関係は石囲炉内で 2 例が認められた。炉の周辺から、ナイフ形石器 2 点、石刃 1 点、剥片 6 点の合計 9 点が出土している。

b. 礫群

第5号礫群(第102図)

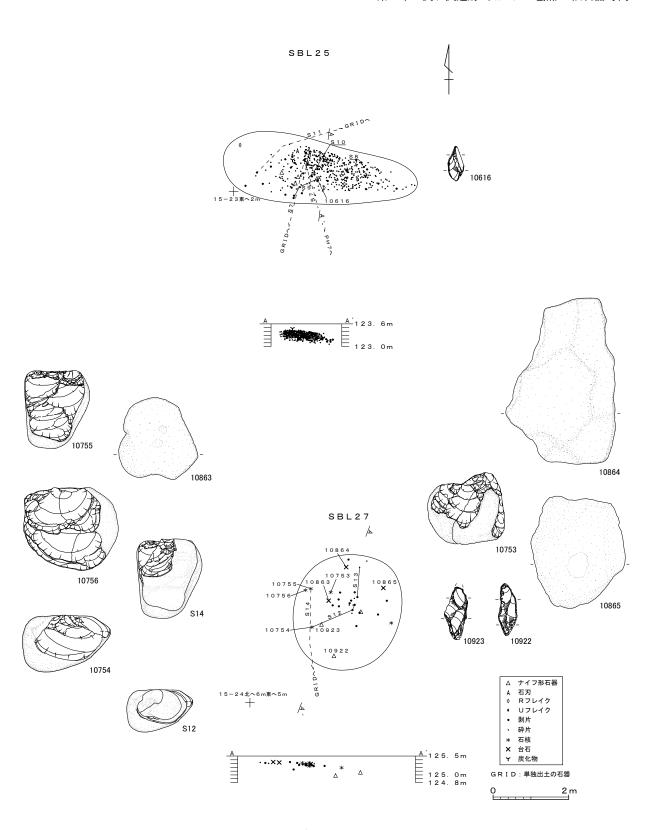
東尾根の $14\cdot15-19$ グリッドに位置する。構成礫は 4 点で、長軸約 1.5 m、短軸約 0.7 mの範囲に分布する。検出層位は休場層である。垂直分布は標高 $119.50\sim119.69$ mにかけて約 1.9cmの分布幅を形成しており、大部分の礫は標高 119.57 m付近に礫の底面を置いている。総重量は 1,894g、平均重量は 473.5g である。構成礫は、非赤化完形礫 1 点、礫面非赤変破損礫 2 点、割面非赤変破損礫 1 点である。石材はすべて安山岩であった。接合関係は認められない。第 40 号配石が近接している。

第7号礫群 (第102図)

東尾根の 15 - 21 グリッドに位置する。構成礫は 3 点で、長軸約 2.1 m、短軸約 0.2 mの範囲に分布する。検出層位は休場層である。垂直分布は標高 121.62 ~ 121.73 mにかけて約 11cmの分布幅を形成しており、大部分の礫は標高 121.66 m付近に礫の底面を置いている。総重量は 1,028g、平均重量は 342.7g である。構成礫は、礫面非赤変破損礫 3 点である。石材はすべて安山岩であった。接合関係は第 8 号礫群と 1 例が認められた。第 43 号・第 44 号配石が近接している。礫群の周辺から石核 2 点、剥片 3 点の合計 5 点が出土している。

第8号礫群 (第103図)

東尾根の 14-24 グリッドに位置する。構成礫は 12 点で、長軸約 1.4 m、短軸約 0.8 mの範囲に分布する。検出層位は休場層である。垂直分布は標高 $123.58 \sim 123.85$ mにかけて約 27cmの分布幅を形成しており、大部分の礫は標高 123.73 m付近に礫の底面を置いている。総重量は 2,846g、平均重量は 237.2g である。構成礫は、非赤化完形礫 2 点、礫面赤変割面赤変破損礫 1 点、礫面非赤変破損



第104図 第川文化層 第25号・第27号石器ブロック実測図

礫 9 点である。石材はすべて安山岩であった。接合関係は第 7 号礫群と 1 例が認められた。第 47 号配石が近接している。

第12号礫群(第103図)

東尾根の 16-28 グリッドに位置する。構成礫は 12 点で、長軸約 $2.0~\mathrm{m}$ 、短軸約 $1.1~\mathrm{m}$ の範囲に

分布する。検出層位は休場層である。垂直分布は標高 128.82 ~ 128.98 mにかけて約 16cmの分布幅を形成しており、大部分の礫は標高 128.92 m付近に礫の底面を置いている。総重量は 3,226g、平均重量は 268.8g である。構成礫は、赤化完形礫 4 点、非赤化完形礫 1 点、礫面赤変割面赤変破損礫 2 点、礫面非赤変破損礫 2 点、割面赤変破損礫 3 点である。石材はすべて安山岩であった。接合関係は認められない。礫群の周辺から剥片 3 点が出土している。

c.配石

配石は 21 基を検出した。検出層位は休場層 13 基、休場層中層 5 基、休場層上層 3 基である。総重量は 47,665g、平均重量は 2,269.8g である。構成礫は、赤化完形礫 2 基、非赤化完形礫 4 基、礫面赤変割面非赤変破損礫 3 基、礫面非赤変破損礫 10 基、割面非赤変破損礫 2 基である。石材は礫岩が 1 基、安山岩が 20 基を占めている。接合関係は認められない。

d. 石器ブロック

第25号石器ブロック (第104図)

東尾根の 15-23 グリッドで確認した石器ブロックである。検出層位は休場層中層 481 点、休場層下層 10 点である。規模は、長軸約 4.8 m、短軸約 1.5 mである。石器類は標高 $123.06\sim123.44$ m にかけて約 38cmのレベル差が生じていた。確認された石器群はナイフ形石器 6 点、加工痕のある剥片 5 点、使用痕のある剥片 1 点、石刃 1 点、剥片・砕片 478 点の合計 491 点である。その他、炭化物 1 点が検出されている。石材は黒曜石 475 点、16 点である。黒曜石の産地は、諏訪星ヶ台産 16 点、箱根畑宿産 16 点、不可他 16 点である。

第27号石器ブロック (第104図)

東尾根の 15-24 グリッドで確認した石器ブロックである。検出層位は休場層中層 32 点、休場層下層 2 点である。規模は、長軸約 2.7 m、短軸約 2.5 mである。石器類は標高 $124.99\sim125.34$ mにかけて約 35cmのレベル差が生じていた。確認された石器群はナイフ形石器 3 点、石核 5 点、剥片・砕片 23 点、台石 3 点の合計 34 点である。石材は F . ホルンフェルス 18 点、黒曜石 10 点、珪質頁岩 3 点、安山岩 3 点である。黒曜石の産地は、和田小深沢産 2 点、和田鷹山産 2 点、諏訪星ヶ台産 1 点、不可他 5 点である。

2遺 物

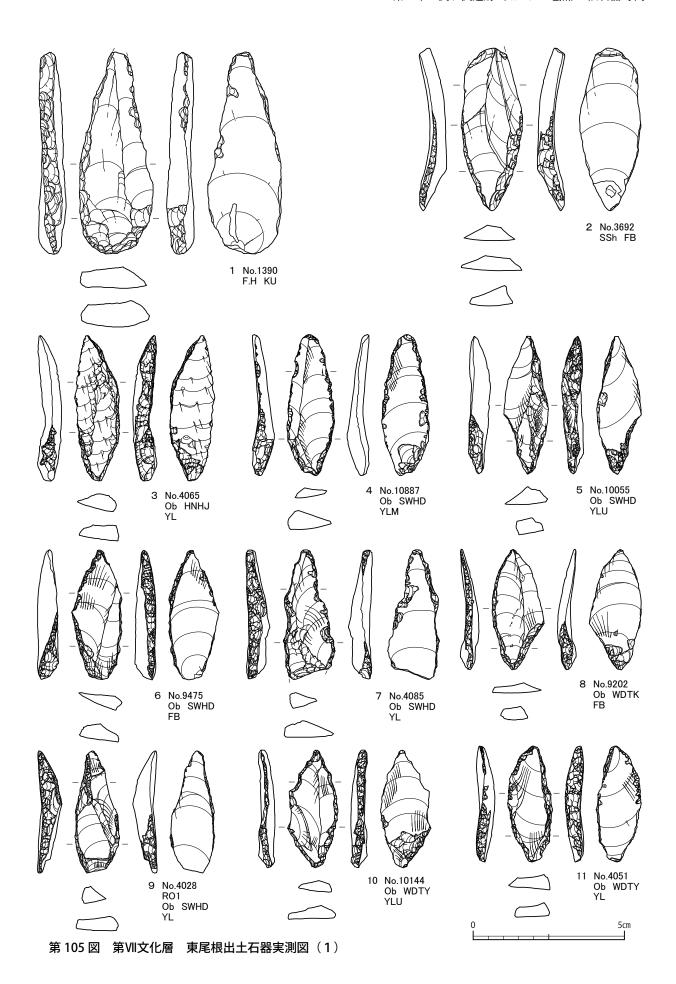
東尾根の石器は、石器ブロックから検出された 525 点と遺構に伴う 84 点、単独出土した 607 点の合計 1,216 点によって構成される。石器群の内訳は、ナイフ形石器 91 点、尖頭器 9 点、掻器 5 点、削器 1 点、彫器 4 点、楔形石器 4 点、石錐 2 点、加工痕のある剥片 17 点、使用痕のある剥片 14 点、石 刃 6 点、石核 20 点、原石 2 点、台石 3 点、剥片・砕片 1,038 点の合計 1,216 点であった。

ナイフ形石器 (第105図1~第107図38)

91 点が出土し、うち 38 点を図示した。これらは二側縁加工のものを I 類、一側縁加工のものを I 類、その他のものを I 類とし、さらに最大長が 5 cm以上のものを a、3 cm以上 5 cm未満のものを b、3 cm未満のものを b0 と細分した。

I類a(第105図1) 二側縁加工のもののなかで、最大長が5cm以上のもの。

第 105 図 1 は 6.7cm以上の大きさを示しており、ナイフ形石器のなかでも大形の部類に入るものである。石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁と基部側の右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。基部に素材剥片の打面を残置している。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は F. ホルンフェルスである。



-145-

I 類 b (第 105 図 2 ~第 106 図 25) 二側縁加工のもののなかで、最大長が 3 cm以上、 5 cm未満のもの。

本類には24点が含まれる。第105図2は石刃を素材とし、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、先端部が欠損している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が180度異なる剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は珪質頁岩である。

3は石刃を素材とし、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは剥離面側と主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は裏面の基部に平坦な調整加工が認められる。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

4は石刃を素材とし、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整としては裏面の基部に平坦な調整加工が認められる。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

5は石刃を素材とし、素材の左側縁の基部側と右側縁の先端部と基部側に調整を加えている。ブランティングは剥離面側と主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整としては裏面の基部に平坦な調整加工が認められる。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

6は石刃を素材とし、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは剥離面側と主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材剥片の打面を残置している。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が 180 度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

7は石刃を素材とし、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは剥離面側と主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。基部を欠損している。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

8は石刃を素材とし、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整としては裏面の基部に平坦な調整加工が認められる。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は和田土屋橋北産の黒曜石である。

9は石刃を素材とし、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは剥離面側と主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

10 は石刃を素材とし、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整としては裏面の基部に平坦な調整加工が認められる。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

11 は石刃を素材とし、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは剥離面側と主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

第 106 図 12 は石刃を素材とし、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

13 は石刃を素材とし、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が 180 度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

14 は石刃を素材とし、素材の左側縁の先端部側と基部側、右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われており、ブランティング以外の調整は認められない。基部を欠損する。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は蓼科冷山産の黒曜石である。

15 は石刃を素材とし、素材の左側縁の先端部側と基部側、右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は黒曜石である。

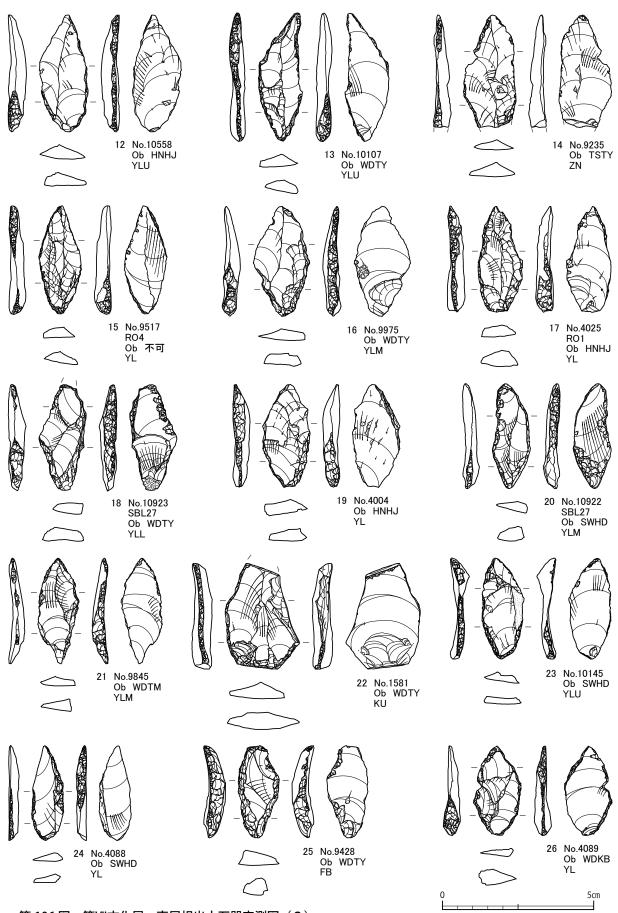
16 は石刃を素材とし、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要 剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、 剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥 離痕が観察される。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

17 は縦長剥片を素材とし、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が90 度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

18 は石刃を素材とし、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が 180 度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。先端部を欠損する。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

19 は石刃を素材とし、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要 剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

20 は石刃を素材とし、素材の左側縁の基部側と右側縁の先端部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整としては裏面の基部に平坦な調整加工が認められる。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。21 は石刃を素材とし、素材の左側縁の先端部と右側縁に調整を加えている。ブランティングは剥離



第 106 図 第VII文化層 東尾根出土石器実測図(2)

面側と主要剥離面側から行われており、ブランティング以外の調整は認められない。基部を欠損する。 素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたも のであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は和田土屋橋南産の黒曜石である。

22 は石刃を素材とし、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要 剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、 剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥 離痕が観察される。素材剥片の打面を残置し、先端部を欠損する。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

23 は石刃を素材とし、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要 剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、 剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。剥離面には自然面 が残る。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

24 は石刃を素材とし、素材の左側縁の基部側と右側縁の先端部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

25 は縦長剥片を素材とし、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整としては裏面の基部に平坦な調整加工が認められる。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が90 度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

I類 c (第 106 図 26 ~ 第 107 図 35) 二側縁加工のもののなかで、最大長が3 cm未満のもの。

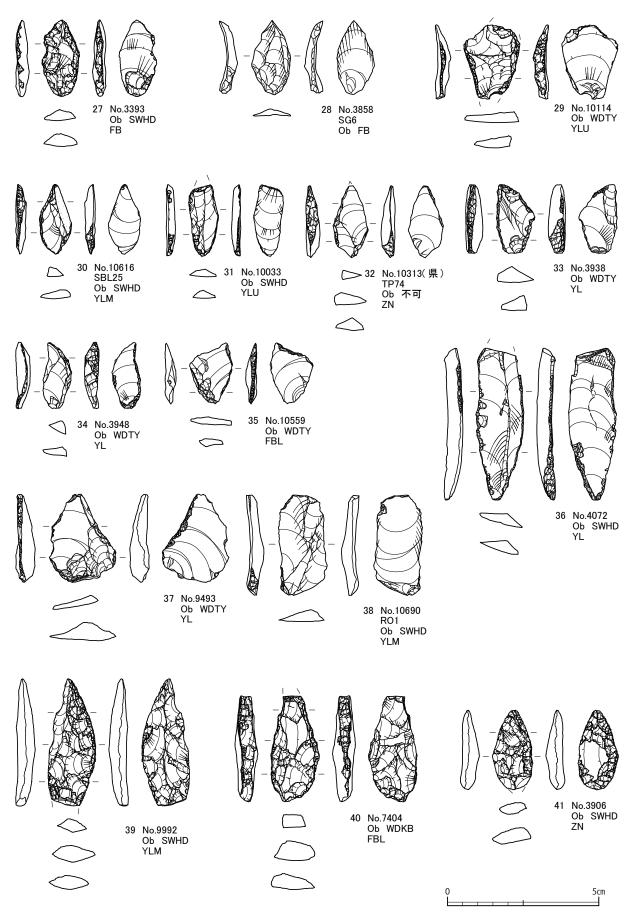
本類には 10 点が含まれる。第 106 図 26 は石刃を素材とし、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは剥離面側と主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が 90 度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は和田小深沢産の黒曜石である。

第 107 図 27 は石刃を素材とし、素材の左側縁の基部と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は裏面の基部に平坦な調整加工が認められる。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が一致する方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

28 は石刃を素材とし、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要 剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。基部に素材剥片の打面を残置 している。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が一致する方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は黒曜石である。

29 は石刃を素材とし、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要 剥離面側から行われており、ブランティング以外の調整は認められない。先端部と基部を欠損する。素 材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が 180 度異なる方向の剥離痕によって構成 されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

30 は石刃を素材とし、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要 剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕 は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が一致する方向の剥離痕によって構成されたものであった。石材は諏



第 107 図 第 VII文化層 東尾根出土石器実測図 (3)

訪星ヶ台産の黒曜石である。

31 は石刃を素材とし、素材の左側縁の基部と先端部および右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が一致する方向の剥離痕によって構成されたものであった。 刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

32 は石刃を素材とし、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要 剥離面側と剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成してい る剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が一致する方向の剥離痕によって構成されたものであった。 刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は黒曜石である。

33 は石刃を素材とし、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要 剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は、裏面の基部に平坦な調整加工が認められる。 素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が180度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には衝突による剥離と微細な剥離痕が観察される。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

34 は石刃を素材とし、素材の左側縁の基部側と右側縁の先端部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側と剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が一致する方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

35 は縦長剥片を素材とし、素材の右側縁に調整を加え、右側縁に打面を残置している。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が一致する方向の剥離痕によって構成されたものであった。 刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

Ⅱ類a (第107図36) 一側縁加工のもののなかで、最大長が5cm以上のもの。

第 107 図 36 は石刃を素材とし、素材の左側縁の先端部側と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側と剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が一致する方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。先端部を欠損する。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

Ⅱ類b (第 107 図 37) 一側縁加工のもののなかで、最大長が3 cm以上、5 cm未満のもの。

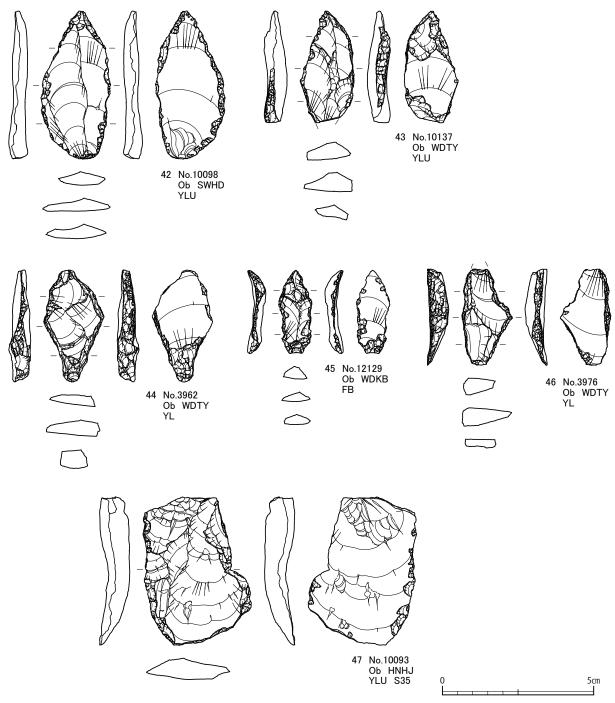
第 107 図 37 は縦長剥片を素材とし、素材の左側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

Ⅲ類b (第107 図38) 部分加工のもののなかで、最大長が3 cm以上、5 cm未満のもの。

第 107 図 38 は石刃を素材とし、素材の右側縁基部に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が 180 度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

尖頭器 (第 107 図 39 ~第 108 図 46)

9点が出土し、うち8点を図示した。これらは樋状剥離のある尖頭器、両面加工の尖頭器、半両面加工の尖頭器、周辺加工の尖頭器に分類される。(伊藤 1995 山中城三ノ丸第1地点)



第 108 図 第 VII文化層 東尾根出土石器実測図 (4)

第 107 図 39 は両面加工の尖頭器に樋状剥離を加えた有樋尖頭器である。器体のほぼ全体に面的剥離を施しているもので、全体的なプロポーションは木葉形に整形されている。側縁はほぼ直線的な状態に整えられ、縁辺の調整が入念に行われている。調整は面的調整で両側縁から中央に向かって施されている。表面と裏面の調整は同程度の剥離によって比較的ていねいな状態が看取される。これらの調整に加えて先端部の右側縁側から樋状剥離が加えられている。樋状剥離の打面はリダクションにより失われており、基部を欠損する。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

第 107 図 40 は両面加工の尖頭器である。表裏面のほぼ全体に面的剥離を施しているもので、全体的なプロポーションは木葉形に整形されている。調整は面的調整で両側縁から中央に向かって施されて

いる。表面と裏面の調整は同程度の剥離によって比較的ていねいな状態が看取される。これらの調整に加えて先端部は、裏面側からブランティング状の急斜度調整が加えられるが、先端部を欠損している。 石材は和田小深沢産の黒曜石である。

第 107 図 41 は半両面加工の尖頭器である。表面の器体全体と裏面の一部に面的剥離を施しているもので、全体的なプロポーションは木葉形に整形されている。側縁はほぼ直線的な状態に整えられ、縁辺の調整がやや入念に行われている。調整は面的調整で両側縁から中央に向かって施されている。表面と裏面の調整は同程度の剥離によって比較的ていねいな状態が看取される。基部を欠損している。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

第108 図 42 ~ 46 は周辺加工の尖頭器である。42 は石刃を縦位に用いて、周辺部に表裏面側から調整を加え、左右非対称に整形されている。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が一致する方向の剥離痕によって構成されており、素材剥片の打面を残す。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

43 は石刃を縦位に用いて、周辺部に表裏面側から急斜度の調整を加え、左右非対称に整形されている。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が一致する方向の剥離痕によって構成されたものであった。基部を折損する。石材は和田鷹山産の黒曜石である。44 は石刃を縦位に用いて、周辺部に裏面側から急斜度の調整を加え、左右非対称に整形されている。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が 180 度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。裏面の基部を平坦剥離で整えている。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

45 は石刃を縦位に用いて周辺部に裏面側から急斜度の調整を加え、左右対称に整形されている。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が同一方向の剥離痕によって構成されたものであった。裏面の基部を平坦剥離で整えている。石材は和田小深沢産の黒曜石である。46 は石刃を縦位に用いて周辺部に裏面側から急斜度の調整を加え、左右非対称に整形されている。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が90 度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。先端部を欠損する。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

削器 (第108図47)

1点が出土した。第 108 図 47 (S35) は石刃を素材として両側縁に刃部が作成されている。刃部の調整状態はやや荒く、大きめの剥離で刃部の形状を整形している。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

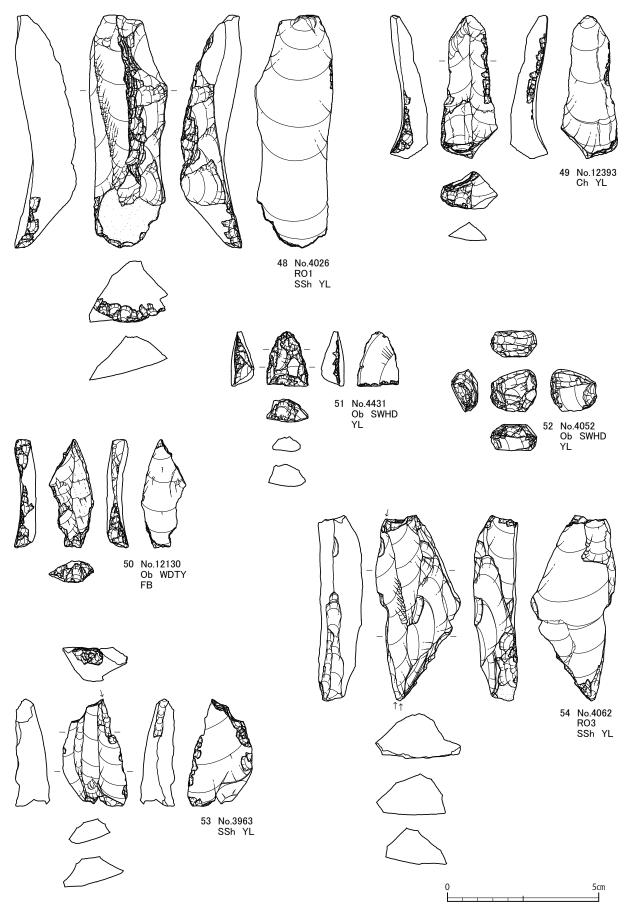
掻器 (第 109 図 48 ∼ 52)

5点が出土し、すべて図示した。第 109 図 48・49 は先刃式掻器である。50 は素材の側縁から末端にかけて刃部が形成されている。

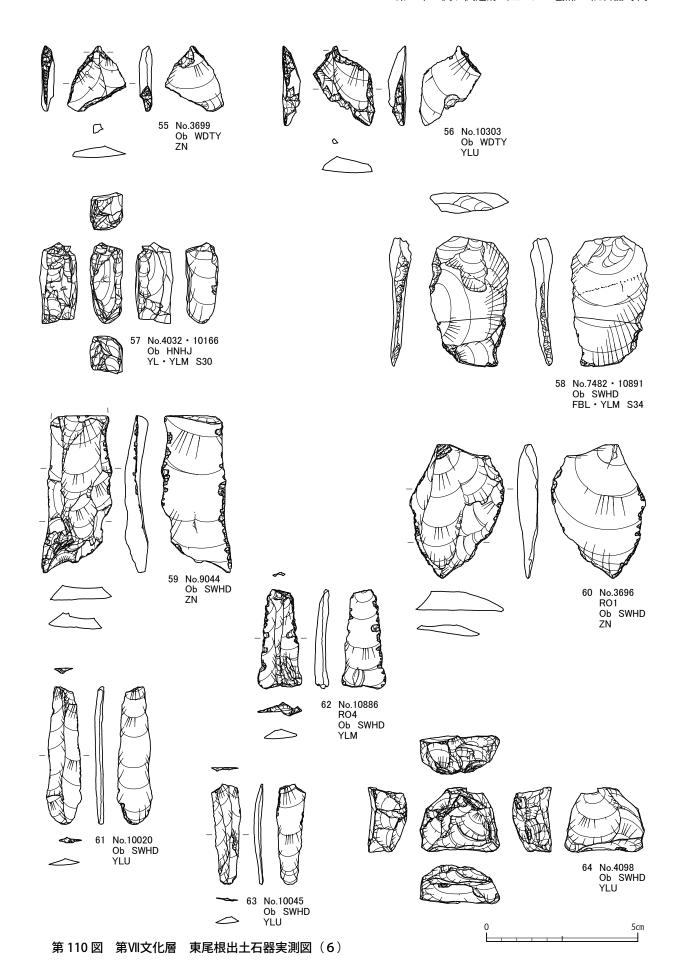
48 は素材の末端から側縁にかけてを刃部としたもので、主要剥離面側から急斜度の強靱な刃部が作出されている。素材剥片は一部に自然面が残る石核稜付剥片である。石材は珪質頁岩である。

49 は素材となる石刃の末端から側縁にかけてを刃部としたもので、主要剥離面側から急斜度の強靱な刃部が作出されている。石材はチャートである。50 は素材の末端から側縁にかけてを刃部としたもので、主要剥離面側から急斜度の強靱な刃部が作出されている。素材剥片は一部に自然面が残る石刃である。石材は和田鷹山産の黒曜石であった。

51 は小形の掻器である。素材の縁辺を刃部としたもので、主要剥離面側から急斜度の強靱な刃部が作出されている。平面形は三角形を呈する。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。52 は素材の側縁を刃部としたもので、主要剥離面側から急斜度の強靱な刃部が作出されている。左右の側面には線状の打面や縁辺に小さな剥離が重複して存在しており、その多くが階段状剥離になっている。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。



第 109 図 第 VII文化層 東尾根出土石器実測図 (5)



-155-

彫器 (第109図53・54)

4点が出土し、2点を図示した。これらは彫刀面を作出する方法により側刃型彫器に細分される。

第 109 図 53 は素材の石刃の打面部を折り取るように粗い調整を加え、この調整面を打面として素材の縁辺に沿って彫刀面を作出している。石材は珪質頁岩である。

54 は素材を折り取るように粗い調整を加え、この調整面を打面として素材の縁辺に沿って上下二方向から彫刀面を作出している。素材の石刃の打面部を取り除いて上面を形成し、これに調整を施して打面としたもので、これを利用して左側縁側に彫刀面が作成される。その後、右側面の自然面を打面とした彫刀面が下面を取り除く形で右側縁に向かって形成されている。石材は珪質頁岩である。

石錐 (第 110 図 55・56)

2点が出土し、ともに図示した。石刃を素材としてその一端に錐状の突出した刃部を作り出している。第110図55は二側縁を加工した石器の左側縁側に刃部を作り出している。この調整は、剥離面側から主要剥離面側に向けて粗い剥離で行われ、刃部の断面形は四角形を呈する。石材は和田鷹山産の黒曜石である。56は二側縁を加工した石器の右側縁側に刃部を作り出している。この調整は剥離面側から行われ、刃部の断面が三角形を呈する。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

楔形石器 (第 110 図 57)

4点が出土し、1点を図示した。第110図57(S30)は楔形石器の接合状態である。剥片剥離の生じている縁辺が、相対する両極で構成されるもので、線状の打面や階段状剥離が観察される。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

加工痕のある剥片 (第 110 図 58)

17点が出土し、うち1点を図示した。第110図58は石刃を素材として両側縁に加工痕が認められる石器である。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

使用痕のある剥片 (第 110 図 59・60)

14点が出土し、うち2点を図示した。石刃や剥片の縁辺に調整剥離より微細な剥離が観察されるものである。第110図59は石刃の鋭い縁辺に使用痕と思われる微細な剥離が観察される。60は縦長剥片の鋭い縁辺に使用痕と思われる微細な剥離が観察される。石材はともに諏訪星ヶ台産黒曜石である。

石刃 (第 110 図 61 ~ 63)

6点が出土し、3点を図示した。第 110 図 61 ~ 63 は縦長に作出された定形剥片で、小形の石刃である。これらは上設打面からの剥離痕と主要剥離面で構成されていることから、単設打面石核から作出された可能性が高い。石材は 3点ともに諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

打面再生剥片 (第 110 図 64)

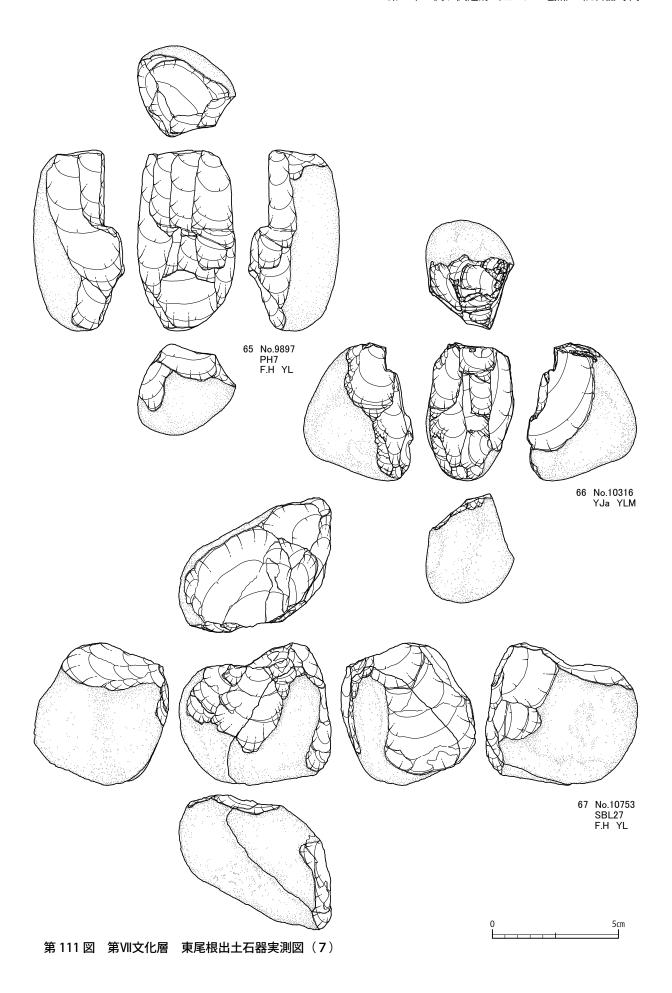
第 110 図 64 は単設打面石核の打面再生剥片である。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

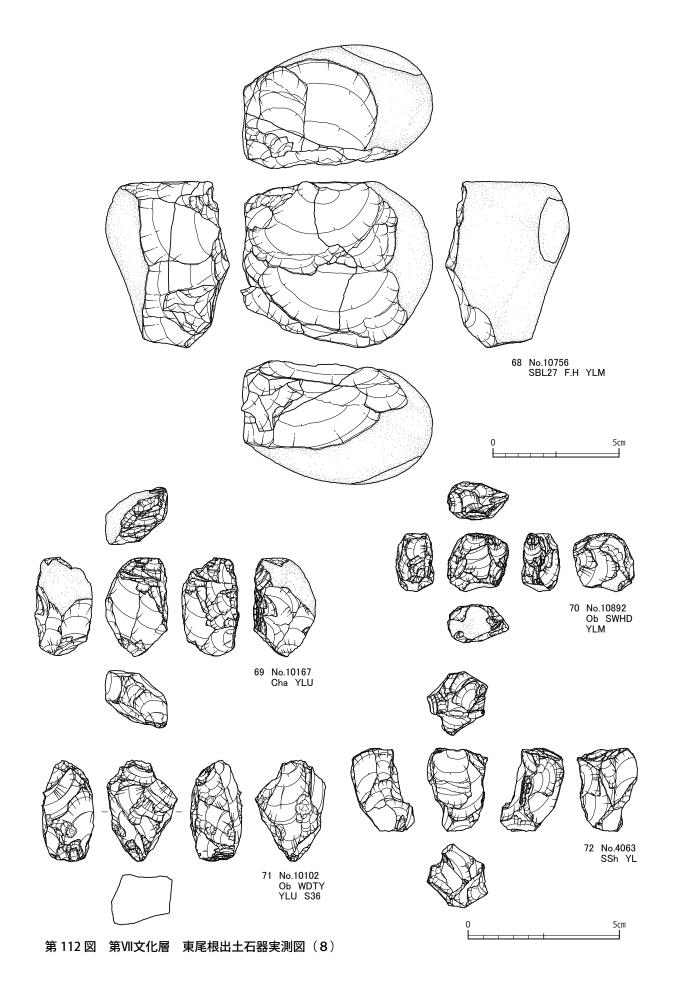
石核 (第 111 図 65 ~第 114 図 77)

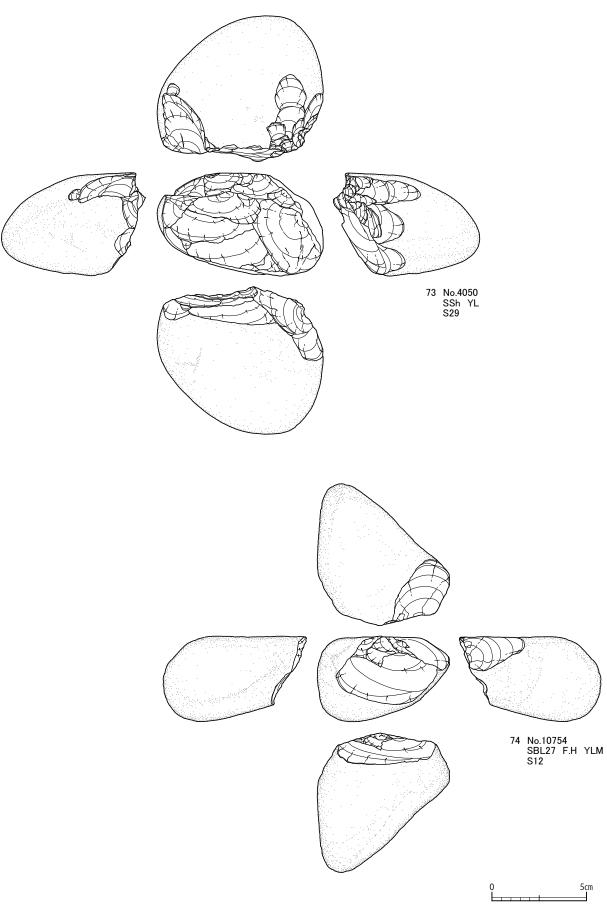
20 点が出土し、うち 13 点を図示した。これらは剥片剥離方向の違いや状態から 3 類に分類される。 I 類(第 111 図 $65\sim67$) 単設の打面を有し、剥片剥離方向を上設打面からの一方向に限定しているもの。

本類には3点が含まれる。第111図65は左側縁から右側縁にかけてを剥片剥離作業面としているもので、剥離作業面が移動していることが推察される。打面は単剥離打面で打面調整が認められない。また、石核調整と考えられる剥離も観察できない。裏面から下面にかけて円礫面が残る。石材はF.ホルンフェルスである。

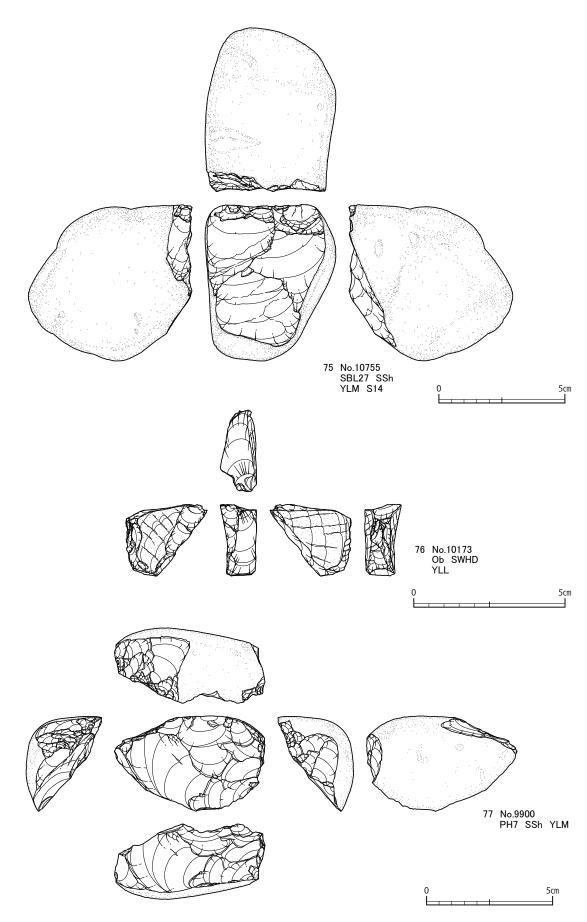
66 は左側縁から右側縁にかけてを剥片剥離作業面としているもので、剥離作業面が移動していると 考えられる。打面は複剥離打面で入念な打面調整が行われている。右側縁の剥離は自然面を除去する調



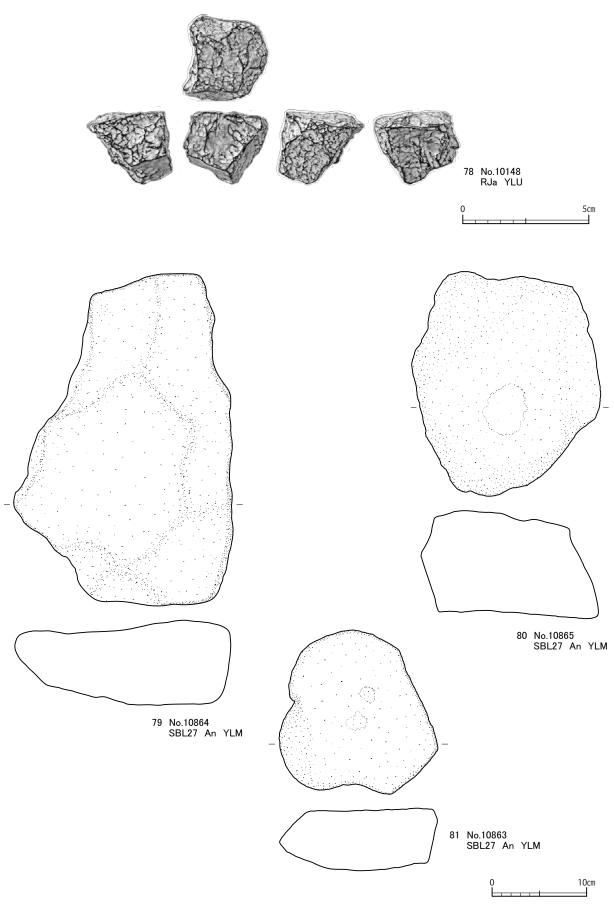




第 113 図 第 VII文化層 東尾根出土石器実測図 (9)



第 114 図 第 VII文化層 東尾根出土石器実測図 (10)



第 115 図 第 VII文化層 東尾根出土石器実測図(11)

整剥離と思われる。裏面から底面にかけて円礫面が残る。石材は黄玉石である。67 は正面と右側縁を 剥片剥離作業面としている。打面は単剥離打面で打面調整は認められない。左側面から裏面や下面にか けて円礫面が残る。石材は F. ホルンフェルスである。

Ⅱ類(第112図68~72) 複数の打面を有し、打面転移が行われているもの。

本類には5点が含まれる。剥片剥離が二方向から行われており、剥片剥離工程のなかに180度の打面転移技術と90度の打面転移技術を持つものである。

第 112 図 68 は正左上下面を剥片剥離作業面としている。打面は剥離作業面で打面調整は認められない。右裏底面に円礫面が残る。石材は F. ホルンフェルスである。69 は正面、裏面を剥片剥離作業面としている。正面の剥離作業面は上面、裏面の剥離作業面は下面を打面としている。上下の打面は調整打面でわずかに打面調整が認められる。右面と左面は線状に潰れ、小さな剥離が重複して存在しており、階段状剥離になっている。石材はチャートである。

70 は小形の石核で、剥片剥離作業面が正左裏面に認められる。正面の剥離作業面は上面と右側面から 90 度異なる剥離痕、左側面は正面と下面から 90 度異なる剥離痕、裏面は左側面からの剥離痕が観察できる。右側縁は打面が線状に潰れている。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

71 (S36) は正右左上下面を剥片剥離作業面としており、90 度打面転移しながら剥片剥離作業を行っている。正面の剥離作業面は上面からの剥離痕、左右下面は裏面からの剥離痕が観察できる。石材は和田鷹山産の黒曜石である。72 は正右左面を剥片剥離作業面としており、90 度打面転移しながら剥片剥離作業を行っている。正面の剥離作業面は上面からの剥離痕、左面は下面からの剥離痕、右面は正面からの剥離痕が観察できる。石材は珪質頁岩である。

Ⅲ類(第113 図73~第114 図77) 礫や剥片に数回の剥離を加えただけのもの。

本類には5点が含まれる。素材礫の一部に調整剥離を施し、石核を形成する過程もしくは石核の初期 段階と思われるものである。

第 113 図 73 (S29) は円礫の上面に打面を形成し、正面を剥片剥離作業面として剥片剥離作業を行っている。石材は珪質頁岩である。74 (S12) は円礫の自然面を打面として数回の剥離を加えている。石材は F. ホルンフェルスである。

第114 図 75 (S14) は円礫の自然面を打面として数回の剥離を加えている。石材は珪質頁岩である。 76 は板状の素材剥片の切断面を打面として数回の剥離が認められる。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。77 は正面を剥片剥離作業面としている。正面の剥離作業面は上面と右面を打面としており、入念な打面調整が認められる。裏面には円礫面が残る。石材は珪質頁岩である。

原石 (第 115 図 78)

2点が出土し、1点を図示した。第115図78は赤玉石製の搬入石材である。

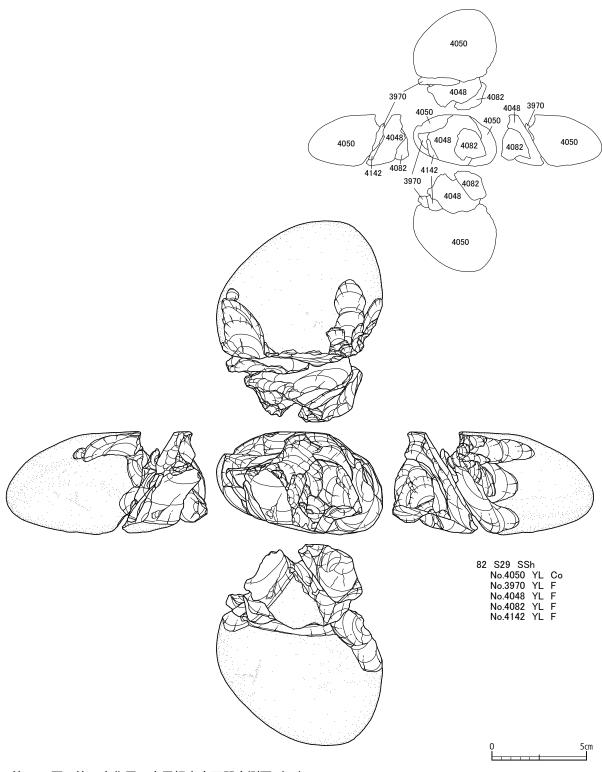
台石 (第 115 図 79 ~ 81)

3点が出土した。第115図79は扁平な大形礫で、表面に不明瞭な打痕が認められる点が人工的な作業の結果と考えて台石と判断した。石材は板状節理の安山岩である。80はサイコロ状の大形礫で、表面に打痕が認められることから台石とした。石材は安山岩である。81は扁平な大形礫で、表面に打痕が認められることから台石とした。石材は板状節理の安山岩である。

接合資料 (第 116 図 82 ~第 119 図 86)

石核と剥片の接合や削器と剥片の接合など、剥片剥離技術に関わるもの5例を図示した。

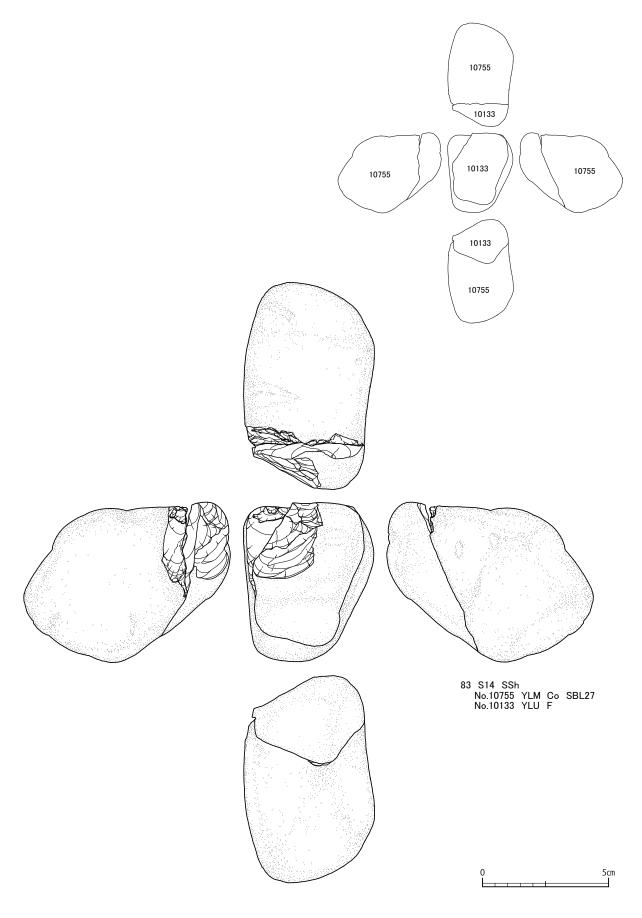
第 116 図 82 は石核 1 点(4050) と剥片 4 点(3970・4048・4082・4142)の接合資料である。 82 の接合状態を見ると、円礫素材の石核から 90 度打面転移を行いながら剥片を剥離している。まず、正面の剥片剥離作業面を打面として 4082 の剥片剥離作業を行い、剥離作業面を整えている。次に 90



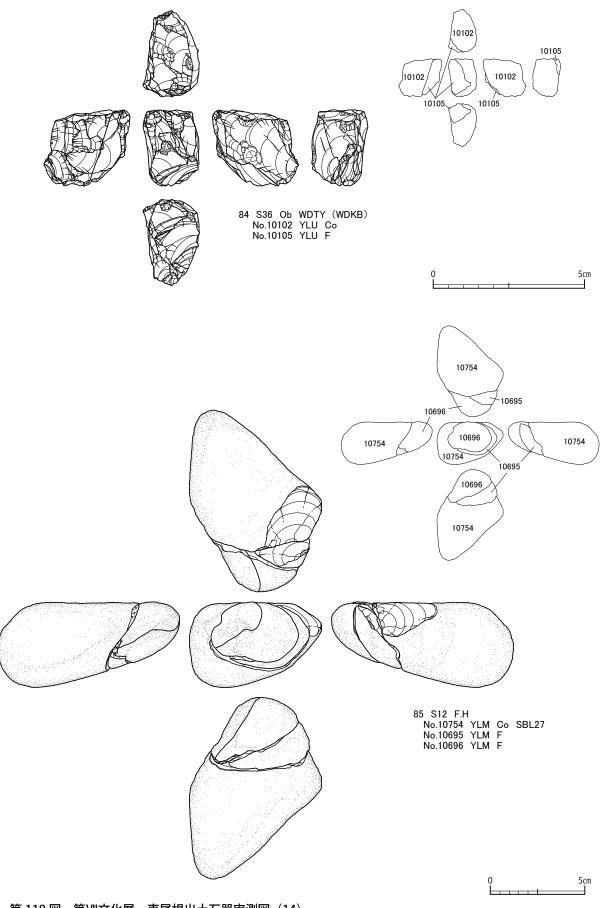
第 116 図 第 VII文化層 東尾根出土石器実測図(12)

度打面転移して、上面の打面から $4048 \rightarrow 4142 \rightarrow 3970$ を連続的に剥離している。石材は性質頁岩である。

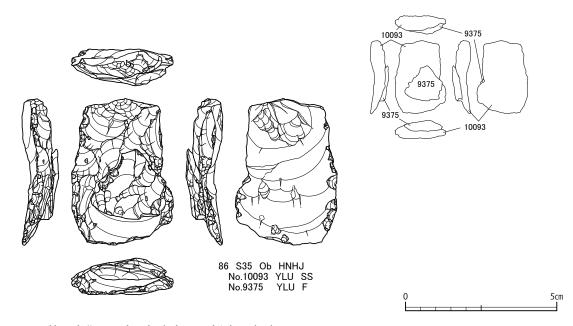
第 117 図 83 は石核 1 点 (10755) と剥片 1 点 (10133) の接合資料である。83 の接合状態を見ると、円礫素材の石核から剥片を剥離している。上面の自然面を打面として 10133 の剥片剥離作業を行っている。石材は珪質頁岩である。



第 117 図 第 VII文化層 東尾根出土石器実測図(13)



第 118 図 第 VII 文化層 東尾根出土石器実測図 (14)



第 119 図 第 VII文化層 東尾根出土石器実測図 (15)

第 118 図 84 は石核 1 点(10102)と剥片 1 点(10105)の接合資料である。84 の接合状態を見ると、90 度打面転移を繰り返しながら剥片剥離作業を行っており、石核と剥片が接合している。上面を打面として、正面の剥片剥離作業面から 10105 を剥離している。石材は黒曜石である。85 は石核 1 点(10754)と剥片 2 点(10695・10696)の接合資料である。85 の接合状態を見ると、円礫素材の石核から連続的に剥片を剥離している。上面の自然面を打面として 10696 \rightarrow 10695 を剥離している。石材は F . ホルンフェルスである。

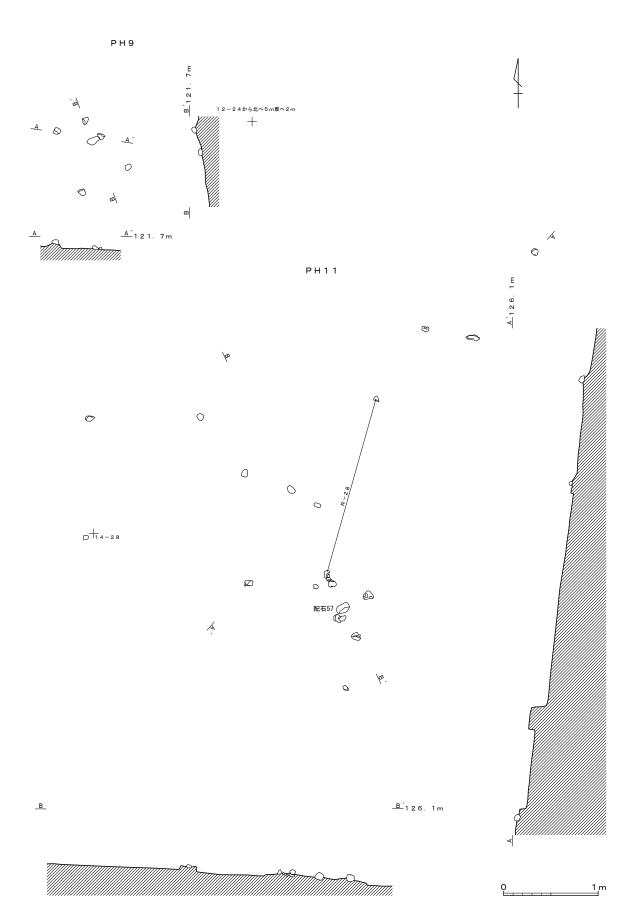
第 119 図 86 は削器 1 点 (10093) と剥片 1 点 (9375) の接合資料である。86 の接合状態を見ると、両設打面石核から連続的に 10093 \rightarrow 9375 を剥離している。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

〈東尾根のまとめ〉

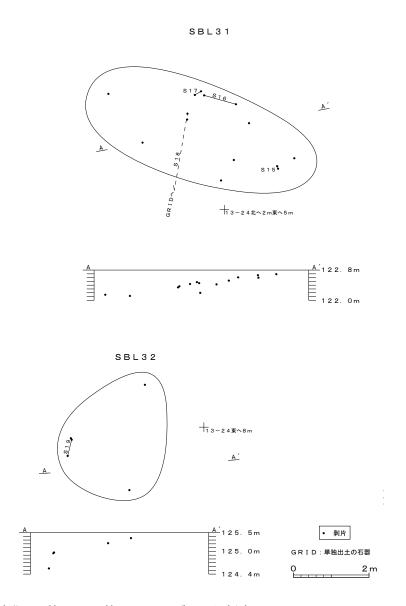
第四文化層の東尾根は、ナイフ形石器 91 点、尖頭器 9点、掻器 5点、削器 1点、彫器 4点、楔形石器 4点、石錐 2点、加工痕のある剥片 17点、使用痕のある剥片 14点、石刃 6点、石核 20点、原石 2点、台石 3点、剥片・砕片 1038点の合計 1216点で構成されている。このうち、ナイフ形石器 18点、掻器 1点、彫器 1点、加工痕のある剥片 5点、使用痕のある剥片 2点、石刃 2点、石核 7点、台石 3点、剥片・砕片 570点の合計 610点は石囲炉・礫群・石器ブロックから出土しているが、ナイフ形石器 72点、尖頭器 9点、掻器 4点、削器 1点、彫器 3点、楔形石器 4点、石錐 2点、加工痕のある剥片 12点、使用痕のある剥片 12点、石刃 4点、石核 13点、原石 2点、剥片・砕片 468点の合計 606点は単独出土例である。文化層の示準的な器種はナイフ形石器で、これに尖頭器、掻器、削器、彫器、楔形石器、石錐等の各器種が伴うナイフ形石器石器群である。

石材組成は、第1石材が黒曜石929点(76%)、544.5g(3%)であり、出土点数の比率が高く、重量の比率が低い。この他、第2石材がF.ホルンフェルス216点(18%)、3,761.7g(22%)で出土点数の比率が低く、重量の比率が高い。第3石材は珪質頁岩40点(3%)、1,156.8g(7%)である。黒曜石の原産地は信州系が203点(22%)、340.0g(62%)と比率が高く、伊豆・箱根系が48点(5%)、131.0g(24%)と低かった。

剥片剥離技術は、ナイフ形石器や尖頭器など信州系の黒曜石や F. ホルンフェルスを素材とする石器類の観察から、石刃・縦長剥片を目的としていたと思われる。そして、石器類の多くが石刃や縦長剥片



第 120 図 第 別文化層 第 9 号・第 11 号礫群実測図



第 121 図 第 別文化層 第 31 号・第 32 号石器ブロック実測図

を素材としていることから、縦長剥片剥離技術を技術基盤としてこれらの剥片類を生産していると考えられる。石核は単設打面石核が3例、剥片剥離作業が二方向以上に観察される石核が5例確認された。これらの剥片剥離作業面を観察すると、石刃や縦長剥片を作出していたと思われる。この他、円礫に数回の剥離を行っているものが5例認められ、幅広な縦長剥片を作出していたと思われる。

接合資料は円礫素材の石核から一定方向に剥離を行う工程と、180度あるいは90度打面転移を行いながら剥片を剥離している工程を確認した。これらの接合資料の観察から、幅広な縦長剥片を目的的剥片として作出していることが明らかとなった。

【中央谷の遺構と遺物】

①遺 構

a . 礫群

第9号礫群(第120図)

中央谷の 12-24 グリッドに位置する。構成礫は 6 点で、長軸約 0.9 m、短軸約 0.7 mの範囲に分布する。検出層位は休場層である。垂直分布は標高 $121.44\sim121.63$ mにかけて約 19cmの分布幅を

形成しており、大部分の礫は標高 121.54 m付近に礫の底面を置いている。総重量は 1,553g、平均重量は 258.8g である。構成礫は、非赤化完形礫 2 点、礫面赤変割面赤変破損礫 2 点、礫面非赤変破損礫 1 点である。石材はすべて安山岩であった。接合関係は認められない。

第11号礫群(第120図)

中央谷の 13・14 — 27・28 グリッドに位置する。構成礫は 22 点で、長軸約 4.0 m、短軸約 3.3 mの 範囲に分布する。検出層位は休場層である。垂直分布は標高 125.26 ~ 126.01 mにかけて約 75cmの 分布幅を形成しており、大部分の礫は標高 125.48 m付近に礫の底面を置いている。総重量は 5,037g、 平均重量は 229.0g である。構成礫は、赤化完形礫 3 点、非赤化完形礫 1 点、礫面赤変割面赤変破損礫 3 点、礫面赤変割面非赤変破損礫 4 点、礫面非赤変破損礫 9 点、割面赤変破損礫 1 点、割面非赤変破損 礫 1 点である。石材は安山岩 21 点、玄武岩 1 点である。接合関係は礫群内で 1 例が認められた。

b.配石

配石は5基を検出した。検出層位は休場層である。総重量は18,156g、平均重量は3,631gである。 構成礫は、赤化完形礫1基、非赤化完形礫3基、礫面非赤変破損礫1基である。石材はすべて安山岩で あった。接合関係は認められない。

c. 石器ブロック

第31号石器ブロック (第121図)

中央谷の 13-24 グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 5.3 m、短軸約 2.1 m である。石器類は標高 $122.12 \sim 122.69$ mにかけて約 57cmのレベル差が生じていた。確認された石器群は剥片 14 点である。石材はすべて F .ホルンフェルスであった。接合関係は石器ブロック内で 3 例、単独出土の石器と 1 例が認められた。

第32号石器ブロック (第121図)

中央谷の $13-23\cdot 24$ グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 2.8 m、短軸約 1.7 mである。石器類は標高 $121.55\sim 122.35$ mにかけて約 80cmのレベル差が生じていた。確認された石器群は剥片 5 点である。石材は F . ホルンフェルス 4 点、黒曜石 1 点である。黒曜石の産地は、不可他 1 点である。接合関係は石器ブロック内で 1 例が認められた。

②遺 物

中央谷の石器は、石器ブロックから出土した剥片 19 点と、単独出土のナイフ形石器 31 点、尖頭器 9 点、楔形石器 1 点、加工痕のある剥片 6 点、使用痕のある剥片 3 点、石刃 1 点、剥片・砕片 54 点の 124 点で構成されている。

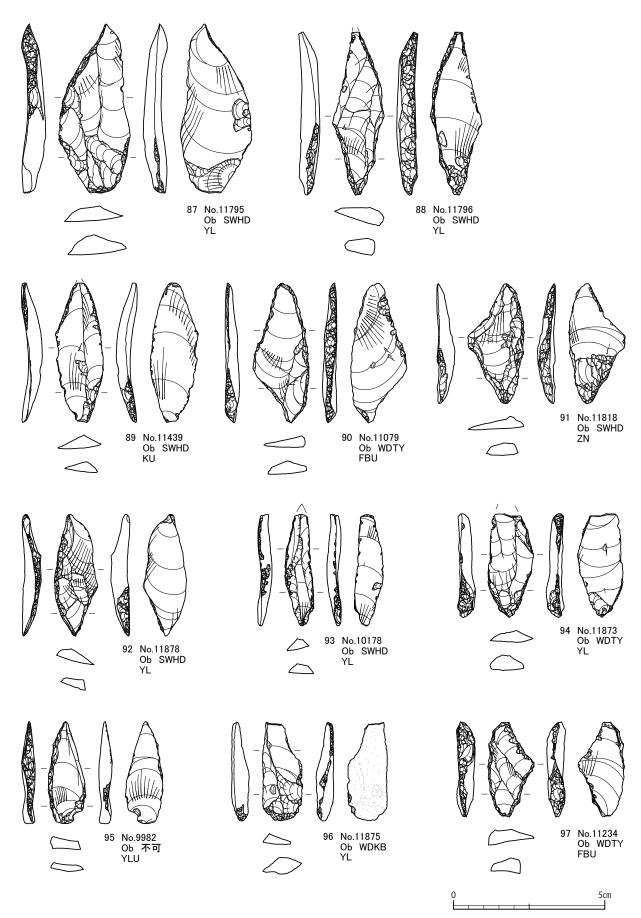
ナイフ形石器 (第 122 図 87 ~第 123 図 104)

31点が出土し、うち 18点を図示した。すべて二側縁加工のナイフ形石器(I 類)で、さらに最大長が 5 cm以上のものを a、 3 cm以上 5 cm未満のものを b、 3 cm未満のものを c と細分した。

I類a(第122 図87・88) 二側縁加工のもののなかで、最大長が5cm以上のもの。

第 122 図 87 と 88 は 5 cm以上の大きさを示しており、ナイフ形石器のなかでも大形の部類に入るものである。87 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と先端部側、右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整としては主要剥離面側の端部に平坦な剥離が施される。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

88 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁



第 122 図 第 VII文化層 中央谷出土石器実測図 (1)

の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは剥離面側と主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は主要剥離面側の基部に平坦剥離が認められる。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

I 類b (第 122 図 89 ~ 第 123 図 99) 二側縁加工のもののなかで、最大長が 3 cm以上、 5 cm未満のもの。

本類には 11 点が含まれる。第 122 図 89 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の先端部側と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

90 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には剥離痕が観察される。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

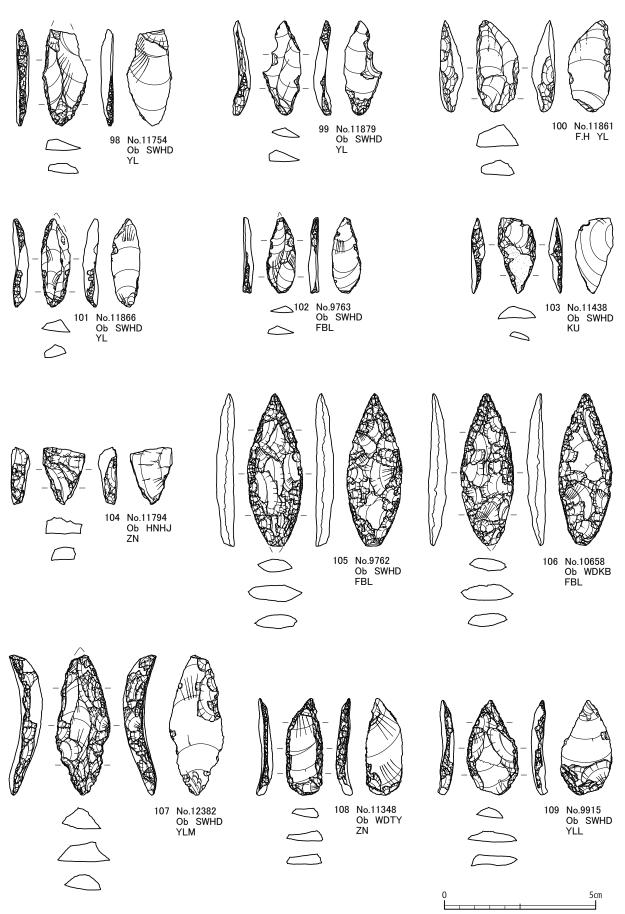
91 は縦長剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主に主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は主要剥離面側の基部に平坦剥離が認められる。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面が180度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

92 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

93 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の先端部側と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、先端部を欠損している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

94 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁の基部側と先端部に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部は欠損している。ブランティング以外の調整としては、主要剥離面側の端部に平坦剥離が施される。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

95 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は黒曜石である。



第 123 図 第 VII文化層 中央谷出土石器実測図 (2)

96 は縦長剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、ブランティング以外の調整は認められない。裏面は円礫面である。刃部には微細な剥離痕が観察された。未製品に近い。石材は和田小深沢産の黒曜石である。

97 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側と剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には剥離痕が観察される。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

第 123 図 98 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、先端部を欠損している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

99 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁の先端部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整としては、主要剥離面側の端部に平坦な剥離が施される。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

I類 c (第 123 図 100 \sim 104) 二側縁加工のもののなかで、最大長が 3 cm未満のもの。

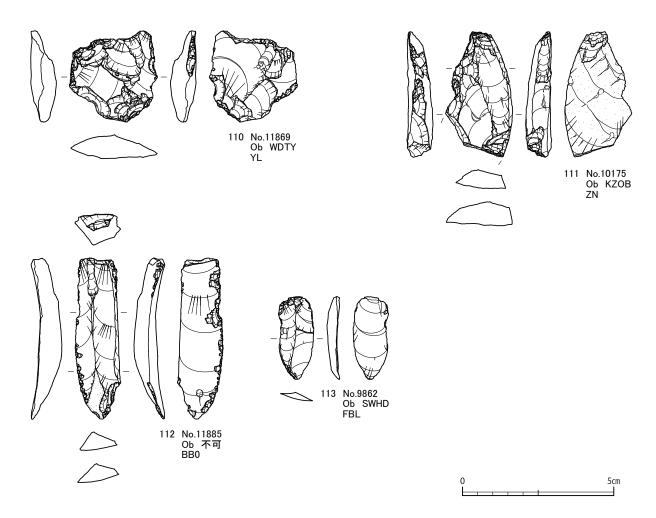
本類には 5 点が含まれる。第 123 図 100 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。石材は F. ホルンフェルスである。

101 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と先端部側、右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、先端部を欠損している。ブランティング以外の調整は認められない。基部に素材剥片の打面を残置している。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

102 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁の先端部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、先端部を欠損している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

103 は幅広な縦長剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

104 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側



第 124 図 第 VII 文化層 中央谷出土石器実測図 (3)

縁に調整を加えている。右側縁は切断面である。ブランティングは主要剥離面側から行われている。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面が同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。切断面を利用した台形様石器に近い。

尖頭器 (第 123 図 105 ~ 109)

9点が出土し、5点を図示した。これらは両面加工の尖頭器(105)、半両面加工の尖頭器(106)、周辺加工の尖頭器(107~109)に分類される。

第 123 図 105 は両面加工の尖頭器である。表裏面のほぼ器体全体に面的剥離を施しているもので、全体的なプロポーションは木葉形に整形されている。調整は面的調整で両側縁から中央に向かって施されている。側縁はほぼ直線的な状態に整えられ、縁辺の調整がやや入念に行われている。表面と裏面の調整は同程度の剥離によって比較的ていねいな状態が看取される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

106 は半両面加工の尖頭器である。表面の器体全体と裏面の一部に面的剥離を施しているもので、全体的なプロポーションは木葉形に整形されている。側縁はほぼ直線的な状態に整えられ、縁辺の調整がやや入念に行われている。調整は面的調整で両側縁から中央に向かって施されている。表面と裏面の調整は同程度の剥離によって比較的ていねいな状態が看取される。裏面は素材剥片の剥離痕を残す。石材は和田小深沢産の黒曜石である。

107~109は周辺加工の尖頭器である。107は石刃を縦位に用いて周辺部に裏面側から調整を加え、

左右非対称に整形されている。側縁は素材剥片の湾曲した状態が残っている。素材を構成している剥離 痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が一致する方向の剥離痕によって構成されている。石材は諏訪星ヶ 台産の黒曜石である。

108 は石刃を縦位に用いて周辺部に裏面側から調整を加え、左右非対称に整形されている。側縁は素材剥片のやや湾曲した状態が残っている。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が一致する方向の剥離痕によって構成されている。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

109は縦長剥片を縦位に用いて周辺部に裏面側から調整を加え、左右対称に整形されている。裏面の端部に平坦な剥離が施される。側縁は素材剥片のやや湾曲した状態が残っている。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が一致する方向の剥離痕によって構成されている。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

楔形石器 (第 124 図 110)

1点が出土した。第124図110は肉厚の剥片を横位に用いた楔形石器である。素材の両側縁に線状に潰れた打面が形成され、縁辺に小さな剥離が重複して存在しており、その多くが階段状剥離になっている。石材は和田鷹山産黒曜石である。

加工痕のある剥片 (第 124 図 111)

6点が出土し、1点を図示した。第124図111は何らかの目的で石刃に調整が施されているものであるが、目的が明確に判断できないため加工痕のある剥片とした。石刃の左側縁部に強靱な刃部を形成しているが、基部側を大きく折損している。石材は神津島恩馳島産黒曜石である。

使用痕のある剥片 (第124 図112)

3点が出土し、1点を図示した。第 124 図 112 は石刃の側縁に使用痕と考えられる細かな剥離が認められる。使用痕は表面の左側縁と右側縁の一部に認められる。石材は黒曜石である。

石刃 (第 124 図 113)

1点が出土した。第124図113は小形の石刃である。一定した剥片剥離方向を持つ工程から作出されたもので、剥離面や主要剥離面で観察される剥離痕が同一方向の剥離で形成されている。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

〈中央谷のまとめ〉

第VII文化層の中央谷は、石器ブロック出土の剥片 19 点と、単独出土のナイフ形石器 31 点、尖頭器 9 点、楔形石器 1 点、加工痕のある剥片 6 点、使用痕のある剥片 3 点、石刃 1 点、剥片・砕片 54 点の 124 点で構成されている。

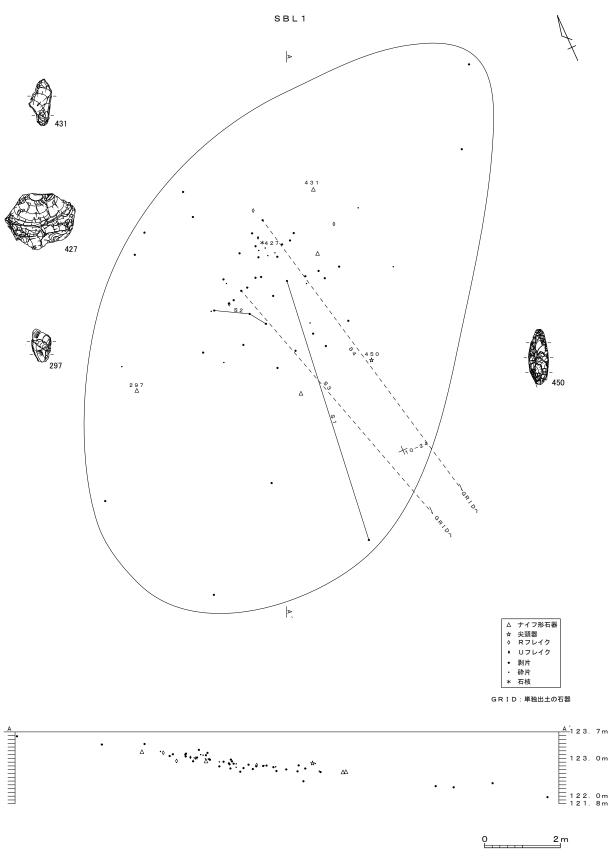
文化層の示準的な器種はナイフ形石器であり、これに尖頭器、楔形石器等の各器種が伴うナイフ形石器 石器群である。

石材組成は、第1石材が黒曜石 76点(61%)、161.5g(13%)と出土点数の比率が高く、重量の比率が低い。この他、第2石材がF.ホルンフェルス 40点(32%)、1,010.8g(82%)であり出土点数の比率が低く、重量の比率が高い。第3石材はガラス質黒色安山岩 4点(3%)、23.8g(2%)である。黒曜石の原産地は信州系が 41点(54%)、89.1g(55%)と比率が高く、伊豆・箱根系が 17点(22%)、56.7g(35%)と低かった。

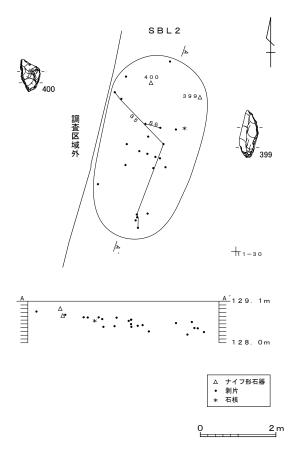
剥片剥離技術は、ナイフ形石器や尖頭器など信州系の黒曜石や F. ホルンフェルスを素材とする石器類の観察から、石刃・縦長剥片を目的としていたと思われる。そして、石器類の多くが石刃や縦長剥片を素材としていることから、縦長剥片剥離技術を技術基盤としてこれらの剥片類を生産していると考えられる。



第125 図 第Ⅲ文化層 第1号~第3号礫群実測図



第126図 第川文化層 第1号石器ブロック実測図



第 127 図 第VII文化層 第 2 号石器ブロック実測図

【西尾根の遺構と遺物】

1)遺 構

a . 礫群

第1号礫群(第125図)

西尾根の8-21・22 グリッドに位置する。構成礫は7点で、長軸約1.0 m、短軸約0.3 mの範囲に分布する。検出層位は休場層である。垂直分布は標高119.14~119.24 mにかけて約10 cmの分布幅を形成しており、大部分の礫は標高119.18 m付近に礫の底面を置いている。総重量は2,797g、平均重量は399.6gである。構成礫は、礫面赤変割面非赤変破損礫2点、礫面非赤変破損礫2点、割面非赤変破損礫3点である。石材はすべて安山岩であった。接合関係は認められない。礫群の周辺から剥片2点が出土している。

第2号礫群(第125図)

西尾根の8-21 グリッドに位置する。構成礫は5点で、長軸約0.9 m、短軸約0.5 mの範囲に分布する。検出層位は休場層である。垂直分布は標高118.68~118.78 mにかけて約10cmの分布幅を形成しており、大部分の礫は標高118.74 m付近に礫の底面を置いている。総重量は1,041g、

平均重量は 208.2g である。構成礫は、礫面赤変割面赤変破損礫 2 点、割面非赤変破損礫 3 点である。 石材はすべて安山岩であった。接合関係は認められない。

第3号礫群(第125図)

西尾根の $9-19\cdot20$ グリッドに位置する。構成礫は 8 点で、長軸約 1.4 m、短軸約 1.3 mの範囲に分布する。検出層位は休場層上層である。垂直分布は標高 $117.45\sim117.81$ mにかけて約 36cmの分布幅を形成しており、大部分の礫は標高 117.55 m付近に礫の底面を置いている。総重量は 2,899g、平均重量は 362.4g である。構成礫は、非赤化完形礫 2 点、礫面非赤変破損礫 4 点、割面非赤変破損礫 2 点である。石材は安山岩 7 点、砂岩 1 点である。接合関係は配石との接合が 2 例認められた。

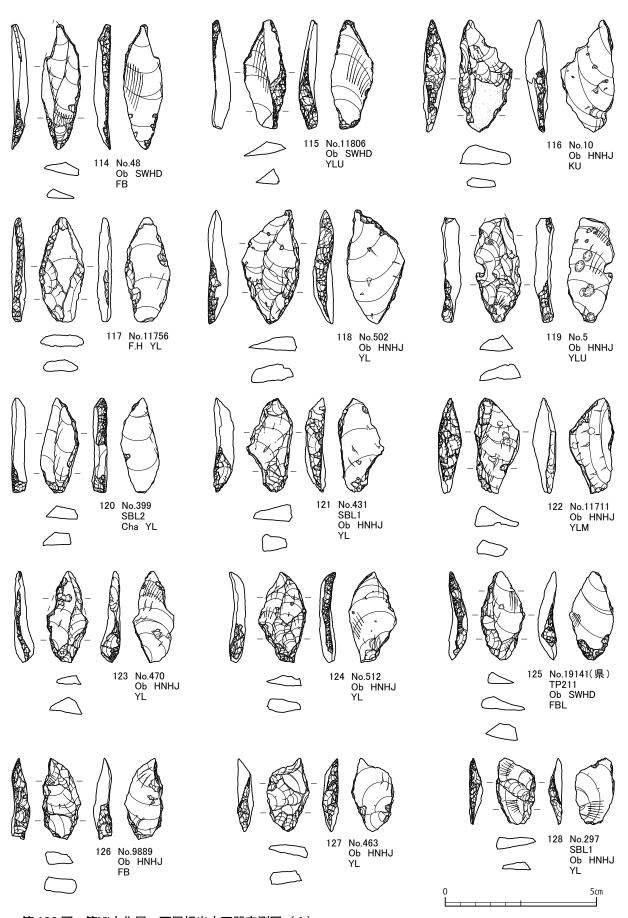
b.配石

配石は20基を検出した。検出層位は休場層15基、休場層中層1基、休場層上層4基である。総重量は53,676g、平均重量は2,683.8gである。構成礫は、赤化完形礫1基、非赤化完形礫4基、礫面赤変割面非赤変破損礫1基、礫面非赤変破損礫10基、割面非赤変破損礫4基である。石材はすべて安山岩であった。接合関係は単独出土の礫と1例、第3号礫群と2例認められた。

c. 石器ブロック

第1号石器ブロック (第126図)

西尾根の $9\cdot10-23\cdot24$ グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 15.6 m、短軸約 8.8 mである。検出層位は休場層である。石器類は標高 $120.97\sim122.58$ mにかけて約 161cmのレベル差が生じていた。確認された石器群はナイフ形石器 4 点、尖頭器 1 点、加工痕のある剥片 3 点、使用痕のある剥片 1 点、石核 1 点、剥片・砕片 54 点の合計 64 点である。石材は黒曜石 59 点、F . ホルンフェルス 3 点、ガラス質黒色安山岩 1 点、珪質頁岩 1 点である。黒曜石の産地は、箱根畑宿産 34 点、諏訪星ケ



第 128 図 第 VII 文化層 西尾根出土石器実測図 (1)

台産1点、未計測他が24点である。接合関係は石器ブロック内で2例、単独出土の石器と2例が認められた。

第2号石器ブロック (第127図)

西尾根の 10-30 グリッドで確認した石器ブロックである。規模は、長軸約 4.5 m、短軸約 2.2 m である。石器類は標高 $128.22 \sim 128.91$ mにかけて約 69cmのレベル差が生じていた。確認された石器群はナイフ形石器 2 点、石核 1 点、剥片 23 点の合計 26 点である。石材は F . ホルンフェルス 21 点、黒曜石 3 点、ガラス質黒色安山岩 1 点、玉髄 1 点である。黒曜石の産地は、箱根畑宿産が 3 点であった。接合関係は石器ブロック内で 2 例が認められた。

②遺 物

西尾根の遺物はナイフ形石器 26 点、尖頭器 11 点、掻器 1 点、彫器 2 点、楔形石器 1 点、加工痕のある剥片 4 点、使用痕のある剥片 2 点、石核 4 点、台石 1 点、剥片・砕片 183 点の合計 235 点の石器群によって構成されている。

ナイフ形石器 (第 128 図 114 ~第 129 図 131)

26 点が出土し、うち 18 点を図示した。これらは二側縁加工のものを I 類、一側縁加工のものを I 類、その他のものを I 類とし、さらに最大長が 5 cm以上のものを a、3 cm以上 5 cm未満のものを b、a 3 cm未満のものを b0 と細分した。

I類b (第 128 図 114 ~ 125) 二側縁加工のもののなかで、最大長が3 cm以上、5 cm未満のもの。 本類には 12 点が含まれる。第 128 図 114 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。先端部を欠損する。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

115 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の先端部側と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは剥離面側と主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整としては主要剥離面側の端部に平坦な剥離が施される。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。剥離面側に自然面を残し、刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

116 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは剥離面側と主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。剥離面に自然面が残り、刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

117 は縦長剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の 左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接す る部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している 剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。風化が著しい。石材は F. ホルンフェルスである。

118 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部

分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離 痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な 剥離痕が観察される。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

119 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁の先端部側と基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部は欠損している。ブランティング以外の調整は認められない。基部に素材剥片の打面を残置している。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

120は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁の先端部側と基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面が180度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は玉髄である。

121 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

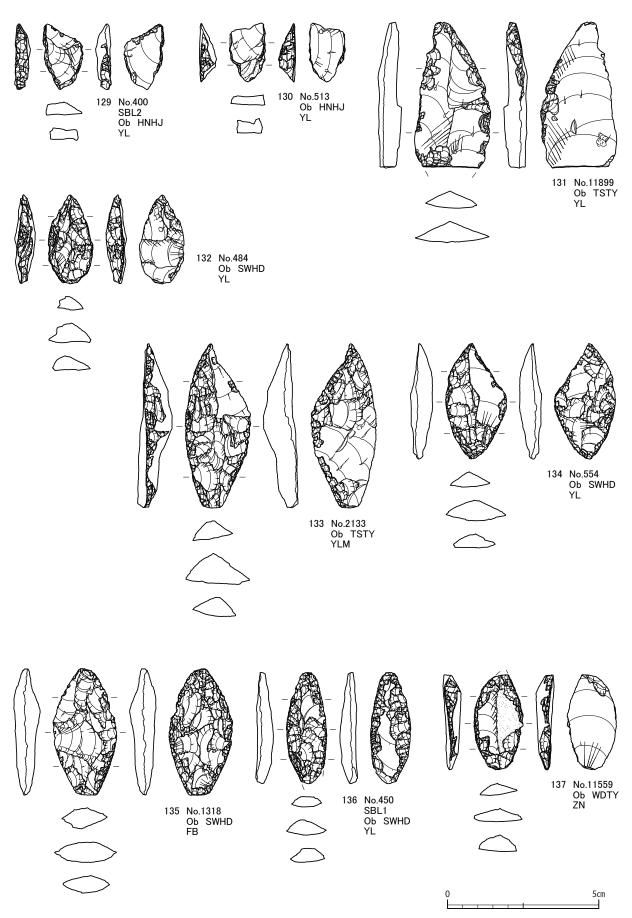
122 は縦長剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。右側縁は切断面である。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面が90度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

123 は縦長剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部は欠損する。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

124 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。基部に素材剥片の打面を残置している。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

125 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整としては主要剥離面側の端部に平坦な剥離が施される。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

I類 c (第 128 図 126 ~第 129 図 130) 二側縁加工のもののなかで、最大長が 3 cm未満のもの。 本類には 5 点が含まれる。第 128 図 126 は縦長剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは剥



第 129 図 第 VII文化層 西尾根出土石器実測図(2)

離面側と主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面が90度異なる方向の剥離痕によって構成されたものであった。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

127 は縦長剥片を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

128 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。いわゆる切出形石器で、台形様石器に近い。

第 129 図 129 は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁と右側縁の基部側に調整を加えている。ブランティングは剥離面と主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。いわゆる切出形石器で、台形様石器に近い。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

130は石刃を素材とし、調整加工としてブランティングを施して器体を整形しており、素材の左側縁の基部側と右側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側から行われ、刃部と接する部分に先端部を形成している。ブランティング以外の調整は認められない。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。剥離面に自然面が残る。刃部には微細な剥離痕が観察される。いわゆる切出形石器で、台形様石器に近い。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

Ⅲ類(第129図131) 欠損品

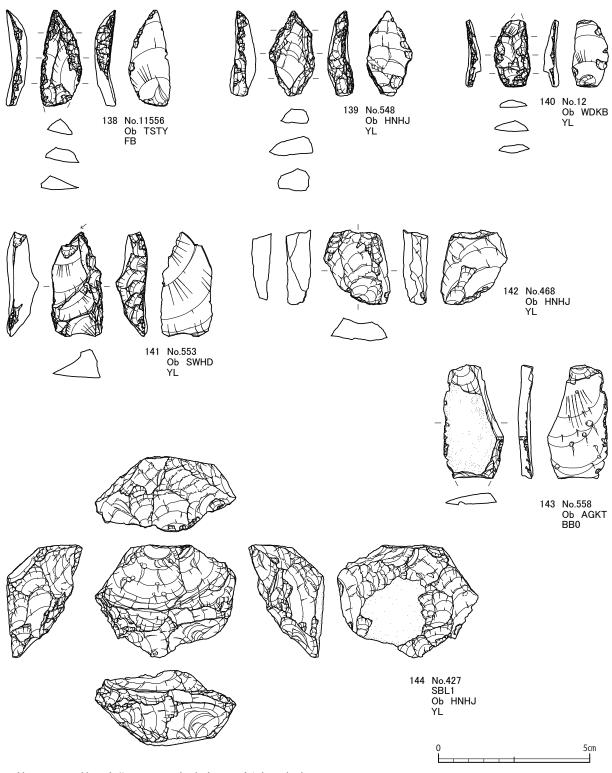
第 129 図 131 は石刃を素材として右側縁の先端部にブランティング加工を施し、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面ともに同じ方向の剥離痕によって構成されたものであった。刃部には微細な剥離痕が観察される。基部側を欠損している。石材は蓼科冷山産の黒曜石である。

尖頭器 (第 129 図 132 ~第 130 図 140)

11点が出土し、9点を図示した。これらは両面加工の尖頭器(132)、半両面加工の尖頭器(133~136)、周辺加工の尖頭器(137~139)に分類される。

第 129 図 132 は両面加工の尖頭器である。表裏面のほぼ器体全体に面的剥離を施しているもので、全体的なプロポーションは木葉形に整形されている。調整は面的調整で両側縁から中央に向かって施されている。表面と裏面の調整は比較的ていねいな状態が看取される。これらの調整に加えて、先端部の左側縁は裏面側からブランティング状の急斜度調整が加えられており、断面形はD字状を呈する。

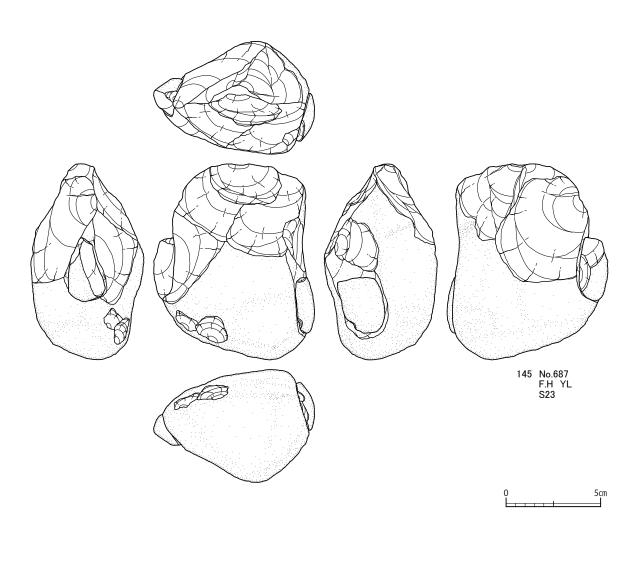
第 129 図 133 ~ 136 は半両面加工の尖頭器である。133 は器体の一部に素材剥片の剥離面を残している。全体的なプロポーションは左右非対称に整形され、側縁は素材剥片の湾曲が残る。調整は面的調整で右側縁に素材の鋭い縁辺を残しながら、中央に向かって施されている。表面と裏面の調整は同程度の剥離によって比較的ていねいな状態が看取され、断面形が D 字状を呈している。石材は蓼科冷山

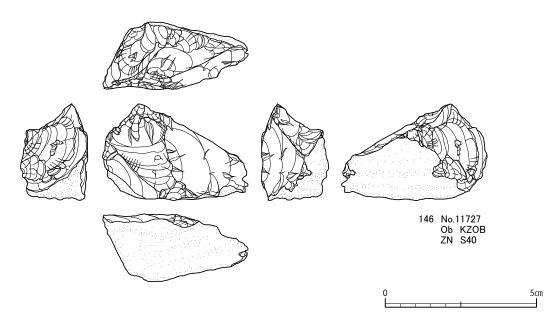


第 130 図 第 VII文化層 西尾根出土石器実測図 (3)

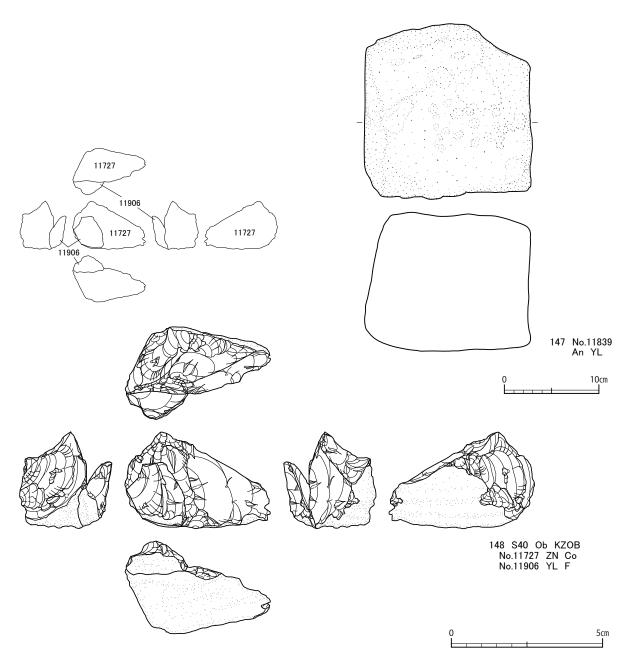
産の黒曜石である。134 は器体の一部に素材剥片の剥離面を残している。全体的なプロポーションは 左右非対称に整形され、側縁はほぼ直線的に整えられている。調整は面的調整で右側縁に素材の鋭い縁 辺を残しながら、中央に向かって施されている。表面と裏面の調整は同程度の剥離によって比較的てい ねいな状態が看取され、断面形が D 字状を呈している。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

135は器体の一部に素材剥片の剥離面を残している。全体的なプロポーションは左右対称に整形され、





第 131 図 第 VII文化層 西尾根出土石器実測図 (4)



第 132 図 第VII文化層 西尾根出土石器実測図(5)

側縁はほぼ直線的に整えられている。調整は面的調整で左側縁に素材の鋭い縁辺を残しながら、中央に向かって施されている。表面と裏面の調整は同程度の剥離によって比較的ていねいな状態が看取され、断面形がレンズ状を呈している。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。136 は器体の裏面に素材剥片の剥離面を残している。全体的なプロポーションはほぼ左右対称に整形され、側縁は直線的に整えられている。調整は面的調整で、中央に向かって施されている。表面と裏面の調整は同程度の剥離によって比較的ていねいな状態が看取され、断面形がレンズ状を呈している。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

第129図137~第130図139は周辺加工の尖頭器である。137は石刃を縦位に用いて周辺部に裏面側から調整を加え、左右がほぼ対称に整形されている。側縁はほぼ直線的に整えられている。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が一致する方向の剥離痕によって構成されており、

断面形は三角形を呈する。石材は和田鷹山産の黒曜石である。

第 130 図 138 は石刃を縦位に用いて周辺部に裏面側から調整を加え、左右非対称に整形されている。側縁は素材の湾曲を残している。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が一致する方向の剥離痕によって構成されており、断面形は三角形を呈する。石材は蓼科冷山産の黒曜石である。139 は石刃を縦位に用いて周辺部に裏面側からブランティング状の調整を加え、左右非対称に整形されている。側縁は素材の湾曲を残している。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主要剥離面の剥離痕が一致する方向の剥離痕によって構成されており、断面形は台形を呈する。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

第130図140は尖頭器の未製品である。石刃を縦位に用いて周辺部に裏面側から調整を加え、左右 非対称に整形されている。側縁は素材の湾曲を残している。素材を構成している剥離痕は、剥離面と主 要剥離面の剥離痕が一致する方向の剥離痕によって構成されており、断面形は三角形を呈する。先端部 を欠損し、基部に素材剥片の打面を残置している。石材は和田小深沢産の黒曜石である。

彫器 (第 130 図 141)

2点が出土し、1点を図示した。第 130 図 141 は素材となる石刃を折り取るように鋸歯状の調整を加え、この調整面を打面として素材の縁辺に沿って彫刀面を作出している。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

楔形石器 (第130図142)

1点が出土した。第130図142は肉厚の縦長剥片を横位に用い、下端部に線状に潰れた打面が形成され、縁辺に小さな剥離が重複して存在しており、その多くが階段状剥離になっている。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

使用痕のある剥片 (第 130 図 143)

2点が出土し、1点を図示した。第 130 図 143 は縦長剥片の左側縁の表面や裏面に使用痕と考えられる細かな剥離が認められる。石材は天城柏峠産の黒曜石である。

石核 (第 130 図 144 ~第 131 図 146)

4点が出土し、3点を図示した。第130図144は剥片剥離作業が二方向以上に観察される石核である。 亜角礫を素材として、正面に剥片剥離作業面が確認できる。正面の剥離作業面には上左下面を打面とする求心的な剥離痕が認められる。上左下面の打面は、正面の剥離作業面を打面として打面調整が行われている。正面の剥離作業面に残る剥離痕の観察から、作出された剥片は幅広い剥片と推測される。裏面には自然面が残る。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

第 131 図 145 (S23)・146 (S40) は石核素材と思われる礫に数回の剥離が加えられているもので、145 は石核というよりも礫器に近い。上面の自然面を打面として剥片剥離作業を行っており、剥片剥離作業面が正裏面に確認できる。剥離痕の観察から作出された剥片は幅広い剥片と推測される。石材はF.ホルンフェルスである。146 は下裏面に自然面が残る。石材は神津島恩馳島産の黒曜石である。

台石 (第 132 図 147)

1点が出土した。第132図147はサイコロ状の大形礫で、表面に打痕が認められることから台石とした。石材は安山岩である。

接合資料 (第 132 図 148)

剥片剥離技術に関わる1例を図示した。第132図148は石核1点(11727)と剥片1点(11906)の接合資料である。148の接合状態を見ると、角礫を石核素材とし、左面の打面から、正面を剥片剥離作業面として11906の剥片剥離作業を行う。石核は裏面や下面に自然面を残しており、剥片剥離工程の早い段階の剥離作業であることがわかる。

〈西尾根のまとめ〉

第四文化層の西尾根は、ナイフ形石器 26 点、尖頭器 11 点、掻器 1 点、彫器 2 点、楔形石器 1 点、加工痕のある剥片 4 点、使用痕のある剥片 2 点、石核 4 点、台石 1 点、剥片・砕片 183 点の合計 235 点で構成されている。このうち、ナイフ形石器 6 点、尖頭器 1 点、加工痕のある剥片 3 点、使用痕のある剥片 1 点、石核 2 点、剥片・砕片 79 点の合計 92 点は礫群・石器ブロックから出土しており、その他は単独出土である。文化層の示準的な器種はナイフ形石器であり、これに尖頭器、掻器、彫器、楔形石器等の各器種が伴うナイフ形石器石器群である。

石材組成は、第1石材が黒曜石170点(72%)、490.1g(5%)で出土点数の比率が高く、重量の比率が低い。この他、第2石材がF.ホルンフェルス56点(24%)、1,272.2g(14%)で出土点数の比率が低く、重量の比率が高い。また第3石材はガラス質黒色安山岩5点(2%)、25.3g(0.3%)であった。黒曜石の原産地は伊豆・箱根系が101点(59%)、399.8g(82%)と比率が高く、信州系が24点(14%)、77.3g(16%)と低かった。

剥片剥離技術は、ナイフ形石器や尖頭器など黒曜石や F. ホルンフェルスを素材とする石器類の観察から、石刃・縦長剥片を目的としていたと思われる。そして、石器類の多くが石刃や縦長剥片を素材としていることから、縦長剥片剥離技術を技術基盤としてこれらの剥片類を生産していると考えられる。石核は剥片剥離作業が二方向以上に観察される石核が 1 例確認された。これらの剥片剥離作業面を観察すると、幅広い縦長剥片を作出していたと思われる。この他、礫や剥片に数回の剥離を行っているものが 2 例認められ、幅広な縦長剥片を作出していたと思われる。接合資料は角礫を石核素材として、数回の剥片剥離作業を行う接合例が確認された。

(8) 第2||文化層の遺構と遺物の分布状況(第133図)

休場層下部黒色帯~富士黒土層では、細石刃、細石刃石核、ナイフ形石器、尖頭器が出土している。そのうちナイフ形石器と尖頭器は休場層を中心として出土し、細石刃と細石核は漸移層を中心に出土していた。また、示準的な石器を石材別と黒曜石の産地別に分類すると、ナイフ形石器と尖頭器は同一の石材や同一の黒曜石産地を選択し、細石刃と細石刃石核は神津島恩馳島産と蓼科冷山産の黒曜石を選択しており、水平分布も異なっていた。このような点を踏まえて、ナイフ形石器石器群と細石刃石器群を分離し、細石刃石器群を第四文化層として抽出した。

第四文化層の遺物は東尾根・中央谷・西尾根に分布しており、単独出土の礫 22 点と単独出土の石器 99 点からなる合計 121 点が検出された。

①遺 物

第1位文化層の石器は、単独出土した 99 点によって構成される。石器群の内訳は細石刃 61 点、細石 刃石核 15 点、削器 2 点、剥片・砕片 21 点であった。

細石刃 (第 134 図 1 ~第 135 図 60)

61点が出土し、60点を図示した。これらの細石刃は残存状況により、完形、打面部~中間部、中間部、中間部~末端部に分類される。

I類(第134図1~5) 完形

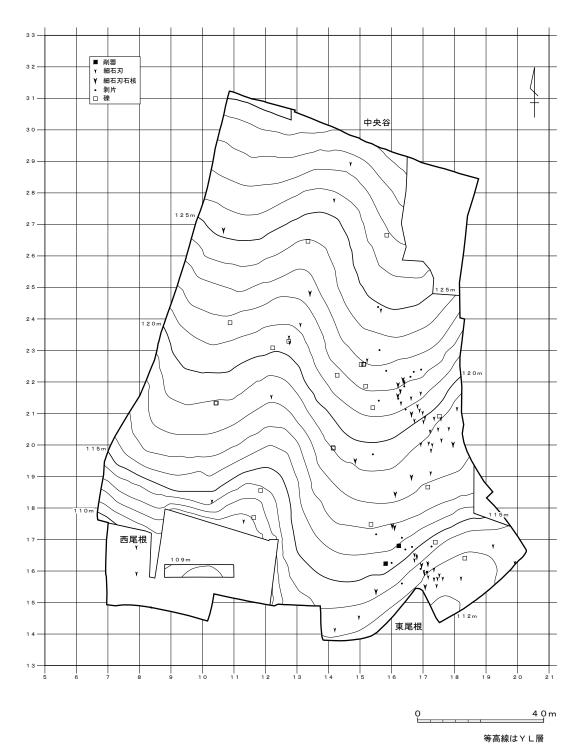
ほぼ完形の状態で出土したもので、5点が含まれる。これは細石刃総点数の約8.2%である。調査時や細石刃剥離時に一部を欠くものも含んでいる。このなかには、細石刃剥離が細石刃石核の下端まで抜けずヒンジフラクチャーとなっているもの(4)、細石刃の下端にまで剥離が抜け、細石刃の下端に細石刃石核の下面を取り込んだ状態にあるもの(2)、円錐形の細石刃石核のように石核下部が先細りする形状のものから剥離されたことが推定されるもの(1・3)、剥離方向と直交するような平らな末端が形成されるもので、細石刃剥離が剥片剥離作業面の途中で抜け、細石刃石核の下端まで達しなかった剥離によって作出されたと思われるもの(5)がある。これらのなかで最大のものが第134図1で2.3 cm、最小のものが4で1.2cmを測る。最大の幅は0.7cm、最小の幅は0.6cmである。石材は1が諏訪星ケ台産、2~4が神津島恩馳島産、5が蓼科冷山産の黒曜石であった。

Ⅱ類(第134図6~第135図35) 打面部~中間部

30点が確認され、細石刃総点数の約49.2%を占めている。これらは細石刃の末端側を切断面で形成している。このなかで最大のものは、第134図16で2.5cm、最小のものは14で0.9cmを測るが、平均すると1.6cmの大きさとなる。これらの細石刃を構成している剥離面と主要剥離面を見ると、すべて上設打面からの剥離で構成されており、剥片剥離方向を一方向に限定した単設打面の細石刃石核から作出されたものと思われる。またこれらの打面を観察すると、調整打面を持つ細石刃石核から剥離された

石	器 種材	台形様石器	ナイフ形石器	尖頭器	掻器	削器	彫器	楔形石器	石錐	ハンマー	磨石	敲石	台石	原石	加工痕のある	使用痕のある	石刃	剥片	砕片	石核	細石刃	細石刃石核	<u>=</u> †
黒曜石	和田フヨーライト																				1		1
	和田土屋橋西																				1		1
	諏訪星ヶ台																				1		1
	蓼科冷山																				6	4	10
	神津島恩馳島					2												19	2		45	11	79
	不可他																				7		7
ā+						2												19	2		61	15	99
																						22	

第 10 表 第 WII 文化層 出土石器一覧表

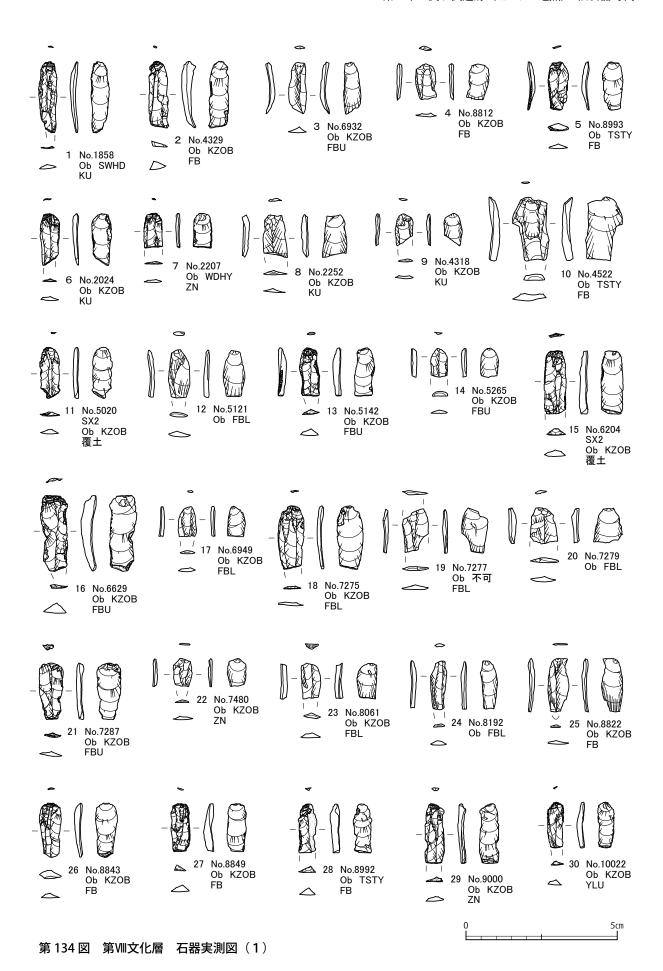


第 133 図 第VIII文化層 遺物分布図

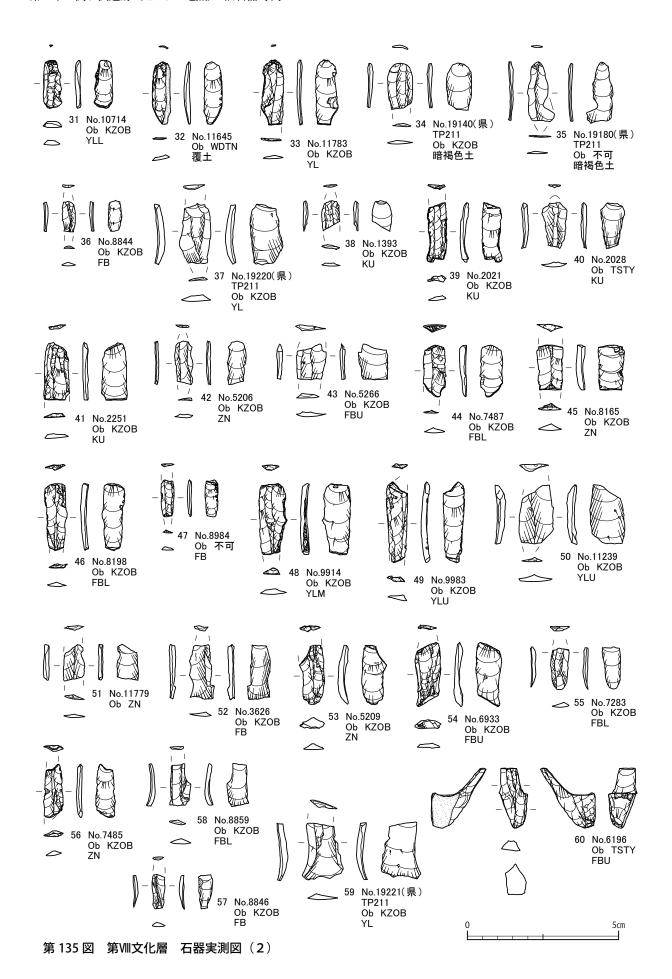
ものであった。石材は7が和田フヨーライト産、 $10 \cdot 28$ が蓼科冷山産、32 が和田土屋橋西産、 $12 \cdot 19 \cdot 20 \cdot 24 \cdot 35$ が不可他で、それ以外は神津島恩馳島産の黒曜石であった。

Ⅲ類(第135図36~51) 中間部

16 点が確認され、細石刃総点数の約 26.2%を占めている。これらは打面部と末端部の両端を欠くもので、双方の端が切断面で構成されるものが大部分を占める。このなかで最大のものが、第 135 図 49で 2.6cm、最小のものが 38で 1.0cmを測るが、平均すると 1.7cmの大きさとなる。これらの細石刃を構



-191-



成している剥離面と主要剥離面を見ると、上設打面を形成した単設打面の細石刃石核から作出されたものと思われる。石材は 40 が蓼科冷山産、 $36 \cdot 47 \cdot 51$ が不可他で、その他は神津島恩馳島産であった。 **IV類** (第 135 図 $52 \sim 60$) 中間部~末端部

9点が確認され、細石刃総点数の約 14.8%を占めている。本類は中間部~末端部にかけて依存していたと考えられるものである。これらのなかには末端の一部を欠くものがある。このなかで最大のものが、第 135 図 53 で 1.9cm、最小のものが 55 で 1.4cmを測るが、平均すると 1.6cmの大きさとなる。これらの細石刃を構成している剥離面と主要剥離面を見ると、上設打面を形成した単設打面の細石刃石核から作出されたものと思われる。60 は細石刃の末端に下面を取り込んで剥離されたものである。石材は 52 ~ 59 が神津島恩馳島産、60 が蓼科冷山産の黒曜石であった。

細石刃石核 (第 136 図 61 ~第 137 図 75)

15点が出土し、すべてを図示した。これらは剥片剥離作業面や石核調整の仕方、打面の位置等により6類に分類される。

Ⅰ類(第 136 図 61 ~ 65) 扁平な素材、厚みのある剥片、剥片状に整形した薄手の原形によって 細石刃石核を製作したもの。

5点が含まれる。素材の小口面に剥片剥離作業面を設定して、正面で剥片剥離作業が行われている。 これらの側面には素材剥片の剥離面、主要剥離面、節理面、自然面が残る。裏面などに調整剥離が認め られる。石材は第136図63が蓼科冷山産、その他が神津島恩馳島産の黒曜石であった。

第136図61は厚みのある剥片を素材として細石刃石核を形成している。素材の小口面に剥片剥離作業面を設定し、正面で細石刃剥離が行われている。打面は複剥離打面で剥片剥離作業面側から打面調整を施している。右側面は素材剥片の自然面、左側面は剥離面が観察できる。裏面の剥離は側面からの調整剥離である。

62 は厚みのある剥片を素材として細石刃石核を形成したものである。素材の小口面に剥片剥離作業面を設定し、正面で細石刃剥離が行われている。打面は複剥離打面で左右の側面側から入念な打面調整を施している。右側面と左側面には素材剥片の主要剥離面と剥離面が残る。裏面に加えられている剥離は側面からの調整剥離である。

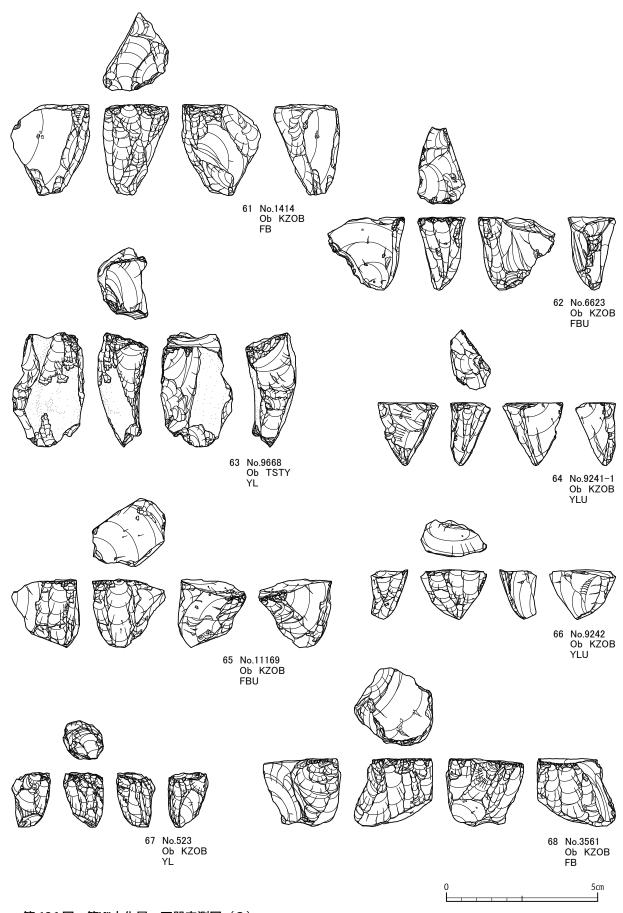
63 は扁平な剥片を素材として細石刃石核を形成したものである。素材の小口面に剥片剥離作業面を設定し、正面から左側面にかけて細石刃剥離が行われている。打面は単剥離打面で左側面側から打面調整を施している。右側面は素材の節理面、左側面は自然面が観察できる。右側縁と裏面に加えられている剥離は調整剥離である。

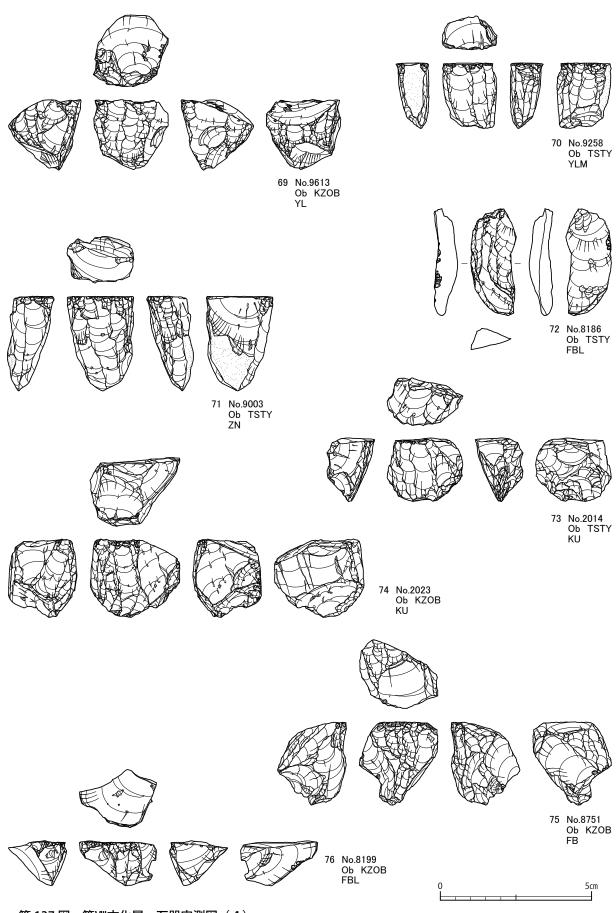
64 は厚みのある剥片を素材として細石刃石核を形成したものである。素材の小口面に剥片剥離作業面を設定し、正面で細石刃剥離が行われている。打面は複剥離打面で右側面側から打面調整を施している。右側面には素材剥片の剥離面、左側面には主要剥離面が残る。裏面に加えられている剥離は調整剥離である。なお、細石刃剥離は現打面以前に行われた剥離痕が観察できることから、打面再生剥離を加えた可能性が高い。

65 は剥片状に整形した厚手の原形を素材として細石刃石核を形成したものである。剥片剥離作業面が正面に形成されている。打面は単剥離打面で打面調整が認められない。右側面には素材剥片の剥離面、左側面には主要剥離面が残る。裏面に加えられている剥離は調整剥離である。

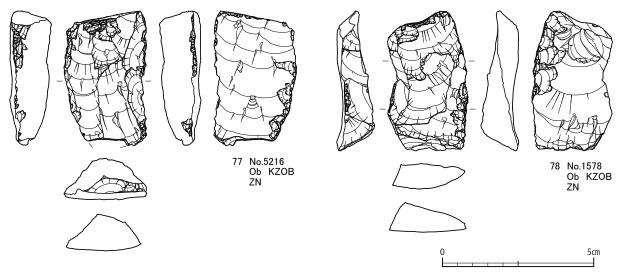
Ⅱ類(第136図66) 平らな形状で、面積の広い面を剥片剥離作業面としたもの。

1点が出土した。剥片剥離作業面が正面から左右の側面にかけて形成される。石核調整は認められない。第136図66は平らな形状の細石刃石核で、剥離作業面が正面と左側面にかけて形成されている。 打面は単剥離打面で打面調整は認められない。裏面には素材剥片の主要剥離面が残る。細石刃剥離は、





第 137 図 第 3 文化層 石器実測図 (4)



第 138 図 第Ⅲ文化層 石器実測図(5)

現打面より以前に行われた剥離痕が観察できることから、打面再生剥離を加えた可能性が高い。石核調整は認められない。石材は神津島恩馳島産の黒曜石である。

Ⅲ類(第136図67・68) 剥片剥離作業面が正面と側面など二面に形成されるもの。

2点が出土した。ともに神津島恩馳島産の黒曜石を石材とする。第136図67は剥片状に整形した 薄手の原形を素材として細石刃石核を形成したものである。剥片剥離作業面が正面と右側縁に形成され ている。打面は複剥離打面で剥離作業面側から打面調整を施している。左側面には素材剥片の剥離面が 残る。裏面に加えられている剥離は調整剥離である。

68 は剥片状に整形した厚手の原形を素材として細石刃石核を形成したものである。剥片剥離作業面が正面と裏面に形成されている。打面は単剥離打面で打面調整が認められない。左面と右面に加えられている剥離は調整剥離である。下面には素材剥片の自然面が残る。

IV類(第137 図69) 細石刃石核の正面と裏面に剥片剥離作業面を形成するもの。

1点が出土した。第137図69は剥片状に整形した厚手の原形を素材として細石刃石核を形成したもので、剥片剥離作業面が正面と裏面に形成されている。打面は剥離作業面側から剥離された調整打面で、入念な打面調整を施している。右側縁と左側縁には素材剥片の剥離面が残る。なお、細石刃剥離は現打面以前に行われた剥離痕が観察できることから、打面再生剥離を加えた可能性が高い。石材は神津島恩馳島産の黒曜石である。

Ⅴ類(第137図70~72) 剥片剥離作業面が正面と側面など三面に形成されるもの。

3点が出土した。第137図70はやや厚みのある剥片を素材として細石刃石核を形成したものである。 正面と右側面と裏面で細石刃剥離が行われている。打面は単剥離打面で打面調整が認められない。左面 は素材剥片の自然面が残る。石材はすべて蓼科冷山産の黒曜石である。

71 (72 と接合) は剥片状に整形した厚手の原形を素材として細石刃石核を形成したものである。剥 片剥離作業面が正右左面に形成されており、打面は単剥離打面で打面調整が認められない。裏面に加え られている剥離は調整剥離である。裏面には素材剥片の自然面が残る。

VI類(第 137 図 73 ~ 75) 両設打面のもの。

3点が出土した。第137図73は剥片状に整形した厚手の原形を素材として細石刃石核を形成した ものである。剥片剥離作業面が正面に形成されている。打面は両設打面で、上設打面と下設打面ともに 打面調整が行われる。右側面と左側面は調整剥離である。石材は蓼科冷山産の黒曜石であった。 74 は剥片状に整形した厚手の原形を素材として細石刃石核を形成したものである。剥片剥離作業面が正面に形成されている。打面は両設打面で、上設打面と下設打面ともに打面調整は認められない。右側面と左側面の剥離は調整剥離で、裏面には節理面が残る。石材は神津島恩馳島産の黒曜石である。

75 は剥片状に整形した厚手の原形を素材として細石刃石核を形成したものである。剥片剥離作業面が正面と裏面に形成されている。打面は両設打面で、上設打面と下設打面ともに打面調整は認められない。右側面と左側面の剥離は調整剥離である。なお、下面の細石刃剥離は現打面以前に行われた剥離痕が観察できることから、打面再生剥離を加えた可能性が高い。石材は神津島恩馳島産の黒曜石である。

打面再生剥片 (第 137 図 76)

第 137 図 76 は打面再生剥片である。細石刃石核の打面を再生した剥片で、細石刃の剥片剥離作業面が残る。石材は神津島恩馳島産の黒曜石である。

削器 (第138図77・78)

2点が出土した。第 138 図 77 は石刃を素材として右側縁に刃部が作成されている。刃部の調整状態はやや粗く、大きめの剥離で刃部の形状を整形している。78 は石刃を素材として右側縁に刃部が作成されている。調整状態はやや細かく、小さめの剥離で刃部の形状を整形している。ともに石材は神津島恩馳島産の黒曜石であった。

〈まとめ〉

第四文化層の石器群は、東尾根・中央谷・西尾根に分布しており、単独出土した 99 点の石器が検出された。これらは、第四文化層のナイフ形石器石器群のなかから細石刃石器群を抽出したものであり、平面分布や垂直分布で集中地点が認められない単独出土の石器群である。

石器組成は細石刃と細石刃石核を組成する細石刃石器群である。細石刃は完形 5 点、打面部~中間部 30 点、中間部 16 点、中間部~末端部 9 点の各部位が認められた。細石刃石核は剥片剥離作業面や打面の位置によって細分したが、「野岳・休場型」(鈴木 1971)の範疇に含まれるものであった。

石材組成はすべて黒曜石で99点(100%)、232.4g(100%)を占める。黒曜石の産地は、神津島恩馳島産79点、蓼科冷山産10点、諏訪星ヶ台産1点、和田フヨーライト産1点、和田土屋橋西産1点、不可他7点である。石器石材は細石刃、細石刃石核、削器ともに黒曜石となっている。細石刃の黒曜石の産地は神津島恩馳島産45点、蓼科冷山産6点、諏訪星ヶ台産1点、和田フヨーライト産1点、和田土屋橋西産1点、不可他7点である。細石刃石核の黒曜石の産地は神津島恩馳島産11点、蓼科冷山産4点である。

細石刃石核には扁平な素材、厚みのある剥片、剥片状に整形した薄手の原形によって細石刃石核を製作したもの、平らな形状で面積の広い面を剥片剥離作業面としたもの、剥片剥離作業面が正面と側面など二面に形成されるもの、細石刃石核の正面と裏面に剥片剥離作業面を形成するもの、剥片剥離作業面が正面と側面など三面に形成されるもの、両設打面のものが認められた。(前嶋)

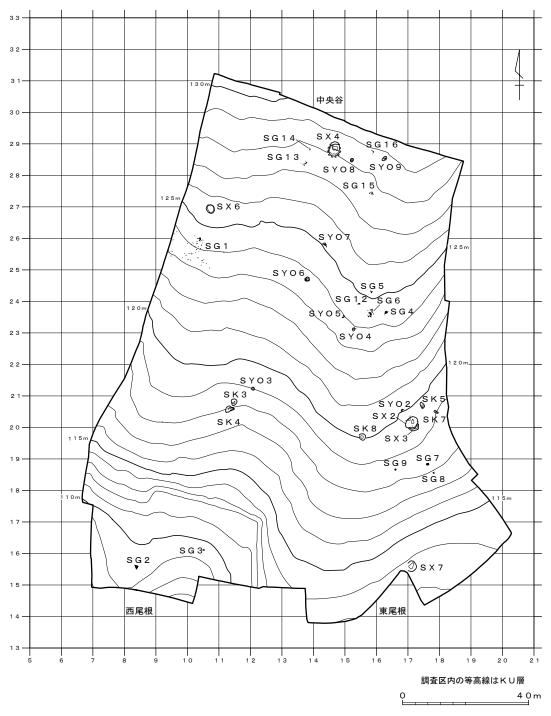
第3節 縄文時代の遺構と遺物

(1) 遺構と遺物の分布

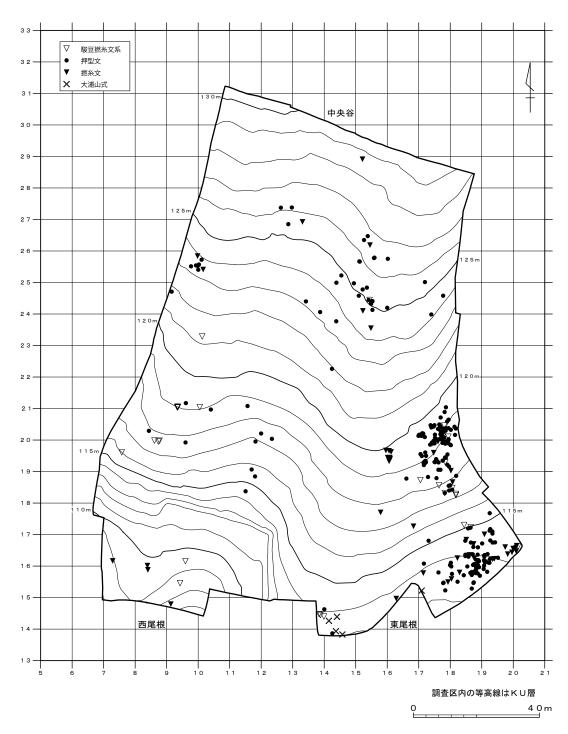
①遺構の分布 (第139図)

遺構は正体不明遺構5基、土坑5基、集石14基、焼土址8基が検出された。大半の遺構が等高線の間隔が広い傾斜の緩やかな場所である東西の尾根上や縁辺部、中央谷の谷頭に立地している。

正体不明遺構は中央谷の谷頭周辺に1基(SX4)と西尾根上標高125 m付近に1基(SX6)、東 尾根上標高120 m付近に2基(SX2・3)、と東尾根南端標高114 m付近に1基(SX7)が分布

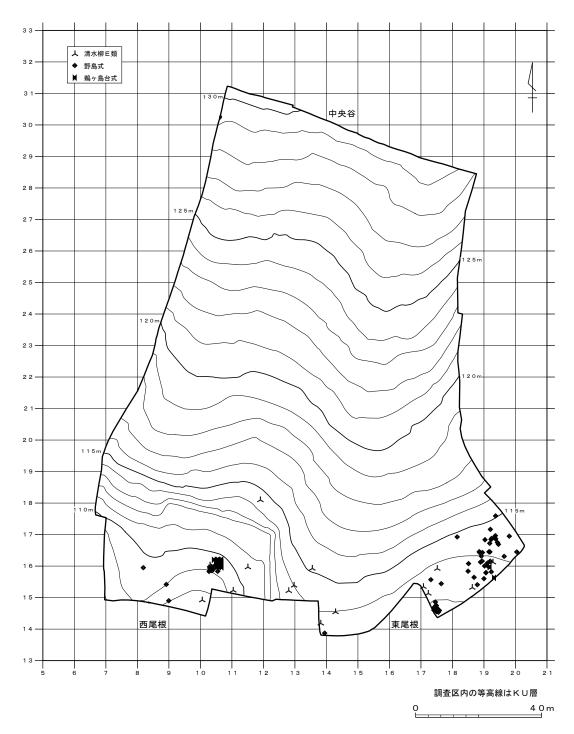


第 139 図 縄文時代 遺構分布図



第 140 図 縄文時代 土器分布図 (第 1 群)

している。土坑は中央谷内部の2基(SK3・4)と、東尾根上の3基(SK5・7・8)が標高120 m前後の位置に分布している。集石は東西尾根上と中央谷の谷頭に集中して分布する傾向が見られ、東尾根上標高118 m付近の016・017 - 018 グリッドで3基(SG7~9)、標高125m付近の015 - 023 グリッド周辺で4基(SG4~6・12)、西尾根南端の008 - 015、010 - 016 グリッドで2基(SG2・3)、中央谷谷頭周辺の標高128 m付近に4基(SG13~16)が存在している。なお、第1号集石については西尾根上標高124 m付近の010 - 025 グリッドで単独に存在する。焼土址は中央谷内の標高119~128 mにかけて4基(SYO3・6~8)と、東尾根上の標高120~129 mにか



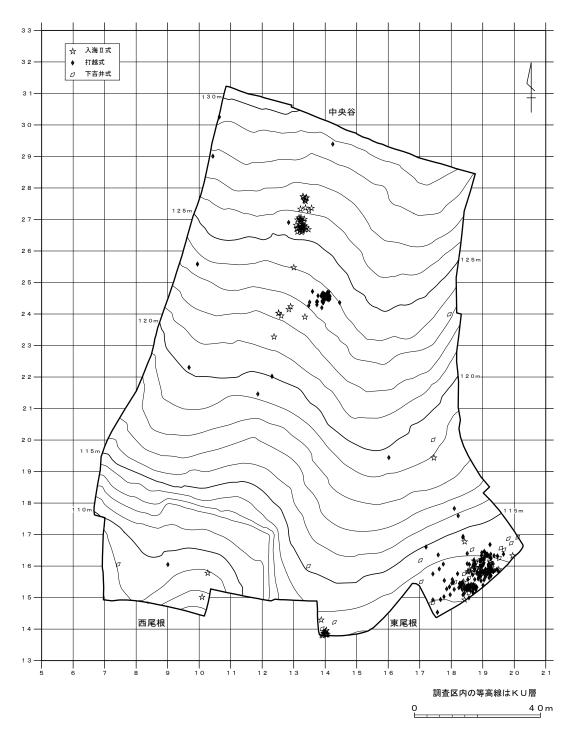
第141図 縄文時代 土器分布図 (第Ⅱ群1~3類)

けて4基(SYO2・4・5・9)がまばらに分布している。

②土器の分布 (第 140 ~ 146 図)

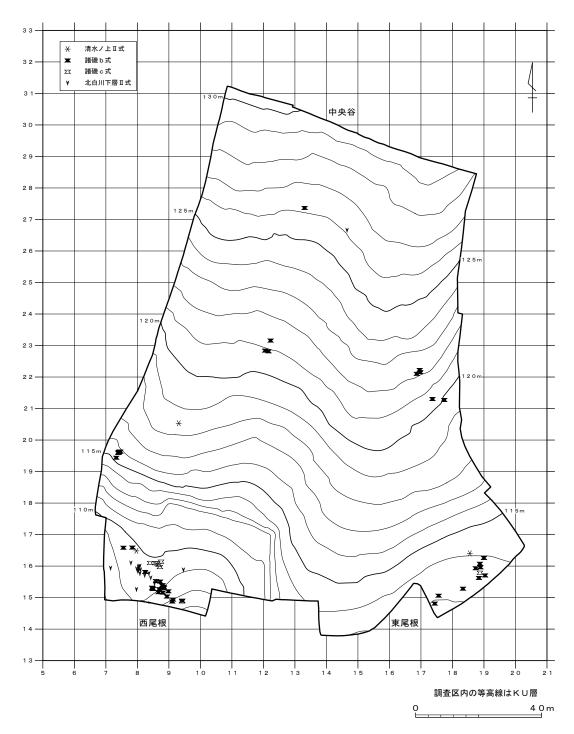
土器は早期前半〜晩期初頭にかけて多時期に及んでいる。全体の分布状況としては、等高線の間隔が広くなる勾配が比較的緩やかな位置に集中する傾向が見られるものの、時期ごとに分布の特徴が異なっている。全体的には標高 120 mより低い位置に濃い分布状況が見られる。

時期別に土器の分布様相を見ていくと、早期前半の土器では駿豆撚糸文系土器、大浦山式、押型文土器、撚糸文土器が出土しており、駿豆撚糸文系土器は標高 115 ~ 120 mの間の西尾根上と東尾根縁辺



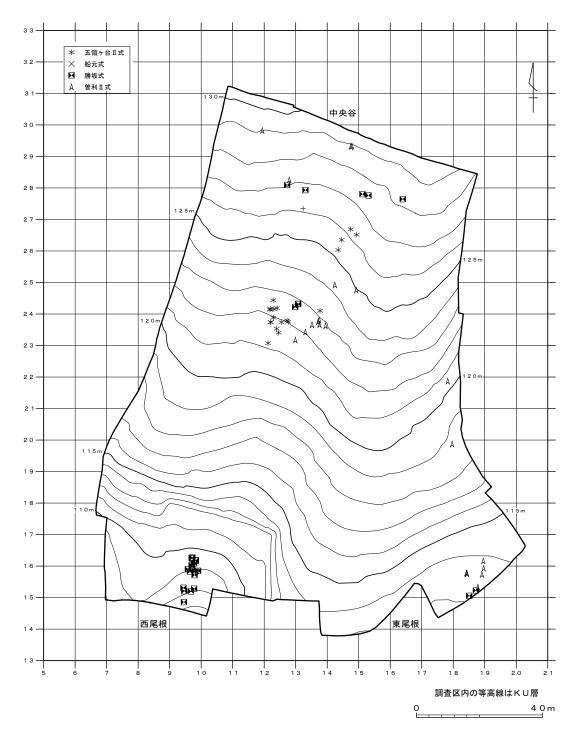
第142図 縄文時代 土器分布図 (第Ⅱ群4~6類)

部で大半が出土している。また、駿豆撚糸文系土器に併行する関東系土器の大浦山式は、調査区南側の 014-014 グリッド付近に集中する。押型文土器は調査区全体に分布するものの、ある程度のまとまりが見られ、特に調査区南東部の東尾根南側縁辺部において分布密度が高い。後述する押型文土器の分類で a 種とした樋沢式段階のものは出土点数が少なく、標高 $117\sim120$ mラインの東西尾根上に散在的に分布している。 b 種とした細久保式段階のもののうち、楕円押型文は全体にまとまりなく分布するが、山形文および異種併設文は 017-020 グリッドを中心とする調査区東側の標高 $117.5\sim120$ m の間に集中する傾向が見られる。 c 種とした b 種の粗大な楕円押型文土器は 018-016 グリッド付近



第 143 図 縄文時代 土器分布図 (第Ⅲ群)

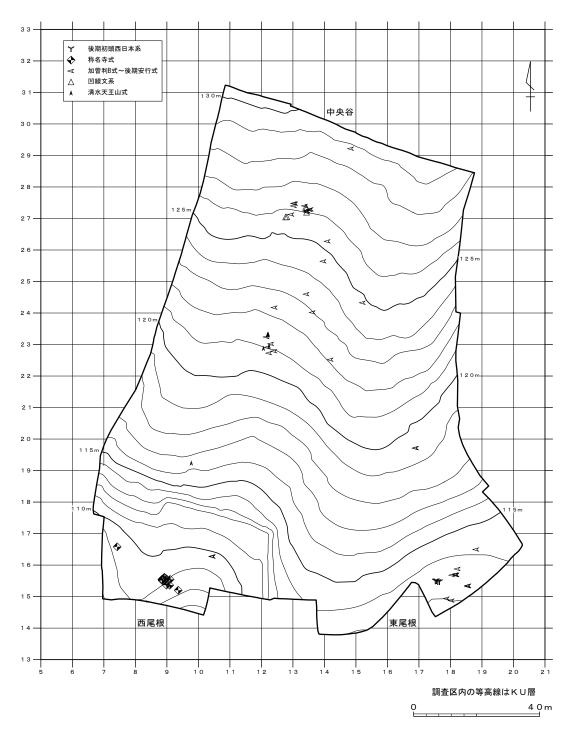
を中心とする調査区南東角の標高 115 m以下の範囲を中心に分布している。撚糸文土器は中央部から 西側を除いた範囲に分布しており、特に南東部の平坦面において濃い分布状況が見られる(第 140 図)。 早期後半~前期初頭にかけての土器は、清水柳 E 類土器、野島式、鵜ヶ島台式、入海 II 式、打越式、 下吉井式が出土しており、入海 II 式と打越式を除いて調査区南側の標高 115 m以下の比較的平坦とな る範囲にのみ分布している。清水柳 E 類土器は散在的でまとまりがない。野島式は南東部と南西部に濃 い分布状況が見られる。鵜ヶ島台式は中央谷内の 010 - 015・016 グリッド付近に集中する。入海 II 式は調査区南端で、西尾根上 013・014 - 013 グリッドおよび調査区南端の 018 - 015 グリッド周辺、



第 144 図 縄文時代 土器分布図 (第Ⅳ群)

打越式は $018 \cdot 019 - 015$ グリッド周辺に濃い分布箇所が存在するが、両土器はさらに調査区中央に位置する中央谷の谷頭付近にあたる $013 \cdot 014 - 024 \sim 028$ グリッドにも集中箇所が存在する。下吉井式は調査区南東部である $018 \cdot 019 - 015$ グリッド周辺において集中的に分布している(第 $141 \cdot 142$ 図)。

前期の土器では前半の清水ノ上II式、後半の諸磯b式、諸磯c式、北白川下層II式が出土している。いずれも出土点数は少ないが、このなかで比較的点数の多い諸磯b式については東西尾根の南端である 008-015 グリッドと 018-015 グリッド周辺に若干、濃い集中箇所が見られる。諸磯c式と北白

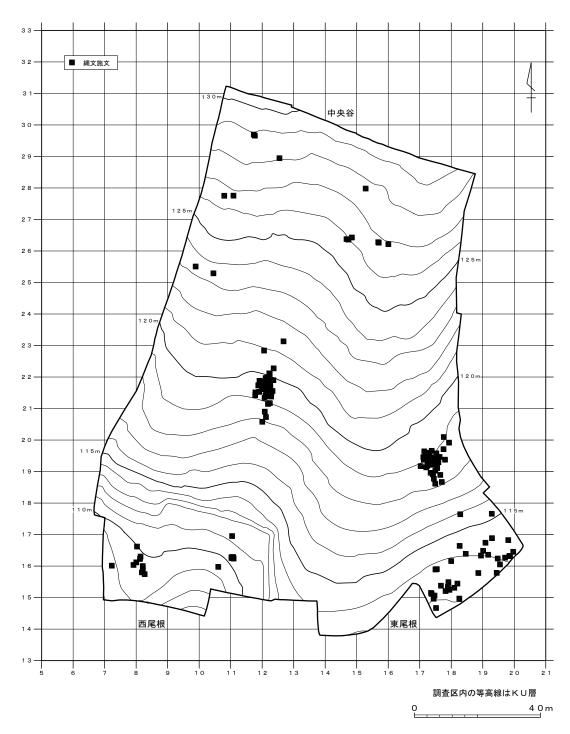


第 145 図 縄文時代 土器分布図 (第 V 群)

川下層 Ⅱ 式は 008 - 015・016 グリッド付近で大半が出土している (第 143 図)。

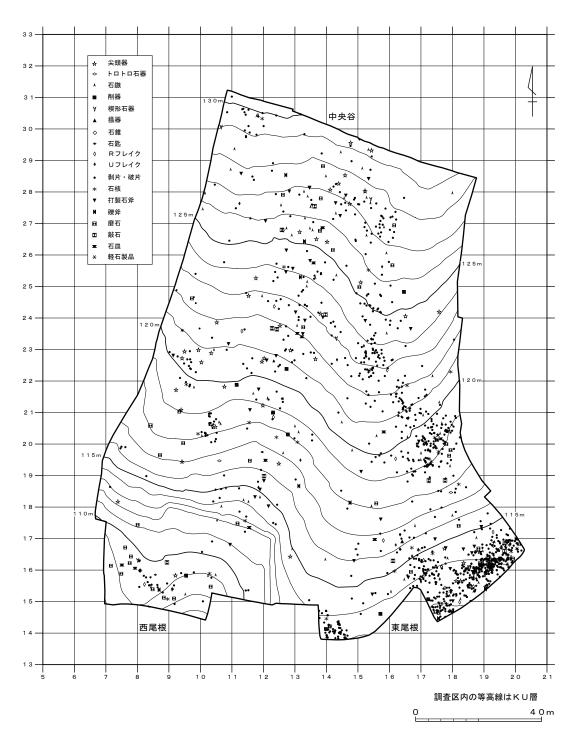
中期の土器は五領ヶ台 Π 式、船元式、勝坂式、曽利 Π 式が出土している。五領ヶ台 Π 式は中央谷内の 012-023 グリッド周辺から北側にかけて分布している。勝坂式は調査区北側と南側に分布域が分かれているが、特に東尾根南側の 009-015 グリッド周辺に濃い分布が見られる。曽利 Π 式は調査区北西-南東ラインの北側(北東側)に分布しており、中央谷内である 013-023 グリッドおよび西尾根上の 018-015 グリッド周辺に集中している(第 144 図)。

後期~晩期初頭の土器では中津式に相当する後期初頭西日本系土器、称名寺式、後期後半の加曽利B



第 146 図 縄文時代 土器分布図 (第 VI群)

式~後期安行式にかけてのもの、東海西部系の土器と推測される凹線文系土器、清水天王山式が出土している。後期初頭西日本系土器(中津式)は、東尾根南東部の017 - 015 グリッドに集中して出土している。称名寺式は西尾根上の008 - 015 グリッド周辺に集中する。加曽利B式~後期安行式にかけての土器は、中央谷の中央から北側にかけてと東尾根南東部に分布域を分けて出土している。ただし、異形台付土器についてはこれらの分布域とは離れた010 - 016 グリッドで単独出土している。凹線文系土器は中央谷の谷頭周辺の013 - 027 グリッド付近、清水天王山式は中央谷中央部の012 - 023 グリッドに集中するが出土点数は少ない(第145 図)。

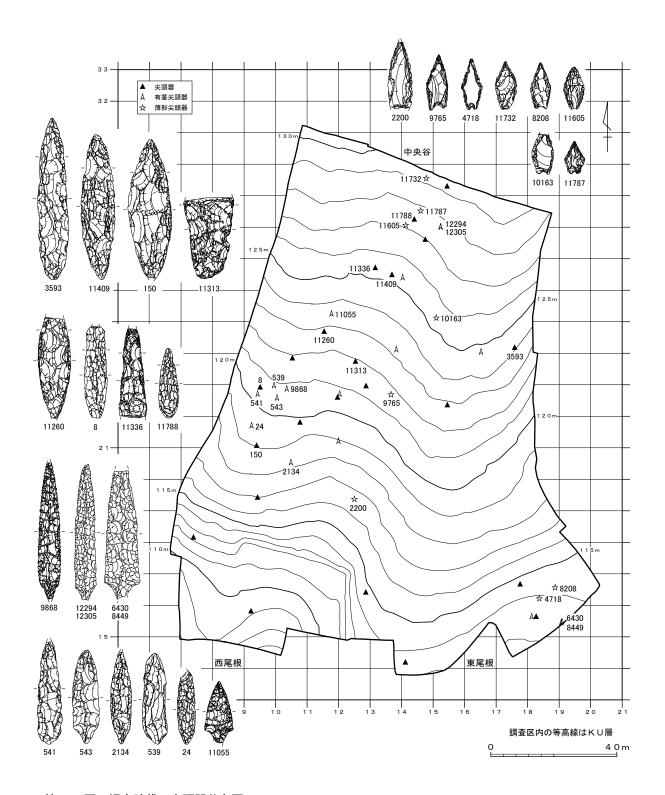


第 147 図 縄文時代 石器分布図

③石器の分布 (第147・148 図)

石器は非常に様々な器種が出土しており、出土量も豊富である。分布状況を見ると、西尾根、東尾根、中央谷のすべてに分布しているが、特に東尾根の南端部および標高 119 ~ 122 m付近にかけてと、中央谷全体に濃い分布が認められる。

出土した石器のなかには多数の尖頭器が含まれており、なかでも草創期に比定されると考えられる尖頭器は完形に近い状態のものが多く出土している。また、薄く剥がれる性質を持つ石材を使用した、いわゆる薄形尖頭器も一定量含まれていた。これらの分布を見ると、西尾根の標高 119 ~ 121 m付近、

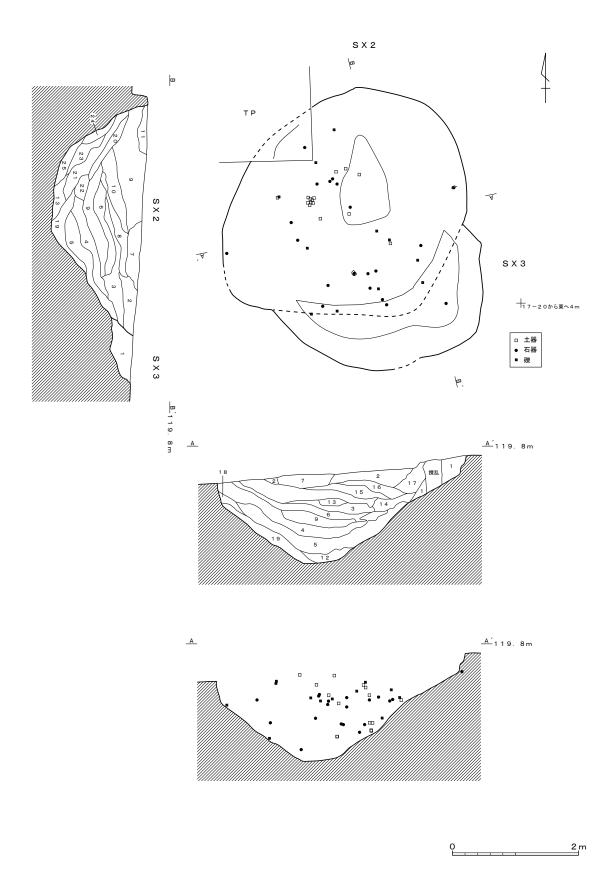


第 148 図 縄文時代 尖頭器分布図

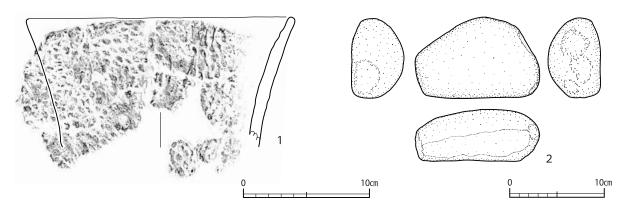
東尾根の南端部、そして中央谷の調査区中央より北側にまとまった分布が見られる。なかでも、中央谷では多くの尖頭器が出土しており、特に谷頭付近で分布が集中している。

(2)遺構

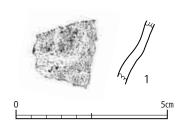
縄文時代に属すると考えられる遺構は、正体不明遺構5基、土坑5基、焼土址8基、集石14基である。



第149図 第2号・第3号正体不明遺構実測図



第 150 図 第 2 号正体不明遺構出土遺物



第 151 図 第 4 号正体不明遺構出土遺物

①正体不明遺構

用途不明の遺構について正体不明遺構として扱った。縄文 時代に属すると推測されるものが5基確認されている。

第2号・第3号正体不明遺構(第149図)

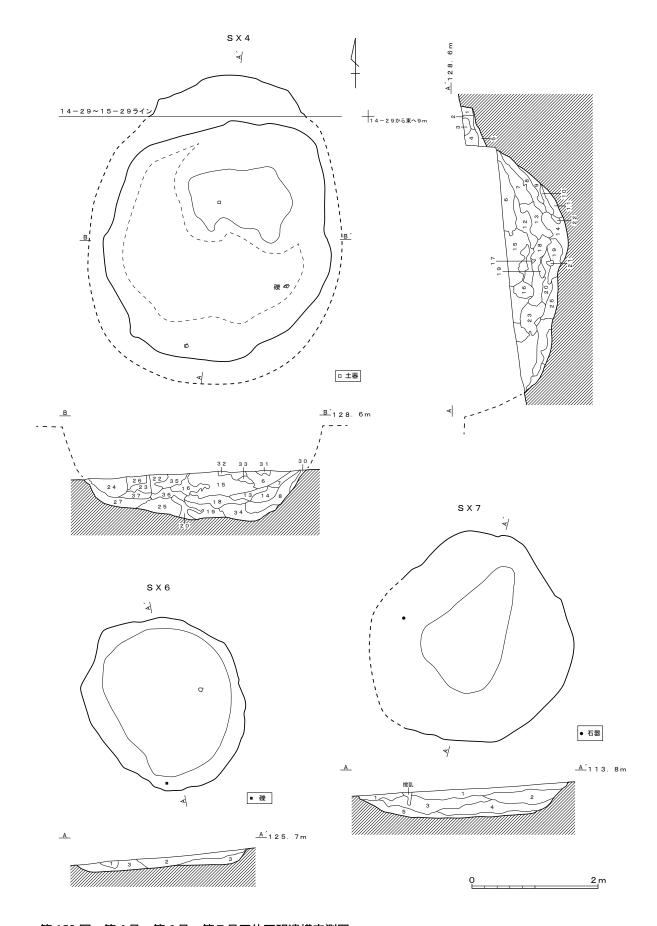
F B 層において第2号・第3号正体不明遺構が017-020 グリッドで重複して検出された。

第2号正体不明遺構は北東-南西方向に長軸4m、北西-南東方向に短軸3.6mの円形に近い平面形状となっており、

深さは最大で 1.4 mを測り、断面形状は底部の一部が平坦となる擂鉢状を呈するものと推測される。ただし、断面形状や規模を踏まえると、東野遺跡(駿東郡長泉町)におけるような大形の陥穴と類似する形状となっていることから、本遺構の掘削が足りていない可能性がある。

第11表 第2号正体不明遺構土層一覧表

層位	色 調		土 層 の 特 徴		
1	暗褐色	7.5YR3/3	arphi 5mm 以下橙色スコリア 15%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 15%、 $arphi$ 1mm 以下炭化物 1% 含む。締まりがない。		
2	黒褐色	7.5YR2/2	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 1%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 1%、 $arphi$ 5mm 大炭化物 1% 含む。やや締まりがない。		
3	黒褐色	7.5YR2/2	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 2%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 1% 含む。やや締まりがない。		
4	黒褐色	7.5YR2/2	φ 5mm 大橙色スコリア 1%、 φ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 3%、 φ 5mm 大 7.5YR3/3 ブロック 5% 含む。やや締まりがある。		
5	暗褐色	7.5YR3/3	arphi 1mm 以下橙色スコリア 1%、 $arphi$ 1mm 以下炭化物 1% 含む。やや締まりはあるが、粘性はない。		
6	暗褐色	7.5YR3/3	φ 5mm 以下橙色スコリア 15%、φ 5mm 以下黒色スコリア 5%、φ 5mm 以下 10YR3/4 土粒 5% 含む。スコリア堆積層。		
7	黒褐色	7.5YR3/2	arphi 5mm 大橙色スコリア 5%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 1% 含む。茶の根が混入。		
8	暗褐色	7.5YR3/3	arphi 5mm 以下橙色スコリア 10%、 $arphi$ 5mm 以下黒色スコリア 1% 含む。締まりがない。		
9	暗褐色	7.5YR3/3	φ 1 ~ 2mm 橙色スコリア 15%, φ 1mm 以下白色パミス 5%, φ 1 ~ 2mm 炭化物 1%, φ 1 ~ 2mm 黒色スコリア 5% 含む。スコリア堆積層。		
10	D++10 /2	7.5)/02/2	やや締まりがない。		
10	暗褐色	7.5YR3/3	φ 1 ~ 2mm 橙色スコリア 3%、φ 1mm 以下白色パミス 1% 含む。やや締まりがあるが、粘性はない。		
11	黒褐色	7.5YR3/2	φ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 15%、 φ 1mm 以下白色パミス 5%、 φ 1 \sim 2mm 黒色スコリア 2% 含む。締まりがない。		
12	暗褐色	10YR3/3	φ 1~ 2mm 橙色スコリア 10% 含む。よく締まり、やや粘性がある。		
13	暗褐色	10YR3/3	φ 1 ~ 2mm 橙色スコリア 2%、φ 1 ~ 2mm 黒色スコリア 1% 含む。締まりがない。		
14	黒褐色	7.5YR3/2	φ 1 ~ 2mm 橙色スコリア 10%、 φ 1mm 以下白色パミス 1%、 φ 1 ~ 2mm 黒色スコリア 5% 含む。締まりがあるが、粘性はない。		
15	黒褐色	7.5YR3/2	φ 1 ~ 2mm 橙色スコリア 7%、 φ 1mm 以下白色パミス 3%、 φ 5mm 以下黒色スコリア 1%、 φ 30mm 大 7.5YR3/3 ブロック 10% 含む。 やや締まりがない。		
16	黒褐色	7.5YR3/2	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 7%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 3%、 $arphi$ 5mm 以下黒色スコリア 1% 含む。やや締まりがない。		
17	暗褐色	7.5YR3/3	φ 1mm 以下橙色スコリア 2%、φ 1mm 以下白色パミス 1% 含む。締まりがない。		
18	黒褐色	7.5YR3/2	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 5% 含む。やや締まりがある。		
19	暗褐色	7.5YR3/3	φ 1mm 以下橙色スコリア 2% 含む。7.5YR3/3 粘性が強いブロック 40%、7.5YR3/2 粘性ありブロック 60% が混在。		
20	暗褐色	7.5YR3/3	φ 1 ~ 2mm 橙色スコリア 10%, φ 1mm 以下白色パミス 10%, φ 1mm 以下炭化物 1%, φ 5mm 大黒色スコリア 1% 含む。やや締まってし		
21	暗褐色	7.5YR3/3	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 7%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 7%、 $arphi$ 5mm 以下炭化物 1% 含む。やや締まっている。		
22	暗褐色	7.5YR3/3	φ 10mm 以下橙色スコリア 40%、φ 10mm 以下黒色スコリア 40% 含む。固結している SC I 相当のブロックあり。		
23	暗褐色	7.5YR3/3	φ 1 ~ 2mm 橙色スコリア 7%、φ 1mm 以下白色パミス 3% 含む。やや締まりがある。		
24	暗褐色	7.5YR3/3	arphi 1 ~ 2mm 橙色スコリア 5%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 3% 含む。やや締まりがある。		
25	黒褐色	7.5YR3/2	arphi 1 ~ 2mm 橙色スコリア 3% 含む、 $arphi$ 30mm 大 10YR3/3YL 相当のブロック 10% 含む。やや粘性あり。		



第152 図 第4号・第6号・第7号正体不明遺構実測図

第3号正体不明遺構は第2号正体不明遺構との重複によって大半が削られているため、平面形状や土層堆積は不明な点が多いものの、残存する箇所から平面形状は北西-南東方向を長軸とする 4.4×3.0 mの楕円形を呈するものと推測される。断面 A-A 'および B-B 'の第1層は本遺構における残存箇所であり、深さは最大で 0.35 mと浅い。

【出土遺物】(第 150 図 1 · 2)

覆土から押型文土器、石器、礫が出土している。出土した押型文土器(第 150 図 1)は、口縁部から胴部にかけてのものである。楕円文を密接施文するもので、胎土に多量の繊維を含んでおり、にぶい赤褐色の色調を呈している。器面に煤が付着しており、全体的に劣化している。016 — 020 グリッドで出土した押型文土器と接合された。

石器は石鏃(神津島恩馳島産黒曜石製)、加工痕のある剥片、打製石斧、磨石(第 150 図 2)がそれぞれ1点と、剥片・砕片が12点出土している。磨石は細長い棒状の磨面を持ち、断面が蒲鉾形に近い、いわゆる「特殊磨石」で、礫岩を石材とする。下面に磨面が形成され、側面には敲打痕が明瞭に認められる。

第4号正体不明遺構(第152図)

 $014-029\sim015-029$ グリッドライン南側の K U層を掘り下げた際に、直径約 4 mの円形もしくは楕円形に近い平面形状となる遺構が確認された。しかしながら、その後に同グリッドラインの北側の掘り下げを行った際に本遺構の一部と推測される遺構線が確認されたため、本遺構の規模は当初よりもさらに大きいものであることが判明した。ただし、南側の検出面がこれよりも下位であるため、遺構の平面規模は 4.9×4.0 m程度の楕円形になるものと推測されるが、正確な規模は不明である。北側で確認された検出面から推測すると、深さは最大で 1.5 mほどになると考えられる。規模や断面の形状か

第12表 第4号正体不明遺構土層一覧表

層位	色調		土 層 の 特 徴			
1	暗褐色	7.5YR3/3	黒褐色極小1%、赤褐色極小1%含む。パミスあり。粘性あり。炭化物あり。			
2	暗褐色	10YR3/3	赤褐色極小 7% 含む。パミスあり。			
3	暗褐色	7.5YR3/3	赤褐色小 1% 含む。パミスあり。			
4	暗褐色	7.5YR3/4	赤褐色極小 5% 含む。パミスあり。			
5	黒褐色	7.5YR3/2	赤褐色極小 1% 含む。パミスあり。粘性あり。			
6	暗褐色	7.5YR3/3	赤褐色小 2%、赤褐色極小 3% 含む。粘性あり。			
7	暗褐色	7.5YR3/3	黒褐色小 1%、黒褐色極小 3%、赤褐色小 2%、赤褐色極小 7% 含む。パミスあり。炭化物あり。			
8	暗褐色	7.5YR3/3	黒褐色小1%、赤褐色小1%、赤褐色極小3%含む。パミスあり。粘性あり。			
9	黒褐色	7.5YR3/2	粘性あり。			
10	黒褐色	7.5YR2/2	黒褐色の土ににぶい黄褐色の土が10%ほど混じっている。粘性あり。			
11	黒褐色	7.5YR3/2	黒褐色の土に明黄褐色の土が 60% ほど混じっている。粘性あり。			
12	暗褐色	7.5YR3/3	赤褐色小 1%、赤褐色極小 1% 含む。粘性あり。			
13	暗褐色	7.5YR3/3	黒褐色小 1%、黒褐色極小 2%、赤褐色小 2%、赤褐色極小 5% 含む。パミスあり。炭化物あり。			
14	暗褐色	7.5YR3/3	黒褐色小 2%、黒褐色極小 2%、赤褐色極小 5% 含む。パミスあり。粘性あり。炭化物あり。			
15	暗褐色	7.5YR3/4	粘性あり。			
16	黒褐色	7.5YR3/2	赤褐色極小1% 含む。粘性あり。			
17	黒褐色	7.5YR3/2	赤褐色極小 2% 含む。粘性あり。			
18	暗褐色	7.5YR3/3	黒褐色小 1%、黒褐色極小 3%、赤褐色小 2%、赤褐色極小 5% 含む。パミスあり。粘性あり。炭化物あり。			
19	暗褐色	7.5YR3/3	粘性あり。			
20	黒褐色	7.5YR3/2	粘性あり。			
21	暗褐色	7.5YR3/3	粘性あり。			
22	黒褐色	7.5YR2/2	赤褐色極小 2% 含む。			
23	黒褐色	7.5YR3/2	赤褐色極小 1% 含む。			
24	暗褐色	7.5YR3/3	黒色極小 1%、赤褐色極小 2% 含む。パミスあり。粘性あり。炭化物あり。			
25	黒褐色	7.5YR2/2	黒褐色の土に黄褐色の土が 10% ほど混じっている。粘性あり。			
26	黒褐色	7.5YR3/2	赤褐色極小 1% 含む。パミスあり。			
27	黒褐色	7.5YR3/2	粘性あり。			
28	黒褐色	7.5YR2/2				
29	黒褐色	10YR2/2				

ら第2号正体不明遺構のような陥穴である可能性があるものの、断定はできない。

【出土遺物】(第 151 図 1)

覆土中から時期不明の縄文土器片が1点出土している。中央付近で内湾するような断面形状となっている。灰褐色の色調を呈し、胎土に石英などの砂粒を多量に含んでいる。

第6号正体不明遺構(第152図)

調査区北西側の 010-026 グリッドに位置しており、YL層で検出された。規模は約 2.7×2.5 m を測り、平面形状は楕円形に近い形状を呈している。壁の両端は緩やかに落ち込んでおり、底面は平坦である。調査段階では土坑(SK1)として扱われていたが、遺構の形状や規模から住居址である可能性がある。ただし、床面は検出されておらず、また柱穴も確認できなかったため、住居址と断定することはできず、正体不明遺構として扱った。検出面から底面までの深さが最大で 0.2 m と浅いことから、遺構の上部は富士黒土層の掘り下げの段階において削平されたものと推測される。

遺物は覆土中から礫が1点出土している。

第7号正体不明遺構(第152図)

調査区南東角付近の 017-015 グリッドで検出された。西側の検出状況が不明瞭であるが、規模は南北 $3.3 \times$ 東西 3.25 m(推定)の円形に近い形状になるものと推測される。断面形状は両端がなだらかに落ち込む形となっており、底面は平坦で、深さは検出面から最大で約 0.45 mを測る。本遺構は調査段階において土坑(S K 6)として扱われていたものの、遺構の規模や形状から住居址である可能性があるため、正体不明遺構として扱った。ただし、明瞭な床面は検出されておらず、また柱穴も確認できないことから住居址とは断定できない。

遺物は使用痕のある剥片 1 点(神津島恩馳産黒曜石製)と、黒曜石の剥片 2 点が覆土から出土している。 ②土坑

縄文時代に属すると考えられる土坑が5基確認された。いずれも調査範囲の中央から南側の東西の尾根上に位置しており、検出面はFB層である。遺物は検出されなかった。

第3号土坑 (第153図)

011-020 グリッドで検出された。 2.1×1.9 mの不正形な平面形状を呈している。断面は擂鉢に近い形状となっており、深さは最大で 1.1 mである。規模は小さいものの断面の形状が第 2 号正体不明遺構と類似していることから、陥穴の可能性がある。ただし、その場合には底面まで到達していないものと推測される。

第4号土坑 (第153図)

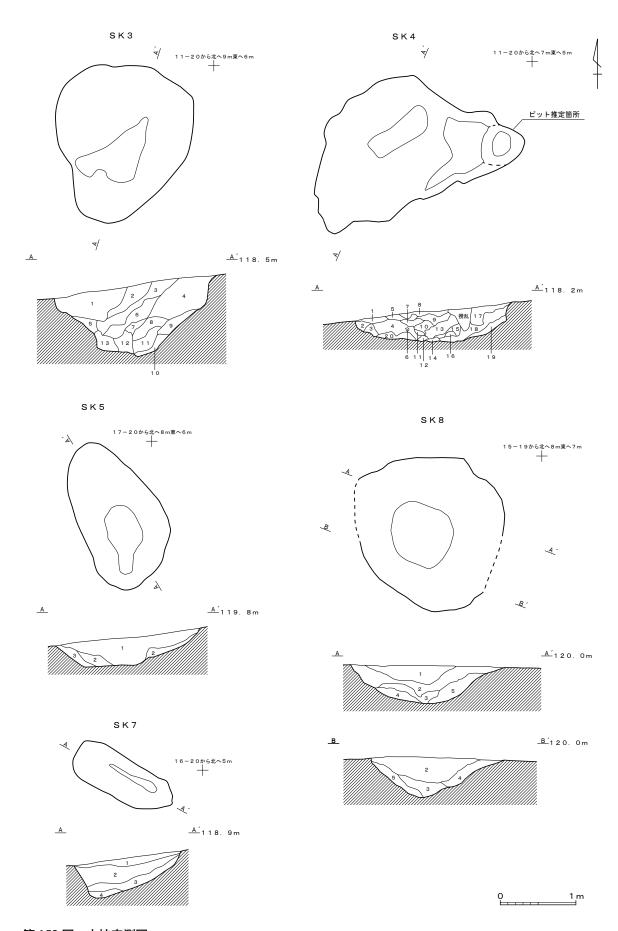
調査区中央の 011 - 020 グリッドで検出された。第3号土坑の南東側に位置しており、平面形状は

第13表 第6号正体不明遺構土層一覧表

層位	色	調	土 層 の 特 徴
1	黒褐色	10YR2/3	φ 5mm 橙色スコリア 2% 含む。
2	黒褐色	10YR2/2	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 5%、 $arphi$ 1 \sim 2mm 炭化物 1% 含む。
3	黒褐色	7.5YR3/2	arphi 1 ~ 2mm 橙色スコリア 5%、 $arphi$ 1 ~ 2mm 炭化物 5%、 $arphi$ 10 ~ 20mm10YR3/3 暗褐色ブロック 5% 含む。

第14表 第7号正体不明遺構土層一覧表

層位	色	調	土 層 の 特 徴
1	褐色	7.5YR4/3	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 5%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 15% 含む。新 SC・KU 相当。
2	黒褐色	7.5YR3/2	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 2%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 3% 含む。粘性が弱い。
3	暗褐色	7.5YR3/3	arphi 1mm 以下橙色スコリア 1%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 1% 含む。粘性が弱い。
4	暗褐色	7.5YR3/3	φ 1mm 以下橙色スコリア 1% 含む。やや粘性あり。
5	黒褐色	7.5YR3/2	φ 1mm 以下橙色スコリア 1% 含む。やや粘性あり。



第 153 図 土坑実測図

整っていない三角形状となっている。規模は主軸の位置が不明瞭であるものの、長軸となる東西は約3.0 m、南北は約1.7 mを測り、深さは最大で約0.4 mである。なお、東側に円形の落ち込みがあり、ピットが存在していたと推測されるものの、記録がないため詳細は不明である。

第5号土坑 (第153図)

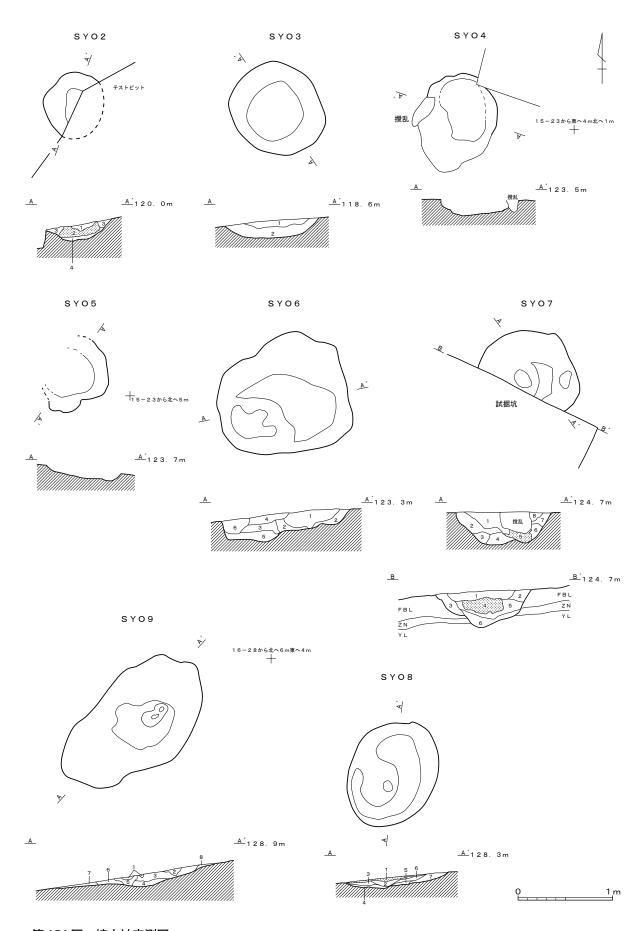
調査区中央東側の 017-020 グリッドで検出された。平面形状は北西-南東方向が長軸となる卵型となっており、規模は 1.9×1.1 mである。断面は両端ともに直線的に落ち込んでおり、底面は比較的平坦である。

第7号土坑 (第153図)

017 - 020 グリッドで検出されており、第5号土坑の南東側に位置している。平面は北西-南東方

第 15 表 土坑土層一覧表

遺構	層位	色	調	土 層 の 特 徴		
	1	暗褐色	7.5YR3/3	φ 2 \sim 5mm 橙色スコリア 15%、 φ 1 \sim 2mm 黒色スコリア 7% 含む。粘性あり。		
	2	暗褐色	7.5YR3/3	φ 1 ~ 2mm 橙色スコリア 2%、 φ 1mm 以下白色パミス 5%、 φ 2 ~ 5mm 黒色スコリア 10% 含む。粘性あり。		
	3	暗褐色	7.5YR3/3	arphi 1 ~ 2mm 橙色スコリア 20%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 50%、 $arphi$ 2 ~ 5mm 黒色スコリア 15% 含む。粘性あり。		
	4	黒褐色	7.5YR3/2	$arphi$ 1mm 以下橙色スコリア 10%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 3%、 $arphi$ 1 \sim 2mm 黒色スコリア 7% 含む。粘性あり。		
	5	暗褐色	7.5YR3/3	$arphi$ $2\sim$ 5mm 橙色スコリア 20%、 $arphi$ 1mm 以下黒色スコリア 1% 含む。粘性あり。		
	6	暗褐色	10YR3/3	φ 1 ~ 2mm 橙色スコリア 10%、 φ 1mm 以下白色パミス 30%、 φ 1 ~ 2mm 黒色スコリア 20% 含む。粘性あり。		
S K 3	7	黒褐色	7.5YR3/2	φ 1mm 以下橙色スコリア 5%、 φ 1 \sim 2mm 黒色スコリア 3% 含む。粘性あり。		
	8	暗褐色	7.5YR3/3	φ 1 ~ 2mm 橙色スコリア 1%、 φ 1 ~ 2mm 黒色スコリア 3% 含む。粘性あり。		
	9	暗褐色	7.5YR3/3	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 3%、 $arphi$ 1 \sim 2mm 黒色スコリア 2% 含む。粘性あり。		
	10	暗褐色	7.5YR3/3	$arphi$ 2 \sim 5mm 橙色スコリア 3%、 $arphi$ 2 \sim 5mm 黒色スコリア 1% 含む。粘性あり。		
	11	黒褐色	7.5YR3/2	$arphi$ 1mm 以下橙色スコリア 1%、 $arphi$ 1 \sim 2mm 黒色スコリア 1% 含む。粘性あり。		
	12	暗褐色	7.5YR3/3	φ 2 ~ 5mm 橙色スコリア 7%、φ 1 ~ 2mm 黒色スコリア 10% 含む。粘性あり。		
	13	黒褐色	7.5YR3/2	$arphi$ 2 \sim 5mm 橙色スコリア 20%、 $arphi$ 1 \sim 2mm 黒色スコリア 3% 含む。粘性あり。		
	1	黒褐色	7.5YR3/2	φ 1mm 以下橙色スコリア 5% 含む。粘性あり。		
	2	黒褐色	7.5YR3/2	φ 1mm 以下橙色スコリア 1% 含む。粘性あり。		
	3	暗褐色	7.5YR3/3	粘性あり。		
	4	暗褐色	7.5YR3/3	φ 1~2mm 橙色スコリア 7% 含む。粘性あり。		
	5	黒褐色	7.5YR3/2	φ 1 ~ 2mm 橙色スコリア 3%、 φ 1mm 以下白色パミス 2%、 φ 1 ~ 2mm 黒色スコリア 1% 含む。粘性あり。		
	6	暗褐色	10YR3/3	粘性あり。		
	7	暗褐色	7.5YR3/3	$arphi$ 1mm 以下橙色スコリア 3%、 $arphi$ 1 \sim 2mm 黒色スコリア 2% 含む。粘性あり。		
	8	暗褐色	7.5YR3/3	φ 1mm 以下橙色スコリア 1% 含む。粘性あり。		
	9	黒褐色	7.5YR3/2	φ 1~2mm 橙色スコリア 3% 含む。粘性あり。		
SK4	10	暗褐色	10YR3/3	φ 1mm 以下橙色スコリア 1% 含む。		
31.4	11	暗褐色	7.5YR3/3	$arphi$ 1 \sim 2mm 黒色スコリア 3%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 3% 含む。粘性あり。		
	12	黒褐色	7.5YR3/2	粘性あり。		
	13	暗褐色	7.5YR3/3	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 2%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 1%、 $arphi$ 1 \sim 2mm 黒色スコリア 1% 含む。粘性あり。		
	14	黒褐色	7.5YR3/2	粘性あり。		
	15	黒褐色	7.5YR3/2	φ 1 ~ 2mm 黒色スコリア 1% 含む。粘性あり。		
	16	黒褐色	7.5YR3/2	粘性あり。		
	17	暗褐色	7.5YR3/3	φ 1mm 以下橙色スコリア 5% 含む。粘性あり。		
	18	黒褐色	7.5YR3/2	粘性あり。		
	19	黒褐色	7.5YR3/2	粘性あり。		
	20	黒褐色	7.5YR3/2	粘性あり。		
	1	暗褐色	10YR3/4	$arphi$ 2 \sim 5mm 橙色スコリア 5%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 2%、 $arphi$ 5 \sim 10mm 黒色スコリア 2% 含む。		
S K 5	2	暗褐色	10YR3/3	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 1%、 $arphi$ 1 \sim 2mm 炭化物 1% 含む。		
	3	暗褐色	10YR3/3	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 2%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 1%、 $arphi$ 2 \sim 5mm 黒色スコリア 1% 含む。		
	1	暗褐色	7.5YR3/4	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 15%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 3% 含む。締まりはあるが、粘性はない。		
S K 7	2	暗褐色	7.5YR3/3	arphi 5mm 以下橙色スコリア 10%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 3% 含む。締まり、粘性ともにない。		
	3	黒褐色	7.5YR3/2	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 3%、 $arphi$ 5mm 以下炭化物 1% 含む。締まり、粘性ともに無い。		
	4	暗褐色	7.5YR3/4	φ 1mm 以下橙色スコリア 1% 含む。締まりがあり、やや粘性がある。		
	1	暗褐色	7.5YR3/3	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 5%、 $arphi$ 5mm 大黒色スコリア 1% 含む。締まりがある。		
	2	暗褐色	7.5YR3/3	arphi 5mm 以下橙色スコリア 30%、 $arphi$ 5mm 以下黒色スコリア 30%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 10% 含む。新 SC・KU 混在土。		
S K 8	3	黒褐色	7.5YR3/2	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 1%、 $arphi$ 10mm 大 7.5YR3/3 大パッチが 30% くらいで混在。		
	4	暗褐色	7.5YR3/3	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 1%、 $arphi$ 1 \sim 2mm 黒色スコリア 1% 含む。締まりがあり、やや粘性あり。		
	5	黒褐色	7.5YR3/2	φ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 2%、 φ 1 \sim 2mm 黒色スコリア 2%、 φ 5mm 大炭化物 1% 含む。締まりがあるが、粘性は無い。		



第 154 図 焼土址実測図

向を主軸として約 1.4×0.5 mの楕円に近い形状となる。断面は平坦になっておらず北西側が深く落ち込んでおり、深さは最大で約 0.5 mである。

第8号土坑 (第153 図)

南東側の 015-019 グリッドで検出された。平面形状は円形とも方形ともいえないような不正形であり、断面は擂鉢状になっている。北西-南東方向が長軸となるものの、規模は 2.5×2.0 mほどで、深さは最大で 0.5 mを測る。

なお本遺構中央の東西にかけては方形状の攪乱を受けており、上端の一部が削平を受けたため遺構線については一部は推定ラインとなっているが、攪乱の深度が比較的浅かったため、底部等の形状は確認することができた。

③焼土址

縄文時代に属すると考えられる焼土址が8基検出されており、調査区のうち北東側に分布している。 検出面は第2号・第3号・第6号~第8号焼土址がFB層、第4号・第5号・第9号焼土址がYL層で ある。いずれの焼土址においても遺物は検出されていない。

第2号焼土址(第154図)

東尾根上の 016-020 グリッドで検出された。全体の形状は、東側の大半が事前の試掘調査時に掘り込まれているため不明な点が多いものの、残存する西側から円形に近い形状になるものと推測される。 規模は推定で 0.7×0.6 m、深さは 0.18 mを測る。土層の堆積は 4 層からなり、 2 層に焼土が集中している。

第3号焼土址(第154図)

中央谷の中である 012-021 グリッドで検出された。円形に近い平面形状を呈しており、規模は長径 $1.0 \text{ m} \times$ 短径 0.9 m、深さは 0.2 mを測る。土層堆積は 2 層からなり、 1 層・ 2 層ともに焼土が混じるものの、 1 層において焼土が特に密であり、炭化物を含んでいる。

第4号焼土址(第154図)

東尾根上の $015-022\cdot023$ グリッドで検出された。部分的に攪乱を受けるが、楕円形に近い形状となっており、規模は長径約 $1.1~\text{m} \times$ 短径 0.8~m、深さは 0.16~mを測る。土層断面は注記記録が残されていないため、エレベーションのみで図示した。このため焼土の状況は不明である。

第5号焼土址 (第154図)

東尾根の西側縁辺部にあたる 014-023 グリッドで検出された。第4号焼土址の北西約4 mほどの位置に存在する。円形に近い平面形状を呈するものと推測されるが、北西側の大半が掘削の際に削り取られてしまったため、南東側のみが残存している。残存する箇所から、直径約0.8 m、深さ約0.1 mを測る。土層断面は注記記録が残されていないため、エレベーションのみで図示した。焼土の状況は不明な点が多い。

第6号焼土址(第154図)

中央谷の中である 013-024 グリッドで検出された。平面形状は楕円形に近いものの、東側は直線的になっている。規模は長径 $1.48~\text{m} \times$ 短径 1.24~mを測る。深さは中央部付近で段差が生じ、南西側で深くなっているため、西側 0.24~m、東側 0.18~mである。土層の堆積状況は 6~M 層からなり、全体的に焼土が混じっている。

第7号焼土址(第154図)

中央谷の中である 014 - 025 グリッドで検出された。試掘調査段階の試掘坑によって南西側が破壊されていることから全体の形状は不明な点が多いものの、規模は直径 1.0 m前後の円形を呈するものと推測される。土層の堆積状況は 8 層からなっており、 5 層に焼土が集中している。

第8号焼土址 (第154図)

中央谷の谷頭周辺にあたる 015-028 グリッドで検出された。平面形状は南北方向に長い楕円形を呈しており、規模は長径 $1.1 \text{ m} \times$ 短径 0.9 mを測る。ただし、深さは検出面から 0.1 m と浅い。土層の堆積状況は 7 層からなっており、上の層位に焼土が多く含まれている。

第9号焼土址(第154図)

中央谷谷頭周辺の東尾根上である 016-028 グリッドで検出された。平面形状は北東-南西方向が長軸となるやや崩れた楕円形を呈しており、規模は長径 $1.7~\text{m} \times$ 短径 1.0~mを測る。中央やや北東寄りに凹みが存在するが、意図的なものかどうかは不明である。注記記録が残されていないため、土層の堆積状況は不明である。焼土は全体的に混じるものの、特に上の層位に多く含まれる傾向がある。

4集石

縄文時代に属すると判断される集石は 14 基が確認されており、これらの大半は東西の尾根上と中央 谷の谷頭付近に立地している。

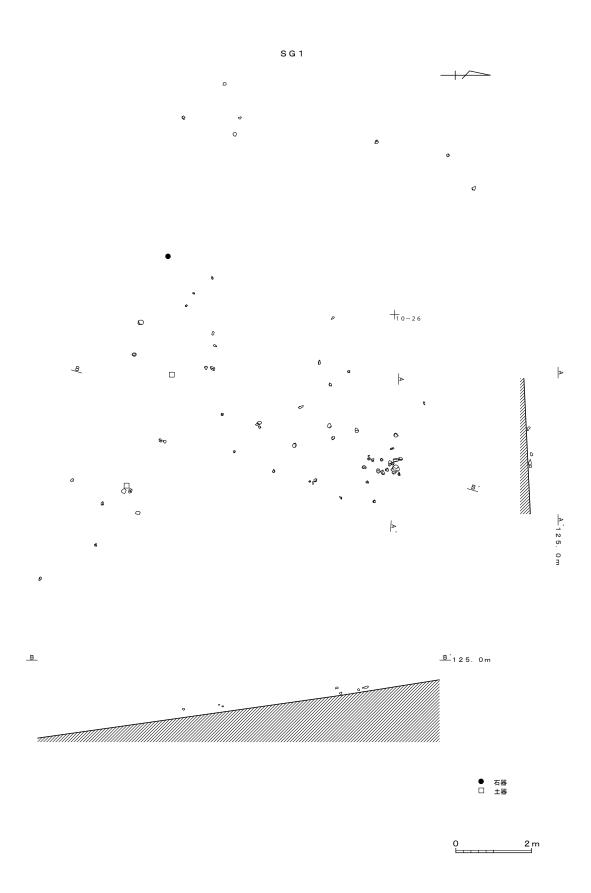
なお、現地調査段階で第10号集石および第11号集石とされた遺構については、整理作業の結果、 古墳時代以降の住居址の一部であると判断されたため、次節において第2号住居址および第3号住居址 として報告する。

第1号集石 (第155図)

西尾根中央部の009 - 025 グリッドおよびその周辺で検出されており、検出面は K U層である。検

第 16 表 焼土址土層一覧表

遺構	セクション	層位	色調		土 層 の 特 徴
SYO2	A	1	暗赤褐色	5YR3/2	$arphi$ 1 \sim 2mm 黒色炭化物 1%、 $arphi$ 1 \sim 2mm 橙色焼土 5% 含む。
		2	暗赤褐色	2.5YR3/3	焼土層。
		3	暗赤褐色	5YR3/2	φ 1 ~ 2mm 橙色焼土 3% 含む。締まっているが、粘性はない。
		4	極暗褐色土	7.5YR2/3	$arphi$ $1\sim 2$ mm 橙色焼土 3% 、 1 mm 大のブロック状塊で構成されている。
	А	1	暗赤褐色	5YR3/2	φ 5mm 以下黒色炭化物 5%、φ 5mm 以下橙色焼土 20% 含む。
SYO3		2	黒褐色	7.5YR2/2	φ 5mm 以下橙色焼土 3% 含む。締まりがない。
		1	暗赤褐色	5YR3/4	ϕ 2 \sim 5mm 黒色炭化物 2%、 ϕ 2 \sim 5mm 橙色焼土 15% 含む。20 \sim 50mm 暗褐色土が混在する(焼土層)。
		2	暗褐色	5YR3/3	φ 1 ~ 2mm 橙色焼土 5% 含む。
6406		3	暗赤褐色	7.5YR3/3	φ 2 ~ 5mm 橙色焼土 10% 含む。
SYO6	A	4	黒褐色	10YR3/1	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色焼土 5% 含む。粘性はないが、よく締まっている。
		5	暗褐色	7.5YR3/3	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色焼土 1%、黒色土ブロック 20% 含む。粘性あり。締まっている。
		6	黒褐色	7.5YR2/2	φ 10 ~ 20mm 橙色焼土 2%、φ 10 ~ 20mm 暗褐色土ブロック 25% 含む。粘性はないが、よく締まっている。
		1	黒褐色	7.5YR2/2	黒褐色極小 1%、焼土 7% 含む。炭化物あり。
		2	黒褐色	5YR2/2	黒褐色極小 1%、焼土 1% 含む。粘性あり。炭化物あり。
		3	黒褐色	7.5YR2/2	橙色小 1%、焼土 2% 含む。粘性あり。
		4	黒褐色	7.5YR3/2	橙色極小 1% 含む。粘性あり。
	A	5	暗褐色	7.5YR3/3	黒褐色小 2%、焼土 25% 含む。炭化物あり。
		6	黒褐色	7.5YR2/2	橙色小 1%、焼土 2% 含む。粘性あり。
6407		7	黒褐色	5YR2/2	黒褐色極小 1%、焼土 1% 含む。粘性あり。炭化物有り。
SYO7		8	黒褐色	7.5YR2/2	黒褐色極小 1%、焼土 7% 含む。炭化物あり
		1	暗赤褐色	5YR3/3	黒褐色小 3%、焼土 7% 含む。炭化物あり。
	В -	2	黒褐色	7.5YR3/2	黒褐色極小 1%、焼土 1% 含む。
		3	黒褐色	7.5YR3/2	黒褐色極小 1%、焼土 1% 含む。
		4	暗赤褐色	5YR3/4	黒褐色小 1%、焼土 50% 含む。粘性あり。炭化物あり。
		5	暗赤褐色	5YR3/2	黒褐色小 1%、焼土 3% 含む。粘性あり。
		6	暗赤褐色	5YR3/2	焼土 1% 含む。粘性あり。
	A _	1	暗褐色	7.5YR3/3	$arphi$ $1\sim$ 2mm 黒色炭化物 7%、 $arphi$ $1\sim$ 2mm 橙色焼土 25%、20 \sim 50mm 褐色ブロック 20% 含む。粘性弱い。
		2	黒褐色	7.5YR3/2	$arphi$ 1 \sim 2mm 黒色炭化物 5%、 $arphi$ 1mm 以下橙色焼土 10% 含む。粘性弱い。
		3	黒褐色	7.5YR3/2	arphi 1mm 以下黒色炭化物 5%、 $arphi$ 1mm 以下橙色焼土 7% 含む。粘性あり。
SYO8		4	黒褐色	7.5YR2/2	arphi 1mm 以下黒色炭化物 2%、 $arphi$ 1mm 以下橙色焼土 1% 含む。粘性あり。
		5	黒褐色	7.5YR2/2	arphi 1mm 以下黒色炭化物 2%、 $arphi$ 1mm 以下橙色焼土 1% 含む。粘性あり。
		6	黒褐色	7.5YR2/2	arphi 1mm 以下黒色炭化物 5%、 $arphi$ 1mm 以下橙色焼土 5% 含む。粘性あり。
		7	黒褐色	7.5YR2/2	arphi 1mm 以下黒色炭化物 2%% 含む。粘性やや強い。
SYO9	Α	_			記録なし。



第 155 図 集石実測図 (1)



第156図 集石実測図(2)

出された礫は66点で、いずれも安山岩である。礫の分布状況は009 - 025 グリッド北端部中央で礫がやや密集する箇所が存在するものの、東西約13 m、南北約10 mの範囲にまとまりなく広がっている。このため、集石遺構としての特徴はよく分からない。複数の集石が重複している可能性もある。検出された礫のうち、赤化しているものは完形で全体の1割程度、破損したものが2割程度を占めている。

出土遺物は、土器では後期後半の加曽利B式~後期安行式にかけてのものと思われる土器片(第190図402)、石器では砂岩製の剥片が出土している。

第2号集石 (第156 図)

西尾根南側の 008-015 グリッドで検出されており、検出面は K U層である。検出された礫は 67 点で、いずれも安山岩である。北東側に若干、広がるものの、直径約 1 mの円形に近い状態で分布している。礫は平坦に配置されており、下部に土坑状の落ち込みは存在していない。赤化した礫は点数で全体の 60%程度を占めているが、大半は破損している。

出土遺物はF.ホルンフェルス製の剥片が1点出土している。

第3号集石 (第156図)

中央谷南側の 010-016 グリッドで検出されており、第 2 号集石から東側に 20 mほど離れた場所に位置している。検出面は F B層である。検出された礫は 20 点で、いずれも安山岩である。礫は北東一南西方向に 0.5 m、北西一南東方向に 0.3 mの範囲で方形状に残存している。断面では礫を斜めに積んで配置していることから、円形の落ち込み内に配置した可能性があり、この場合には本集石の半分以上を欠損しているものと考えられる。ただし、土坑状の落ち込みは確認されていないため、不明な点が多い。構成する礫はすべて破損したものであり、赤化したものは点数で全体の 25%程度を占めている。

第4号集石 (第156図)

東尾根の 016-023 グリッドで検出されており、検出面は F B層である。検出された礫は 28 点で、いずれも安山岩である。礫は北東-南西方向に 1.0 m、北西-南東方向に 0.7 mの範囲で分布している。断面 B-B 'ラインから半円状に礫を積んで配置していることが確認できるため、落ち込み内に礫を配置した可能性が高いものと判断されるが、調査段階では土坑状の落ち込みは確認できなかった。構成する礫は破損したものが多く、完形は少ない。赤化した礫の点数は全体の 20%程度を占めている。

出土遺物は、早期に属すると考えられる無文の土器および黒曜石製の剥片1点が出土している。

第5号集石 (第156図)

東尾根の 015-024 グリッドで検出されており、検出面は F B層である。検出された礫は 11 点で、うち 10 点が安山岩である。礫は南北および東西 0.7 mの範囲で分布している。断面 A-A'ラインでは礫を斜めに並べて配置しているようにも見えるが、礫の点数が少なく全体の状況は不明な点が多い。構成する礫は破損したものが大半を占めており、赤化した礫は皆無である。

第6号集石 (第157図)

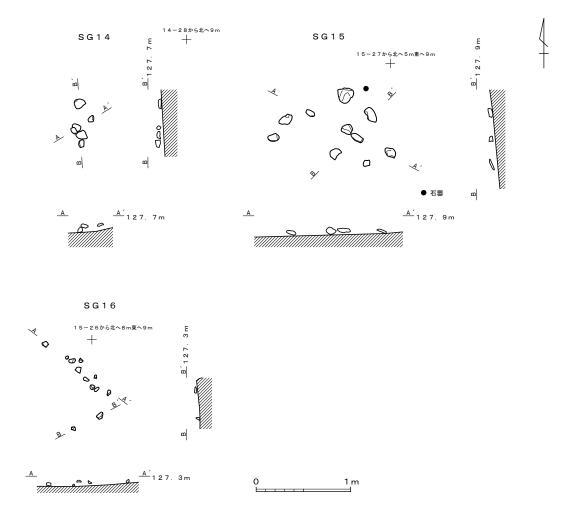
東尾根の 015 - 023 グリッドで検出されており、検出面は F B 層である。検出された礫は 49 点で、いずれも安山岩である。礫は北東ー南西方向に 2.5 m、北西ー南東方向に 2.0 mの範囲で分布し、分布範囲の中心に礫の集中箇所が存在している。傾斜地に立地しており、礫も地形に沿うように配置されていることから、落ち込むようにはなっていない。構成する礫は破損したものが大半を占めており、赤化した礫はわずかである。

第7号集石 (第156図)

東尾根の 017-018 グリッドで検出されており、検出面は F B 層である。検出された礫は 23 点で、いずれも安山岩である。南西方向を長軸とし、 0.8×0.6 mの平面形状が楕円形となる土坑状の落ち込み内に、礫が配置されている。落ち込みの深さは検出面から最大で 0.15 mである。構成する礫は破損



第 157 図 集石実測図 (3)



第158図 集石実測図(4)

したものが大半を占めており、赤化した礫はわずかである。土坑状の落ち込みは1層からなり、わずかにスコリアを含むものの、焼土は含んでいない。

第8号集石 (第156図)

東尾根の 017-018 グリッドで検出されており、検出面は FB層である。検出された礫は 8点で、いずれも破損しており、赤化は確認できなかった。石材は安山岩が 7点、砂岩が 1点である。礫の大半が北東-南西方向に $0.4~\mathrm{m}$ 、北西-南東方向に $0.3~\mathrm{m}$ の狭い範囲に集中し、平坦に配置されている。礫の下部に土坑状の落ち込みは確認できなかった。

第9号集石 (第157図)

東尾根の 016-018 グリッドで検出されており、検出面は F B 層である。検出された礫は 17 点で、すべて安山岩である。礫は南北および東西 0.6 mの範囲に、環状に近い状態で平坦に配置されており、環状内部には礫が少ない。赤化した礫が半数以上を占めている。

第 12 号集石 (第 157 図)

東尾根の 015-023 グリッドで検出されており、検出面は FB層である。検出された礫は 7点で、すべて安山岩であり、半数が赤化している。長径が $0.2\sim0.3$ mのやや大きめの礫が、0.7 mの範囲に半円状に配置されていることから、環状であった可能性がある。下部に土坑状の落ち込みは確認できなかった。

第13号集石 (第157図)

中央谷の谷頭付近である 013 - 028 グリッドで検出されており、検出面は F B 層である。検出された礫は 19点で、すべて安山岩であり、半数以上の礫で赤化が確認できる。北東 - 南西方向に 1.5 m、北西 - 南東方向に 0.7 mの範囲に広がり、中央部付近には礫の密集箇所があるものの、遺構としての意図的な配置を見出すことは難しい。

第14号集石 (第158図)

中央谷の谷頭付近である 013-028 グリッドで検出されており、検出面は FB層である。 10 mほど南には第 13 号集石が存在する。検出された礫は 6 点で、すべて安山岩であり、半数が赤化している。南北 0.6 m、東西 0.3 mの狭い範囲に比較的平坦に配置されている。下部に落ち込みは確認できなかった。

第 15 号集石 (第 158 図)

中央谷の谷頭付近である 014-027 グリッドで検出されており、検出面は K U層である。検出された礫は 10 点で、すべて安山岩であり、すべて赤化している。南北 0.9 m、東西 1.5 mの範囲に三角形状に広がっており、すべての礫が比較的平坦に配置されている。下部に落ち込みは確認できなかった。

出土遺物は、黒曜石製の剥片が1点出土している。

第16号集石 (第158図)

中央谷の谷頭付近である 014-028 グリッドで検出されており、検出面は K U層である。検出された礫は 12 点で、石材は安山岩 3 点、玄武岩 1 点、砂岩が 8 点である。安山岩のうち 1 点が赤化しているが、これ以外は赤化が確認できなかった。大半が北西—南東方向に約 1 mの幅で並んでいる。礫はおおむね平坦に配置されている。下部に落ち込みは確認できなかった。

(3) 遺構外出土土器

本遺跡で出土した縄文土器は早期~後期末・晩期初頭までの多時期に及んでいる。これらを以下のとおり時期ごとに第 I 群~第VI群に分類し、さらに型式や特徴で細分した。なお、各土器を報告するにあたり、同一個体ごとにまとめるように努めた。

第1群 早期前半 1類 駿豆撚糸文系土器

2類 大浦山式

3類 押型文土器

4類 撚糸文土器

第Ⅱ群 早期後半~前期初頭

1類 清水柳E類土器

2類 野島式

3類 鵜ヶ島台式

4類 入海Ⅱ式

5類 打越式

6類 下吉井式

7類 その他

第Ⅲ群 前期 1類 清水ノ上Ⅱ式

2類 諸磯b式

3類 諸磯c式

4類 北白川下層Ⅱ式

第Ⅳ群 中期 1類 五領ヶ台Ⅱ式

2類 船元式

3類 勝坂式

4類 曽利Ⅱ式

第 V 群 後期・晩期

1類 後期初頭西日本系土器

2類 称名寺式

3類 加曽利B式~後期安行式

4類 凹線文系土器

5類 清水天王山式

6類 その他

第VI群 縄文施文土器

第1群 早期前半

1類 駿豆撚糸文系土器 (第 159 図 1 ~ 20)

早期前半において静岡県東部を中心に分布する在地系土器である駿豆撚糸文系土器とされる一群(池谷 2003)を本類とした。土器の特徴から a~c種の3種に分けることができ、a種を撚糸文土器、b種を縄文施文土器、c種を縦位密接の山形押型文土器とした。これらは土器によって色調が異なっているものの、いずれもデイサイト質の「軽しょう」な胎土を特徴としており、一部に繊維を含んでいる。

a種 撚糸文土器 (第 159 図 1 · 2)

第159図1と2は撚糸文土器であり、縦位に撚糸文が施文されている。

b種 縄文施文土器 (第 159 図 3 ~ 14)

第 159 図 $3\sim14$ は縄文を施文する土器である。 $3\cdot4$ は LRの縄文が施文されている。 3 は口縁部の一部であり、口端部付近でわずかに外反する。 4 はその胴部である。 $5\sim7$ は羽状縄文を施文するもので、胎土には比較的多くの繊維を含んでいる。いずれも胴部の一部である。 $8\sim13$ は胎土にデイサイト粒を多量に含み、色調はにぶい褐色を呈しており、全体的に白みがかっている。器面の摩滅が著しいため、施文されている縄文の詳細な観察は困難であるが、RLの縄文が単一の方向で施文されているものと、RLとLRの縄文が交差して施文されているものがある。

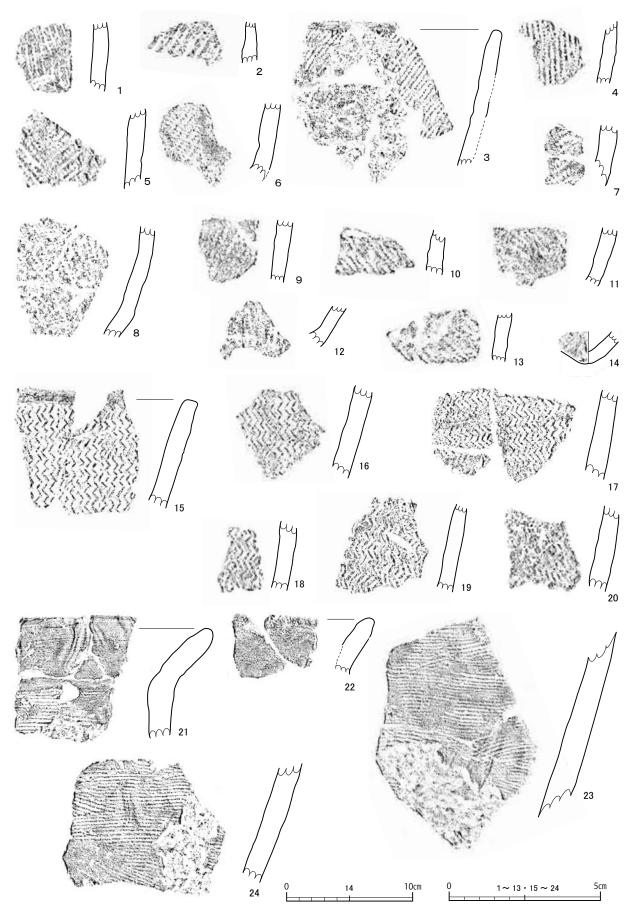
c 種 駿豆撚糸文系土器群に伴う押型文土器(第 159 図 15 ~ 20)

第 159 図 $15 \sim 20$ は山形押型文を縦位密接に施文するものである。 $15 \sim 17$ は色調が $8 \sim 13$ に近いにぶい褐色を呈して、胎土にあまり繊維を含まないものの、 $18 \sim 20$ はにぶい赤褐色を呈して、胎土に繊維を若干、多く含むことから、その特徴が明瞭に異なっている。 15 は口縁部の一部であり、口端部は丁寧にナデつけることで平坦になっている。

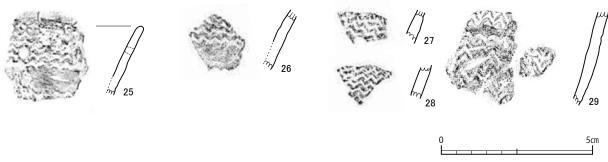
2類 大浦山式 (第159図 21~24)

早期前半において関東地方を中心に分布する撚糸文土器の大浦山式を本類とした。時期的には第 I 群 1 類に併行するものである。口縁部が「く」の字に外反し、胴部には条間隔の狭い撚糸文が横位ないし斜位に施文される。第 159 図 21 ~ 24 の 4 点が出土しており、全点を図示した。これらは同一個体と推測される。色調は外面がにぶい褐色や黄褐色、内面がにぶい赤褐色や橙色を呈しており、器厚が 15 mm程度と厚い。焼成は良く、硬質である。21 は口縁部から胴部にかけてであり、口縁部は内外面ともに横位方向にナデられ整っている。22 は口縁の一部で、23・24 は胴部の一部である。

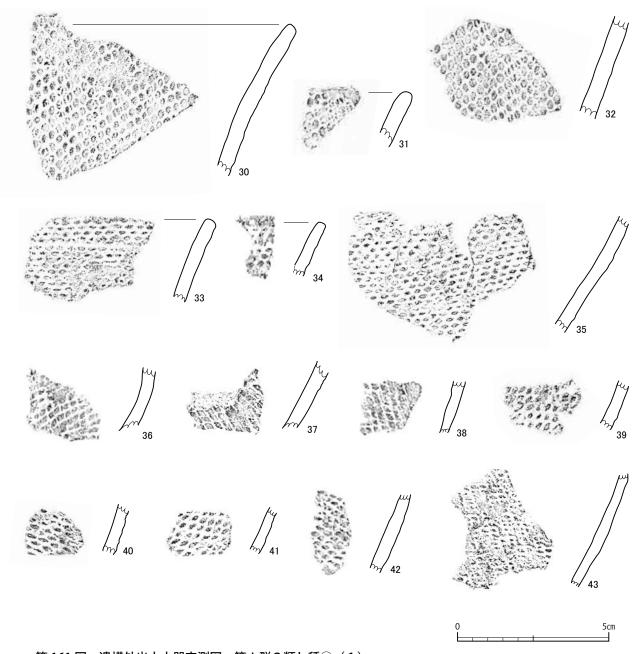
3類 押型文土器 (第 160 図 25 ~ 第 165 図 113)



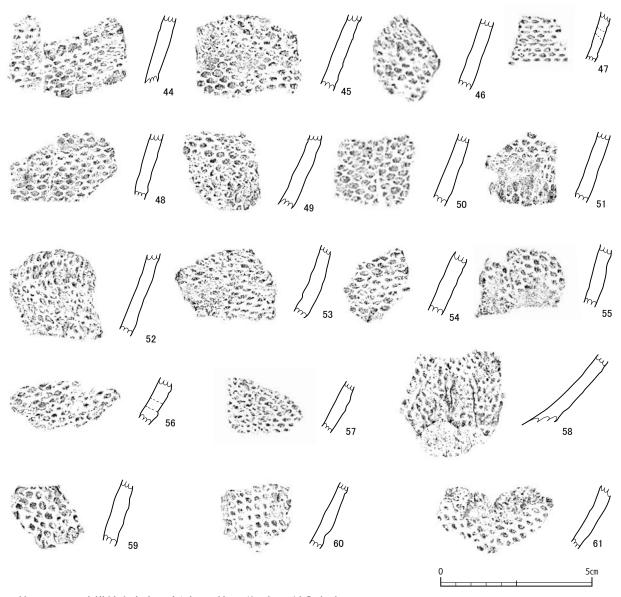
第 159 図 遺構外出土土器実測図 第 I 群 1 · 2 類



第160図 遺構外出土土器実測図 第1群3類a種



第 161 図 遺構外出土土器実測図 第 I 群 3 類 b 種① (1)



第 162 図 遺構外出土土器実測図 第 I 群 3 類 b 種①(2)

本遺跡で出土した押型文土器は、施文される押型文土器の特徴から時期別に a ~ d 種の 4 種類に分類 することができる。 a 種は樋沢式段階のもの、b 種は細久保式段階のもの、c 種は高山寺式前段階のもの、d 種は時期不明のものである。これらのうち、b 種①とした細久保式段階におけるの楕円押型文を密接施文するものが、出土した押型文土器のなかで最も多い。

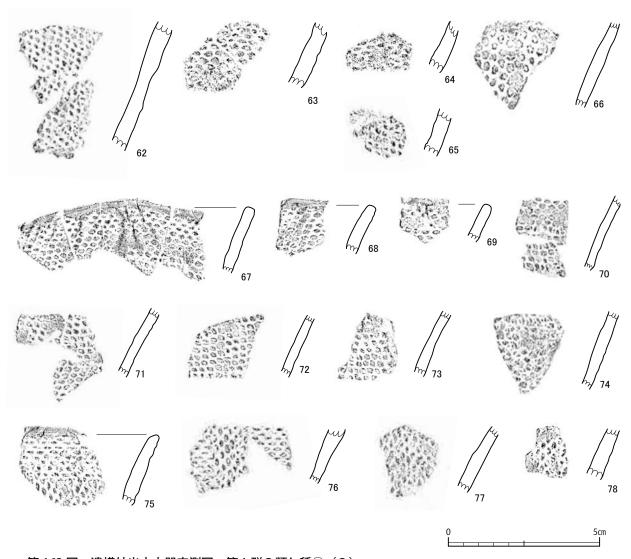
a種 樋沢式段階のもの (第 160 図 25 ~ 29)

第 $160 \boxtimes 25 \sim 29$ は山形押型文を帯状に施文しているもので、中部高地における樋沢式段階のものと推測される。器厚は $6 \bmod$ 程度と薄手であり、胎土に雲母を多量に含んでいる。25 は口縁部の一部であり、平口縁となっている。また破片の中央やや左寄りに補修孔が空けられている。27 の下部にも補修孔が残る。

b種 細久保式段階のもの(第 161 図 30 ~ 第 164 図 95)

楕円もしくは山形の押型文を密接施文することを基本とするもので、中部高地における細久保式段階に位置付けられるものを本種とした。

①楕円押型文を密接施文するもの(第 161 図 30~第 163 図 78)

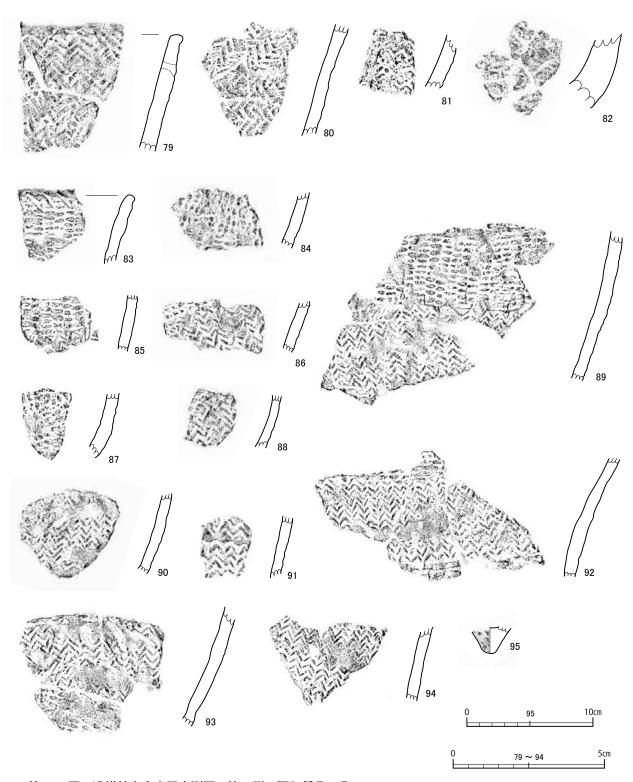


第 163 図 遺構外出土土器実測図 第 I 群 3 類 b 種① (3)

第 161 図 30 ~ 43 は、①のなかでも多くの雲母を含むものである。30 ~ 32 は楕円押型文を縦位に密接施文するもので、同一個体と推測される。30・31 は口縁部の一部である。口端部は丸みを帯びて、内削ぎ状となっている。胎土には雲母の他に砂粒や岩片も多量に含んでおり、硬質である。33 ~ 42 は横位ないし斜位に楕円押型文を密接施文するものである。33 ~ 35 は同一個体と考えられ、33・34 は口縁部の一部である。口端部は平坦になっている。36 ~ 38 は密接施文される押型文の形状が楕円というよりも菱形に近いもので、押型の押圧は比較的弱い。これらは同一個体と推測される。42 は比較的横長の、粒が小さい楕円文が密接施文されている。器厚が 6 mm程度と薄手である。

第 162 図 44 ~ 58 は胎土に長石などの多量の砂粒を含むもので、器厚、胎土および色調が極めて類似していることから、同一個体と推測される。いずれも胴部破片で口縁部は出土しなかった。47 には補修孔が残る。58 は尖底となる底部の一部であるが、底部の尖端を欠損している。

第 $163 \boxtimes 62 \sim 65$ は、胎土に多量の繊維と白色砂粒を含むもので、器厚が 10mm以上と比較的厚手である。66 は雲母を含まず、胎土に繊維や白色の砂粒、岩片を含むものである。円形に近い楕円押型文が密接施文されている。 $67 \sim 74$ は胎土に砂粒の他に多量の繊維を含むもので、器厚が 7mm程度と薄く、色調が黄褐色を呈しており、同一個体と推測される。 $67 \sim 69$ は口縁部で、波状口縁になるものと推測される。 $75 \sim 78$ は口端部付近に横位の楕円押型文、その下に縦位の楕円押型文を密接施文

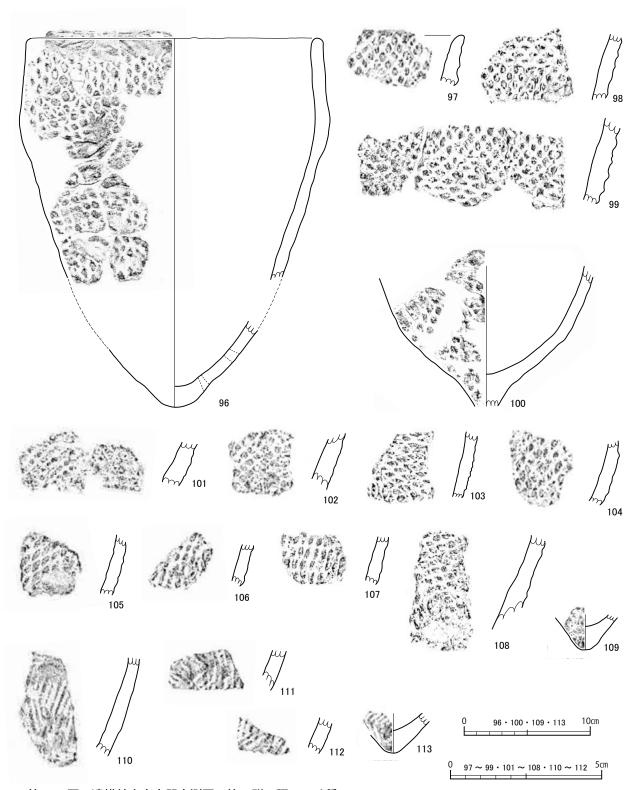


第 164 図 遺構外出土土器実測図 第 I 群 3 類 b 種②・③

するものである。胎土に多量の白色砂粒とわずかに雲母を含んでいる。

②山形押型文を密接施文するもの(第164図79~82)

第 164 図 79 \sim 82 は山形押型文を密接施文するものである。79・80 は同一個体であり、横位ないし斜位に山形押型文を密接施文し、胎土には多量の雲母と砂粒を含んでいる。81 は色調や胎土の特徴が 79・80 と類似しているものの、施文される山形押型文がやや小振りであることから、別個体のもの

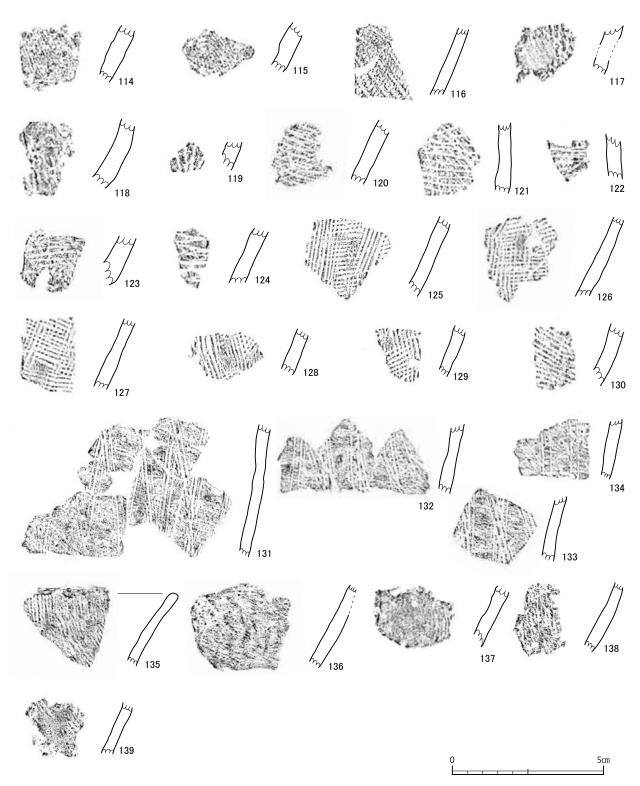


第 165 図 遺構外出土土器実測図 第 I 群 3 類 c · d種

である。82 は底部付近の一部で、器厚が約 15mmと厚手である。

③楕円押型文と山形押型文の異種併設文(第164図83~95)

第 164 図 83 ~ 95 は楕円押型文と山形押型文を帯状に交互に組み合わせて施文しているものである。 1 個体分が出土しており、口端部から楕円文→山形文→楕円文の順に押型文が施文されている。83 は 口縁部で、口端直下の外面に斜位の連続した刻みが加えられている。胎土には繊維、雲母、砂粒を含む

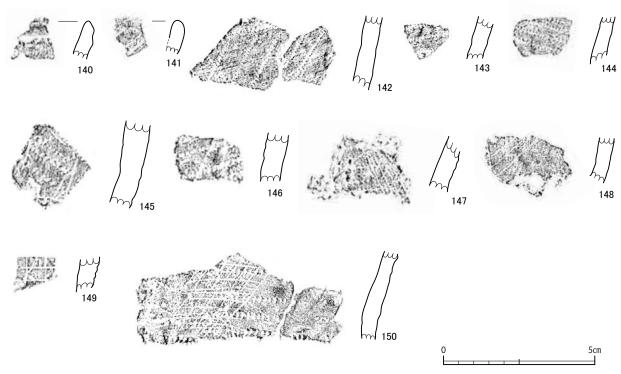


第166 図 遺構外出土土器実測図 第 | 群 4 類

が、焼成は良く硬質である。

c 種 粗大な楕円文を密接施文するもの(第 165 図 96 \sim 109)

最大径が8mm程度の粗大な楕円押型文を器面に密接施文するもので、器面がにぶい褐色や黄褐色の色調を呈し、胎土に繊維を多量に含むものを本種とした。時期的には高山寺式の前段階に位置付けられるものである。



第 167 図 遺構外出土土器実測図 第 Ⅱ 群 1 類

第 165 図 96 は底部から緩やかに立ち上がり、口縁部付近で直線的になる器形のものである。口端直下を横位にナデることで、幅 15mmほどの無文部分が作られており、これより下に楕円押型文が密接施文されている。無文部分の直下は縦位に施文されているものの、それより下は横位ないし斜位となっており規則性が乏しい。また全体的に粗雑な作りであり、器面の内外面ともに整えられておらず凹凸がある。 $97 \sim 100$ は 96 よりも若干、小さめの楕円押型文が施文されるもので、同一個体のものと推測される。97 は口縁部であり、口端部から楕円押型文が密接施文されており、96 のような口端直下の無文部分はない。100 は尖底の底部である。

 $101 \sim 109$ は本類に属するものの、同一個体等の分別が難しいものである。103 は比較的薄く、硬質である。 $106 \cdot 107$ は比較的細長い楕円押型文が施文されるもので、他の押型文の形状とは異なっており、また出土位置も異なっている。胎土には繊維の他に白色の砂粒も多量に含んでいる。109 は尖底の底部である。

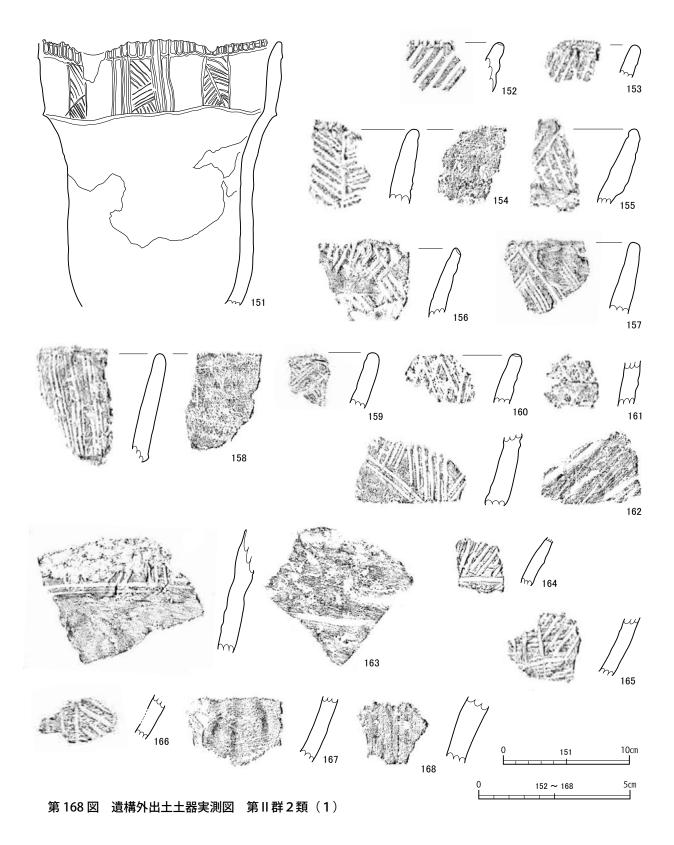
d種 特殊な押型文を施文するもの(第 165 図 110 ∼ 113)

直線的な押型文を用いて文様を施文しているものであり、文様に規則性を見出すのは難しい。これらは同一個体であり、胎土には多量の雲母を含んでいる。口縁部は出土していない。第 165 図 113 は尖底の底部である。

4類 撚糸文土器 (第 166 図 114 ~ 139)

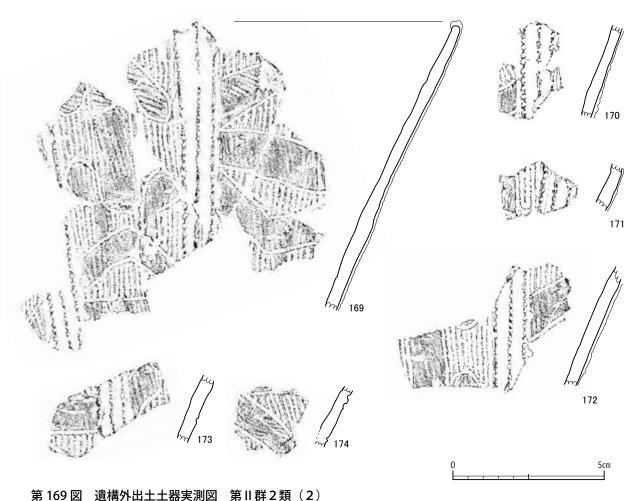
撚糸文を施文するものを本類とした。第 166 図 114 ~ 118 は縦位ないし斜位方向に撚糸文を施文しているが、施文される撚糸文は一方向のみである。115 は内面の一部が肥厚している。116 は条間がわずかに開いた撚糸文が斜位に施文されている。一方、120 ~ 134 は撚糸文を交差させることで文様を施文しているものである。124 は胎土に雲母を多量に含んでいるもので、本類のなかでは異質な胎土である。

 $125 \sim 130$ は密に縄文を巻き付けた原体を横位と縦位に回転させて、直交に近い角度で交差するように撚糸文を施文している。 $131 \sim 134$ は、間隔の広い撚糸文の原体を斜位に交差させるようにして



器面に施文しているもので、器厚は 7 mm以下と薄手である。 $135\sim139$ は間隔の狭い原体の撚糸文を施文しているものである。135 は緩やかに外反する口縁の一部であり、口端は丸みを帯びている。施文される撚糸文は口端部直下は縦位であるが、これより下は斜位に施文されている。

なお 135 \sim 139 は、静岡県富士宮市に所在する黒田向林遺跡の発掘調査報告書(馬飼野 1986)で 第 I 群 A 類 1 種として分類されている撚糸文土器と特徴が類似している。



为10万四 这情介四工工品天/闪四 为11年2只

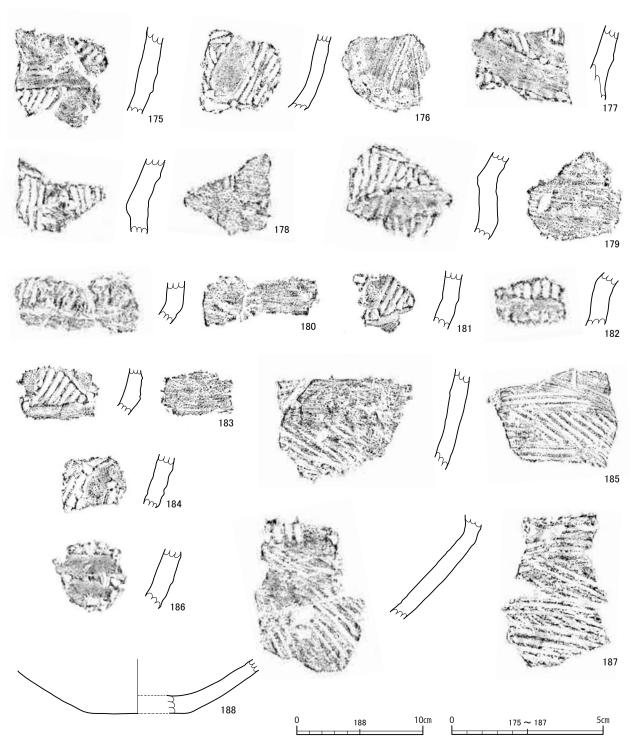
第Ⅱ群 早期後半~前期初頭

1類 清水柳 E 類十器 (第 167 図 140 ~ 150)

静岡県東部を中心に分布する在地の土器である、清水柳 E 類土器を本類とした。第 167 図 140・141 は口縁部の一部であり、140 は口端から 15mmほど下に横位の微隆起線を貼付し、その下位には横位の絡条体圧痕文を施文している。142 は横位の絡条体圧痕文を 2 条施文して、その下位には斜位の絡条体圧痕文が数条に渡って施文されている。143・144 は横位の絡条体圧痕文が施文されている。140~144 は、絡条体圧痕文の特徴や、色調および胎土が類似していることから、同一個体の可能性がある。145・146 はやや大振りな絡条体圧痕文を横位と斜位に組み合わせて施文している。にぶい赤褐色の色調を呈しており、胎土には多量の繊維を含んでいる。145 の内面は輪積みの痕跡が明瞭に残る。147~150 は絡条体圧痕文と格子目状の沈線を組み合わせて、文様を施文しているものである。胎土には繊維の他に白色岩片を含んでいる。150 は器厚が 10mm程度と若干、薄手であり、焼成も良く、締まっている。

2類 野島式 (第 168 図 151 ~ 第 169 図 174)

早期後半の野島式、もしくは併行する土器を本類とした。第 168 図 151 は、口縁が緩やかな波状となるもので、口縁部に作られる文様帯は 1 段のみである。底部は出土していないため、形状は不明である。口端から 10mmほど下に横位の微隆起線を貼付して区画し、口端部から横位の微隆起線の間に垂下する微隆起線を連続して貼付している。そして、横位の微隆起線から文様帯の段部までの間には幾何学的な文様が施文されている。文様は、狭い間隔に 3 条の微隆起線を縦位に貼付した文様単位を用いて斜



第170図 遺構外出土土器実測図 第 II 群 3 類

めの集合沈線を挟む箇所と無文箇所、そして縦位の沈線で同様の斜めの集合沈線を挟む箇所を、横に繰り返し描いていくことで文様が構成されている。口縁部文様帯の段部以下は無文となっているが、内面には条痕が残る。口縁部文様帯の残存状況が比較的良い。

 $152\sim160$ は、それぞれ斜めや縦位の集合沈線ないし凹線を基本として、口縁部文様帯に幾何学的な文様を施文している土器の口縁部である。これらの口縁部に対応すると思われる胴部は確認できなかった。152 は斜めの集合する凹線が施文されており、口端部には連続した押圧が加えられている。153 は斜めの集合沈線が施文されている。154 は縦位の沈線と斜めの集合沈線を組み合わせて矢羽状

にしている。口縁形状は波状と推測され、口端部には連続した刻みが加えられる。155 は斜めの沈線を組み合わせて幾何学的な文様を施文しているものである。文様帯は口端部から 40mほどと狭い。156 は左側に三角形状の無文部を作っている。そして周囲に集合沈線による文様を施文している。口縁端部には連続した刻みが加えられている。157・159 は斜めの集合沈線を用いて幾何学的な文様を施文しているもので、口端部は丸みを帯びている。158 は条痕を縦位に施文することで文様を描いているもので、口端部は丸みを帯びている。160 は半裁竹管状の工具を用いて平行沈線で文様を施文している。口端部には連続した刻みが加えられている。

162・163 は文様帯から無文の胴部にかけてのもので、同一個体と推測される。文様帯部分には縦位と斜位の沈線を組み合わせて文様を施文している。胴部部分の内面には条痕が明瞭に残る。164~166 は並行する縦位の沈線と横位の沈線で区画を作り、その中に斜位の集合沈線を充填しているものである。口縁部は出土していない。167・168 は無文の胴部であり、同一個体である。

第 169 図 169~174 は同一個体のものである。器厚が 10mm以下と比較的薄手で、口縁は波状になるものと推測される。波頂部から下には垂下する 3条の微隆起線が貼付され、微隆起線上には細かい連続した刻みが加えられている。この 3条の微隆起線で縦位の区画を作り、その中に沈線を用いて楕円や V字形の幾何学的な文様を描く。そして、さらにその中に縦位の集合沈線を充填している。この土器の地文は条痕であり、条痕調整を器面全体に行った後に前述した文様が施文されている。無文の部分には地文の条痕が一部に残っている。また、内面には条痕が明瞭に残る。なお、文様帯以外の部分が確認できなかったため、全体の器形は不明である。

3類 鵜ヶ島台式 (第170図175~188)

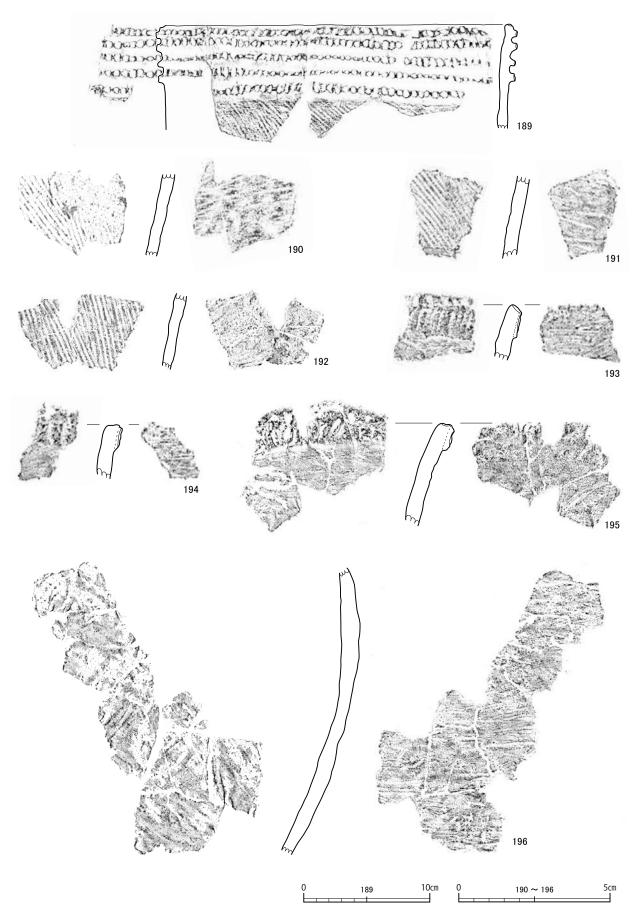
野島式の次型式である鵜ヶ島台式を本類とした。大半が調査区南西部(010-015・016グリッド付近) に設定した第 15 トレンチ(TRE15)から出土している。出土した土器の特徴から、いずれも同一個体 と判断される。出土部位はいずれも文様帯から底部にかけてのもので、口縁部は出土しておらず、また 大きく接合することはできなかった。しかし第 170 図 179・186・187 から、 2 段の文様帯を有した 平底になる器形になるものと判断される。

文様については微隆起線を幾何学状に貼り付けることで区画を形成し、区画内には集合沈線を充填している。また微隆起線と微隆起線の交点や微隆起線の途中に刺突を加えている。胴部や内面には条痕が明瞭に残る。胎土には繊維や砂粒を多量に含んでいる。

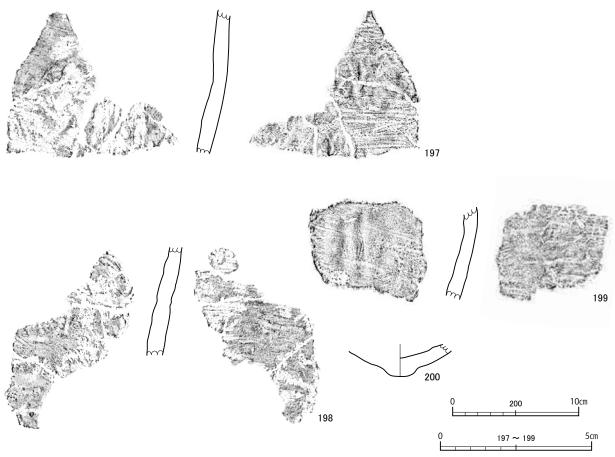
4類 入海Ⅱ式 (第171 図189~第172 図200)

早期末葉の東海系土器である入海 II 式を本類とした。第 171 図 189~192 は平口縁で、口端部直下から連続した押圧状の刻みを加えた横位隆帯を 4 条貼付するものである。また、口縁端部にも隆帯上と同様の刻みが加えられている。隆帯の最下段より下は貝殻条痕による調整が行われている。内面は貝殻条痕調整を行った後にナデで消しているが、一部に指オサエの痕が残る。ただし、部分的には貝殻条痕の痕がわずかに残っている。にぶい赤褐色の色調を呈しており、焼成は良い。193~195 は、口端に沿うように口端直下に幅 15mmほどの平坦な隆帯を横位に 1 条貼付し、隆帯上に貝殻腹縁による連続した刻みを施文しているものである。また、口端上には広い間隔で、棒状工具による押圧が連続して加えられている。器面外面には貝殻条痕の痕跡が残るが、明瞭でない。193~195 は入海 II 式の主体的地域である東海地方西部(愛知県を中心とする伊勢湾周辺部)では類例の少ない文様であるが、土器の特徴を踏まえて本類に含めた。

第 171 図 196 ~ 第 172 図 199 は胴部の一部である。接合できたものを中心に図示した。いずれも 器面の内外面に貝殻条痕による調整を行った後、指でナデることによって条痕を消している。ただし、 198 では内面に貝殻条痕が明瞭に残存している。200 は小平底(乳房状底部)の一部である。



第171 図 遺構外出土土器実測図 第11群4類(1)



第172図 遺構外出土土器実測図 第Ⅱ群4類(2)

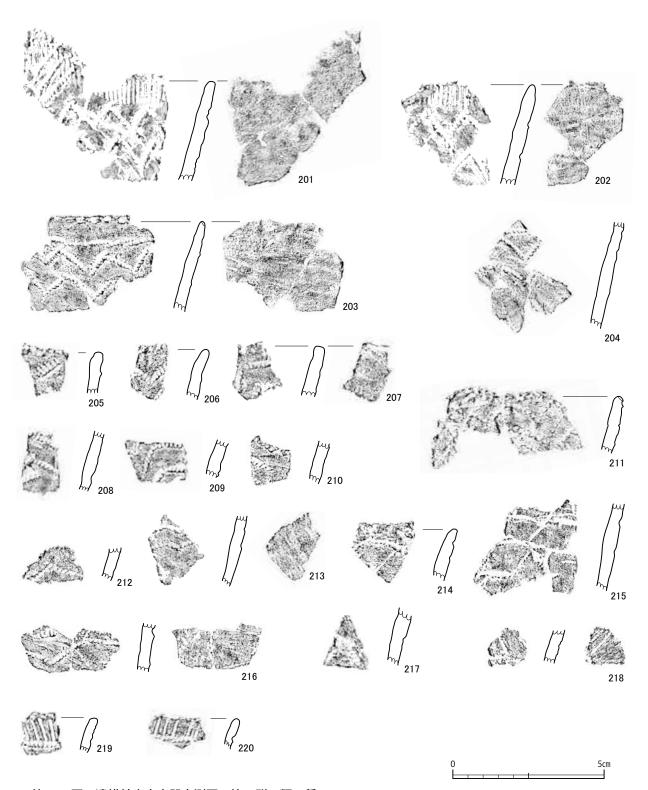
5類 打越式 (第 173 図 201 ~ 第 175 図 246)

早期末葉の関東系の土器である打越式を本類とした。出土した打越式はいずれも貝殻の腹縁を用いて 文様を施文しており、文様の特徴から $a \sim e$ 種に分類される。 a 種は山形状に連続的に刺突するもの、 b 種は格子目状にするもの、 c 種は口端部下に横位の隆帯を貼り付けているもの、 d 種は口端部下に横位の隆帯を貼り付け、さらにその下に貝殻腹縁を用いた沈線を格子目状に施文するものである。 e 種は 胴部下半の無文部分であり、 $a \sim d$ 種のいずれかの胴部であると推測される。なお、 $a \cdot b$ 種は南東の 谷部である 018 - 015 グリッド付近に集中するが、 d 種は尾根上である 013 - 024 グリッド付近に集中していることから出土位置が明瞭に異なっており、時期差が存在する可能性がある。

a種 貝殻腹縁を連続的に刺突し、山形状の文様を施文するもの(第 173 図 201 ~ 220)

第 173 図 201・202 は同一個体であり、口縁が波状となるものである。口端直下は貝殻腹縁による 短条痕が施文されており、波頂部には短条痕の上から波状の逆向きに貝殻腹縁による山形文が施文されている。短条痕より下には連続した山形状の貝殻腹縁文が横位 2 段で施文されている。203・204 は 同一個体と推測され、口端上には貝殻腹縁による連続した押圧が加えられている。口端直下には 201・ 202 のような短条痕は施文されず、口端部から 10mmほど離れた位置に、貝殻腹縁を横位に 1 条連続し て施文している。また、その下には山形状の貝殻腹縁文が横位 2 段で施文されている。

 $205 \sim 217$ は口端下に山形状の貝殻腹縁文を施文するもので、 $211 \sim 213$ は同一個体と推測される。 211 は口縁の形状が波状であり、口端上部に貝殻腹縁による連続した押圧を加え、器面には横位の山形状の貝殻腹縁文が間隔を狭くして施文されており、少なくとも 3 条は施文されている。 214 は口縁部の一部であり、比較的大きい山形文が施文されている。 215 は 214 と同一個体のものであり、胎土

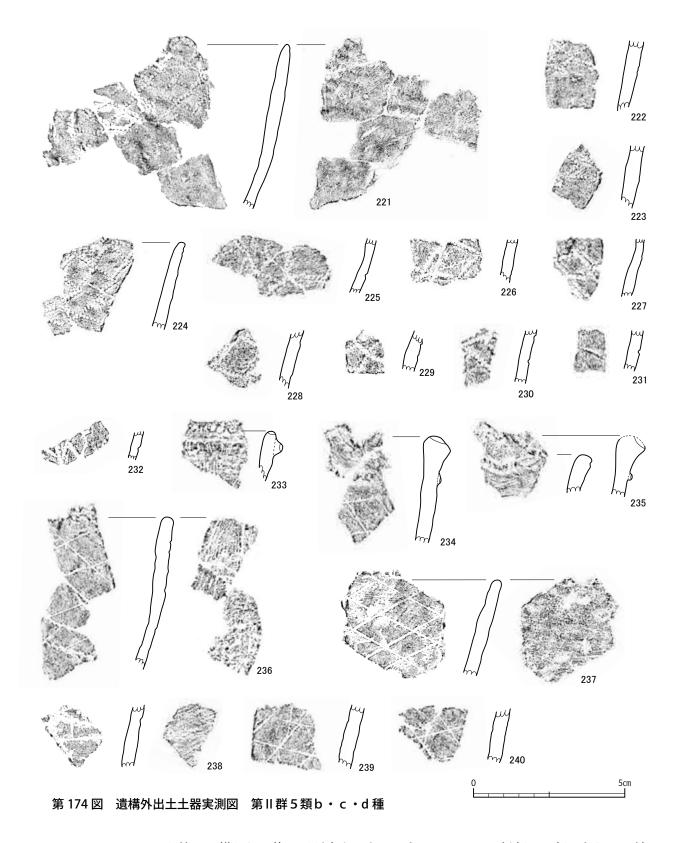


第 173 図 遺構外出土土器実測図 第 II 群 5 類 a 種

に繊維を含んでいる。219・220 は口縁部の一部であり、口端部に短条痕を施文し、短条痕の下端に横位の連続した貝殻腹縁文を施文している。

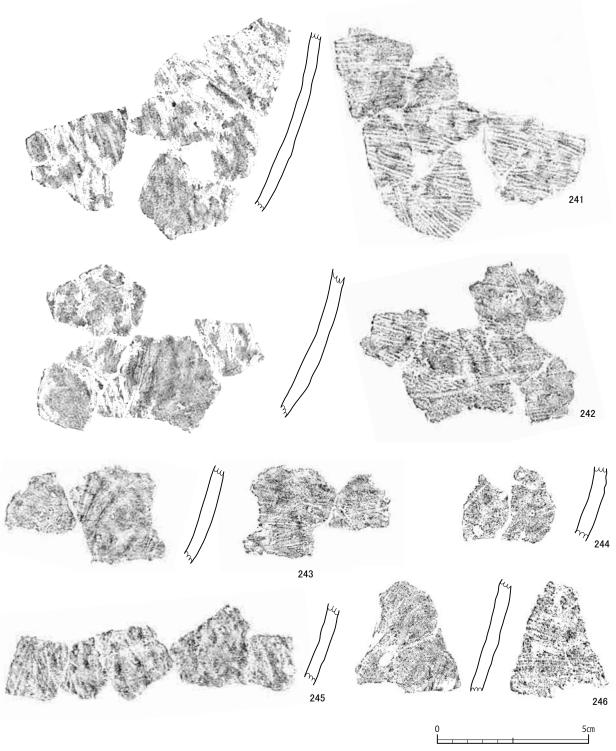
b種 貝殻腹縁を連続的に刺突し、格子目状の文様を施文するもの(第 174 図 221 ~ 232)

第 174 図 221 \sim 223 は同一個体と推測され、口端から 40mmほどの間隔に貝殻腹縁による刺突を格子目状に施文している。口端は内削ぎ状になっており、口端上には何も施文されていない。 224 \sim



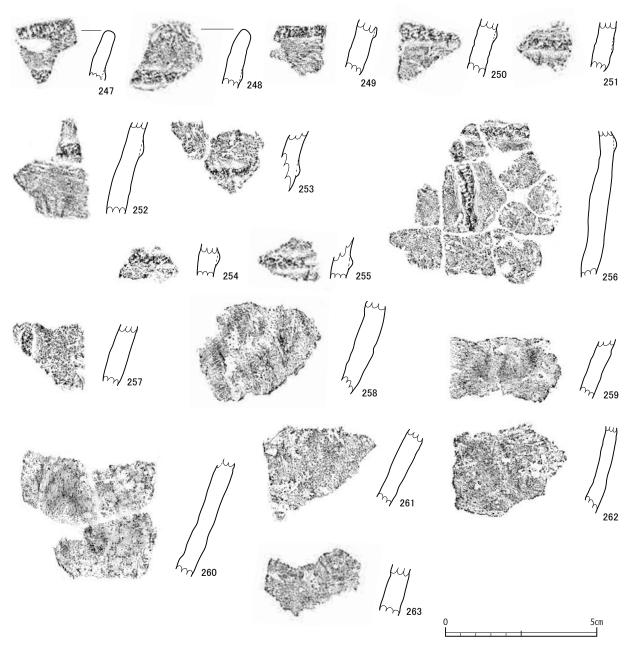
230 は、221 \sim 223 と比べて描かれる格子目が大きいものである。224 は口縁部の一部であり、口端部から下に 50mmほどの間隔に貝殻腹縁を用いた格子目状の文様が施文されている。口端部には貝殻腹縁による連続した押圧が行われている。225 \sim 232 はいずれも小片であるが、貝殻腹縁を用いた格子目状の文様が施文されている。

c種 口端直下に横位隆帯を貼付するもの(第 174 図 233)



第175図 遺構外出土土器実測図 第11群5類 e種

口端部直下に1条の横位隆帯を貼付するものを本種としたが、出土は第174図233の1点にとどまっている。233は口縁部であり、口端部が緩やかにカーブしていることから、波状口縁の可能性がある。口端上には連続した押圧状の刻みが加えられている。そして外面の口端部から1cmほど下の位置にやや大きめの隆帯が横位に1条貼付されており、隆帯上には連続した刻みが加えられている。隆帯下には縦位の条痕が確認できるが、出土した破片が小片のため、文様の全体的な構成は確認できない。a・b・d種とは出土位置が異なっている。



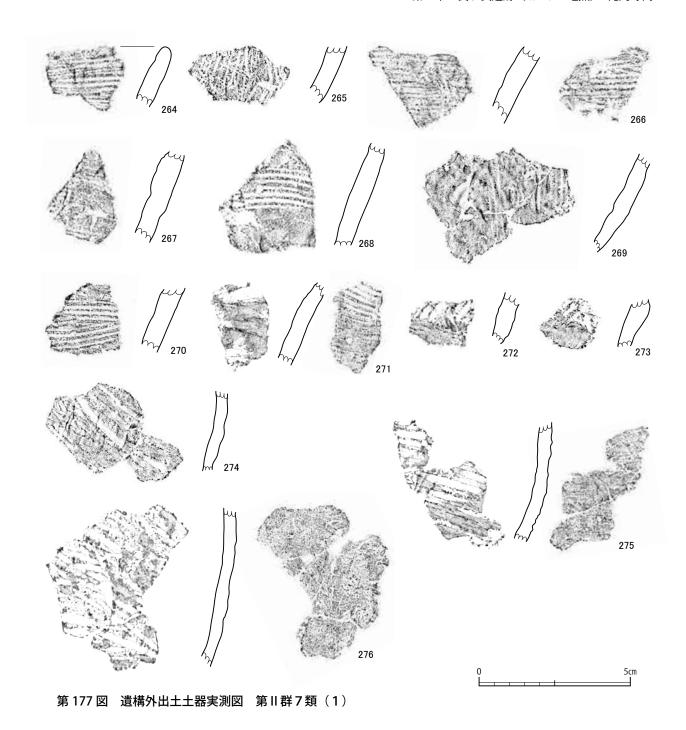
第176図 遺構外出土土器実測図 第Ⅱ群6類

d種 口端直下に横位隆帯を貼付し、格子目状の沈線を施文するもの(第 174 図 234 ~ 240)

口縁の一部に突起を貼付して、器面には貝殻腹縁を用いた沈線を格子目状に施文するものである。前述したように $a \cdot b \cdot c$ 種とは出土した位置が異なっている。第 174 図 234 ~ 239 は同一個体と推測され、234・235 は口縁部の突起箇所である。突起は一部を欠損しているものの、残存する形状から 2 本で 1 単位となる双状の突起と推測される。突起部分の下には短い隆帯が曲線的に貼付され、隆帯上には連続した刻みが加えられている。そして、この下に貝殻腹縁を用いた沈線が格子目状に施文されている。236・237 は、突起が付けられていない口縁部の一部である。施文される格子目状の文様の下端には貝殻腹縁による刺突が施文されており、この貝殻腹縁の刺突より下は無文となっている。238 は文様部下端の貝殻腹縁による刺突が施文される部分である。

e 種 胴部下半の無文部分 (第 175 図 241 ~ 246)

第 175 図 241 ~ 245 は出土位置が a・b 種と重複することから、これらの胴部の破片と推測される。

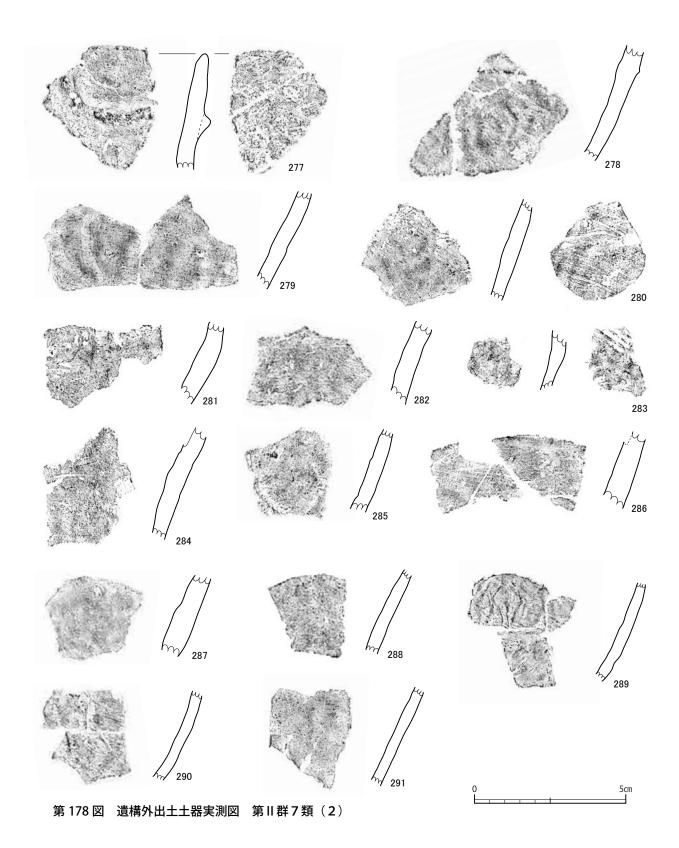


241 は器面の外面に擦痕調整が行われており、また内面には貝殻条痕が明瞭に残る。破片上部には煤が付着している。242 は胎土に白色や赤色の砂粒を多量に含むものであり、内面に条痕が残る。243・244 は条痕等が残っていない。246 は出土位置が d 種と重複していることから、 d 種の胴部片である可能性が高い。内面には条痕が明瞭に残る。

6類 下吉井式 (第 176 図 247 ~ 263)

早期末葉~前期初頭にかけての土器である下吉井式を本類とした。018-015 グリッド付近に集中して出土しており、これらは同一個体である可能性が高い。

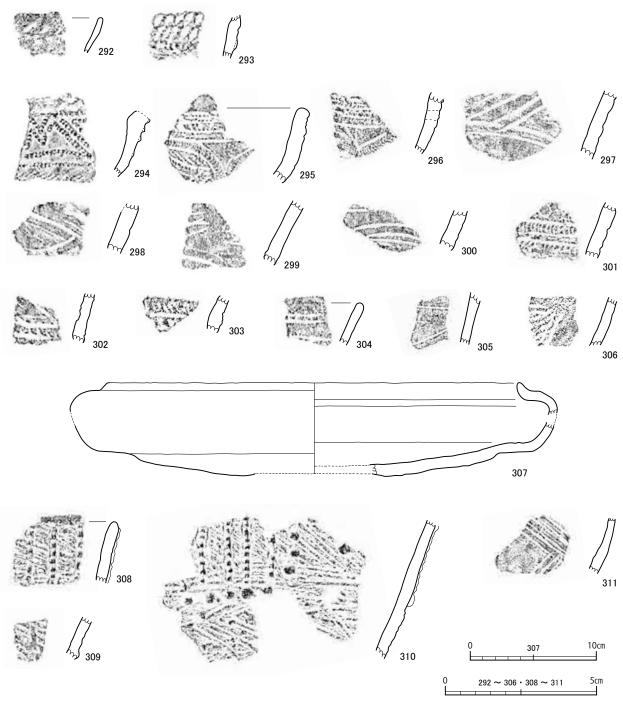
第 176 図 247・248 は口縁部の一部である。247 の口縁部は緩やかにカーブしていることから、口縁の形状は波状口縁である可能性がある。口端上には貝殻の背面を連続して押圧するいわゆる貝殻背圧痕文が口端面に対して斜めに施文されている。口端部から下に 2.5 ~ 3 cmほどの位置には横位の隆帯



が貼付されており、256 に見られるように部分的に垂下する隆帯と合わせて T 字状にする箇所がある。 隆帯は貝殻背圧痕文を施文する際の押圧によって低隆帯となっている。 $249\sim255$ には横位の低隆帯、257 には縦位の低隆帯が貼付されている。 $258\sim263$ はこの胴部である。

7類 その他 (第177図264~第178図291)

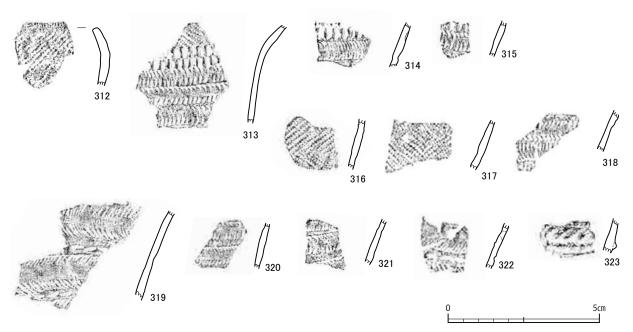
器面に貝殻などによる条痕や擦痕による調整を行っているもので、早期後半の土器と推測されるが、



第 179 図 遺構外出土土器実測図 第Ⅲ群 1~3類

型式等の特定が困難なものを本類に一括した。このため、本類は第 II 群 $1\sim6$ 類のいずれかに相当するものと思われる。

第 177 図 264 \sim 276 は器面外面に明瞭に条痕が残っているものである。264 は緩やかな波状となる口縁の一部である。外面には横位方向に貝殻条痕による調整が行われている。口端部は丸みを帯びており、刺突列などは加えられていない。265・267・268・270 は外面に、266・269 は内外面に貝殻条痕が残っている。271 は外面に凹線状の文様が施文されている。これは尖端が幅広の工具を用いてるため凹線状になっているものであるが、文様として施文されているのか、器面調整が行われた痕なのかは判然としない。内面は貝殻条痕が見られる。272・273 は屈曲部の一部であり、上側に集合沈線に



第 180 図 遺構外出土土器実測図 第Ⅲ群 4 類

よる文様が施文され、下側は無文となっている。 2 類の野島式である可能性がある。 $274\sim276$ はや や幅広の原体による条痕調整が行われている。

第 178 図 277 ~ 291 は外面に明瞭な条痕調整が残っていないものである。ただし、一部の内面には明瞭な条痕が残っている。277 は口端部付近に U字状に隆帯を貼付しているものである。胎土には砂粒と多量の繊維を含んでいる。器面に施される調整は確認できない。器厚が 10m以上あり、厚手である。胎土等の特徴は他の土器とは異質な印象を受ける土器である。278 は上部に横位の微隆起線が貼付されており、 1 類の清水柳 E 類土器か 2 類の野島式に相当する可能性がある。279 は外面に条痕の痕が残るが、明瞭でない。

280 は内外面に条痕による調整が行われている。ただし条痕は浅く、また不規則であることから、原体は貝殻ではなく植物の茎である可能性が高い。282・283 は外面に条痕が残り、283 は内面にも条痕の痕跡が残る。284 は内面に条痕がわずかに残るが、はっきりとしない。285・287 は内面に煤が付着しており、灰褐色の色調を呈している。286 は破片の上部と下部に明瞭な輪積み痕が残る。288~291 は器厚が 7 mm程度と薄手のものであるが、型式等は不明である。

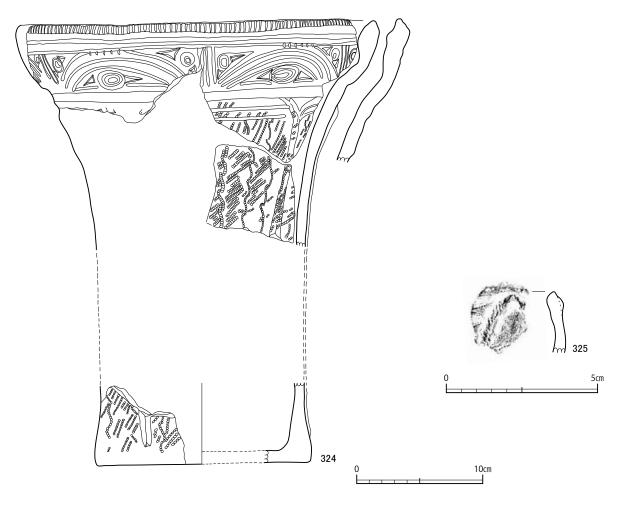
第Ⅲ群 前 期

1類 清水ノ上||式(第179図292・293)

前期前半の東海系土器である清水ノ上II式を本類とした。小片が2点出土しており、ともに図示した。 第 179 図 292 は口縁部の一部であり、口端部付近に低い隆帯を横位に貼り付け、その上から連続した 刻みを加えている。胎土には砂粒の他に微細な雲母を含んでいる。293 は口縁部付近の文様帯箇所で あり、連続した爪形状の刺突が施文されている。また、その下には隆帯が横位に貼付されており、その上にも刻みが加えられている。胎土には砂粒の他に繊維を含んでいる。

2類 諸磯b式 (第 179 図 294 ~ 307)

前期後半の諸磯b式を本類とした。細い粘土紐を幾何学状に貼付して文様を施文するものや半裁竹管を用いて木葉状文を施文しているもの、無文の浅鉢が出土している。第 179 図 294 は細い粘土紐を幾何学状に貼付する、いわゆる浮線文で文様を構成し、浮線文上を半裁竹管状の工具で押し引いている。また、下半には縄文が施文されている。



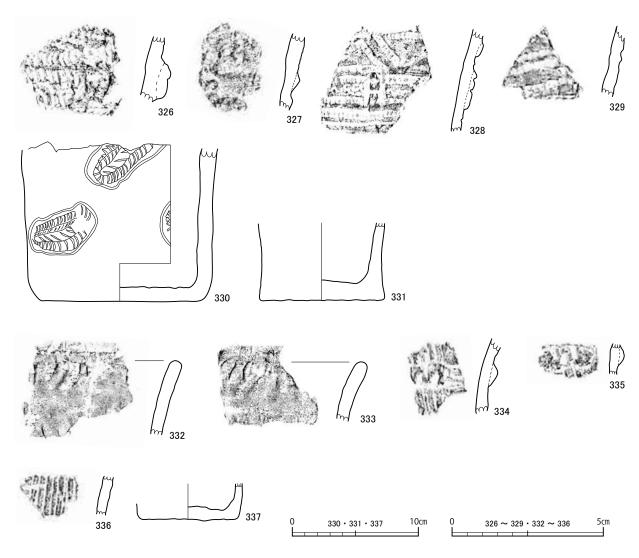
第181 図 遺構外出土土器実測図 第IV群1・2類

295~306 は半裁竹管状の工具を用いた平行沈線で木葉状文を施文するものである。295 と 296 は同一個体と推測され、半裁竹管状の工具で平行沈線による木葉状文を施文した後に、平行沈線間を同様の工具で押し引いている。また、木葉状文の中には縄文が施文されている。297~300 は半裁竹管状の工具で平行沈線による木葉状文のみを施文するものである。にぶい赤褐色の色調を呈しており、胎土には微細な雲母を多量に含んでいる。301~303 はやや幅広の半裁竹管状の工具を用いているものである。301 の左上には円形刺突文が施文されている。305 は幅が狭い半裁竹管状の工具を用いて木葉状文を施文し、木葉状文の中には縄文を施文している。306 は地文として縄文を施文し、その上から平行沈線による文様を描いているもので、地文の縄文はナデることで消している。

307 は無文の浅鉢である。なお、図示できなかったものの、頸部から胴部にかけての屈曲部に穿孔を有するものが存在することから、有孔浅鉢の可能性がある。全体としての接合はできなかったが、破片が多数出土し、また部分的な接合が可能であったため、これらを合わせて図上復元を行った。復元される口径は約32cmで、胴部の最大径は38.5cm、器高は約7cmである。

3類 諸磯c式(第179図308~311)

諸磯 b 式の次型式である諸磯 c 式を本類とした。第 179 図 308 ~ 310 は同一個体である。308 は 口縁の一部であり、半裁竹管状の工具による集合沈線を施文した後に、その上から縦位の浮線文を貼り付けている。また浮線文は上から半裁竹管状の工具で押し引き、密着させている。口端部は丸みを帯びている。310 は 308 に近い位置の破片であり、半裁竹管状の工具を用いた集合沈線を矢羽状や横位に



第 182 図 遺構外出土土器実測図 第IV群 3 · 4類

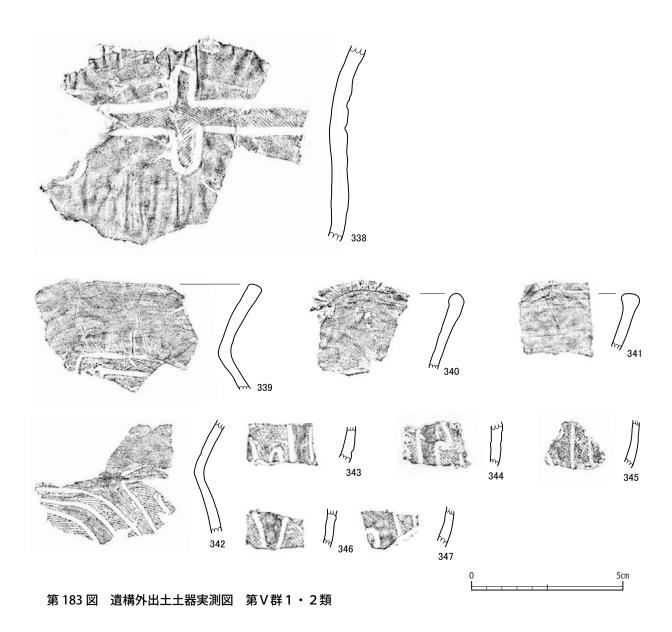
施文する。そしてその上から 308 と同様に縦位の浮線文を貼付している。また、ボタン状貼付文も施文されている。311 は矢羽状の集合沈線のみが施文されている小片である。出土位置が 308 \sim 310 とは異なっている。

4類 北白川下層Ⅱ式 (第180図312~323)

前期後半の関西系土器である北白川下層 II 式を本類とした。いずれも胎土に微細な砂粒を含んでおり、器厚は 5 mm以下と極めて薄手である。調査区南西部の 008-015 グリッド付近に大半が集中して出土している。ほとんどが胴部の一部であり、口縁部は 1 点の出土にとどまっている。

第 180 図 312 は内湾する口縁の一部であり、口端には細かい刻みが加えられている。また器面には R L の粒が細かい縄文が施文されている。313 は破片上部で大きく外反することから、口縁部から胴部にかけての箇所の一部と考えられ、器面には羽状縄文と尖端が角状の工具による押引文、半裁竹管状の工具による爪形状の押引文を組み合わせて文様を施文している。316・317 は羽状縄文が施文されて いる箇所である。312 \sim 317 は同一個体と推測される。

318~321 は器面に幅 20mmに及ぶ大振りな半裁竹管状の工具を使用した押引文と、横位の刺突列を 組み合わせて文様を施文しているもので、同一個体と推測される。322 には補修孔が残る。323 は外 面の下部に連続した刻みを加えた断面三角形状の小さい隆帯を横位に貼付し、隆帯の上側には斜め方向



に縄文が施文されている。また隆帯の下の一部には朱が付着している。出土位置が $312 \sim 322$ とは異なっており、調査区の北側である 014-026 グリッドで出土している。

第Ⅳ群 中 期

1類 五領ヶ台Ⅱ式(第181図324)

中期前葉の土器である五領ヶ台 II 式を本類とした。深鉢が 1 点出土している。比較的多数の破片が出土し、部分的な接合が可能であったことから、図上復元を行い図示した。第 181 図 324 の特徴を見ると、口縁の形状は平口縁であるが、部分的に突起の付く箇所がある。ただし、突起の形状については一部を欠損するため不明である。口縁部は内面で肥厚している。口端直下には縦位の条線が連続して施文されており、口縁に沿うかたちで横位 2 条の沈線を施文し、その下位に間隔をおいて縦位 3 条の沈線で区画が作られている。そして、区画内に 3 条の沈線を半円状に施文し、これに伴ってできる空白域に同心円の玉抱き三叉文を充填する。また、口縁部から胴部にかけての頸部には指頭による横位の凹線が施文されており、その下には間隔をおいて縦位の隆帯を垂下させ、垂下する隆帯の間には結節状文が施文されている。なお、垂下する隆帯は位置関係から 4 単位になるものと推測される。

2類 船元式 (第 181 図 325)

口縁部が 1 点出土している。内湾する口縁形状となることから、キャリパー型の器形になるものと推測される。口端部は内削ぎ状になっており、器面には隆帯を山形状に貼り付け、その上に連続した刺突を加えている。内面は横位方向のナデ調整が行われている。文様や器形の特徴から中期前葉の関西系土器である船元 Π 式と推測され、 1 類の五領ケ台 Π 式との時期的な関連が推測される。

3 類 勝坂式 (第 182 図 326 ~ 331)

中期中葉の土器である勝坂2式(藤内式)を本類とした。第 182 図 326 は半裁竹管状の工具を用いた押引文による文様を主体としており、破片左側に突起状のものが貼付されている。何らかの区画が作られていると推測されるが、部分的なため全体の様子は不明である。327 は隆帯で区画を作り、その中に押引文を充填している。全体的に摩滅が著しく、また小片であるため、全体の文様構成は不明な点が多い。328 は隆帯によって重三角区画文と方形区画文を構成し、隆帯の脇をなぞるように角押文(押引文)を施文している。また方形区画の中心には横位方向に沈線をジグザグに施文している。また方形区画を作る隆帯の縦位部分にはヘラ状工具による刻みが加えられている。329 は 328 と同一個体と推測され、横位方向の角押文が施文されている。

330 は胴部から底部にかけての一部であり、口縁部付近は出土していない。底径は 13cmほどである。地文はなく、器面には短い隆帯が斜位方向に数か所、貼付されている。隆帯上にはヘラ状工具による連続した刻みが加えられており、この隆帯を囲うように角押文が施文される。さらにこの角押文を囲うように沈線が楕円形に施文されている。331 は底部の一部であり、底径は 10cmほどで 330 よりも小さい。器面に文様や地文は施文されていない。底部には網代痕が残る。

4類 曽利Ⅱ式 (第182図332~337)

中期後葉の曽利Ⅲ式を本類とした。第 182 図 332・333 は口縁部の一部であり、無文である。この無文部の存在から、器形はキャリパー型を呈するものと推測される。334・335 は口縁部から胴部にかけての屈曲部である。器面には縦位の集合沈線を施文し、その上から横位の隆帯が 1 条貼付され、隆帯上には刺突が上下交互に加えられている。336 は胴部の一部であり、集合沈線が施文されている。337 は底部であり、底径は8 cmほどである。

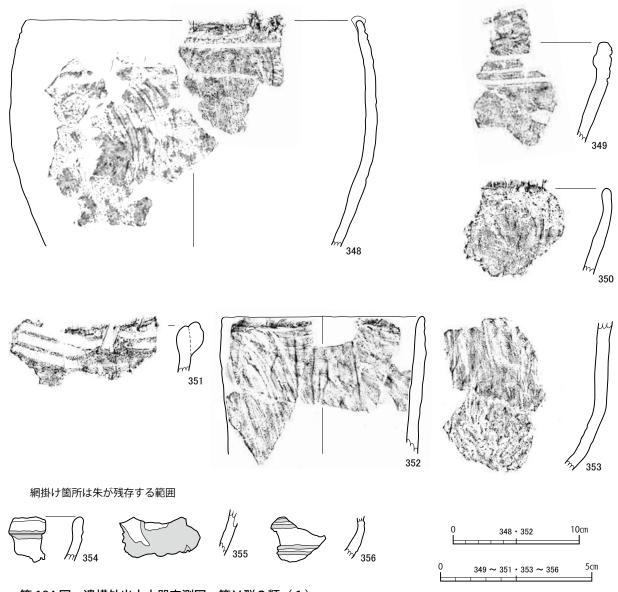
第 V 群 後期・晩期

1類 後期初頭西日本系土器 (第 183 図 338)

後期初頭における西日本系土器を本類とした。中津式に相当すると推測される。口縁から胴部にかけての頸部の一部が出土しているが、口縁部は出土していない。屈曲する位置に、幅 5mm程度の棒状工具を使用した凹線で横位の方形区画を施文している。また、破片中央では上下に凹線を突出させており、区画が十字状になる。そして区画内に縄文を充填することで、帯縄文のようにしている。また、破片上部の外面には板状の工具による器面調整の痕跡が残る。内面の下側には指頭ないし植物を用いたナデの痕が残っており、胎土に含まれる砂粒が右側に引きずられている状態が確認できる。外面の下端付近には煤が付着している。

2類 称名寺式 (第 183 図 339 ~ 347)

後期初頭における称名寺式を本類とした。第 183 図 339 ~ 341 は口縁の一部、342 は口縁から胴部にかけての屈曲部(頸部)、343 ~ 347 は胴部の一部であり、いずれも胎土や色調の特徴が類似していることから同一個体と判断される。器形は胴部が丸みを帯びて、頸部で直線的に外反して立ち上がる口縁となる。口縁は無文であり、頸部以下の胴部に文様が施文されている。文様は曲線や直線の凹線を描き、凹線間に縄文を充填することを基本としている。文様構成については断片的なものしか出土していないため明確には判断できないが、比較的大きな破片である 342 から渦巻型やカギ型の文様が施文されているものと推測される。器形や文様の特徴から、これらは称名寺式のなかでも、称名寺 I c 式(今



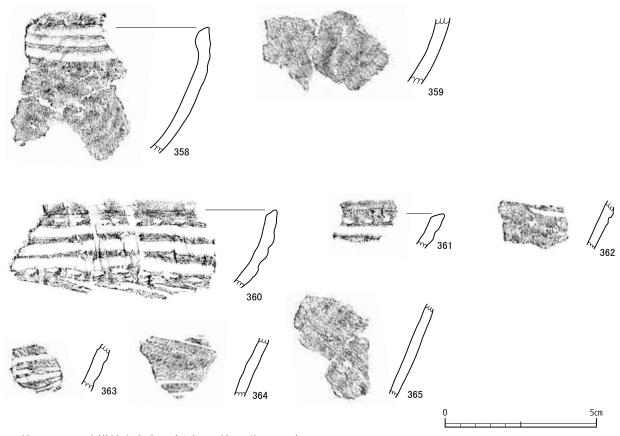
第184 図 遺構外出土土器実測図 第 V 群 3 類 (1)

村 1977) に相当するものと判断される。

3類 加曽利B式~後期安行式(第 184 図 348 ~第 185 図 357)

後期後半の加曽利B式~後期安行式にかけてのものを本類とした。第 184 図 348 は部分的に接合が可能であったため、それらを合わせて口径等の復元を行い図示した。口縁の形状が緩やかな波状となるものであり、口縁部には双状の突起が付けられている。そして、突起の上部には横位の刻みが加えられている。口径は復元値で約 25cmである。また器形は口縁部が緩やかに内湾する形状となることから、口端部から 8 cmほど下の位置で最大となり、復元値で最大径は 29cmほどである。口端直下には、口縁部の形状に沿って棒状の工具ないし植物の茎を用いて 2 条の凹線が施文されており、凹線間にはヘラ状工具の尖端で連続した刺突が加えられている。内面には植物の繊維などを用いてナデた痕跡が明瞭に残っている。349 は口縁部の一部であり、口端部を内面で肥厚させている。口端直下には、ヘラ状工具を用いて斜位の連続した刻みを加えている。そしてこの下には 3 条の凹線が施文されている。350 は口縁が緩やかに内湾して立ち上がるものであり、口端部は内面でわずかに肥厚している。器面外面に文様は施文されていない。これらは加曽利B式に比定される。

第185 図 遺構外出土土器実測図 第V群3類(2)

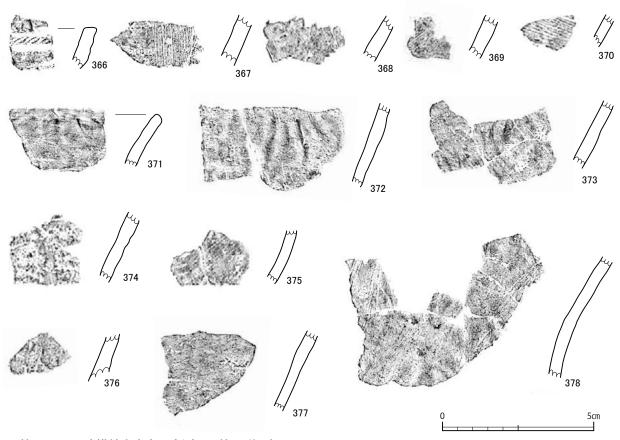


第186図 遺構外出土土器実測図 第V群4・5類

351 は口縁が緩やかな波状となるもので、口端直下の一部に突起が貼付されている。この突起を挟むように指頭か棒状の工具で横位3条の凹線が施文されている。352 は胎土が351 と類似しているものの、口縁部には文様等は施文されておらず、突起も貼付されていないことから、別個体と判断した。口縁形状は平口縁であると推測されるが、整形が粗く、正確な形状を判断することはできない。外面には植物の繊維を用いた粗いナデ調整が行われており、その痕跡が明瞭に残っている。353 はこの胴部から底部にかけてものである。

354~356 はいずれも小片であるが、器面に朱が塗られているものであり、同一個体と判断される。354 は内湾する口縁部の一部であり、内面はわずかに肥厚している。外面に2条の並行する沈線が施文されている。沈線より下に朱が確認でき、特に沈線の中に多く残存している。また、上端を欠損していることから、突起等が貼付されていた可能性がある。355 は胴部の一部であり、器面全体にミガキによる調整が行われており、光沢を帯びている。そしてその上から朱が塗られており、右側に良く残存している。356 は口縁部付近の破片である。内外面にミガキによる調整が行われており、器面は光沢を帯びている。そしてその上から朱が塗られているが、朱の残存状態は悪い。また、破片の上側と下側の2段に渡って2条の平行沈線が施文されている。

第 185 図 357 はいわゆる異形台付土器である。口縁部と器台部を欠損しており、中央の胴部の一部が残存している。胴部には注口と突起が貼付されており、注口と突起の下端が胴部の最大径となっている。最大径は 11cm程度である。なお、突起は両側から孔を穿っているものの貫通していない。また、注口と突起の下にはヘラ状工具による縦位の線があり、おおむね突起と注口の中央の位置に当たっていることから、これらを器面に付ける際の目印と推測される。しかし、注口と突起についてはそれぞれ 1 か所ずつしか残存しておらず、その他の箇所は大きく欠損しているため、これら以外がどのようになっ



第187図 遺構外出土土器実測図 第V群6類

ていたかの判断は難しい。ただし、注口の反対側の無文部分においても縦位の線の痕がわずかに残っていることから、注口ないし突起が貼付されていたものと推測される。器面の外面はミガキによる調整が行われており、その上から沈線と縄文を用いた文様が施文されている。一方、内面は指頭によるナデで調整されており、ミガキ調整は行われていない。

外面に施文される文様は、胴部と器台の接合部から1cmほど上の位置に横位の沈線が施文されており、この沈線より上の部分に施文されている。注口と突起を器面に貼付した後にこれらを2条の沈線で丸く囲い、注口と沈線の間の空白域は半円に近い形の沈線で区画する。そしてその頂点にボタン状の浮線文を貼付し、そこから下に向かって2条の平行沈線を施文することで半円を2分するような区画を作り、その中に縄文を充填している。ただし、残存する注口と突起の間には縦位の平行沈線が施文されておらず、区画内の縄文も施文されていないため無文となっており、ミガキ調整のみが残っている。胴部下半に施文される横位の沈線の下には縄文が施文される。

胴部の底は指頭ないし繊維質の工具を用いて、時計回りに抉るような調整の痕跡が明瞭に残っている。器台部分は一部が残存するのみであるが、胴部との接合箇所から下には、2条の横位の平行沈線が施文されている。また、器台の残存部分には土器の胎土が見える箇所と見えずに焼き締まっている箇所が存在することから、透かしが作られていたものと推測される。そしてこの透かし箇所にも、胴部に存在したような注口と突起を器面に付ける際の目印となる、ヘラ状工具による縦位の沈線が見られる。文様などから時期的には後期安行式の範疇に収まるものと判断されるが、3類が集中して出土している東尾根上ではなく、調査区南側の010-016 グリッド(中央谷内)において単体で出土している。

4 類 凹線文系土器 (第 186 図 358 · 359)

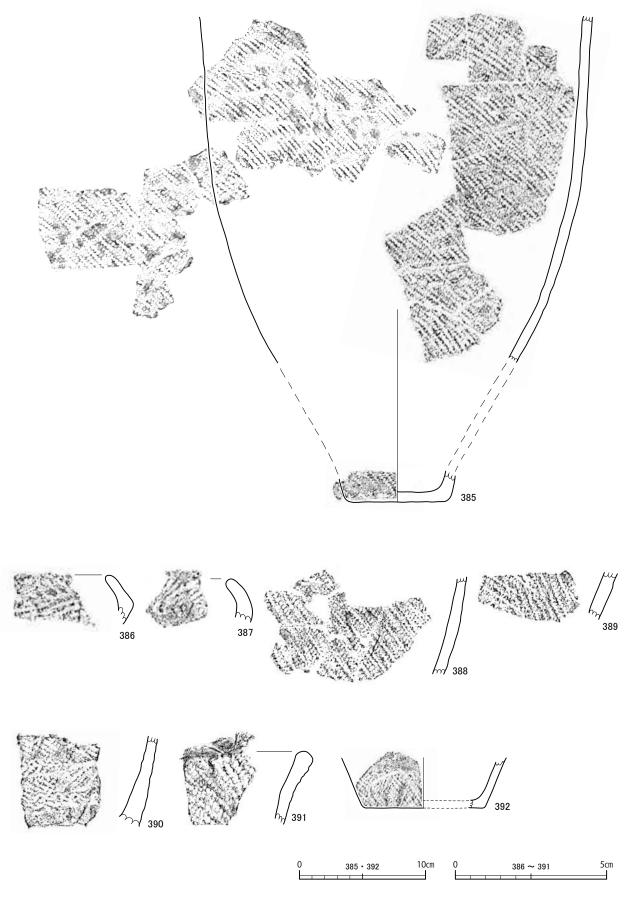
後期末葉における凹線文系土器を本類とした。第186図358は内湾する口縁の一部であり、口端部



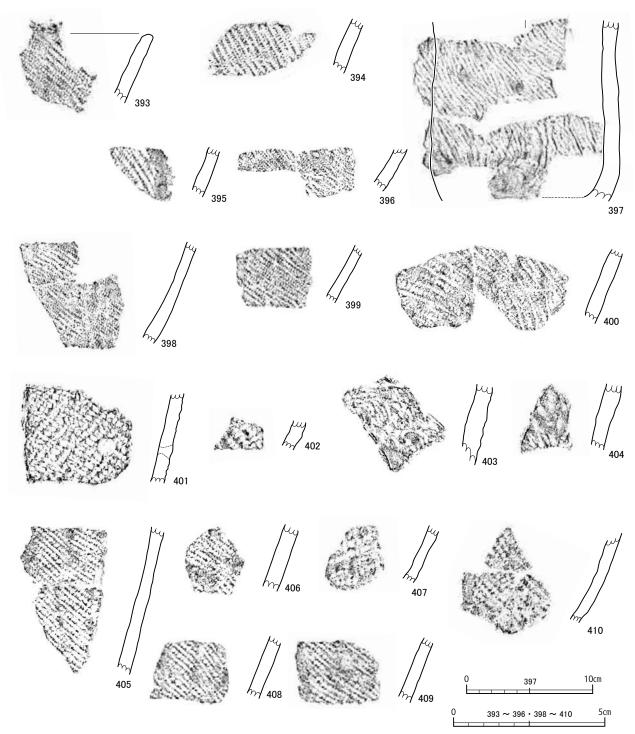
第 188 図 遺構外出土土器実測図 第 VI群 (早期)

直下に3条の凹線が施文され、口端部は内面で肥厚している。口端上部は指頭によるナデで平坦になっており、口縁形状は平口縁である可能性が高い。外面はミガキによる調整が行われていると推測されるが、全体的に摩滅している。内面はナデによる調整が行われている。359 は胴部の一部であり、器面の内外面にミガキによる調整が行われている。色調や胎土が358 と類似するため本類に含めたが、他の分類に属する可能性もある。

5 類 清水天王山式 (第 186 図 360 ~ 365)



第 189 図 遺構外出土土器実測図 第 VI群 (前期)



第 190 図 遺構外出土土器実測図 第 VI群 (中期・後期~晩期初頭)

後期末葉~晩期初頭にかけての土器である清水天王山式を本類とした。口縁部から胴部にかけての破片が出土している。第 186 図 360・361 は口縁部の一部である。360 は内湾する口縁で、口端直下には口縁に沿うように連続した刺突を加え、その下には横位 3 条の凹線を施文し、さらにその下に口端直下と同じ連続した刺突列を加えている。最下段の刺突列の下には、斜位方向に連続した短沈線が施文されている。他の遺跡から出土している清水天王山式から推測すると、この短沈線の下に逆向きの沈線が施文され、矢羽状になっている可能性が高い。口端は内削ぎ状になっており、またわずかに肥厚している。器面の内面は指頭によるナデで調整が行われている。361 は 360 と同様の口縁部である。口端直

下に口縁に沿うように連続した刺突列が加えられており、その下には横位の凹線が 2 条施文されている。 文様や色調、胎土といった特徴が 360 と酷似するものの、やや器厚が薄く、また口端内面の内削ぎの幅が狭いことから、別個体の可能性がある。 $362\sim365$ は胴部の一部である。一部に沈線が施文されている。

6類 その他 (第187図366~378)

後期~晩期初頭にかけての土器と推測されるが、型式等の詳細な時期比定が困難なものを本類に一括した。第187図366は口縁部の一部である。口端は平坦で、外面の口端直下には2条の凹線が施文され、凹線の間には縄文が施文されている。内面はミガキによる調整が行われている。文様の特徴から後期安行式の可能性があるが、小片のため断定はできない。367~369は器面に縦位や斜位の条線を施文するもので、同一個体と判断される。外面は褐灰色などの黒色に近い色調を呈しており、内面はミガキによる調整が行われている。370は外面に条線を施文するものである。367~369に類似しているように見えるものの器厚が薄く、また色調も明瞭に異なっている。

371 は緩やかに外反する器形となる無文の口縁部である。内外面にミガキによる調整を行っており、口端部は丸みを帯びている。372 は器面の内外面を縦位にナデることで調整を行っており、砂粒が縦位に動いた痕が多数残っている。374 は外面が摩滅していて判然としないが、縄文が施文されている可能性がある。内面はミガキによる調整が行われている。375 は器面の一部に縄文らしき痕跡が残っているが、明瞭でない。

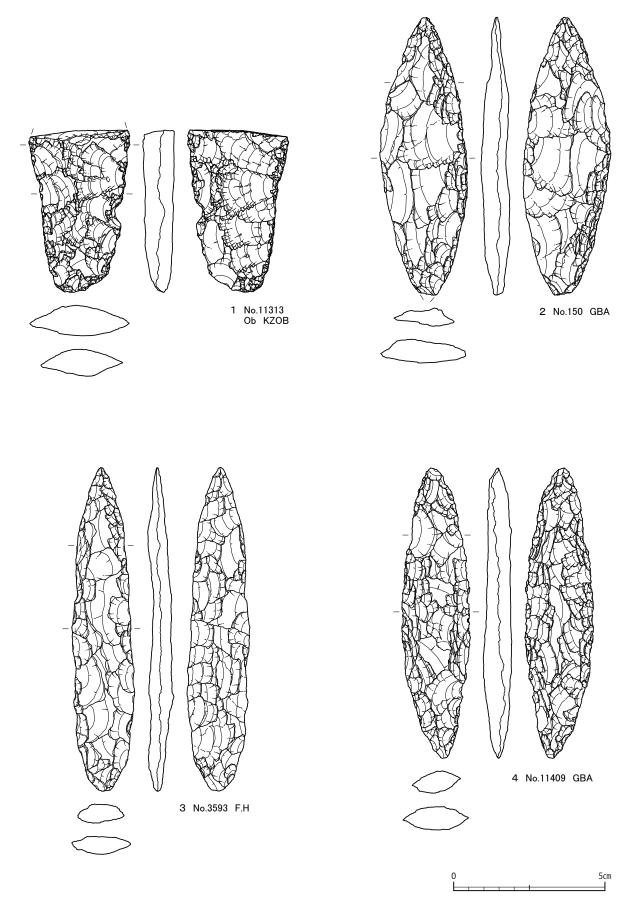
第VI群 縄文施文土器 (第 188 図 379 ~第 190 図 410)

時期判断が困難である縄文を器面に施文する土器を、本群として一括した。土器の特徴や出土位置などから時期等を推測してまとめた。

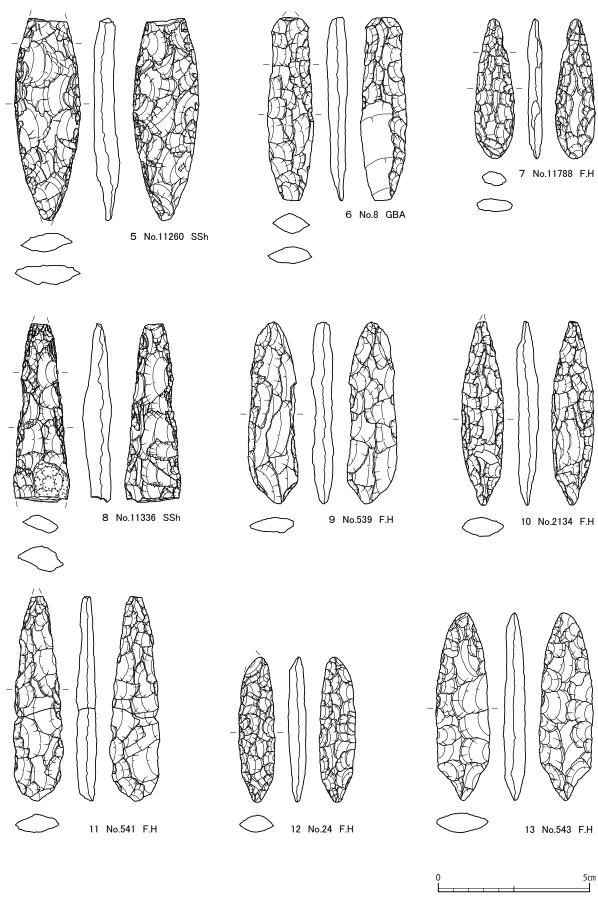
第 188 図 379 ~ 384 は早期に属すると思われる縄文施文土器である。379 は部分的にある程度の接合が可能であったため、それらを合わせて口径等の復元を行い図示した。復元図からは、口縁部は緩やかに内湾するラグビーボール形の器形となり、口端から 8.5cmほど下の位置が最大径となる。口端部は丸みを帯びている。器面には口縁部から底部にかけて、粒の大きい R L の縄文が施文されているが、指でナデた痕跡も多く残っている。内面は無文である。器厚は 10cm前後と比較的厚手で、胎土には繊維を多量に含んでいる。器形や底部の形状から、早期前半の押型文土器に併行するものと推測される。380 ~ 384 は、器面に R L の縄文を施文するもので、胎土に比較的多量の繊維を含んでいる。胎土の特徴が早期後半の茅山系土器に類似しているが、型式は不明である。なお、380 の上部には補修孔が残る。

第 189 図 385 \sim 392 は前期に属すると思われる縄文施文土器である。385 は口縁部を欠損するものの、胴部以下において部分的な接合が可能であったため、それらを合わせて胴部径等の復元を行い図示した。底部は直径 7.5cm程度の平底であり、底部からは緩やかに外反して立ち上がるが、途中で直線的に変化する器形となる。器面には R L の縄文が底部付近まで施文されており、部分的に指を当てた痕が残っている。内面は無文であり、横方向にナデている痕跡が明瞭に残っている。焼成は良く、焼き締まっている。前期前半の土器と推測されるが、細かい時期比定は困難であった。

386・387は口縁の一部であり、口端部から2cmほど下の位置で内側に屈曲する器形となるものである。前期に属するものと推測されるが、型式等は不明である。388~390は縄文が文様の主体を占める、前期前葉の関東系の土器と推測される。388・389は胴部の一部であるが、390は底部付近の一部であり結節縄文が施文されている。いずれも部分的な出土のため、型式等の比定は困難である。391は波状口縁の一部で、波頂部は肥厚しており、突起状の部位が付く可能性が高い。胎土に多量の雲母を含んでおり、器形や施文される縄文から諸磯b式に相当するものと推測される。392は器厚が6~7m程度と比較的薄手の土器の底部であり、底部下端まで縄文が施文されている。



第191図 遺構外出土石器実測図(1)



第 192 図 遺構外出土石器実測図(2)

第190図393~400は中期に属すると思われる縄文施文土器である。393~395は同一個体と推測され、RLの縄文が施文されている。393は口縁部で口端は内削ぎ状になっている。395は土器片の右側が無文となっている。397は底部から胴部のもので、器形から勝坂式の下半部と推測される。RLの縄文が横回転で施文されているが、規則的ではない。底部から3cmほどは無文となっている。本部位よりも上に文様部分があるものと推測されるが、今回の調査では出土していない。396・398~400は胴部の一部である。器厚や胎土から中期のものと推測されるが、細かい型式等は不明である。400は器面全体に摩滅している。

第 190 図 401 ~ 410 は後期~晩期初頭にかけての縄文施文土器と推測されるものである。401 は 組紐を用いて器面に縄文を施文しており、破片の右側に補修孔が残る。 $402 \sim 404$ はやや赤味を帯び た褐色の色調を呈し、胎土には白色や赤色の砂粒を多く含んでいる。器面には縄文が施文されているものの外面が全体的に摩滅しており、原体の特徴などは不明な点が多い。加曽利 B 式~後期安行式にかけてのものと推測される。 $405 \sim 410$ は器面に縄文を施文しているものである。これらは出土位置から 当該期のものと判断したものの、土器そのものから明確な時期比定は困難であった。(小崎)

(4) 遺構外出土石器

尖頭器 (第191図1~第192図8)

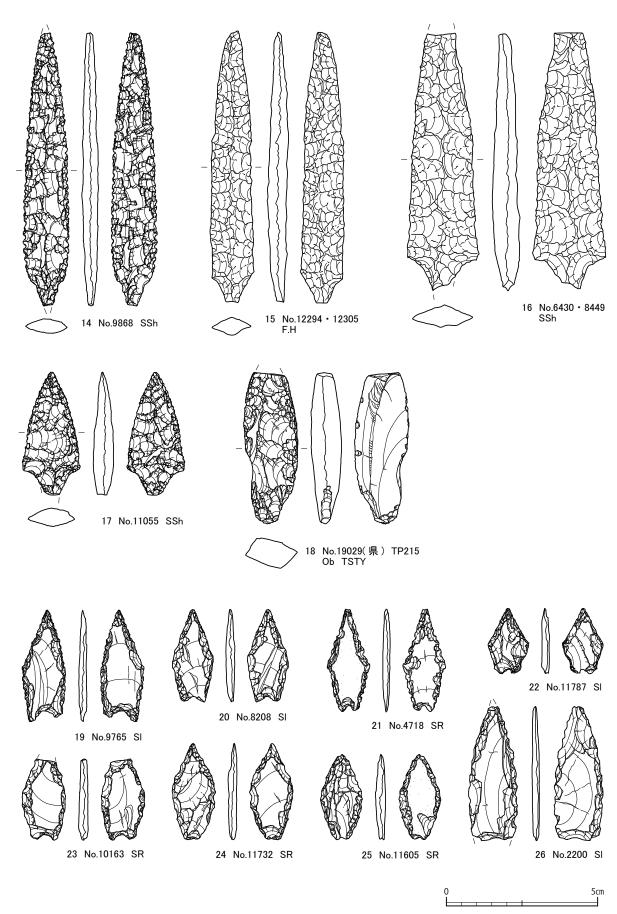
23 点が出土し、うち8点を図示した。第191図1は黒曜石(神津島恩馳島産)を素材とする大形の 尖頭器である。表面からの衝撃により上半部を欠損しているが、器長は10cm程度になると推測される。 両面に調整剥離が施されているが、両面とも一側縁にのみ深い調整が及んでいるため、石器中央の稜線 は両面とも左側に寄り、断面は平行四辺形に近い凸レンズ状を呈している。側縁は極めて鋭角であり、 潰れたような微小な剥離が認められる。なお、草創期に比定されうる黒曜石製の尖頭器は、ほかに微小 な破片1点を数えるだけである。

第191 図 2 ~第192 図 8 は、木葉形の尖頭器である。石材は、2・4・6 がガラス質黒色安山岩製、3・7が F. ホルンフェルス製、5・8 が珪質頁岩製である。2 は両面にやや粗く浅い調整加工を繰り返し施すことで石器を仕上げている。3 は最大幅が下半部にあり全体的に薄身であるが、先端部は特に薄く仕上げられている。4 は 2 と同程度の器長であるが、2 に比べて全体的に厚身である。第192 図 5 は先端部を欠損しているが、両面に平坦な剥離が丁寧に施されている。6 は先端部を欠いているが、3 と同様に下半部に最大幅を持ち、基部が薄く仕上げられている。7 は器長 5 cm弱を測る、薄手で小形の尖頭器である。8 は両端を欠いているが、細身で厚みのある尖頭器である。

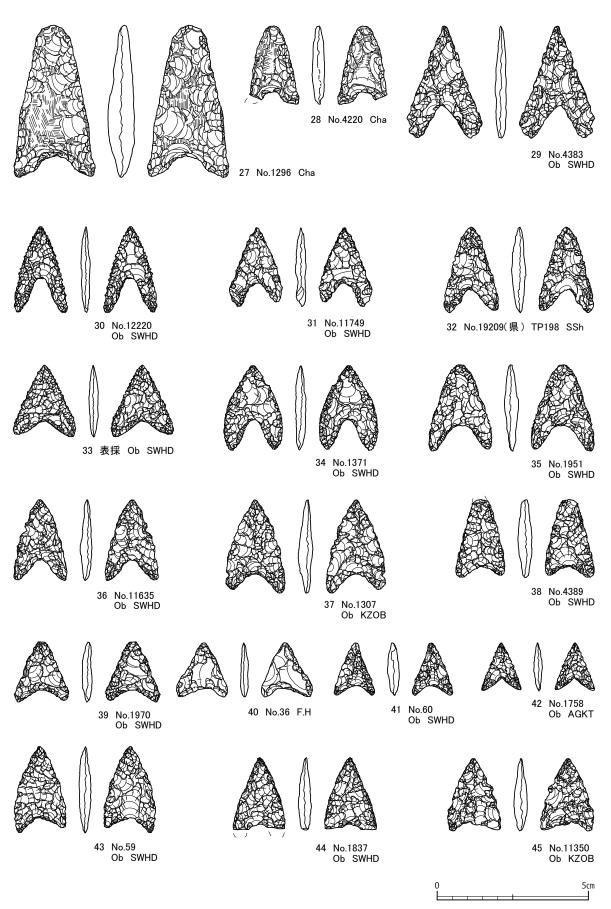
有茎尖頭器 (第 192 図 9 ~ 第 193 図 17)

基部に加工が認められる、有茎の尖頭器である。17点が出土し、うち9点を図示した。第192図9~13・第193図15は、F.ホルンフェルス製の有茎尖頭器である。石材の性質から表面の風化が激しく、調整加工はわかりづらくなっている。また、 $9\sim12$ は風化によって逆刺部分の形状が目立たなくなってしまっていることから、茎の作り出しはあまり明瞭ではない。15は両面からの丁寧な剥離によって細身の形状に整形されており、器長は9cmを測る。

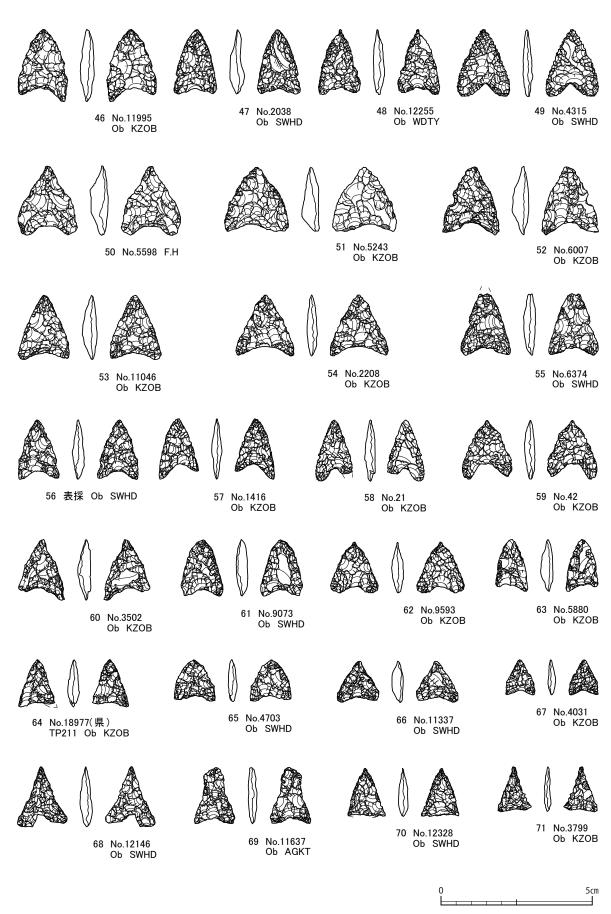
第 193 図 14・16・17 は珪質頁岩製で、全体に丁寧な剥離を加え、形状が整えられている。14 は両面ともに被熱を受けて赤く変色し、一部には煤も付着している。先端部と基部に欠損が認められるが、全体として薄手に仕上げられている。側縁は両面から同一打点を押圧することで鋸歯状の側縁にしているが、打点が重ならないようにある程度、間隔を空けているため、頂点が平坦な鋸歯状となる。16 は両端部を欠損するものの、両面からの丁寧な剥離によって整形されている。17 は器長が 4 cmほどで、側縁は鋸歯状を呈する。



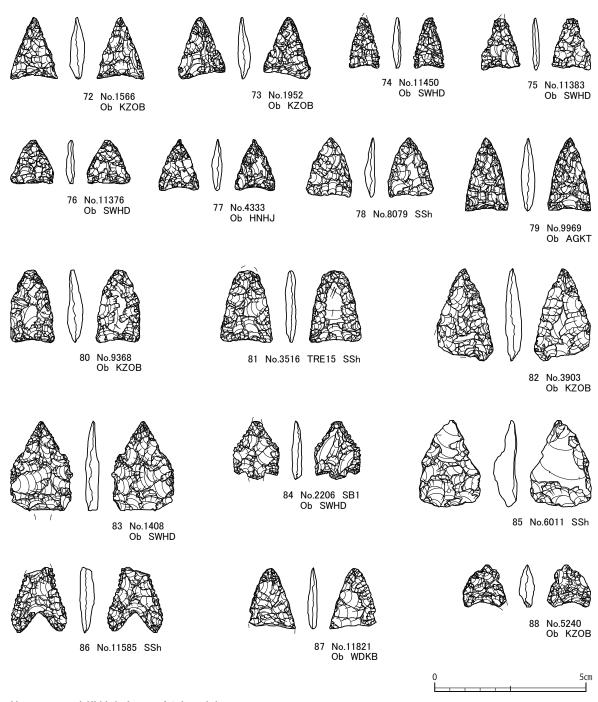
第 193 図 遺構外出土石器実測図 (3)



第194図 遺構外出土石器実測図(4)



第195図 遺構外出土石器実測図(5)



第 196 図 遺構外出土石器実測図 (6)

尖頭器未製品 (第 193 図 18)

尖頭器の未製品と考えられるものは 2 点出土しており、うち 1 点を図示した。第 193 図 18 は黒曜石製(蓼科冷山産)の尖頭器の未製品である。背面には左側縁を中心に平坦な調整加工が施されているが、腹面は未加工のままである。なお、本遺物は静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した試掘調査(TP215)で出土したものである。

薄形尖頭器 (第 193 図 19 ~ 26)

8点が出土し、すべてを図示した。この類の尖頭器は、素材に薄く剥がれる性質のある粘板岩やこれ に類する石材を多用するため非常に薄く、周縁にのみ浅い加工を施して形状を整え基部に簡単な抉りを 加える。今回の調査では粘板岩に加え、珪質岩も用いられていた。胴部に屈曲部を持ち五角形に近い形状を示すもの($19 \sim 22$)と、側縁が弧状で明確な屈曲部を持たないもの($23 \sim 26$)に大きく分類できる。総じて基部の抉りは浅いが、第 193 図 24 の基部にはわずかな抉りしか認められず、25 は腹面の下端から剥離が行われているものの、抉りが入るまでには至っていない。これは基部に十分な幅が確保されておらず、調整が不十分になってしまったためと考えられる。また、 $19 \cdot 21 \cdot 26$ は縁辺に施された粗い鋸歯状の剥離が特に明瞭に認められ、 $21 \cdot 24$ の背面または腹面には節理面が残る。

トロトロ石器 (第 194 図 27・28)

2点が出土し、ともに図示した。「異形局部磨製石器」に分類されるもので、通称「トロトロ石器」と呼ばれる。いずれも乳白色をしたチャート製である。細かい剥離調整によって整形されており、基部にはU字状の抉りが入る。また、側縁は脚部の手前で少し括れ、中央付近には研磨が認められる。28は石鏃と同程度の大きさであるが、上述した特徴がトロトロ石器と類似しているため本類に分類した。

石鏃 (第 194 図 29 ~第 196 図 88)

115 点が出土し、うち 60 点を図示した。基部の抉りに着目し、6 類に分類した。基部の抉りが器長の半分近くに及ぶものを I 類、基部の抉りが器長の 1/4 以上に及ぶものを I 類、基部の明確な抉りはあるものの、器長の 1/4 に達しないものを I 類、基部にわずかな抉りが認められるものや平基となるものを I 数、基部が有茎のものを I 類とした。さらに側縁の形状により、側縁の形状が直線的なものを a、曲線的なものを b、左右非対称となっているものを c と細分した。

I類a (第194図29) 基部の抉りが器長の半分近くに及び、側縁が直線的なもの。

基部の抉りがV字状に深く入る長脚鏃で、1点が出土した。石材は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

I類b(第194図30) 基部の抉りが器長の半分近くに及び、側縁が曲線的なもの。

基部の抉りがU字状に深く入る長脚鏃で、1点が出土した。側縁はやや弧状を呈し、鋸歯状に加工されている。諏訪星ヶ台産の黒曜石を石材とする。

■類a (第194図31~33) 基部の抉りが器長の1/4以上に及び、側縁が直線的なもの。

本類には3点が含まれる。基部の抉りはU字状またはV字状を呈し、側縁は鋸歯状に加工が施される。 石材は第194図32が珪質頁岩製で、その他は諏訪星ヶ台産の黒曜石である。

Ⅱ類b (第194 図 34 ~ 37) 基部の抉りが器長の 1/4 以上に及び、側縁が曲線的なもの。

本類には4点が含まれる。基部の抉りはU字状で、丁寧な調整剥離によって整形されている。すべて 黒曜石製で、第194図37が神津島恩馳島産、その他は諏訪星ヶ台産である。

Ⅲ類 a (第 194 図 38 ~ 42) 基部の抉りが器長の 1/4 未満で、側縁が直線的なもの。

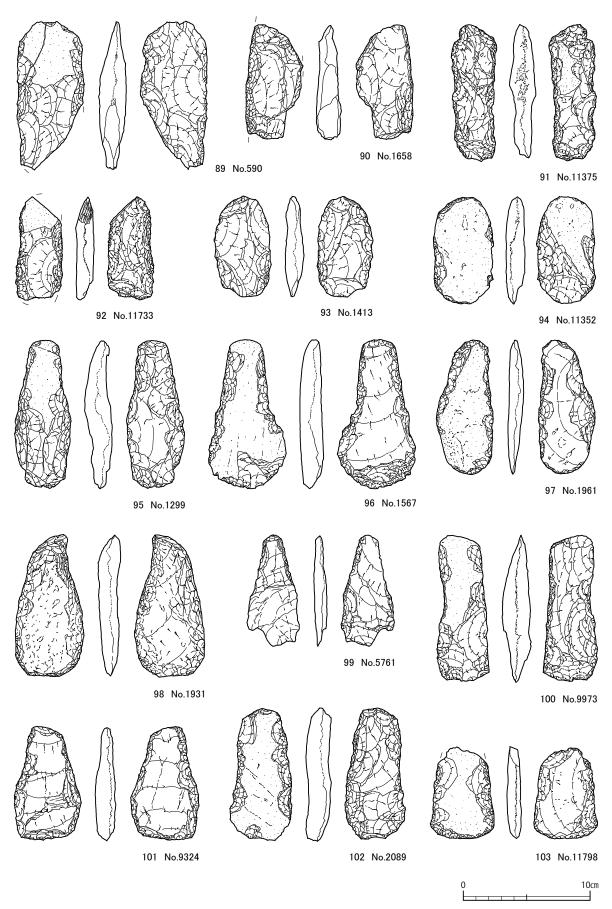
本類には 5 点が含まれる。形状が正三角形に近いもの(39・40・42)と二等辺三角形に近いもの(38・41)に分類される。 F. ホルンフェルス製の第 194 図 40 以外はすべて黒曜石製で、38・39・41 が諏訪星ヶ台産、42 が天城柏峠産である。

Ⅲ類b (第 194 図 43 ~ 第 195 図 67) 基部の抉りが器長の 1/4 未満で、側縁が曲線的なもの。

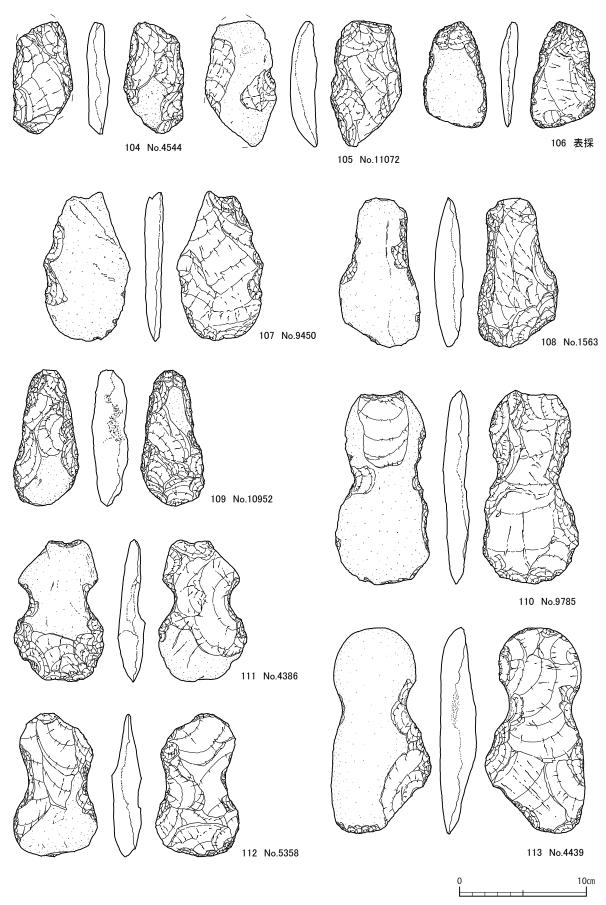
本類は最も出土数が多く、25 点が含まれる。器長が 2.4cm程度のものから 1 cmを測る小形のものまであり、脚部の形状も丸みのあるものや尖ったものなど様々である。また第 195 図 50 \sim 52 は比較的、厚みがある。石材は、50 が F. ホルンフェルス製である以外はすべて黒曜石製で、産地は第 194 図 43・44・第 195 図 47・49・55・56・61・65・66 が諏訪星ヶ台産、第 194 図 45・第 195 図 46・51 \sim 54・57 \sim 60・62 \sim 64・67 が神津島恩馳島産、48 が蓼科冷山産である。

Ⅲ類 c (第 195 図 68・69) 基部の抉りが器長の 1/4 未満で、左右非対称のもの。

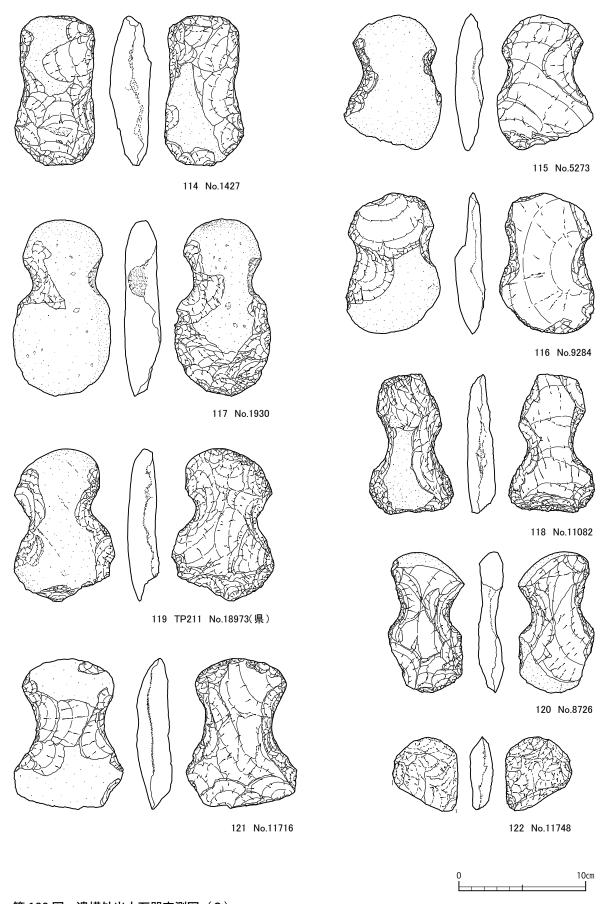
2点が含まれる。第 195 図 69 の先端部は、いったん屈曲してから右側に偏って頂点を形成する。 石材は 68 が諏訪星ヶ台産、69 が天城柏峠産の黒曜石である。



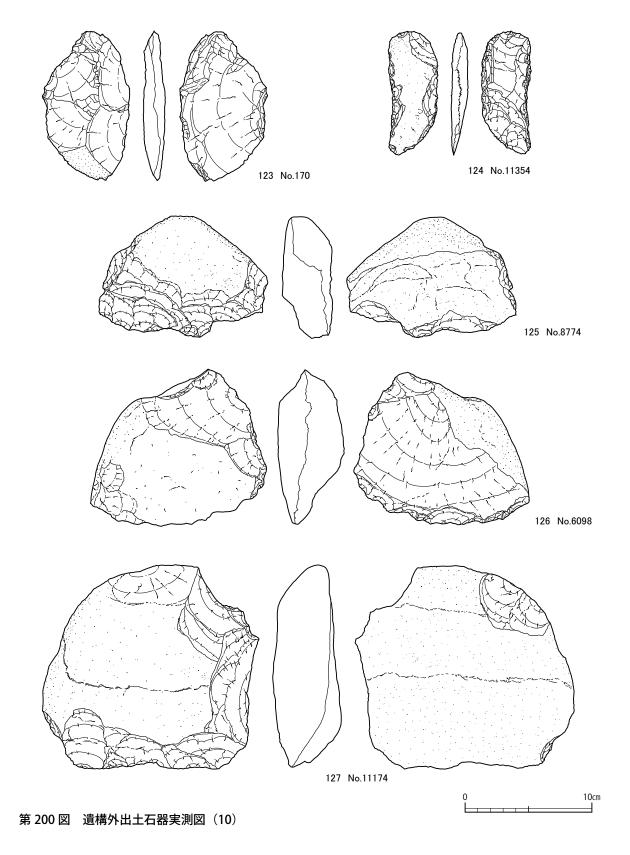
第 197 図 遺構外出土石器実測図 (7)



第 198 図 遺構外出土石器実測図(8)

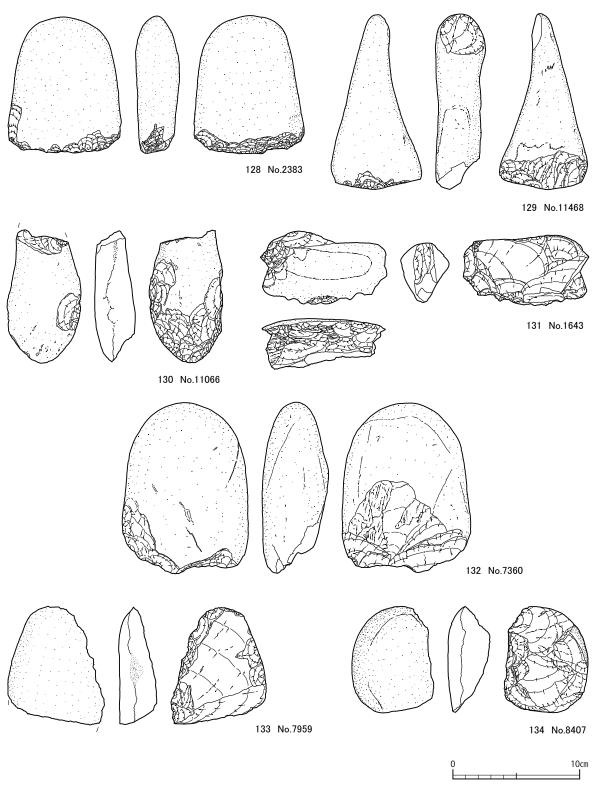


第 199 図 遺構外出土石器実測図(9)



IV類 a (第 195 図 70 ~ 第 196 図 73) 基部にわずかな抉りが入る、または平坦なもので、側縁が直線的なもの。

本類には 4 点が含まれる。石材はすべて黒曜石で、第 195 図 70 が諏訪星ヶ台産、それ以外は神津島恩馳島産である。



第 201 図 遺構外出土石器実測図 (11)

IV類 b (第 196 図 74 ~ 82) 基部にわずかな抉りが入る、または平坦なもので、側縁が曲線的なもの。 本類には 9 点が含まれる。石材は第 196 図 78 と 81 が珪質頁岩製で、それ以外はすべて黒曜石製である。 産地は 74 ~ 76 が諏訪星ヶ台産、77 が箱根畑宿産、79 が天城柏峠産、80・82 が神津島恩馳島産であった。

V類(第196図83·84) 基部が有茎となるもの。

本類には2点が含まれる。第196図83は茎部を、84は先端部と茎部をそれぞれ欠損している。83は先端部から側縁の途中で屈曲し脚部へ直線的に移行する。茎部から脚部にかけての抉りはほとんど無く、五角形状の器体に茎部が付いたような形をしている。84も同様に側縁の途中で屈曲するが、先端部から屈曲部までは外側へ向かって緩やかな弧状を描き、茎部から脚部はやや深く抉れる。2点とも諏訪星ヶ台産の黒曜石を石材とする。

未製品もしくは、欠損により分類が不可能なもの(第 196 図 85 ~ 88)

第 196 図 85 は背面に粗い剥離が施されるものの、腹面には素材剥片の剥離面が残っており、未製品であると考えられる。86 は尖端部、87・88 は脚部を欠損する。石材は 85・86 が珪質頁岩、87 が和田小深沢産、88 が神津島恩馳島産の黒曜石である。

打製石斧 (第 197 図 89 ~第 200 図 124)

48点が出土し、うち36点を図示している。平面形状が「短冊形」を示すもの、「撥形」を示すもの、「分銅形」を示すものに分類される。短冊形は出土数が少なく、撥形が最も多い。石材は砂岩を用いるものが大半で、一部に安山岩や粘板岩、泥岩が使用される。

I類(第197図89~94) 平面形状が短冊形を示すもの。

本類には6点が含まれる。欠損により形状がはっきりしないものが多いが、細長いもの(89~92)と小判形に近いもの(93・94)が認められる。基本的に円礫から得た剥片を素材としているが、第197図94は扁平な円礫をほぼそのまま用い、背面の大半と腹面の半分に礫面が残されている。90は基部、刃部とも大きく欠損している。91は両面の側縁に細かい加工が施され、形状が細長く整えられている。

Ⅱ類(第197図95~第198図109)平面形状が撥形を示すもの。

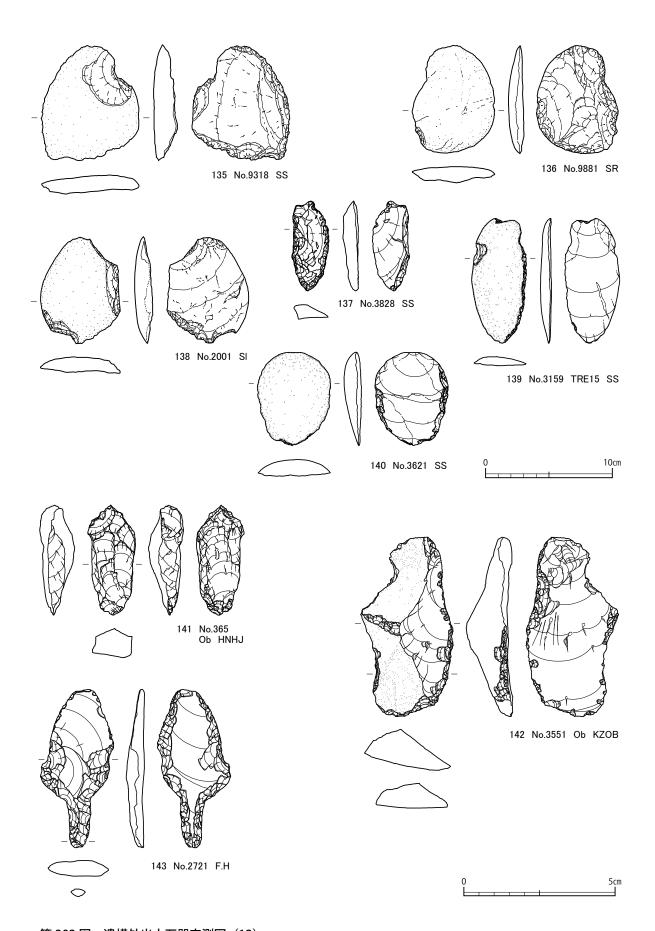
本類には 15 点が含まれる。基部に比べわずかでも刃部の幅が広くなっているものは、本類に含めた。 円礫から得た剥片を素材とし、大半は背面に礫面、腹面に一次剥離面を残す。第 197 図 98 は両面の 縁辺に細かい加工を施すことで、刃部から中央付近にかけて緩やかな丸みを帯びた器形を作り出して いる。99 は粘板岩の剥片を使用しているため、薄い板状を呈する。101 は腹背面ともに広く一次剥離 面が残され、両面の全周に剥離調整を施し器形を整えている。第 198 図 104・106・108・109 は刃 部が偏刃となる。108 の背面のほとんどを占める礫面は、そのまま基部と刃部になっており、腹面の 左側縁に細かい加工が認められる。109 は扁平な円礫を用いているため他の石斧に比べて厚みがあり、 刃部や基部、両側縁に丁寧な剥離調整を施している。

Ⅲ類(第 198 図 110 ~第 199 図 121) 平面形状が分銅形を示すもの。

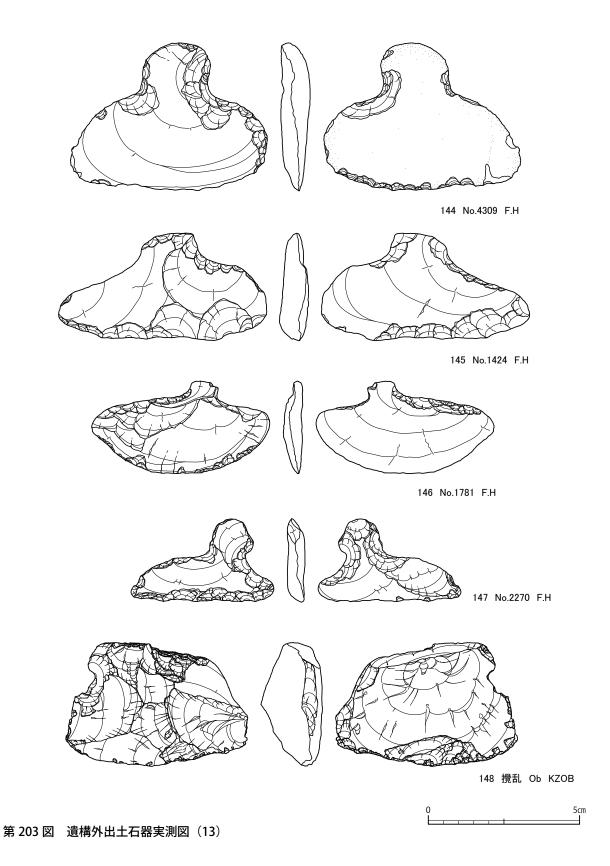
本類には 12 点が含まれる。短冊形と撥形に比べ、大形で厚みのあるものが目立ち、第 198 図 110 と 113 は器長が 15cmを超える。撥形と同様に円礫から得た剥片を素材とするもの(111・114・117・120)と、扁平な円礫をそのまま素材として用い加工を施しているもの(110・112・113・115・116・118・119・121)がある。よって背面の大半にそのまま礫面を残しているものが多く、第 199 図 117 と 120 の背面基部は全く加工を施さず礫の形状を活かしている。115 の背面は礫面がそのまま基部および刃部となり、括れ付近のみ細かく加工が施される。116 は横長剥片を縦に使用し、括れ付近と刃部に剥離調整が加えられる。117 は刃部を中心に加工されているが、基端と括れ部分には敲打痕が認められる。

上記の3類に分類できないもの(第 199 図 122 ~第 200 図 124)

第 199 図 122 と第 200 図 124 は欠損部分が大きく分類が困難であった。124 は基部から中央付近にかけての形状が短冊形に類似するものの、尖った刃部が左に偏り、形状は不定形である。123 は背

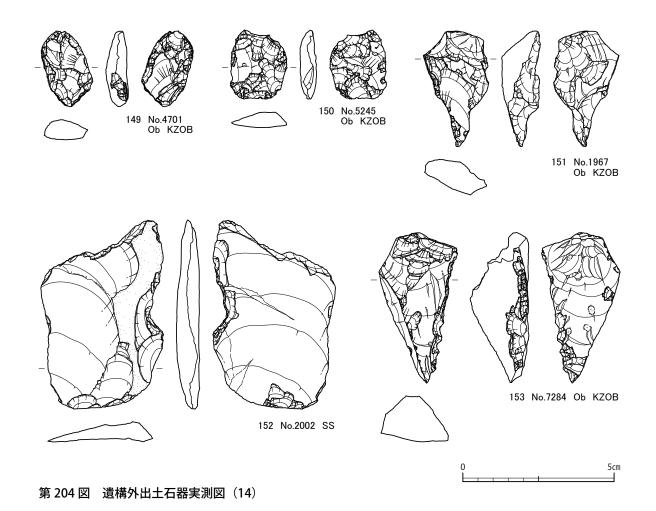


第 202 図 遺構外出土石器実測図(12)



面の大まかな剥離のみで、端部への細かい加工が認められないことから、素材剥片と考えられる。 **礫斧**(第 200 図 125 ~第 201 図 134)

10 点が出土し、すべてを図示した。安山岩を石材とした大形の礫を用いるもの(125 \sim 127)と、砂岩を石材とした円礫を用いるもの(128 \sim 134)に分けることができる。第 200 図 127 は幅 17cm



以上と非常に大きく、腹面は素材の礫面をほぼ残し、背面の刃部から右側縁にかけて幅広の粗い剥離を施している。砂岩製の礫斧は素材の形状を活かし、刃部を中心に加工を施す。第 201 図 133 と 134 は 礫の長軸に対して、刃部が平行に設けられている。

削器 (第 202 図 135 ~ 140)

10点が出土し、うち6点を図示した。円礫から得た剥片を素材とし、第202図135・136・138~140は背面の大半に素材の礫面を残している。137と139は縦長であるが、137が横長剥片を素材とし、背面の両側縁に調整剥離を施すのに対し、139は縦長剥片を素材とし、背面の右側縁のみに細かい剥離調整を施している。また、140も周縁に連続した加工を施しており、素材剥片の形状をよく残す。136は珪質岩、138は粘板岩、その他は砂岩を石材としている。

楔形石器 (第 202 図 141)

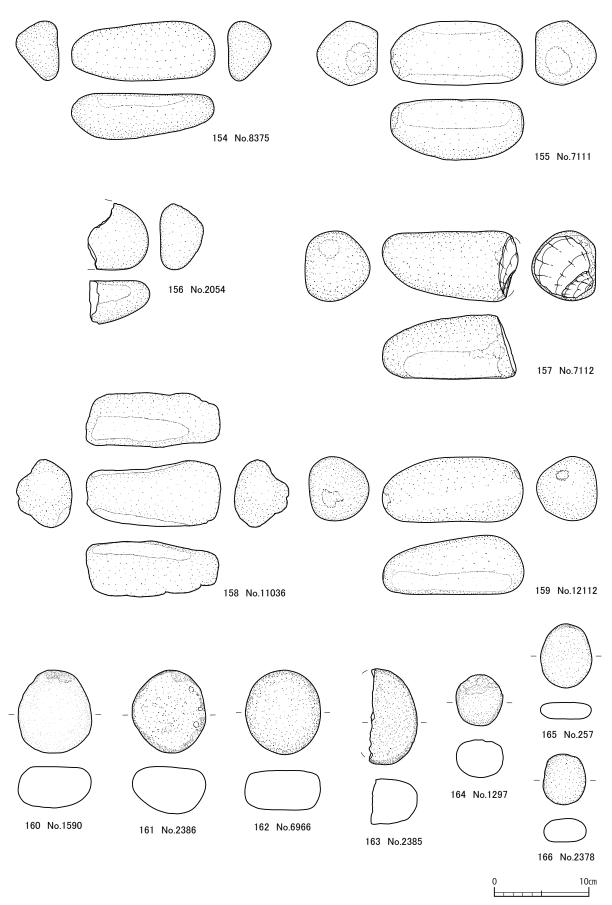
8点が出土し、うち1点を図示した。第202図141は相対する縁辺に対向する剥離が認められ、下端は潰れた形状を示す。石材は箱根畑宿産の黒曜石である。

掻器 (第 202 図 142)

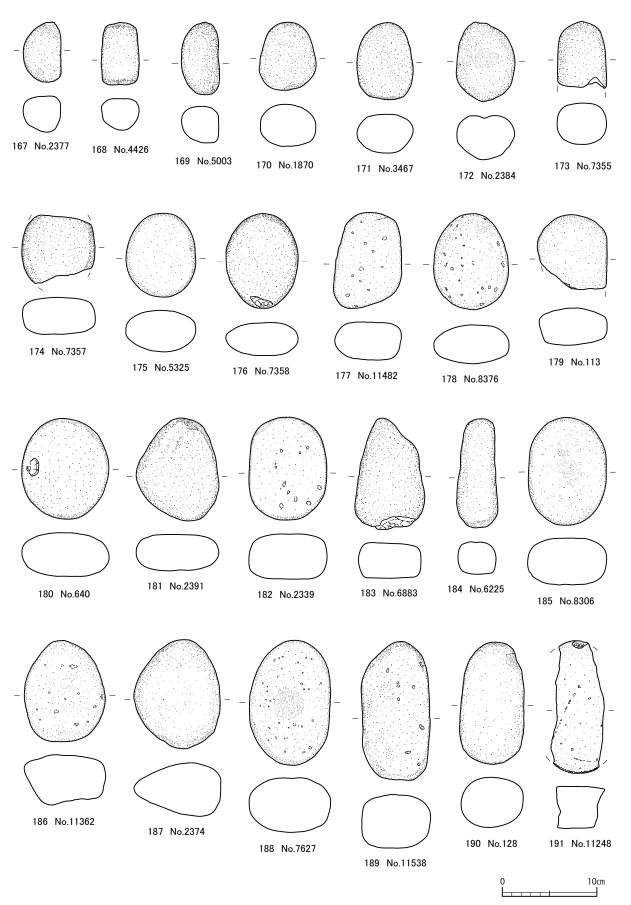
1点が出土した。第202図142は縦長剥片を素材とし、背面に素材の礫面を残す。下端部から右側縁にかけて弧状の分厚い刃部が認められる。石材は神津島恩馳島産の黒曜石である。

石錐 (第 202 図 143)

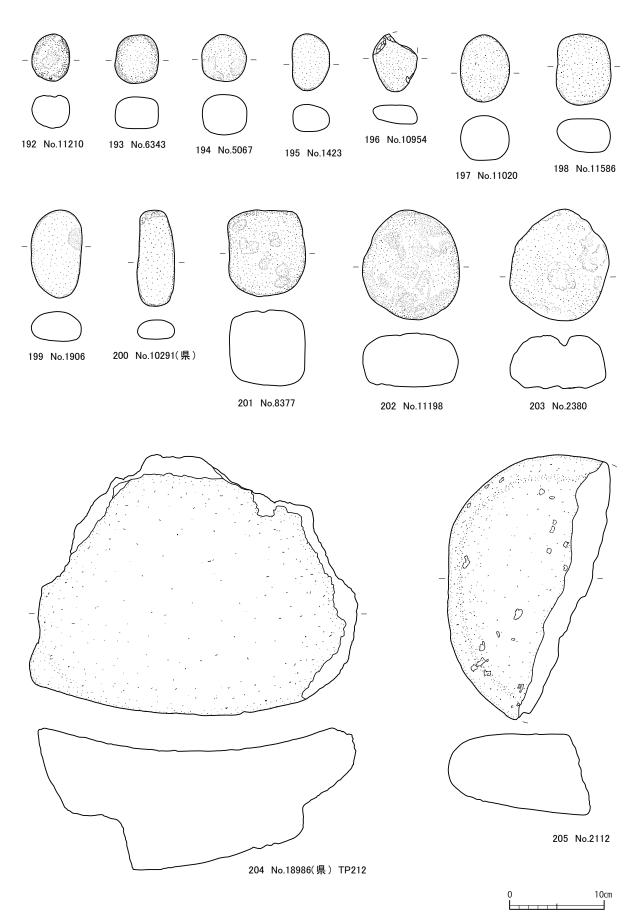
1点が出土した。第 202 図 143 は薄手の F. ホルンフェルス製の剥片を素材とし、両面からの丁寧な調整で錐部を整えている。



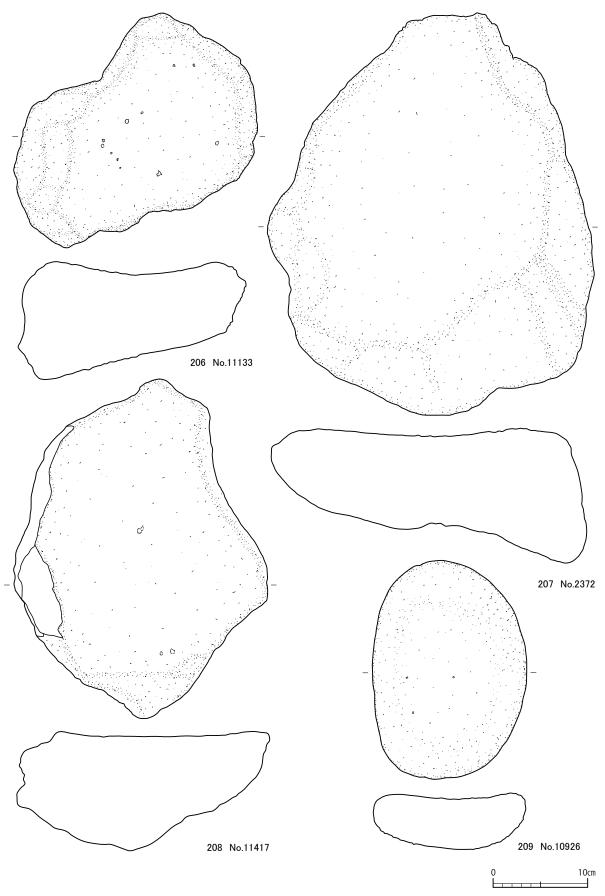
第 205 図 遺構外出土石器実測図(15)



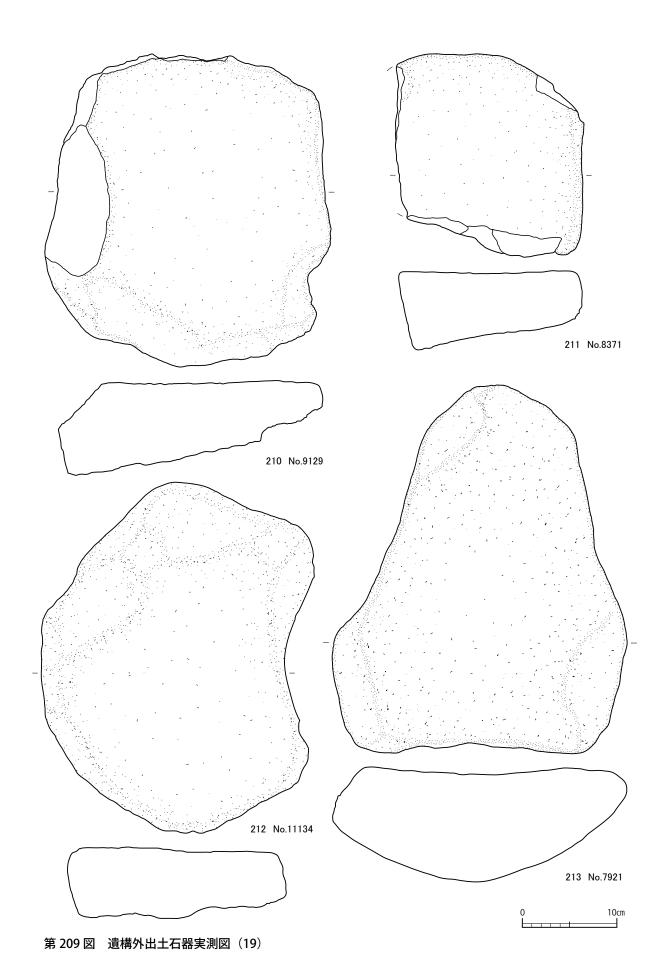
第 206 図 遺構外出土石器実測図 (16)



第 207 図 遺構外出土石器実測図(17)



第 208 図 遺構外出土石器実測図(18)



-280-

石匙 (第 203 図 144 ~ 148)

5点が出土し、すべて図示した。5点とも横長の形状をとり、横長剥片を素材とする。第 203 図 $144 \sim 147$ は F. ホルンフェルス製で、両側面からの調整によってつまみ部分を作出している。刃部の形状は、直線状のもの($144 \cdot 145 \cdot 147$)と、半円状のもの(146)とに分けられる。148 は神津島恩馳島産の黒曜石を石材とする。刃部の加工とつまみの状況から未製品と考えられる。

加工痕のある剥片 (第 204 図 149 ~ 153)

31点が出土し、うち5点を図示した。第204図149と150は両面に調整剥離が施されており、全体の形状が丸みを帯びている。151は厚みのある剥片を素材とし、左側縁に調整加工が施されるが、調整は粗い。153は右側縁に細かい調整剥離が施されている。152は砂岩、それ以外は神津島恩馳島産黒曜石を石材とする。

磨石 (第 205 図 154 ~第 206 図 191)

48点が出土し、うち38点を図示した。ほとんどが一般的な円形または楕円形状を呈する磨石であるが、特殊磨石も6点出土している。

Ⅰ類(第205 図 154 ~ 159) いわゆる「特殊磨石」と呼ばれるもの。

細長い帯状の磨面を持ち、断面が蒲鉾形に近い「特殊磨石」を本類とする。磨面が1面のものと2面のものがあり、左右の側面に敲打痕が認められるものが多い。第205図155は磨面を2面持ち、側面には敲打痕が明瞭に認められる。154・157・159は砂岩、それ以外は安山岩を石材とする。

Ⅱ類(第205 図 160~第206 図 191) 平面形状が円形または楕円形を示すもの。

第 205 図 160 ~ 164 は平面形状が円形に近く、比較的、厚みがある。第 205 図 165 ~第 206 図 191 は平面形状が楕円形に近く、長さが 5~7㎝程度の小形のものから、14㎝前後の大形のものまで存在する。第 206 図 168 はデイサイトを石材とし、上下に敲打面があることから、「トチタタキ石」に類似している。169・174・177・179・182・184・186・188・189 などは明瞭な敲打面を形成する。また、165 は断面が扁平である。石材は大半を砂岩と安山岩が占めている。

敲石 (第 207 図 192 ~ 203)

13点が出土し、うち12点を図示している。第207図192~196は長さ5cm前後の小形の敲石である。それぞれ、上下端や両側縁に敲打痕が認められ、192は中央付近にも敲打痕が残る。196の上部は敲打時の衝撃で欠損している。200は断面が扁平な棒状を呈し、上端部と下端部から左側縁にかけて明瞭な敲打痕が認められる。201は非常に多くの敲打痕が認められ、上面は磨面になっていることから平坦となり、全体として立方体状を呈する。202と203は長さ11.5cm以上を測り、重量感もある。202は上下端と左側縁を中心に敲打痕が認められ、203は表裏面に敲打による深い凹みが多数、空いている。

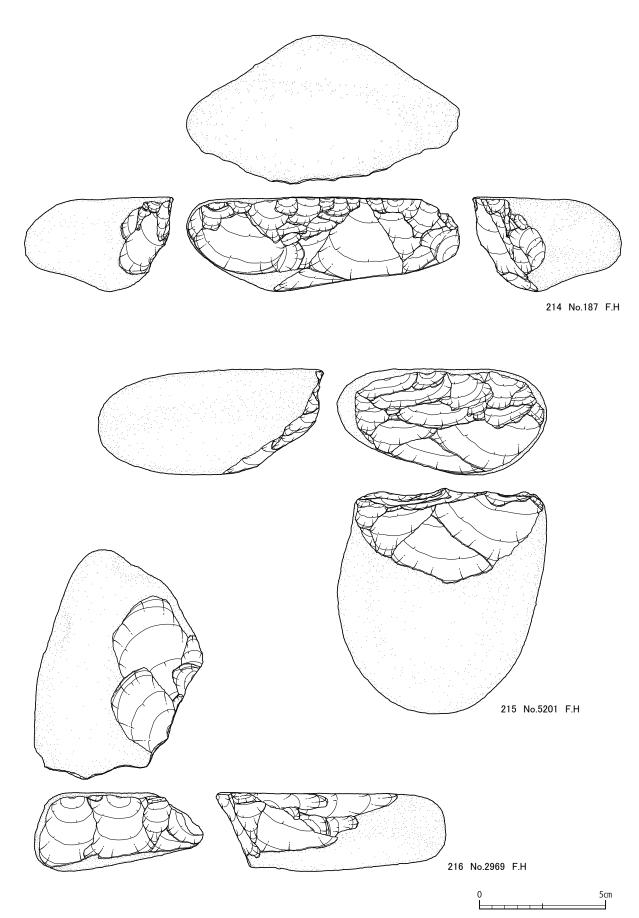
石皿 (第 207 図 204 ~第 209 図 213)

14 点が出土し、10 点を図示した。石材は安山岩を中心とし、第 208 図 206 のみ玄武岩が使用されている。第 207 図 204 は表面のほぼ全面に磨面が形成され、緩やかに凹んでいる。205 と第 208 図 209 は扁平な円礫をそのまま使用しており、205 は約半分を欠損する。207 は長さ 42.6cmと非常に大形で、裏面にも磨面が形成されている。第 209 図 210 と 212 は表面のほぼ全面に磨面が形成されているが、ほとんど摩耗していない。

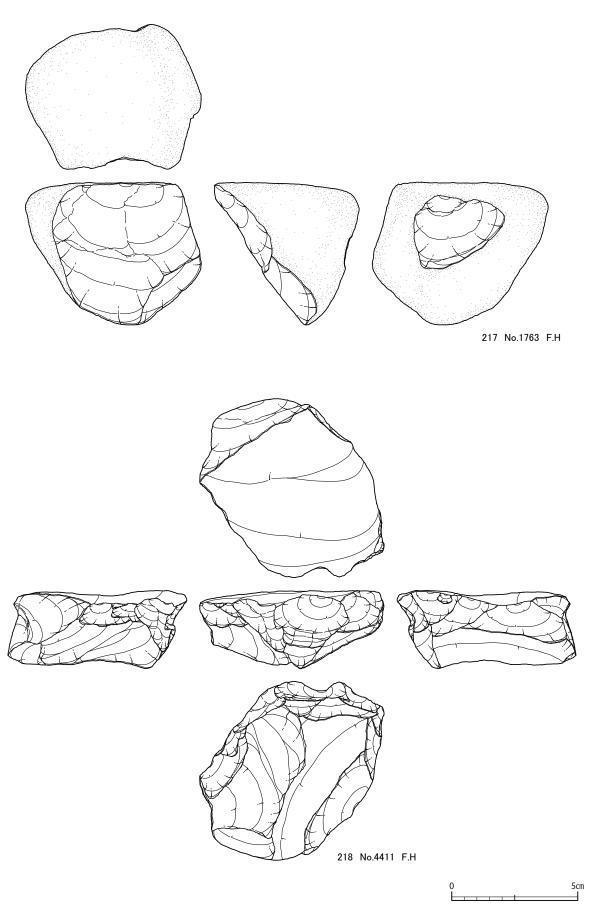
石核 (第 210 図 214 ~第 216 図 233)

39 点が出土し、うち 20 点を図示した。これらは、剥片剥離方向の違いや状態から 4 類に分類される。 **I 類**(第 210 図 214 ~第 213 図 221) 単設の打面を有するもの。

本類には8点が含まれ、すべてF.ホルンフェルスを石材とする。石核調整を除く剥片剥離方向が、

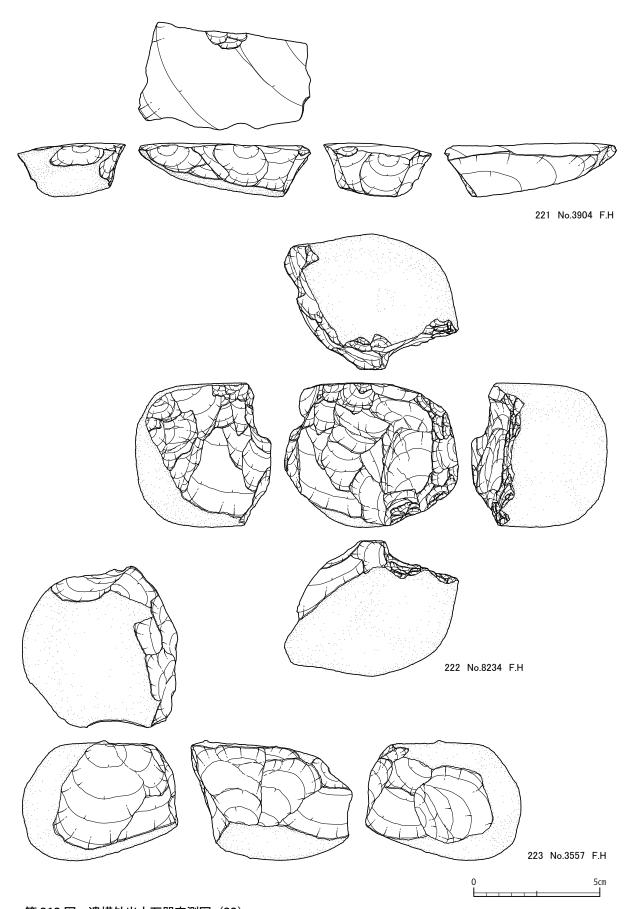


第 210 図 遺構外出土石器実測図(20)

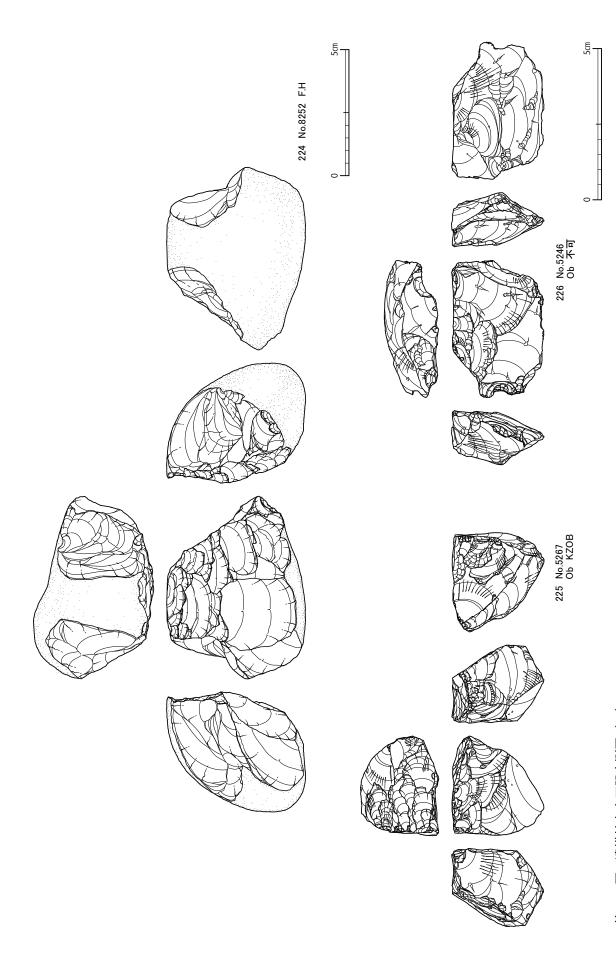


第 211 図 遺構外出土石器実測図 (21)

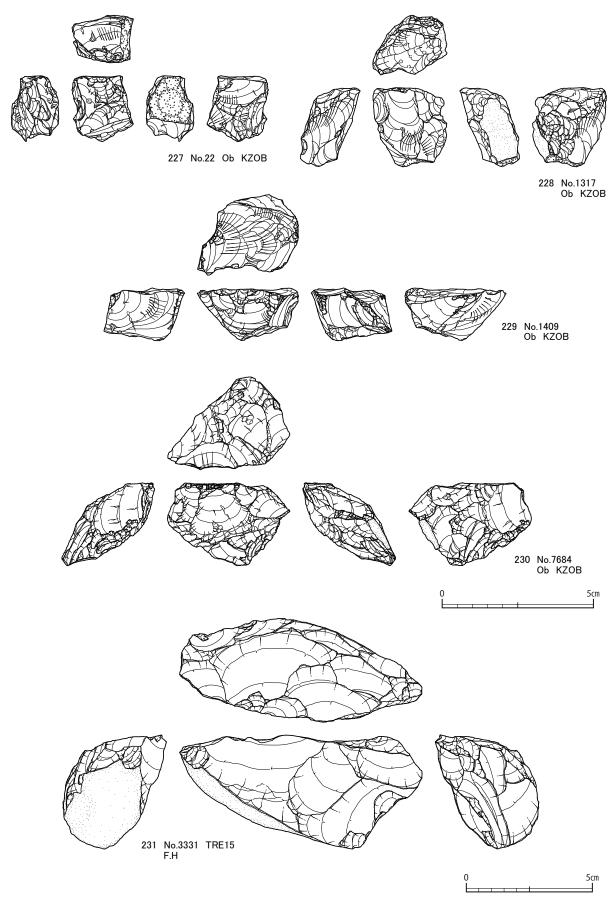
第 212 図 遺構外出土石器実測図 (22)



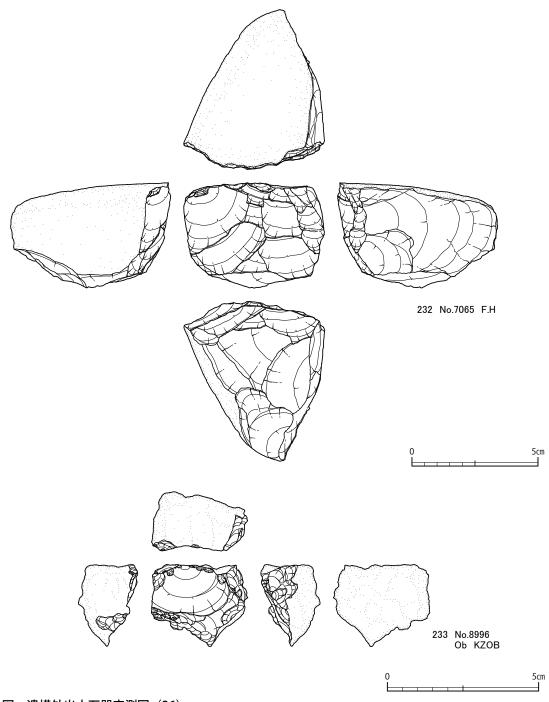
第 213 図 遺構外出土石器実測図 (23)



第 214 図 遺構外出土石器実測図 (24)



第 215 図 遺構外出土石器実測図 (25)



第 216 図 遺構外出土石器実測図 (26)

同一の方向に限られるもので、打面の種類により自然面を打面とするものと、単剥離面を打面とするものに細分できる。剥片剥離作業面は正面を主体とし、さらに左右の側面にも設定される。剥離作業面の 剥離痕を観察すると、総じて幅広の剥片が作出されている。

第 210 図 214 ~第 211 図 217 は、自然面を打面とするものである。剥離作業面は正面に設定され、幅広の剥片が作出されている。 214 と 216 は分割した礫を素材とし、 215 は扁平な円礫を素材とする。

第 211 図 218 \sim 第 213 図 221 は単剥離面を打面とするものである。剥離作業面は正面を主体とするが、220 と 221 は右側縁、218 と 219 は右側縁と左側縁にも剥離作業面を設定している。220 は扁平な円礫を用いており、礫斧に似た形状を示す。

Ⅱ類(第213 図222・223) 複数の打面を有し、打面が両設打面であるもの。

本類には2点が含まれ、ともにF.ホルンフェルスを石材とする。2点とも上下両端の自然面を打面とする両設打面石核である。第213図222は正面と左側面、223は正面と左右側面を剥片剥離作業面としており、幅広の剥片を作出する。

Ⅲ類(第214図224~第216図232) 複数の打面を有し、打面転移が行われているもの。

本類には9点が含まれる。剥片剥離工程において、90度や180度の打面転移技術が用いられている。 打面の種類によって、自然面を打面とするもの、自然面や剥片剥離作業面を打面とするもの、単剥離打面や剥片剥離作業面を打面とするもの、複剥離面や剥片剥離作業面を打面とするものに細分される。また、剥離作業面は正面を主体として、左右側面や裏面、上面にも設けられる。

第214 図224 は自然面を打面とする。F.ホルンフェルス製で、剥離作業面を正面に設定し、90 度の打面転移が行われている。第216 図232 は自然面や剥離作業面を打面とする。F.ホルンフェルス製の分割した礫を素材とし、剥離作業面を正面と右側面に設定している。90 度の打面転移が行われており、幅広の剥片を作出する。

第214 図 225 ~第215 図 229 は単剥離打面や剥離作業面を打面とするもので、それぞれ90度の打面転移が行われている。第214 図 225 は表裏面と左右側面、上面を剥離作業面とすることから下部の尖った逆三角形状を呈し、上面では連続した剥離が行われている。226 は剥離作業が進んでおらず、形状に素材剥片の形を残している。第215 図 227 ~229 は90度の打面転移が行われ、剥片剥離作業も進んでいることから、形状がサイコロ状を呈している。227 と228 は表裏面を剥離作業面とし、229 は正面と右側面を剥離作業面とする。5 点とも石材は黒曜石で、226 以外は神津島恩馳島産である。

第215 図230・231 は複剥離面や剥離作業面を打面とするもので、ともに90度の打面転移が行われている。230は神津島恩馳島産の黒曜石を石材とし、剥離作業面は表裏面に設けられる。231 は F. ホルンフェルスを石材とし、正面と上面に剥離作業面を設定している。 礫器のように、剥離の角度が鋭角をなしており、幅広の剥片が作出される。

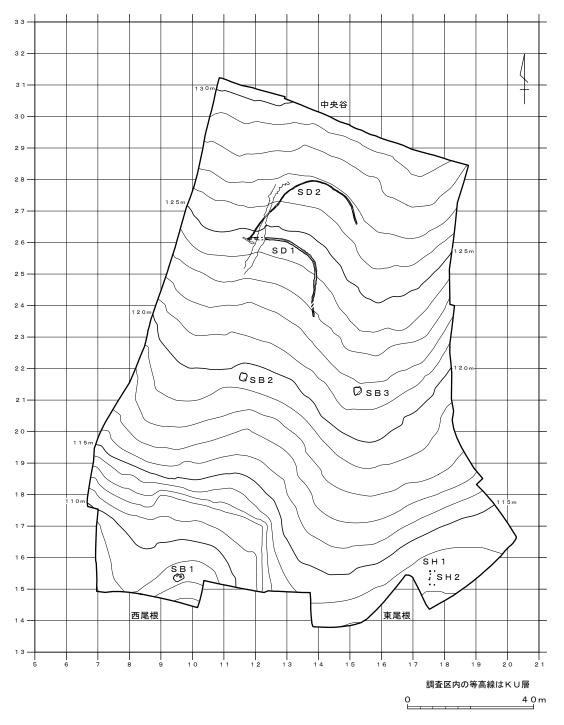
Ⅳ類(第 216 図 233) 石核素材に数回の剥離を加えただけのもの。

本類に含まれるのは1点のみである。礫面を多く残しており、石核というよりも素材礫に近い。第 216 図 233 は上面の自然面を打面とし、正面に剥片剥離作業面を設けて幅広の剥片を作出している。 石材は神津島恩馳島産の黒曜石である。(北)

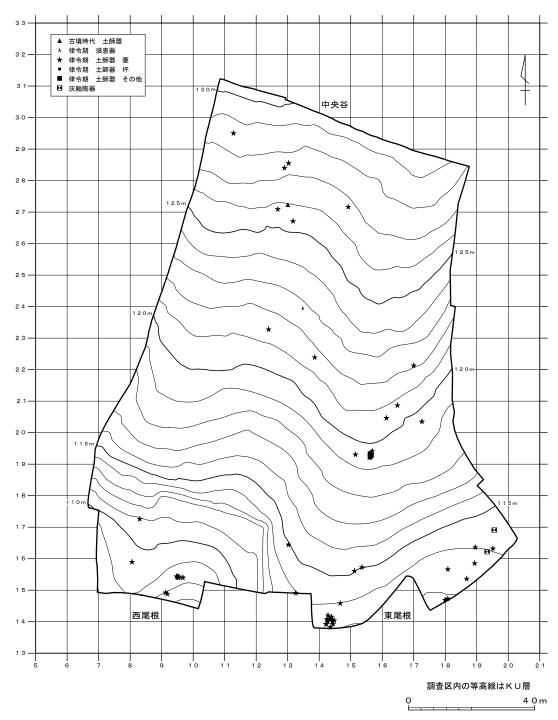
第4節 古墳時代以降の遺構と遺物

(1) 遺構と遺物の分布 (第 217・218 図)

遺構は住居址3基、掘立柱建物址1 (2)基、溝状遺構2条が検出された。住居址は第1号住居址が調査区南西側(009-015 グリッド)、第2号住居址が調査区中央西側(011-021 グリッド)、第3号住居址が調査区中央東側(015-021 グリッド)に位置している。第1号住居址は標高110 m付近に立地するものの、第2号および第3号住居址は中央谷を挟んだ東西の尾根上、標高120 m前後の位置に立地しており、特徴が異なっている。掘立柱建物址は調査区南東部の017-015 グリッドに存在



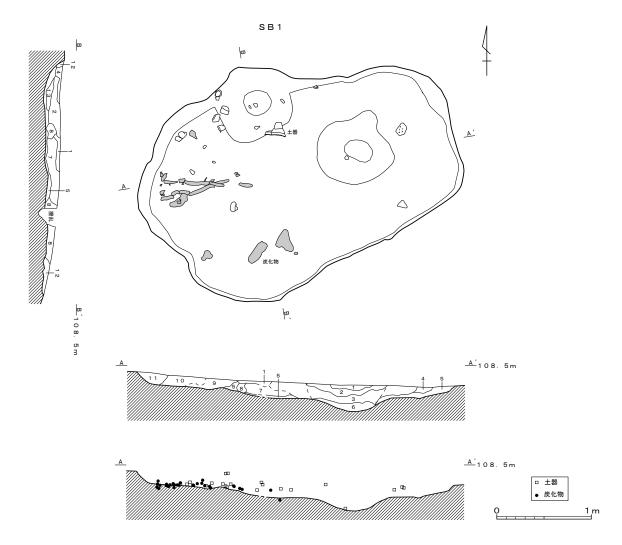
第 217 図 古墳時代以降 遺構分布図



第 218 図 古墳時代以降 遺物分布図

する。溝状遺構は2条が検出されており、調査区中央北側の標高125 m前後において弧を描くように 続いている。

遺物は古墳時代の土師器、律令期の須恵器と土師器が出土している。古墳時代の土師器は、中期における高坏の坏部と脚部の接合部 1 点が調査区北側の 013-027 グリッドで出土している。律令期の遺物では、6 世紀後半の須恵器の小片が調査区中央の 013-024 グリッドで 1 点出土している。土師器の甕は調査区の西側を除いたほぼ全体に分布しており、そのなかでも調査区南西の 009-015 グリッドと南側の 014-014 グリッドでは集中する箇所が存在する。なお、009-015 グリッドには第 1



第219 図 第1号住居址実測図

号住居址が存在することから、このグリッド周辺で出土している土器は第 1 号住居址との関連を想定する必要がある。土師器の坏と不明土器は調査区南東側の 015-019 グリッドで重複して出土している。 灰釉陶器は調査区南東角の 019-016 グリッドで出土している。

(2)遺構

古墳時代以降の遺構として、住居址3基、掘立柱建物址1基、溝状遺構2条が検出されている。

①住居址

調査区南西部で古代(平安時代)に属する住居址が3基検出された。なお、これらの住居址はいずれも現地での調査段階において住居の可能性が検討されたものの、住居としての明確な根拠が乏しいことから、縄文時代の焼土坑や礫群として扱われた。このため、第1号住居址が第1号焼土址、第2号住居址が第10号集石、第3号住居址が第11号集石として、遺構や遺物の記録が行われていた。しかしながら整理作業段階において遺構の図面や写真を検討した結果、住居址の可能性が高いと判断されたことから、本報告では住居址として報告する。

なお、第XII章(第 2 分冊)自然科学的分析で記すように、第 2 号住居址のカマドで検出された炭化物について A M S 法による放射性炭素年代測定を実施したところ、1,090 ± 20BP、1,100 ± 30BP の

結果を得られた。これは校正暦年代でおおむね9世紀末~10世紀末までの年代となる。第1号住居址で出土した遺物が、その特徴から9世紀後半以降のものと推測されることから、本遺跡で検出された住居址と遺物の時期はおおむね合致していると判断して問題ないものと判断される。

第1号住居址 (第219図)

第1号住居址は調査区南西側の009-015グリッドで検出された。検出面はKU層である。平面形状は南西-北東方向が長軸となる小判形に近い形状となっており、長軸 $3.3\,\mathrm{m}\times$ 短軸 $2.3\,\mathrm{m}$ を測る。検出面からの最大深度は、落ち込み箇所を除くと $0.2\,\mathrm{m}$ 程度と浅い状態である。検出された底面が平坦ではないことから、掘り方が検出されたものと判断される。なお、西側で炭化した木材が $2\,\mathrm{a}$ 本検出されていることから、この面が床面である可能性がある。

北西部にある落ち込みについては、土層断面図 B-B'の第 13 層が焼土のブロックとなっており、またその周辺には礫が散在していることから、この位置にカマドが存在したものと推測される。そして散在する礫はカマドの構築材であった可能性が高い。また、本住居址は赤化ないし炭化物を含んだ覆土で覆われており、西側には前述したように炭化した木材が 2 本検出されていることから、焼失したものと推測される。

なお住居址東側には円形の落ち込みが存在しており、また当該箇所の土層断面図は部分的にレンズ状 堆積が確認できる。これらのことから、当該箇所には住居址が廃棄された以降に作られた土坑が存在し ていたものと推測される。ただし、調査段階では土坑の存在は認識されておらず、土坑に関する記録は 一切残っていない。

【出土遺物】(第 224 図 3 · 4)

遺物は9世紀後半以降のものと推測される土師器の甕の口縁部(第224図3)と、底部の一部(第224図4)が出土している。いずれも器面の内外面に煤が付着し、一部に剥離が見られることから、住居址が焼失した際の被熱によるものと推測される。

第2号住居址 (第220図)

第2号住居址は調査区中央部やや西寄りの 011-021 グリッドで検出された。検出面は F B層である。平面形状は隅丸方形に近い形状となっており、規模は約 2.5×2.3 mを測る。検出面からの最大深度は、落ち込み箇所を除くと 0.15 m程度と極めて浅い状態であり、底面は比較的平坦となっている。土層断面図から推測すると、A-A では上下が 2 層に並行して堆積しており、また後述するようにカマドの構築材の一部と推測される礫が上層で確認されていることから、掘り下げた底面は掘り方であり、その上層が床面である可能性が高い。ただし、柱穴となるピットは確認されていない。

住居址の南東側に落ち込みが存在しており、焼土がブロック状に含まれている。また、その両脇には

セクション	層位	色調		土 層 の 特 徴				
セクフョン	唐世							
	1	黒褐色	7.5YR2/2	$arphi$ 2 \sim 10mm 黒色スコリア 1%、 $arphi$ 1 \sim 2mm 橙色焼土 1%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 2% 含む。				
	2	黒褐色	7.5YR2/2	$ ho$ $2\sim$ 10mm 黒色スコリア 1%、 $ ho$ $1\sim$ 2mm 橙色焼土 3%、 $ ho$ 5mm 以下炭化物 1% 含む。				
	3	暗赤褐色	5YR3/4	ho 2 ~ 10mm 黒色スコリア 1%、 $ ho$ 10mm 以下角柱状炭化物 1%、 $ ho$ 5mm 以下炭化物 2% 含む。焼土層。				
	4	黒褐色	7.5YR2/2	φ 1mm 以下橙色焼土 1%、φ 1mm 以下白色パミス 1% 含む。				
	5	極暗褐色	7.5YR2/3	φ 1mm 以下橙色焼土 1%、 φ 1mm 以下白色パミス 2% 含む。				
Α	6	極暗褐色	7.5YR2/3	arphi 1mm 以下橙色焼土 2%、 $arphi$ 10mm 以下炭化物 5% 含む。				
	7	極暗褐色	7.5YR2/3	arphi 1 ~ 2mm 橙色焼土 3% 含む。				
	8	黒褐色	10YR2/2	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色焼土 3%、 $arphi$ 5mm 以下炭化物 1%、炭化材含む。				
	9	極暗褐色	7.5YR2/3	arphi 1mm 以下橙色焼土 5%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 2% 含む。				
	10	黒褐色	10YR2/2	φ 1mm 以下白色パミス 1%、 φ 10mm 大 7.5YR3/3 暗褐色土をパッチ状に含む。炭化材含む。				
	11	黒色	7.5YR2/1	arphi 1mm 以下橙色焼土 1%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 1% 含む。炭化材含む。				
Вのみ	12	暗褐色	7.56YR3/3	φ 1mm 以下橙色焼土 2%、 φ 1mm 以下白色パミス 2% 含む。				
1 BU)#	13	暗赤褐色	5YR3/6	焼土層。非常に固結している。				

第17表 第1号住居址土層一覧表



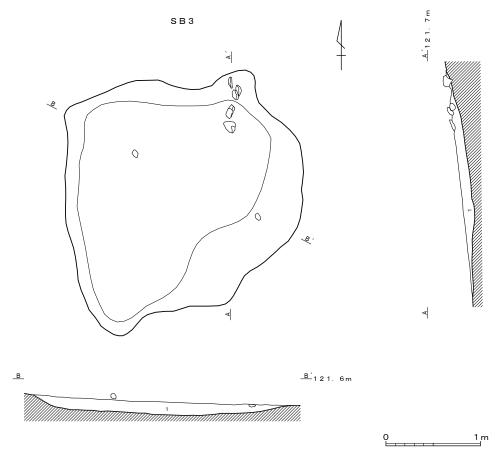
第220図 第2号住居址実測図

大形の礫が意図的に設置するように立てられている。そして、底面から浮いた形で多数の礫が住居址内で検出されている。これらのことを踏まえると、この落ち込みはカマドと判断され、検出された礫はカマドの構築材と推測される。

遺物は縄文時代の土器の小片が1点出土しているものの混入と考えられ、当該期の遺物は出土していない。なお、前述したように本住居址のカマドで検出された炭化物の年代測定値が9世紀末~10世紀末までの時期となったことから、第1号住居址と同時期のものと考えられる。

第18表 第2号住居址土層一覧表

セクション	層位	色 調		土 層 の 特 徴			
	1	黒褐色	7.5YR2/2	φ 5mm 以下橙色スコリア 1%、φ 1mm 以下白色パミス 2% 含む。細砂粒が混在する。			
Α	2	黒褐色	7.5YR2/2	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 1%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 1% 含む。7.5YR3/2 $arphi$ 10mm 大ブロックが混在する。			
	3	黒褐色	7.5YR2/2	$arphi$ 1mm 以下橙色スコリア 1%、 $arphi$ 1 \sim 2mm 黒色炭化物 1% 含む。			
	4	黒褐色	7.5YR2/2	1 を基本に、 φ 1 mm 以下黒色炭化物 3 %、 φ 1 mm 以下焼土粒 1 % 含む。			
С	5	暗赤褐色	5YR3/4	φ 5mm 大黒色炭化物 1% 含む。下部に焼土塊が集中。			
	6	黒褐色	7.5YR3/2	φ 1mm 以下焼土粒 3% 含む。			



第221 図 第3号住居址実測図

第3号住居址 (第221 図)

第3号住居址は調査区中央部から東側の015-021 グリッドで検出された。検出面は FB層である。平面形状は西側は直線的であるものの東側は曲線的であるため、不整形に近い方形となっており、規模は約 2.5×2.3 mを測る。住居址の北東側に礫が集中していることからカマドの存在が想定されるものの、第1号住居址や第2号住居址のような焼土のブロックは確認できず、カマドが構築されているような様相は確認できなかった。検出面からの最大深度は0.1 mと極めて浅く、柱穴が検出されなかったことから、本遺構は住居址の掘り方の下部が検出されているものと判断される。

遺物が検出されなかったため、本住居址の時期比定は困難であるが、第1号・第2号住居址と同時期である可能性が高い。

②掘立柱建物址

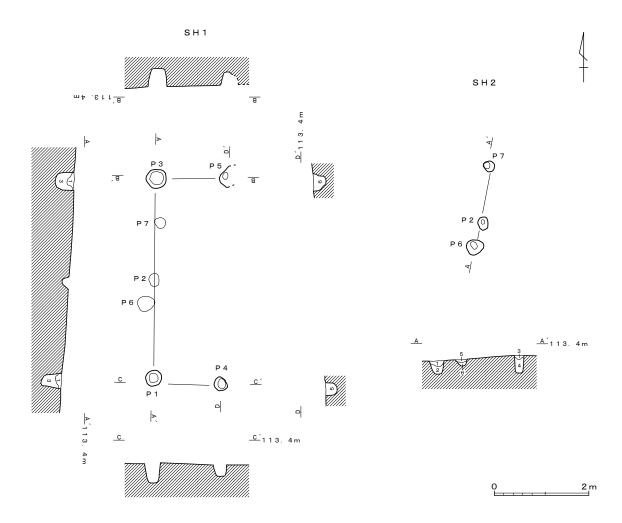
調査区南東部の 017 - 015 グリッドにおいて 7 基のピットが検出された。検出面は F B 層である。 検出されたピットは連続した位置関係を有していると考えられ、規模や配置から 2 基の掘立柱建物が重 複しているものと推測される。いずれのピットからも遺物は検出されなかった。

第1号掘立柱建物址 (第222 図)

径 0.3 m前後のピットが 4 基確認されている。ピットは「コ」の字状につながることから、掘立柱建

第19表 第3号住居址土層一覧表

セクション	層位	色 調		土 層 の 特 徴
Α	1	暗褐色土	7.5YR3/3	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 10% 含む。やや締まりがあるが、粘性はない。



第222 図 第1号・第2号掘立柱建物址実測図

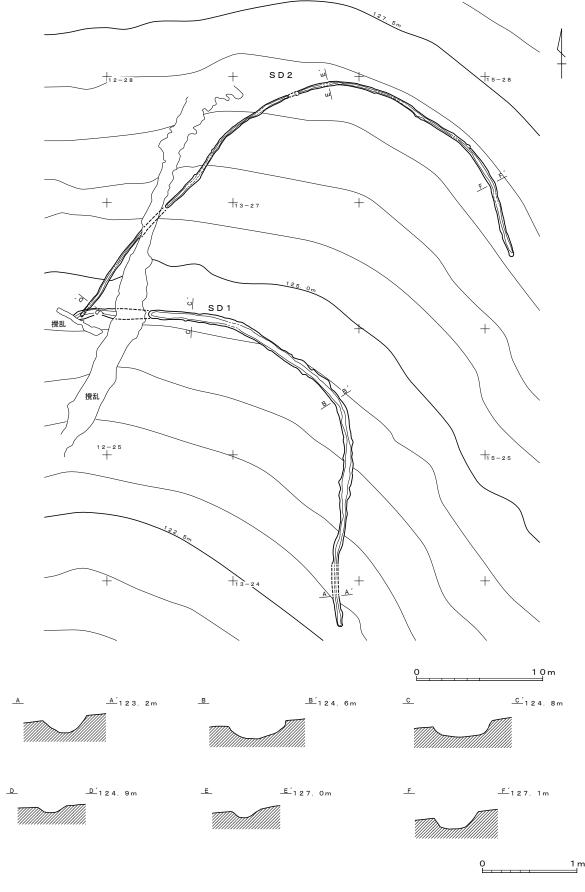
物の一部と推測される。ただし、 $P1 \cdot P3$ は深さが 0.4 mほどであるが、 $P4 \cdot P5$ は 0.2 m前後と極めて浅く、特徴が異なっている。また、東側にピットの検出ができなかったため、掘立柱建物としての規模、主軸方向は不明である。

第2号掘立柱建物址 (第222 図)

第1号掘立柱建物址と重複する形で3基のピットが確認されている。P6は径が $0.2\,m$ 、深さが $0.4\,m$ 、P7は径が $0.3\,m$ 、深さが $0.3\,m$ である。柱穴としての役割は不明であるが、第1号掘立柱建物址と位置的に重複していることから、第1号掘立柱建物を建てる前もしくは建て直した後の柱穴である可能性がある。しかしながら検出されたピットが3基にすぎず、第1号掘立柱建物址との関係も不明瞭であるため、掘立柱建物として報告するものの、単なる小穴である可能性が残る。

第 20 表 掘立柱建物址土層一覧表

セクション	層位	色 調		土 層 の 特 徴			
	1	黒褐色	7.5YR3/2	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 3%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 1% 含む。締まりがない。			
	2	暗褐色	10YR3/3	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 3%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 1% 含む。締まりがない。			
A	3	黒褐色	7.5YR3/2	φ 1mm 以下橙色スコリア 1% 含む。			
	4	暗褐色	10YR3/3	φ 1mm 以下橙色スコリア 1% 含む。 やや締まりがある。			
A · C · D	5	黒褐色	10YR3/2	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 3%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 1% 含む。締まりがない。			
	6	黒褐色	7.5YR3/2	$arphi$ 1 \sim 2mm 橙色スコリア 5%、 $arphi$ 1mm 以下白色パミス 2% 含む。締まりがない。			



第223図 第1号・第2号溝状遺構実測図

③ 溝状遺構

調査区の北側に2条の溝状遺構が検出された。検出面はKU層である。いずれも011 - 026 グリッド西側を始点としているが、第1号溝状遺構は南西方向に、第2号溝状遺構は北東方向に向かって曲がりながら続き、第1号溝状遺構は013 - 023 グリッド、第2号溝状遺構は015 - 026 グリッドで収束している。第1号溝状遺構が第2号溝状遺構の始点を切る形で掘り込まれているため、両溝状遺構には時代の前後関係が存在しており、第2号溝状遺構が第1号溝状遺構よりも前の遺構であると判断される。ただし、両溝状遺構とも用途、詳細な時期は不明である。

第1号溝状遺構(第223図)

第 1 号溝状遺構は全長約 42 mで、前述したように 011-026 グリッド西側を始点として南西方向 に曲がりながら続いており、013-023 グリッドで収束している。溝の幅は $0.5\sim0.8$ m、深さは 0.2 m程度である。

第2号溝状遺構(第223 図)

第2号溝状遺構は全長約51 mで、前述したように011-026 グリッド西側を始点として北東方向に曲がりながら続いており、015-026 グリッドで収束している。溝の幅は最大でも0.5 m程度、深さは最大で0.15 m程度と第1 号溝状遺構よりも狭く、浅い。

(3) 遺物

古墳時代以降の遺物としては、時期の判断ができるものとして古墳時代中期末~律令期にかけての土 器が出土している。出土した土器について時代ごとで分類を行い、型式や特徴で細分した。

第1群 古墳時代の遺物 (第224図1)

高坏の一部が1点出土している。坏部の底部であり、脚部との接合部で折れた状態となっている。脚部は欠損しており、出土土器を全点確認したものの、脚部の破片は存在しなかった。

胎土には微細な砂粒を多量に含んでおり、色調は外面がにぶい赤褐色、内面がにぶい褐色を呈している。表面の剥離が著しいためどのような調整が行われているかは不明であるが、器面の一部が光沢を帯びていることからミガキ調整が行われているものと推測される。坏部と脚部の接合部の特徴から古墳時代中期における中見代式に相当すると推測される(佐藤 2012)。

第 || 群 律令期の遺物

1類 須恵器(第224図2)

坏蓋の一部が1点出土している。大半を欠損しているため全体の形状については不明な点が多いが、破片の下端に返しの一部が残存していることから、返り蓋と推測される。復元される口径は17cmである。時期は7世紀後半以降のものと判断されるが、小片のため詳細な時期比定は困難である。

2類 土師器

a種 甕(第224図3・4)

第1号住居址で検出された土師器の甕であり、口縁部(3)と底部の一部(4)が出土している。第224図3は口縁部が「く」の字状に外反する長胴甕の上部であり、口縁部の外反はやや緩くシャープではない。口縁部の外面はヨコナデに調整を行っており、胴部の外面は斜めハケによる調整を行った後にその上からナデている。また、胴部の内面はヨコハケによる調整が行われている。なお、口縁部と胴部の接合部にもナデによる調整が行われている。胎土には径1mm程度の白色粒子を少量含んでおり、色調は内外面ともににぶい赤褐色である。

4 は甕の底部の一部であり、底部の径は 7.5cmほどである。底部から胴部への屈曲部には大きめの刻 みが斜め方向に連続して施文されている。底部にはヘラ状工具による並行する 3 条の沈線が施文されて おり、木葉痕に類するものと推測される。胎土には径1m以下の白色や橙色の砂粒や、径2~3m程度の岩片を含む。色調は外面が灰黄褐色、内面がにぶい褐色を呈している。土器の特徴から9世紀後半以降のものと推測され、第1号住居址の時期を示しているものと判断される。

b種 坏(第224図5)

須恵器の坏を模倣したと推測される土師質の土器の一部が出土している。底部から胴部にかけての屈 曲部であり、器面外面には横位ないし斜位方向に、内面では胴部に縦位ないし斜位方向にミガキ調整が 行われている。また、底部との屈曲部付近にはヘラ削りによる調整が行われている。なお、底部の縁部 にはミガキ調整が施されている。胎土に多量の雲母と砂粒を含んでおり、色調は内外面ともに褐灰色の 色調を呈している。

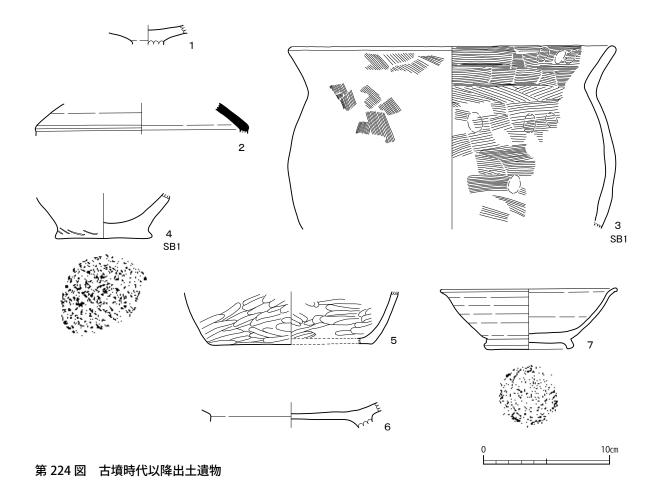
c種 その他(第224図6)

器形および用途不明の土師質の土器が1点出土している。部位は底部と推測され、底部の厚さは4~6m程度である。底の内面と外面はミガキによる調整が行われている。底部の下側には高台と推測される部位が貼り付けられていることから、全体の形状の断定は難しいものの、高台を有する須恵器の坏もしくは灰釉陶器の碗を模倣した土師質の土器である可能性がある。高台の一部は指ないし棒状の工具を押し当てることで凹んでいる。胎土には雲母や径3mm以下の砂粒を含んでおり、色調は外面がにぶい赤褐色、内面が黄灰褐色を呈している。

3類 灰釉陶器 (第224図7)

灰釉陶器の碗が1点出土している。口縁は外反して立ち上がり、口端部は丸みを帯びている。釉は付け掛けがなされたものと推測されるが、釉の大半が焼成の段階で飛んでしまっているため、外面の大半は灰白色の素地の状態となっており、釉が縞状となる部分が1か所残るのみである。また、内面にはわずかに釉が残るものの、釉の残存状況は悪い。底部には回転糸切りの痕が明瞭に残っており、その後に高台が貼り付けられている。高台は底面から4mほど上で外側に膨らんでおり、断面は三角形状になる。

灰釉陶器の特徴と他に出土している土師器の時期から、猿投編年における折戸 53 号窯式 (10 世紀 前半) に併行するものと推測される。(小崎)



-300-

報告書抄録

ふりがな	ふちがさわいせき・ながさかいせき・こさかうえきたいせき・つちはしだいにいせき・つちはしだいさんいせき・いどがわいせき・いどがわにしいせき・ あけのにしいせき だいにとうめいNa 27 — 2・Na 36・Na 35・Na 17・Na 18・Na 20・Na 21・Na 24 ちてん										
書名	渕ヶ沢遺跡・長坂遺跡・小坂上北遺跡・土橋第Ⅱ遺跡・土橋第Ⅲ遺跡・井戸川遺跡・井戸川西遺跡・赤野西遺跡 第二東名№ 27 — 2・№ 36・№ 35・№ 17・№ 18・№ 20・№ 21・№ 24 地点										
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書										
巻 次	沼津市 - 9 第 1 分冊										
シリーズ名	沼津市文化財調査報告書										
シリーズ番号	第 109 集										
編著者名	小崎晋 前嶋秀張 北佳奈子 池谷信之										
編集機関	沼津市教育委員会										
所 在 地	〒 410-8601 静岡県沼津市御幸町 16 番 1 号 TEL 055-931-2500 代										
発行年月日	西暦 2014 年 3 月 31 日										
ふりがな	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経						
所収遺跡		市町村	遺跡 番号		測地系	調査期間	調査面積	調査原因			
	ぬまづ し ね ご や		番号	日本測地系							
ふち が さわ い せき	沼津市根古屋 李漢/	22203	403	E138° 48′ 23	3″ N35° 9′ 12″	2003.4.10		第二東名			
渕ヶ沢遺跡				E138° 48′ 35″ N35° 9′ 0″		~ 2005.3.31	19,805 m ²	建設事業			
所収遺跡名	種別	主なな	≢代	主な遺構		主な遺物		特記事項			
		旧石器時代		石器ブロック 29 か所		台形様石器・ナイフ形石器・尖頭器・掻器・削器・石錐・彫器・ 楔形石器、加工痕のある剥片・使用痕のある剥片・石刃・細石刃・ 石核・細石刃石核・原石・敲石・ハンマー・磨石・台石		石囲炉			
渕ヶ沢遺跡	集落址	縄文時代		正体不明遺構 5 基・土坑 5 基 焼土址 8 基・集石 14 基		縄文土器(早期前半〜晩期初頭)、尖頭器・有茎尖頭器・薄形 尖頭器・トロトロ石器・石鏃・削器・楔形石器・掻器・石錐・ 石匙・加工痕のある剥片・石核・打製石斧・礫斧・磨石・敲石・ 石皿					
		古墳時代以降		住居址3基・掘立柱建物址2基 溝状遺構2条 土師器・須恵器・灰秞陶器							

沼津市文化財調査報告書 第 109 集

渕長小土土井井赤 ケ坂上第第川川西 遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺

第二東名No. 27 - 2・No. 36・No. 35・ No. 17・No. 18・No. 20・No. 21・No. 24 地点 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

沼津市一9

第 1 分 冊

平成26年3月31日 印刷

平成26年3月31日 発行

編集/沼津市教育委員会

沼津市御幸町 16番1号

発 行 /沼津市教育委員会

中日本高速道路株式会社

印 刷 /文光堂印刷株式会社